

やはり俺の社会人生活  
は間違っている

kuronekoteru

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

社会人も2年目に突入した比企谷八幡は、突然に会社の同僚に飲み会に誘われる。その場所で1年振りに雪ノ下雪乃と再会を果たした。

その日から、二人の距離はゆっくりと近付き始めていく。

# 目次

やはり俺の社会人生活は間違っている	# 1	1
やはり俺の社会人生活は間違っている	# 2	16
やはり俺の社会人生活は間違っている	# 3	25
やはり俺の社会人生活は間違っている	# 4	35
やはり俺の社会人生活は間違っている	# 5	44
やはり俺の社会人生活は間違っている	# 6	55
やはり俺の社会人生活は間違っている	# 7	65
やはり俺の社会人生活は間違っている	# 8	75
やはり俺の社会人生活は間違っている	# 9	87
やはり俺の社会人生活は間違っている	# 10	98
やはり俺の社会人生活は間違っている	# 11	111
やはり俺の社会人生活は間違っている	# 12	124

# 1 3  
——  
138

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 1 4  
——  
152

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 1 5  
——  
166

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 1 6  
——  
178

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 1 7  
——  
192

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 1 8  
——  
204

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 1 9  
——  
218

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 2 0  
——  
230

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 2 1  
——  
244

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 2 2  
——  
258

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 2 3  
——  
273

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 2 4  
——  
288

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 2 5  
——  
301

やはり俺の社会人生活は間違っている

# 26

やはり俺の社会人生は間違っている

316

# 27

やはり俺の社会人生は間違っている

330

# 28

やはり俺の社会人生は間違っている

344



# やはり俺の社会人生活は間違っている #1

労働とは義務であり、悪である。

早朝から行きたくもない会社のために眠たい身体を叩き起こし、乗車率200%を超える車両に身体を捻じ込む。果てには夕方まで会社に軟禁されてしまうという。

こんな日をなんと週に五日も、しかも年の大半は連続で過ごせというのである。

普通に考えて現代社会の地獄ではない。だがしかし、俺の入社した会社は世間的にはホワイトに分類されているらしい。

日本まじで終わっているのでは……？ 電車に関しては東西線が悪い、千葉から東京に働きに行く人間が多すぎるのだ。

そんな気が狂うような社会人生活も早2年目となった。

1年目は仕事を覚えるのだとか、同期と上手くコミュニケーションを取れるように勤しむことに必死で、瞬く間に過ぎ去っていった。

……きつとあの二人もそんな感じなのであろうことは想像に難しくない。雪ノ下は上手く社会に溶け込んでいるだろうか。無理をしていないだろうか。

最近会えていない奉仕部二人のことを思い浮かべながら帰り支度をしていると、同期の吉田が珍しく声を掛けてきた。

「比企谷は確か今夜は暇だよな？ 佐藤達とご飯を食べに行くから来て欲しいんだけど、だめかな？」

吉田は仕事は出来るわ、性格も良いわで隙の無い爽やか完璧イケメンである。昔懐かしいの葉山と比べても遜色ない程に顔立ちが良いのが癪である。俺なんかも普通に接してくれる人間性は嫌いじゃないが。

「……気持ちは嬉しいんだが、今日はアレがアレでちよつと都合が悪いからまた今度誘ってくれ」

俺は即興にしては完璧な言い訳をして丁重にお断りをしていた。社交辞令も交えられるようになり、社会人としての成長を感じざるを得ない。

目の前の男は俺の返答が予想通りだったのか、爽やか笑顔から表情を変えずに口を開いた。

「暇ってことだよな。じゃあ駅前居酒屋に19時集合でよろしく」

吉田はそう言い終わるや否や、俺の返事も待たずにそそくさと佐藤と思われるチャラそうな男と共に会社から出て行ってしまふ。まあ実際は暇だからいいんだけどね、今日は華金で明日は休みだし……。



渋々とだが、俺は指定された時刻である19時丁度に目的地へと到着した。時間を守ることは社会人の基本なのだ。

……5分前行動？ えっと、これプライベートなので許してください。

「比企谷、こつちだぞ」

中に入り周りを見渡していると、店の奥の方に位置する個室から素敵な笑顔で俺を呼ぶ奴の声が聞こえた。その男前を目印に俺は活気のある店内をいそいそと歩いて行く。そして、漸く席に辿り着いた俺は見知った男たちに挨拶しようと口を開こうとしたのだが。

「……………はい？」

同期の吉田と佐藤だと思われる男、その対面には初めて見る女性が二人ともこちらを見つめていた。片側の女性は、茶髪を肩まで伸ばした明るそうな雰囲気で、もう一人は黒髪ショートで大人しい印象を受ける女性だった。どちらも目鼻立ちが整っており、美人と言つて差し支えない二人組。

「比企谷君、早く座つて自己紹介するつしよ」

現状に着いていけずに困惑する俺に対して、チャラ男は自己紹介するように迫る。今すぐ逃げ出したいのだが、社会で揉まれたせいか昔よりも逃げ足が遅くなつてしまった

のである。仕方がないので就職活動中に身に着けた自己紹介を披露するとしますかね。見知らぬ他人に対して話すのも学生よりは俄然慣れたものである。

「……あー、えっと、比企谷です。こいつらとは会社の同期です。その、よろしくお願いします」

「よろしくね、比企谷くん！」

「比企谷……？ あ、よろしくー」

俺の挨拶に対して明るい朗らかな笑顔と何故だか疑問符を浮かべる女性陣。まあ半数を笑顔に出来たのであれば上々の自己紹介だっただろう。だったよね？

自己紹介を終え、席に座りおしほり袋を開けながらに俺は気付いた。これって所謂合コンと呼ばれるイベントではなからうか。

「……おい、合コンだなんて聞いてないぞ」

「言っていないからね」

向こう側に座る女性たちには聞こえないように小声で文句を告げたのだが、素敵な笑顔でそう返されてしまうと非難する言葉はもう出てこなくなる。正にイケメン無罪であり、これが許されてしまう社会が憎い。

対面の女性の目的は間違いなく横に座る男だろうし、ここは無難に盛り下げないよう気を付けながら時期を見て帰ろう。俺はそう踏ん切りをつけ、軽く息を吐き姿勢を正し

た。

すると、女性の一人がスマホを確認して何やら嬉しそうに笑い始めた。そのままに彼女は席を立つと、先ほどの佐藤のように個室からひよつこりと顔と手を出して声を発し始める。

「こつちこつち、はやくー!」

「ちよつと、お店に迷惑になるから騒がないで欲しいのだけれど……」

その返ってきた澄んだ声を聴いて俺の身体は反射的に動いた。聞き間違える筈もない、この声は……。

無意識に立ち上がっていた俺は通路から聞こえてくる音に神経を集中させる。段々と小気味の良い足音が近付き、やがて先ほどの声の持ち主の姿が現れた。長い黒髪を垂らし、白磁のような肌を持つ彼女。

「……………雪ノ下」

「……………比企谷君」

そこには、あの雪ノ下雪乃が立っていた。唯でさえ作り物のように美しかった学生時代から更に綺麗になったその容貌に、俺を含めた男性陣全員が息を呑んだ。

「比企谷君、もしかして知り合いなん? 紹介してくれっしょ!」

チャラ男に声を掛けられた気がするが、久しぶりに見た彼女に見惚れてしまっている

ので何も言葉を返すことは出来ない。

そんな静止した空気を動かすように、吉田は全員に聞こえるように明るく声を掛けた。

「みんな集まったことだし、まずは乾杯をしようか」

「雪ノ下さんの分も頼んでおいたよー」

「え、ええ……ありがとう」

少しぎこちなさはあるが笑顔で返しているところを見ると、雪ノ下は同期の女の子と仲良く出来ているのであろう。あの文化祭の時のように一人で激務に追われたりしていないかと心配だったが、それは杞憂だったみたいだ。

乾杯の後、俺たちは改めての自己紹介を行った。吉田と佐藤は相手方の女性である加藤さんと橋本さんと共に楽しそうに会話をしている。

そんな四人を横目に、俺は久しぶりに再会した雪ノ下に声を掛けようとしたのだが、同期の佐藤から横槍が入ってしまう。

「そーいや、雪ノ下さんと比企谷君ってどういう関係なん？ 知り合いっばかったけどさ」

「……高校で同じ部活だっただけだ」

高校で同じ部活になって、何だかんだ大学生の時も仲良くしていた間柄です。などと

マウントを取りたい欲に駆られるが、本人の目の前だと流石に出来やしない。

「そうなん？ 付き合ってたりとかはしてないん？ だったらめっちゃ美人だし俺アタックしちやおつかなく」

「おいおい、佐藤じや無理だろう……」

吉田は意味深に笑って佐藤を牽制し、俺を一瞬見てから雪ノ下はその顔を向ける。まさか、吉田までもが雪ノ下を狙っているのだろうか。

俺がそんな危機感を募らせていると、吉田は静かに席を立ち雪ノ下に声を掛ける。

「雪ノ下さん、ちょっといいかな」

対する雪ノ下は特に嫌がる素振りも見せずに快諾してしまう。そして彼女も席を立って二人で何処かへ歩いて行ってしまった。

あの吉田に本気で狙われたら、雪ノ下といえど危ないんじゃないだろうか。内心無茶苦茶に焦っていた俺はトイレに行く振りをして席を立ち、二人の様子を見に行くことにした。

焦りのままに大袈裟に店内を見回すと、店の入り口の方で会話している二人が目に出された。あの雪ノ下が興味深そうに吉田の話を聞いている姿が俺の目に入り、心の奥底から醜い嫉妬が芽生えそうになるのを理性で抑え込む。

——今の俺に出来るのはただ黙って元の場所へと戻ることだけだった。

「吉田君、二人で何の話してたん?!」

俺が席に戻ってから数分もせず雪ノ下たちも帰ってくると、間髪入れずにチャラ男が口を開いて詮索を入れ始める。騒がしいだけだと思っていたけれど、躊躇なく訊けるメンタルは見習いたいものだ。

「……秘密だよ」

イケメン笑顔で誤魔化す彼に対し、俺は恨みを込めた視線を向けてしまう。だが、それでは何も解決はしないので、動揺を隠し切れないまま雪ノ下に直接訊いてしまった。

「ゆ、雪ノ下……その、何を話していたんだ?」

「た、大したことではないわよ……」

雪ノ下は少し頬を赤く染め、俯きながらそう小さく呟いた。その可愛らしい姿には心打たれそうになるけれど、彼女が照れている理由を想像すると腸が煮えくり返りそうになるのだった。

「少し早いけれど、二次会に行こうか」

「おっけーい!!カラオケ行くっしょ!!」

店の外に出ると吉田達が二次会の提案をしていた。相手方の女性陣も笑顔で快く同

意しているように見える。俺としては憎悪の気持ちで満ち満ちているため、1秒でも早く帰りたいのだが、雪ノ下が行くのであれば帰る訳には行かないだろう。

彼女も特に拒否をしている様子は見られないため、俺は二次会への参加を決意していると、吉田が雪ノ下に一步近付いて口を開いた。

「雪ノ下さんには悪いんだけど、二人で別のところに行ってもらえないかな？」

「ええ、構わないわ」

雪ノ下の了承が出たところで俺の意識が飛びそうになる。このままでは不味い、何か行動を起こさなくてはと必死で頭を回転させようとする。

——しかし、俺のそんな悪あがきは一瞬で無意味なものになった。

「比企谷君、早く行きましよう？」

「……………は？」

突然、雪ノ下に手を取られて頭が真っ白になる。えっ、吉田はいいの？ 誘われたん

じゃないの？

「近くに良いバーがあるから、そこでいいかしら？」

雪ノ下に柔らかい微笑みで問い掛けられては、二つ返事で了承してしまうのも致し方ないだろう。そんな俺の様子を見て嬉しそうに歩き始める彼女の様相に、俺の心拍数は著しく上昇していた。

「比企谷、雪ノ下さんのエスコートをしっかりするんだぞ」

「フアイトっしょ、比企谷君！」

同期の吉田と佐藤が声を掛けてくれているのだが、俺には彼等に反応する余裕など一切なかった。今はただ、彼女の手の感触に俺の意識は奪われていたのだから。

ただひたすらに彼女の背中を追いかけていると、気が付けばお洒落なバーへと入店していた。暗い店内には大きなカウンターが鎮座しており、周りには幾つか座れる椅子が設置されている。

お店のマスターに案内されるがままにカウンターに並んで座り、適当にカクテルとつまみを注文した。頼んだ酒が到着したタイミングで、隣に座る彼女は微笑みながらグラスを持ち上げる。

「久しぶりね、比企谷君。一先ずは乾杯をしましょうか」

「お、おう。……乾杯？」

グラスは接触させないように、ゆっくり丁寧に乾杯をした。

これは割れてしまう恐れがあるから本来は接触させない方が良いというものもあるが、俺自身が彼女に触れる勇氣を持ち合わせていないからだだった。

お互いに一口だけグラスに口を付けると、雪ノ下がこちらに問い掛けてくる。



「……比企谷君も合コンなんて行くのね？ 残念ながら私の同期の子はまだちゃんとしてきているのだけれど」

「いや待て、合コンだなんて知らなかったし、俺はゾンビの類ではない」

何も嘘を言っていないのだが、彼女は不服そうにこちらを見つめている。合コンだと知っていたら行かなかったからね？

「……どうかしらね」

「そういうお前はどうかんだよ、なんか吉田と仲良く話してたけどよ」

少し苛立ちを込めてそう呟いてしまったところ、彼女の瞳が僅かに大きくなった。そして、お得意の意地の悪そうな微笑でこちらを見つめる。

「あら、嫉妬かしら？ ふふっ、少し嬉しいわね」

彼女の素敵なその笑顔と、羞恥心から少し顔が赤くなってしまう。それを隠すように俺は顔を視線の反対側へと向けるも、雪ノ下はそのまま言葉を続けた。

「……吉田君、だったかしら？ には比企谷君の会社での様子を話してもらっていただけよ。彼は私と比企谷君が知り合いだって最初から知っていたらしいわね」

「……はい？」

「私の同期の加藤さんが吉田君と知り合いだったらしくてね、今回のことを協力して企画してくれたらしいわよ」

「いや、俺は雪ノ下と知り合いだなんて会社で喋った記憶がないんだが……」

一体全体どうなっているんだと俺は首を傾げた。そんな俺の様子が可笑しいのか、目の前の彼女はくすくすと笑っている。

「あなた酔っぱらうとすぐ私たちのことを話すらしいじゃない」

「……………記憶にございません」

まじかよ、理性の向こう側の俺なにやっつてんだよ。

もう同期とは酒を飲まない。というか会社関係の飲み会には参加しても酒は飲まないようにしよう、うん。

「私もね、同期にはあなたのことを話したことがあるのよ」

雪ノ下が静かに、ゆっくりと語り始める。俺は氷の入ったグラスを火照る頬に当てながら黙って聞いていた。

「だからかしらね、珍しい苗字ってこともあるし、特徴も特徴だから知り合い経由で特定されてしまったのでしょうね」

なるほど、だから自己紹介の際に俺の名前を言ったら相手方に妙な反応をされたのか。

俺は腑に落ちると同時に安堵した。そして吉田に胸の内を謝罪をする。あいつマジで良いイケメンだったのね。

「世間ってマジで狭いんだな……」

「そうね。というより、私とあなたが想像以上に運命の糸で繋がっているって感じかしらね？」

揶揄うように笑いかけてくる。今の雪ノ下さんは大変上機嫌である、かわいい。

その後、2時間ほど聞き慣れない名前のカクテルを飲みながら、お互いの近況についての話をしていた。

やはり雪ノ下はエリートコースまっしぐららしい。1年目にして社長から表彰されるほどの仕事っぷりだそう。そんな彼女と仲良くしてくれる同期がいることを心から嬉しそうに語っていた。

恵まれた環境で、より魅力的になっていく彼女を1年も見られなかったことが俺は何よりも悔しく感じた。

酔いを感じながらも携帯を確認すると、そろそろ終電を意識する時刻であった。この時間が終わってしまうのは惜しいけれど、帰ろうと雪ノ下に声を掛ける。

「おい、そろそろ終電だから早く帰ろうぜ」

「……………」

返事をせず、こちらを睨みつけてくる雪ノ下。比企谷八幡のぼうぎよがさがった気が

する。

「雪ノ下さん？」

「はあ……。あなたは社会人になっても変わらないのね」

彼女は何か呆れているようだが、皆目見当もつかない。まさかお洒落なバーなんかには帰る前の作法があつたりするのだろうか。

「……とりあえず出ましようか」

渋々といったところだが、店の外へと向かう雪ノ下に俺は黙って付いていった。

もう日付も変わってしまいそんな時間だった。道行くサラリーマンと思われるスーツ姿の人々は駅に向かって歩いて歩いている。

俺たちもその人々に付いていくように会話もせずに駅へと向かった。

「じゃあ気をつけてな」

「ええ、あなたもお巡りさんに気を付けてね」

駅に到着したので、改札前で雪ノ下に別れの挨拶をする。

特に酔っている様子もないので送らなくても大丈夫かなと思っていたのだが、段々と彼女の顔が赤みを帯びてくる。急にアルコールが回ってきたのだろうか。

「……あの、比企谷君」

「…………どうした、雪ノ下？」

雪ノ下は不安そうにこちらを見つめていた。一呼吸を置いてから彼女は続きの言葉を口にする。

「あ、明日は時間あるかしら。良ければ映画でも見に行かない？」

俺は想像もしていなかった雪ノ下からの突然のお誘いに驚きを隠せない。しかし、動揺しながらも喜びの方が圧倒的に上回った俺は反射的に首を縦に振っていた。

彼女は俺の了承の意思を確認すると、急にくるりと背中を向けた。

「…………じゃあ明日の12時にここで集合にしましょう」

そう言つてそそくさと逃げ帰ろうとしている雪ノ下を追いかけて、その手を握った。俺らしくもないが、これは酒で酔った勢いなんだと自分に言い訳をする。

「…………やっぱ送るわ」

心底嬉しそうに微笑む彼女からの返事は、俺の手を強く握り返すことだった。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #2

どうして休日なのに俺は朝早く目を覚ましてしまったのだろうか。思い当たる理由は幾つかある。真つ先に浮かぶのは昨夜の出来事だろう。

雪ノ下の手を握って歩き出したまでは良かったのだが、電車に乗るタイミングで周りの目が気になって彼女の手を離してしまった。その際の彼女の残念そうな声を拾ってしまったので申し訳ない気持ちになった。小心者ですいません。

その後、雪ノ下が現在一人暮らししているらしいマンションに無事に送り届けた。彼女はお礼にお茶でも出すと言ってくれたのだが、時間も時間だし、送り狼になってしまいう可能性も考慮して断った。いや、ならないですけどね……。

別れ際には改めての送ったお礼の言葉と今日のデートのリマインダーをかけられた。お礼はいいけど、もう片方は余計なお世話である。多分一生忘れないから。

本日はそのデートがあるのだ。故に早く起きられたのだ、と言いたいところなのだ。目が覚めてしまった理由はただの習慣であろう。社会人になると朝早く起きることが強制され、矯正されてしまうのだ。

精神的には学生気分が抜けない俺ではあるが、身体はもう立派な社畜なのである。悲しいね。

予定の時間までは随分と余裕がある。取り敢えず日課のログインとデイリーミツシオンを消化しつつ、朝ごはんとしてカップラーメンを食べることにした。お湯を沸かすだけで食べられる簡単さと美味しさの両立ができた素晴らしい食べ物を。健康面は知らない。

朝飯も食べ終わり、無事に推しをURRで優勝させたところで、この後のお出掛けについて思想する。っていうか改めなくてもこれから雪ノ下とデートなんですよ。想像だけで胸が高鳴り、冷静さを欠きそうになる頭を冷やすべく、俺は風呂場へと向かった。

冷たい水を被って落ち着いたので、出かける準備を始める。服装は黒のパンツと白いシャツでいいだろうか。

無難ではありそうなんだが、あの雪ノ下の隣に立つ姿としてはどうなんだろう。と言つても他に良さそうな服もないため、これに着替えるしかない。

今から出かければ約束の時間の30分前には到着できるはずだ。天気も本日は晴天が続くらしいので、財布とスマホだけ持って家を出る。雪ノ下もそろそろ家を出る頃だろう。

……彼女に会えるのが今から楽しみだ。

「あの男の好みの服装ってどうだったかしら」

目が覚め、シャワーを済ませ、朝ごはんを食べ終わった際に時計を見ると8時前だった。服装を選び始めた時刻も大体その時のはずだ。

しかし、現在の時刻は10時30分を過ぎたあたりである。十分な時間はあつたはずなのに、一向に本日のデートに着ていく服が決まらない。

自分から誘ったとはいえ、今日のお出かけイベントは予定外だったのよね。昨夜の舞い上がった自分を少しだけ恨めしく思ってしまう。

間もなく服装を決めないといけないので、ネットで調べた情報を頼りに男性受けの良さそうな、上は白のブラウス、下はブルーのフレアスカートに決めた。

あの男が一般的な男性の感性を持っているとはあまり思えないのだが、時間がない以上もう決めるしかなかった。

今から急いで支度をすれば待ち合わせの30分前に到着できそうだ。あの男、比企谷君よりも先に着いていたい。

負けず嫌いはいつになっても治りそうにはない。



昨晚にあの約束をした駅に到着する。あの時の行動や発言、そして彼女の柔らかな手の感触を思い出してしまい、身体がむずがゆくなる。

「……肉体の腐敗が進んだのかしら、この晴天の中を出歩いたのだから仕方ないのかも  
しれないわね」

「いや、ゾンビの類じゃないから……」

振り向いた先には、穏やかに微笑んだ雪ノ下が居た。服装は白いシャツに青のスカートで、大変よく似合っている。マジで綺麗だなこいつ……。

「それじゃあ行きましょうか」

背中を向けて、いざ行かんとしている彼女に対してなんとか言葉を振り絞る。

「……えっと、その、服似合ってるな。可愛いと思うぞ」

「……………あ、あの、ありがとう」

わざわざ振り返り、返してくれた言葉と表情はいたく可愛らしかった。そんな素敵な彼女に俺は追加で言わないといけないことがあった。

「ちなみに映画館は逆方向だぞ」

場所は変わり、現在はオムライス専門店に來ている。映画を見る前にお昼ご飯を食べようとのことだ。雪ノ下は映画館の逆方向側に見つけたこのお店に誤魔化すように入

店したのである。

「比企谷君は何にするか決めた？」

「……そうね、普通のスタンダードなオムライスでいいかな」

「そう、じゃあ注文するわね」

店員を呼び、注文を済ませる。雪ノ下はデミグラスソースのオムライスを注文していた。

オムライスにはケチャップソース派かデミグラスソース派かで別れるところだが、俺は断然デミグラス派である。自分で作る場合にはケチャップソースにしてしまうのがその要因かもしれない。一人暮らしの自炊でデミグラスさんを登場させるのは荷が重いのである。

メニューをちゃんと読まずに決めたのが敗因であった。悔しい。

「そういうええ見たい映画とかあるのか？」

「特にそういった映画があるわけではないわ」

え、そうなの？ それならば、何故映画を見ようなんて誘ってきたのだろうかと疑問に思っていると、彼女がその口を開いた。

「……別に映画じゃなくてもよかったのよ。あなたを誘えば何でもよかったの」

「お、おう」

当たり前のように心は読まれるし、デレのんになってるし、でタジタジになっちゃった。お出掛けをすれば調子上がる筈なのに、俺の調子は下がっていく。気分が上がっていることで帳消しかもしれないが。

「お待たせしました、こちらが注文の商品になります」

「ありがとうございます」

配膳してもらったオムライスを目の前にする。この店のオムライスの卵はふわとろタイプのようなのだ。

薄焼き卵のタイプであればケチャップソースとの相性は良いのだが、ふわとろだと更にデミグラスで食べたい気持ちが大きくなる。しかし表情にはおくびにも出さない。俺はもう立派な大人なのだ。

「一口いかがかしら。どうぞ、比企谷君」

「……はい？」

スプーンで一口分をよそい、こちらに差し出してくる雪ノ下。これって所謂 “あん” じゃん。いや無理、恥ずかしいし、あと超恥ずかしい。

「……流石に恥ずかしいからムリ」

「……えっと、早くしてくれない？」

ちつとも差し出した手を下す気配がない。彼女の表情は如何にも挑戦的で、余裕があ

りそうに見えるのだが、耳の方が少し赤くなっている。恥ずかしいならやらなければいいのに。

「ただでさえ少ない私の体力を奪うつもりのようなね。私を弱らせてどうするつもりかしら。やはり移動の途中で休憩しようとか言い出すのかしらね。最低ね、まるで比企谷君じゃない」

「……あーん、うん美味しいな。というか、そんなことは言わん。あと最底辺の例えに俺を使うのはやめろ」

遂に耐え切れずに罵倒し始めた彼女を救うべく、羞恥心に打ち勝った俺はそのスプーンを啜えた。残念ながら味はあまり分からなかった。

「ふふ、あなたはこっちのオムライスの方が好みでしょう？ もう一口いかがかしら」

やはりというか、なんというか、こちらの思ったこと彼女には筒抜けのようだ。

「いや、もう充分だわ。あとは自分で食べてくれ」

もうこれ以上はこの羞恥心に抗えそうにもないので、そう言葉を返すと残念そうな雪ノ下さんが目に入る。だが、次の瞬間にはまた挑戦的な表情に戻る。何か思い付いたのだろうか。

「……それなら、次はあなたのオムライスを頂けるかしら」

控えめに口を開き、少しだけこちらに顔を近づける雪ノ下。これってさっきのお返し

をしろつてことですかね。ハードルが高すぎませんかね。しかし、言う通りにしないとまた罵倒が飛んでくることは想像に難くなかった。

仕方がないので、雪ノ下の口に入るように少な目にスプーンでよそい、黙って彼女にその匙を近付けていく。

「おい」

勇気を出してスプーンを差し出したのに、彼女は口を閉じてしまった。しかし、顔の位置はまだ近づけたままである。

これつてもしかして……。

「あ、あーん……」

ふふつと笑い、口を開けなおしてスプーンを頬張る雪ノ下さん。控えめに言っても天使である。

その後は普通にそれぞれでオムライスを食べ進める。スプーンの交換とかは特にしていない。それじゃあ間接キスじゃん意識してしまうような年齢ではもうない。だから一切気にしていない。…でもオムライスの味は分からなかった。

作ってくれた店員さん、本当にごめんなさい。今度一人でゆっくり味わいに来ます。

食後のコーヒーを飲みながら、これからどうするかを画策する。映画じゃなくてもいい

いと彼女は言っていた。だが、他に行く所もやることも特には思いつかない。それじゃあ、とりあえず映画でいいんじゃねと思いは始めていると、雪ノ下が口を開く。

「比企谷君はどこか行きたいところはあある？」

「いんや、思いつかないわ。そつちもなければ映画でいいんじゃね、当初の予定通りだしな」

そうね、と彼女は同意した。会計を済ませ、お店を出ると陽の光に晒される。今日は少し暑くなりそうだ。

4月の頭にしては珍しいその熱気を少しだけ先の未来への期待感へと昇華させる。身だけではなく、心も温かくなればいいなと思わずにはいられない。

隣の彼女を見れば、穏やかな眼差しを空へと向けている。彼女には今日一日ぐらいは笑って過ごして欲しい。そんなことを思ってしまう程度には毒抜きをしてもらった。

この後はできるだけ彼女のために行動してみよう。返せるときに返すのが社会人の務めである。

「ほら、行こうぜ」

そう言っただけで差し出した手には昨夜のような言い訳なんてない。嬉しそうにその手を掴んで、握ってくれる雪ノ下が笑ってくれるのだから、言い訳なんて今日は必要ないのだ。

# やはり俺の社会人生活は間違っている #3

青い空の下、雪ノ下の手を引き映画館までゆつくりと二人で歩いた。歩調を合わせて、呼吸を合わせて。今の俺の気持ちも雪ノ下と合っていたらどれだけ嬉しいことだろうか。

彼女の体温が手から伝わる。少しだけ冷たかった手も、俺の体温で中和されたからか今は温かい。まあ単純に少し気温が高いせいかもしれないけどね。

映画館に到着したため、今上映している映画を壁や柱に掲示されているポスターで眺める。

真つ先に目に付いたのはプリキユアである。学生時代のストレスですら彼女たちの輝きに心を癒されていたのだから、ストレス社会に出るからは涙が出るほどである。学生時代から回によっては泣いていたが。もしかしたら年を取ったから涙腺が脆くなっているだけかもしれない。

「…他に何か気になる映画はあるかしら？」

隣で雪ノ下さんがしらっとした顔でこちらを覗いていた。慌てて他のポスターをささっと確認するとホラーや探偵アニメ、実写版剣客、ギャングブル系、青春恋愛、鬼を滅

するやつなどが上映中のようだ。

彼女が興味を持ちそうな映画はどれだろうか。意外と探偵アニメは楽しんで見てくれるんじゃないかなと思う。最近は女性に大人気だしね。

しかし、今の状況を考えれば自ずと見るべき映画の答えは出てくる。男女がデートで見る映画は青春ものの恋愛映画と相場が決まっているのだ。

「この恋愛映画つばいのでいいか？」

「意外なチョイスね。あなたのことだから同族が出ているホラーが見やすいアニメ系を選ぶものかと思っていただけ」

お決まりのゾンビ扱いである。この扱いも慣れるとなぜか嬉しくなってしまう。冗談を言える間柄だという安心感が持てるからだろうか。え、冗談だよね？

「でも嬉しいわ、ありがとう」

雪ノ下はこちらの意図を汲んでくれたのであろう。彼女の表情がそう物語っていた。「じゃあチケット買ってこくるから待っていてくれ」

繋いでいた手を離すのは非常に惜しかったが、人の視線もある中でいつまでも続けることは精神的にちよい辛いというのも本音である。財布を出さないといけないし、ここはひとまず急いで買ってこよう。

券売機に到着したため、席を探し始める。昔の俺ならば、席は通路席で出入口に近い



場所を選んだであろう。

だが、今回購入する席は真ん中よりも少し後ろの方の列で中央の2つ並んだ席である。一人ならまだしも二人で見えるのだ。見やすさを重視してもいいだろう。

無事に購入して雪ノ下の居る場所に戻る。足音で俺が戻ってきたことを悟ったからか、顔を上げてこちらを見て微笑んだ。そんな彼女に買ってきたチケットを手渡しする。

「チケットありがとう、比企谷君。値段はいくらだったかしら」

割り勘を所望してくれる雪ノ下さん。デート代は男が全額支払って当然という女性が存在するらしいことを考慮すると、彼女の価値観は非常に好ましいと言わざるを得ない。

しかしだ、デート代くらいは出してあげたいと思うのも男の矜持であろう。その相手が彼女のような女性なら余計にそう思ってしまうだろう。

「要らねーよ、映画代くらいは俺に出させてくれ。それと飲み物とかどうする？俺は何か買おうと思ってるんだが」

「ふふ、大したプライドね。でもありがとう、比企谷君。飲み物はアイステイーでも買おうかしら」

俺の安いプライドを彼女はちゃんと尊重してくれた。今日は彼女のために行動しよ

うと思っていたが、彼女の方が俺のために行動してくれているように感じる。

お返しではないが、飲み物も映画代の一部と称して奢らせてもらおう。彼女は遠慮するだろうが、ここは強引にでも出させてもらおう。

なんやかんやで飲み物を購入し、そして映画の席に到着した。

ここで飲み物を右と左のどちらのホルダーに入れるか問題に直面する。なんとなく利き手側に置きたい気がするのは普通なのだろうか。

しかし、右側には雪ノ下が座っている。彼女は右利きだが、左側のホルダーを使う可能性もある。左は空席だし、それなら左側でよくね？と思いついて、左側のホルダーに飲み物のコーラをセットする。

その後、雪ノ下は彼女の利き手の方である右側に飲み物を置いた。じゃあ右側に置いてもよかつたじゃん。別にいいんだけどね。

映画の予告ムービー連打が終わり、ノーモア映画泥棒が流れ始めた。これを見ると映画がもうすぐ始まるんだという感覚に襲われる。

特に悪いことはしていないのにサイレンの音を聞くとビビってしまうのはなぜだろうか。そこそこの頻度で職質されるのが原因かもしれない。

怪しい目をした男が夜間に出歩いているのだ、警察の方が意欲的に仕事をしているのであれば当たり前のことかもしれない。

日本の治安維持への貢献、誠にありがとうございます。そんなことを考えていると映画が始まった。

彼が恋愛映画を選ぶとは正直思ってもいなかった。

昔聞いた話だと、テレビで恋愛映画が放送された際に小町さんと一緒に見たらしいのだけれど、小町さんが隣で感動している横で彼は眠気と戦っていたらしい。

兄妹でそこまで感性が違うというのはどうなのかしら。まあ、比企谷君の感性が常人と違いすぎているのが原因でしょうね。

映画の内容は一人の男性とその男性を想う二人の女性による三角関係のお話のようだ。

私と由比ヶ浜さんと比企谷君の高校時代の関係も似たようなものだったのかもしれない。ただ、あの男が誑かしていた女性が私たち二人だけとは到底思えないけれど。

大学に入学してからは由比ヶ浜さんは私のことを応援してくれるようになっていた。あの二人の間で何かあったのだとは思いう。でも私はそのことを聞こうとは思わなかった。

由比ヶ浜さんが居て、比企谷君が居てくれる。三人で集まれることを当たり前のように享受していた私は彼女らに甘えていたのでしようね。

環境や立場が変われば関係性も変化する。高校を卒業すると同時に私と彼は部活仲間から親しき友人に変わった。大学を卒業すれば友人からまた更に近づいた関係になれると思っていた。

けれど心地のよい友人という殻は私が考えていたよりもずっと頑強で、関係は変わらずに停滞。そんな悩みを大学を卒業して間もない頃に由比ヶ浜さんに相談してみた。

彼女は比企谷君が私と一緒に居ることに慣れてしまっていて、それと同時に友人の関係性に満足している——そんな風に感じていたらしい。

私も大学の四年間で毎週のように集まり、三人で過ごす日々には不満はなかった。けれど、私はもつと比企谷君との距離を埋めたくなくなってしまったから。

由比ヶ浜さんの提案はこうだった。比企谷君から誘ってくるのを待つこと。今までは由比ヶ浜さんが次に会う日を決めてくれていたから、私たちは予定を合わせて集まる事が出来ていた。

社会人になれば今までのように会うのは難しくなる。けれど、会おうと思えば会えないことなどない。

『誘うのは会いたいって思っているからなんだよ！』

彼女は比企谷君に、自分から誘ってでも会いたいと思わせることが大事だと話していた。

彼は面倒くさい性格をしているから、自分から誘う時には絶対に理由を求めろ。そして、その理由はただ単純に会いたいからなのだと嫌でも理解するだろう。

そうしたらすぐに二人の関係性は変わる。だから待ってみようということだった。

これは言うならば、比企谷君と私の耐久勝負であると。

……残念ながら1年の間、彼からのお誘いはなかった。

年度の末に由比ヶ浜さんと会った際には、我慢比べは私の負けだと言われてしまった。

確かに、彼と会えないのが辛くて涙してしまった夜も少なくないし、学生時代に撮った彼の写真を毎日のように眺めたりしていたけれど、まだ負けてはいないと思う。

『どこかで偶然出会えたら盛り上がりられるかもしれないね。ヒッキーは普段外出しないだろうから難しいかもだけど』

この彼女の発言を聞いて、私は彼を誘わずに出会う方法を思案した。

勝負には負けたくはないけれど、彼には早く会いたい。だから私は同期でコミュニケーションが広い友人に相談をすることにした。比企谷君の勤め先は知っていたから、その会社を知り合いが居ないかどうかを尋ねてみたのだ。

幸いなことに知り合いが居るとのことだったので、その知り合いと協力してもらい、比企谷君をあのお店に連れ出してもらった。

彼にはあの夜に運命がどうか喋ってしまっただけけれど、本当は運命的なことなんて一切なかった。今見ているこの映画でも運命という言葉が度々出てくるけれど、その都度、ほんの少しだけ胸がちくりと痛む。

私はこんなにも比企谷君のことを考えているのに、隣に座る彼はどうなのだろう。ちらと横目で彼を見ると、一瞬だけ目が合ったが、即座に映画の方へと視線を戻してしまっただけ。

彼がそこまで映画に熱中してるのかと思うと嫉妬心が芽生えそうになる。私は少しでも彼に近づきたいという想いから、肘掛に腕ごとゆつくりと乗せていった。きつと彼は、私のこんな気持ちには気付いてくれないだろうなと思っていた。

全くと言っていいほど映画に集中できていない。理由はご明察の通り、隣に座る彼女、雪ノ下雪乃のせいである。

人のせいにするのは良くないと思うが、こればかりは仕方ない。映画に出てくる女優なんて目じやないほどの美人であることは説明するまでもないが、そんな彼女の真剣な横顔をずっと見れるのである。

映画のチケット代が安すぎてびびる。おいおい、諭吉さんくらいなら余裕で出せるぞ。

正直、映画の登場人物がどうなるうともあまり興味はない。俺は横に座る彼女さえ幸せになってくれれば充分なのだ。

そんなちよつと痛々しいことを考えながら彼女を横目で盗み見していると、不意に目が合ってしまった。俺は誤魔化すように素早くスクリーンへと目を戻す。

ずつと見てたのバレてないよね？生まれ初めて初めて恋愛映画を見てドキドキしてしまっている。なるほど、こういう気持ちになりたくて恋愛映画を見るんだね。そんな馬鹿げたことを考えていると、雪ノ下が右の肘掛に手を置いたことに気が付いた。

……これはあれだな、手を繋いで映画を見ようっていうあれだな。なるほど、雪ノ下さんも可愛いところあるじゃないか。いや、改めなくても雪ノ下が基本可愛いのは重々承知ですけどね。

俺は意を決し、彼女の手に分自分の手を重ねようと動き始める。

指先が触れた程度で、彼女はビクツと身体を跳ねてしまった。これは、もしかしくても求められていなかったのでは……………。

勘違いで先走ってしまったことによる自己嫌悪に陥ってしまいそうだったが、彼女は口角を少し上げ、その手のひらをくるりと裏返して肘掛に置き直した。

指の間隔を少しだけ広げ、口の動きだけで俺に催促をしてくる。彼女の求めていることを理解した瞬間、鼓動が痛いほど早くなる。

彼女の手を、指を決して傷つけないように、離さないように自分の指で閉じていく。普通に握るよりも遥かに密接になるこの繋ぎ方は何て呼ばれていただろうか。そう、”恋人”繋ぎだ。

俺と雪ノ下の関係はまだ違うけれど、そう呼べるようになりたいと思っている。

映画はハッピーエンドを迎え、エンドロールが流れ始める。俺と彼女はどんな終わりを迎えるのだろうか。願わくば幸せにしてあげたいと思ってしまうのは間違っていないだろう。

彼女との物語がエンドロールを迎えるのはまだまだ先になることを、未だ繋いだ手に慣れる先触れがない俺は理解していた。



## やはり俺の社会人生活は間違っている #4

映画館を出る頃には空は少し赤みがかっていた。夕暮れが少し近づいてきていることを知らせてくれる。隣に居る彼女の顔も少し紅潮しているように見えるが、これは空色の影響なんだろうか。

一応今日の予定としては終わってしまったのだが、この後はどうしたいのだろうか。

自分の考えすら纏まっていけないのに、彼女に委ねてしまうのは甘えだろうか。

甘えと言えなれば、俺は今までずっと彼女たちに甘えてきたのだろう。今日のデートも雪ノ下に誘ってもらえたから実現したことだ。自分から誘うなんてこと、ほとんどしてこなかった。いや、できなかったのだ。

社会人になってから1年間も彼女に会えなかったのは、自分が誘う勇氣を持てなかったことに原因があると分かっている。いくら忙しいとは言え、会おうと思えば時間くらい作れたはずだ。俺も誘われたら何が何でも時間を作つただろう。

同期の吉田に誘われたあの日も彼女たちを、いや彼女を強く思い浮かべていた。会えなくなつてから、彼女への気持ちは嫌というほど理解してしまっていた。あとは誘う勇氣さえ持てれば良かったのに、その最後の一步が踏み出せなかった。

だからあの日、彼女に、雪ノ下に会えたことは本気で嬉しかった。運命なんて言われて気持ちが昂ってしまった。

でも運命なんかじゃなくても構わない、偶然なんかじゃなくて、努力して必然にしてしまえば良かったんだ。

故に、今日からは神様頼りにするのではなく、自分で掴みにいこう。最後の一步どころか、これからは歩むようにその行為を繰り返していきたい。だったら、こんなところで立ち止まっている訳にはいかないのだ。

「……その、なんだ。この後は飯でも食べに行かないか？」

「え、ええと、喜んで」

彼女は夕陽を背に笑って応えてくれた。その頬は先ほどまでよりも更に紅に染まっている。ああ、そうだったんだな。雪ノ下はいつだって俺の自身が傷つかないように張った予防線を無駄にしてくれる。

今も先ほども、彼女が顔を赤らめてくれるのは俺のせいだった。

そして、俺の一步が勇み足にならないように彼女はともに歩いてくれるのだ。

無事に晩御飯に誘えたのはいいのだが、時間はまだ5時前といったところだ。流石に早すぎると思われる。昼食のオムライスでさえまだ消化しきっていない現状。雪ノ下

も同じだろうし、一体全体どうするべきなのだろうか。

俺がこの後のスケージュールリングについて必死に頭を悩ませていると、目の前の彼女は何かを思い付いたようで口を開き始める。

「まだ晩御飯には早いし、丁度いいから食材を買って私の家で食べない？」

「……………はい？」

あつけらかんとした彼女の提案に俺の理解が追い付くことが出来ない。気の抜けたような返答をしてしまったためか、彼女は少し不満げに言葉を紡いだ。

「なにかしら、私の手料理は食べたくないのかしら。それとも昨夜みたいに外で酔わせて私を帰れなくしようとしても画策しているのかしらね。それも悪くないけれど、帰る時間を気にせず一緒に居れる方が嬉しいのだけれど」

早口で罵倒し始めたのかと思ったらデレのんになっている。なにこの子、本当に可愛いんだけど。お持ち帰りしてもいいですか？ダメですよね、はい。

「昨夜はちゃんと帰れるように送つただろうが。あと俺はお前の手料理食べたいからそれでもいい」

「最初からそう言えばいいのよ、…………じゃあ行きましようか」

彼女は弾むように歩き出す。その背中が遠ざかってしまわないように、彼女のいつもより早い歩調に合わせて歩こう。それだけで俺の心は満たされるのだから。

場所は変わり、現在地は雪ノ下の住むマンションの近くにあるスーパーである。彼女は普段ここで買い物をしているのであろう。さほど迷わずにここまで案内してくれた。え、さほど……？ まあ、深くは追求しまし。

「比企谷君は何カリクエストはあるかしら」

「いや、なんでもいいぞ」

これは嘘偽りのない本心である。雪ノ下の作る料理なら何でも食べてみたいのだから。

しかし、問うてきた本人は困った感をジト目で表現してくる。

「何でもいいが一番困るのだけれど……」

雪ノ下のこの反応は作る側からしたら当たり前なのかもしれない。それじゃあ何か案を出そうと思案し始めてみよう。……えっ、本当に何でも食べたいんですけど？

雪ノ下に毎食作ってもらえるのであれば、その時に食べたい料理を伝えるであらう。しかし、こんな機会が何度もあるのか分からない以上、絞るのは非常に難題である。

パツと思いつく料理はいくつかある。肉じゃが、ハンバーグ、唐揚げ、ビーフシチュー、カレー等々。お昼が洋食だったことを考慮すると和食が無難だろうか。字面にして初めて気づいたが、”雪ノ下のお手製の肉じゃが” こんなの食べてみたいという感

想しかない。

「……じゃあ肉じゃがってできるか？」

「誰に聞いているのかしら、至高の肉じゃがを食べさせてあげるわよ」

ふふんと、自信満々に言い放つ雪ノ下さん。しかし、次の瞬間には少し恥ずかしそうに、自信なさげに言葉を紡ぐ。

「比企谷君は……その、私に胃袋を掴んで欲しいってことなのかしら」

上目遣いでそう訊く彼女に対抗できる男が居るのだろうか。俺は一切できない。対抗どころか、口をパクパクさせるだけで何も言えなくなってしまった。

彼女はそんな俺の姿を見て、口元を手で抑えて笑っている。考えてみれば男の胃袋を掴む料理の代表だった。無意識に胃袋を掴まれる期待をしていたのかもしれない。

「そういうつもりじゃなかったが、まあ……その、期待してる」

絞りだすようにそう小さく返すと、彼女は笑顔を見せてくれた。その頬は赤くなり、細めた目でこちらを見つめてくる。彼女にそういった意思があるかは分からないが、その表情はとて壘惑的であった。

肉じゃがの材料を買っていく。牛肉の切り落とし、人参、玉葱、じゃが芋、さやいんげん。さやいんげん以外はカレーと同じ材料だ。昔に学習教材の宣伝として付属され

ていた漫画を思い出す。校外学習でカレールーを忘れてしまったグループに所属する主人公が機転を利かせて肉じゃがに変貌させるストーリーだった。

今思えば、肉じゃが用の調味料がどこかにあるのであれば、カレールーもあってもいいんじゃない？とか他の班から少しずつだけルーを分けてもらうとかの方が現実的なのでは？とか考えてしまう。あとさやいんげんって肉じゃが以外でほとんど見ない具材だけど、需要ってどうなっているんだろう。

下らないことを考えていると、雪ノ下さんが他の食材をカゴに入れていることに気付いた。

カゴは俺が持っているので中身を一瞥したところ、ベーコンやらチーズやらが入っていた。これは何に使うんでしょうね。私気になります。

「お酒のおつまみに丁度いいでしょ？余ったら朝ごはんにも流用できるし」

いつものようにタイミングよく彼女に答えを教えてもらった。考えていることが筒抜けになっている可能性があつてこわい。というか雪ノ下さん今日もお酒飲む予定なんです。じゃあお酒も買わないといけないな。

「酒はどうするよ。酎ハイでも適当に買っていくか？」

「私の家に日本酒とワインがあるから買わないで大丈夫よ」

ほお、家にお酒の在庫があるのか。チョイスも雪ノ下のイメージ通りではある。雪ノ

下にワインが合わない訳がない。日本酒をお猪口で飲むのもいとおかし。いいね、すごくいい。

しかし、雪ノ下さんって一人でお酒飲んだりするんですかね。意外と会社のストレスの発散のために毎夜晩酌するタイプなのだろうか。

「実家に帰ると偶にお土産に持たされるのよ。一人ではあまり飲まないし、結構余っているから比企谷君が飲んでくれると助かるわ」

「ほーん、それなら遠慮なく飲ませてもらうわ」

結構いい値段のするお酒なんだろうけど、雪ノ下を助けるためなら張り切って飲んじゃうぞーと言いたいところなのだが、別に俺はお酒が強いわけでもないの、そこまでの量は多分消費できない。雪ノ下の前で粗相するわけにもいかないしね。

あとアルコールを摂取すると自制心が揺らぎやすくなるのが怖い。理性の化け物と言われたこの俺も、お酒を飲めば一般人レベルにまで落ちてしまう。

「ふふ、沢山飲んでくれるならおつまみも作ってあげましょうかね」

雪ノ下さんが嬉しそうに張り切っている姿を見て、既に自制心を失い始めている気がする。

そもそも雪ノ下の家で2人きりで飲むとかハードルがやばい。俺はちゃんと紳士的に振舞えるのだろうか。頼むぞ未来の俺。

買い物を終え、スーパーの袋に購入物を詰めしていく。雪ノ下さんの詰め方綺麗ですね。こんな些細なことに胸がキュンするのはおかしい。

詰め終わった2つの袋を左右の手で持つ。雪ノ下が何か言いたそうだったけれど、すぐに感謝の言葉を伝えてくれた。

店の外に出て、それじゃあ雪ノ下宅へ向かいますかね、と気合を入れていると隣に立つ彼女に声をかけられる。

「……その袋、どちらか片方持つわよ」

「いや、別に持てるから構わんぞ」

特段強がった訳じゃないが、雪ノ下さんは少し不満顔である。え、どうして。お得意の負けず嫌いが発動しているのだろうか。

困惑してしまった俺を見て、彼女は溜息を吐くと後ろを向いて歩きだしてしまった。この件はもう終わりにして、もう彼女の家に向かうのだろうか——そう思っていたのだが。

彼女は数歩だけ歩くと立ち止まる。背を向けたまま、右の手のひらを俺の方に向け少しだけ指の間を広げた。

俺は左手に持っていた袋も右手で持つと、彼女の元へ急いだ。



雪ノ下は俺が横に並び歩くと、その手を少し揺らして無言で訴えかけてくる。

俺は手汗を服で拭い、彼女の手と自分の手を繋いでいく。スーパールの冷房のせいだろうか、彼女の手は少しだけ冷たくなっていた。だが、もつと早く温めてあげることができた筈だろう。

「ふふ、じゃあ行きましようか」

「お、おう」

見るからに上機嫌になった彼女のその手はすぐに火照り始めていた。安心感と充足感を感じながら、握る力を少しだけ強める。

彼女もそれに呼応するようにギュツとその指一つ一つに力を入れてくれる。

もう簡単には離れそうにない。この心も。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #5

雪ノ下の住むマンションに到着する。駅から徒歩5分程度の8階建てのマンションのようだ。いや、結構な高級マンションですね。

昨夜来た時は真つ暗だったので分からなかったが、外観からして相当お洒落である。建物全体で弧を描くような造りになっており、各部屋が平行に並ぶのではなく、少し角度がズレるように設計されているようだ。よく分からんけど凄い。

オートロックの入り口を開けると、中は黒を基調としたシックなデザインのエントランスになっていた。大きいドーナツ型の白いソファアーの中心には観葉植物が置かれている。いや、無駄にお洒落過ぎませんかね。

「すごいや雪ノ下が住んでるのは何階なんだ？」

「6階よ。……その、ちゃんと覚えてね？」

すぐ隣に立っているのと身長差の関係で、こちらを見上げる形の彼女に見つめられる。これ狙ってやってるんだとしたら、とんだ悪女だぞ、雪ノ下さん。素なんだろうけどね。

当たり前のようにしどろもどろにしか返せなくなる俺。重くもないのに、右手に持っている荷物を握り直して心を落ち着かせようとする。しかし、左手がそうさせてはくれなかった。

エレベーターに乗り、6階まで上がった俺たちは遂に彼女の家の扉前にたどり着いた。心の準備ができていない俺は緊張でどうにかなりそうだった。

大きな緊張源の一つである左手に握られていた彼女の手が離れる。淋しさよりも安堵の気持ちの方がまだ大きいのは慣れのせいであろうか。

「比企谷君には悪いのだけれど、少しここで待ってもらえる？流石にもう〝待て〝はできるとかしら？」

「おい、犬扱いはやめろ。ちゃんと待ってるから」

「ふふ、それでは忠犬のように待っててね、ハチ君」

揶揄うように笑う彼女のその言葉に、別に自分の名前ではないのだが気恥ずかしくなってしまう。

買った物袋は雪ノ下に回収されたので、久しぶりに両の手が自由になった。自由って素晴らしい。まあ、軽くなった側はともかく、もう片方は不自由でも良かったけどね。

手持無沙汰になったため、スマホを確認する。数時間振りのため、いくつか通知が来ていた。ソシャゲの全回復通知にLINEが数件来ていた。

LINEを開くと、同期の吉田からのメッセージが届いているようだ。正直、めんどくさそうなのでスルーしたいが、昨夜のお礼もしたので既読を付ける。

『昨夜は雪ノ下さんと上手くいっただかい?』 13:40

『今度お礼に昼飯奢ってくれよな』 13:41

余計なお世話だが、感謝しているのは確かなので、適当にお礼を返す。

18:15 『うるせえよ』

18:15 『飯は今度おごるわ、ありがとよ』

そこから数分すると、雪ノ下宅の扉が開かれる。開ける前に解錠音が聞こえなかったので、鍵はかけていなかったようだ。ちよつと警戒心足りてないんじゃないんですかね、雪ノ下さん。

「あら、ちゃんと”待て”できるじゃない」

にこりと笑う彼女は服の上にエプロンを装着していた。それはいつだったか購入していた黒い薄手の生地、胸の部分に猫の足跡があしらわれたエプロンだった。

同時に思ったよりも幾分も似合っている。あの頃よりも年を重ね、大人らしくなって

いるせいだろうか。見ている側のバイアスについては測り兼ねます。

「やっぱり、すげえよく似合っているな」

「……………覚えていてくれたのね」

驚きからか、目を少し大きくした後に笑う彼女。先ほどの笑顔と違い、その笑顔は少し涙ぐんでいるように見える。

その涙にはきつと悪い意味はないだろう。だから別に気の利いたことは言わなくていい。普通に返せればそれでいい。

「まあな、記憶力には自信あるんだよ」

「忠犬としては必要な能力よね。じゃあ次は“ハウス”よ、できるかしら?」

「だから犬扱いはやめてね? ってか…………」

まるで犬のように躡られている。しかも“ハウス”は彼女の家に入ることらしい。

……………これは飼ってくれるってことでいいんですかね。最後まで責任持つてね?

「早く入りなさい、近所迷惑になるじゃない」

「あ、はい。お邪魔します」

突然の正論に思わず反射で入室してしまった。入った瞬間にサボンの香りを感じる。彼女の匂いを嗅いでしまったようで恥ずかしい気持ちになった。

「いらっしやい、比企谷君。まずはそこを右に曲がって手を洗ってもらえるかしら」

雪ノ下の指示に従い、まずは洗面所に入室する。

そこには大きな洗面台鏡が当たり前として、丸めのガラス瓶に植物が入った置物や幾つかの化粧水などのボトルが置いてある。こんなところもお洒落なんですね。

手を洗いながら、洗面台の端に歯ブラシが置いてあるのを見つめる。2つ置いてあったりはしない。分かっている筈だったが、こういう部分を見ると安心してしまふ。

リビングに入ると、右手にはアイランドキッチンが配置されており、正面手前には、二人用のテーブルと椅子が置いてあり、奥手にはブラウンのL字ソファと黒のローテーブルが置かれている。ソファの向かいには60型くらいの大きなテレビも置かれている。

……滅茶苦茶良い部屋ですね、雪ノ下さん。ここに住みたいです。

というか雪ノ下は何処に行ったのだろう。見当たらない彼女をキョロキョロと探してしていると、左側にあつた扉から凜とした顔で登場する。

彼女は先ほどまでとは少し異なる髪型をしていた。後ろ髪を下の方で纏めて横に垂らしていた。その彼女の髪を纏めているのはあの時のピンクのシュシュであった。

久しぶりに見た、昔にプレゼントをしたそのシュシュと彼女の今の姿を見て俺はどう思ったのだろうか。答えは簡単である。えっ、雪ノ下さん可愛すぎませんか？ その髪型はもう新妻のそれじゃん。俺はいつの間にか雪ノ下と結婚していた。それと、まだそ

のピンクのシユシユ使ってくれてたんですね、嬉しすぎて軽く死ねます（早口）。

そんな俺の馬鹿みたいな感想は彼女には伝えられそうにもない。しかし、彼女にはその一端が伝わってしまったようで、今の俺と同じくらい赤面してしまっていた。

彼を家に入れる前にすべきことがあったので、少しだけ時間を貰うことにした。それはリビングに置かれている数点のパンさんグッズを寝室へ回収することだ。

しかし、片付けをしていただけと思われると、普段片付けていないと誤認されてしまう可能性があった。それは癪なので、少し私の様相に変化を加えようと考えた。その結果、あのエプロン姿を披露することにした。

彼に似合うと褒められただけで購入してしまった黒い生地のエプロンを私は未だに使っていた。彼からすれば些細なことだと思うし、覚えていないかもしれない。それでも構わないと思っていた。

その時は、また似合っていると思わせればいいだけだと。

けれど、彼はちゃんと覚えていてくれて、また同じように褒めてくれたのだ。彼は私がお思っている以上に私とのことを記憶していてくれてると舞い上がってしまった。

だから私は宝物のシユシユを彼の前で身に着けようと思った。この宝物はエプロン

とは違って、彼が選んでくれた物だから、忘れ去られてしまっていたらショックを受けてしまうと思う。

見せつけるように胸の前に垂らした髪を束ねたシュシュを、そして私を見て、彼は目まぐるしい程恥ずかしい感情をその表情で、目で示してくれた。

彼を知らない人では分かりづらい彼の澀んだ目でも、私にはもう澄んでいるように読み取れるのだ。

漸く、調理に取り掛かろうという流れになったので、手伝いを申し出る。しかし、彼女は難しい顔をしてしまった。やはり素人がキッチンに入ると邪魔なのだろうか。

少し考え、何かを決断したらしい彼女は米研ぎだけお願いとのことだ。刃物を持たせるにはまだレベルが足りないかと判断されたのだろうか。

「今日はちゃんと私の手料理を食べて欲しいからこっちは手伝わなくていいわ」  
そういう趣旨だったのか。俺は分かった、と平静を装い返答する。

「…その、次は一緒に料理しましょうね、比企谷君」  
優しく微笑んだ彼女の追撃により、張りぼての平静状態はあっさり崩壊させられてしまった。



雪ノ下の横に立ち、お米を2合ほど研いでいく。炊飯ぐらいは一人暮らしでも行うので慣れたものである。彼女にも悪くないわね、とお褒めの言葉を頂いた。

炊飯器にセットし、俺のキッチンでの業務は終了となる。が、彼女の調理を横に立って見るぐらいは許されるだろう。

彼女は手際よく包丁を使い、下ごしらえをしていく。じゃが芋は皮を剥き、一口大にカット。人参は皮を剥いて乱切りに。玉葱は手で皮を剥き、くし形切りにしていた。

その後、大きめのフライパンで食材を炒めていくようだ。ごま油を敷き、玉葱から炒め始める。次に人参、じゃが芋と加えていく。既に美味しそうな気がする。

最後に牛肉を炒めた野菜の上に置き、醤油等の調味料を混ぜ合わせた液体をフライパンに注ぎ、蓋を締める。

「あとは焦がさないように加熱していただくだけよ。見てて楽しかったかしら、盗み見谷君」  
「堂々と見てただろうが。あと、結構新鮮で面白かったわ」

彼女の髪を結んでいるエプロン姿と合わせて、本当に新鮮で良い時間だっただろう。これから偶には見せて頂きたい光景だ。

何故か照れてしまった彼女にキッチンを追い出される。変なことは言っていないはずなのに、どうしてだ。

仕方がないので、少し離れてしまうが、テレビ前のソファアに座らせて貰おう。

ソファアの座り心地が非常に良いのはこの際置いておこう。今は雪ノ下が楽しそうに調理している姿を目に焼き付けるのに必死だった。

気が付くと部屋には出汁のいい匂い充滿していた。手元は見えないけれど、恐らく汁物を作ってくれているのであろう。

いつかこの光景を日常的に見られる日が来るのであろうか。その為ならばどんな努力も厭わないだろう。そう思ってしまうほど、この彼女との空間は幸せに満ち溢れていた。

炊飯器の炊飯完了を知らせる音が鳴る。結構時間が経っていたみたいだ。色んな料理の匂いが鼻腔に入り、堪らずお腹が悲鳴を上げる。

聞こえていたのであろう雪ノ下さんはくすつと笑いながら配膳を始めていた。俺が手伝おうかと立ち上がると、食卓の方へ座るように誘導される。

「もうすぐ食べられるから座って待ってね、腹ペコ谷君」

完全に甘やかしモードである。こちとら甘えることには慣れ切っているので普通に着席してしまった。

そして目の前には、白米とお味噌汁、ほうれん草のお浸し、そしてメインの肉じゃがが置かれる。対面に雪ノ下が着席すると、こちらに目配せをしてくる。食べていいのか

な？

「……いただきます」

「ふふ、どうぞ召し上がれ」

待ちきれないと言わんばかりにまずはメインの肉じゃがを一口頂く。煮崩れは一切しておらず、味付けもしっかり付いているじゃが芋は絶品だ。あの短時間でこんなに味が付くのか。

次にほうれん草のお浸しを口にする。丁度良い茹でにより食感はシャキシャキ感が残っていて素晴らしい。味も醤油ベースで生姜と胡麻の味わいが何とも言えない美味しさだ。

そして最後にお味噌汁を飲む。鰹節と昆布による合わせ出汁とお味噌の風味がたまらない。具材には豆腐と葱が使われており、オーソドックスだからこそ出来の良さが際立っていた。

いや、全部美味し過ぎるでしょ。炊き立てご飯もおかずのお供に最高である。夢中で箸を、口を動かして食べ進める。これは食べ終わるまで止まれる気がしない。

「お代わりもあるから、欲しかったら言っただけ」

「じゃあ肉じゃがとお味噌汁を頼む」

数分もせずに空になってしまった器を彼女に手渡す。呆れるように笑う彼女の視線

は綺麗になっっている食器に向けられていた。

お代わりを貰い、それでも忙しなく食べ進める俺。だって美味しいんだもの。

「そんなに美味しいかしら？あまり気合の入った料理ではないと思うのだけれど」

「まじでめっちゃ旨いぞ、毎日食べたいくらいだ」

箸も口も大変に軽くなっているせいで本音が駄々洩れになる。しかし、食事に夢中な俺は全く気にしていない。視線も料理に集中させている。

この時、雪ノ下は顔を真っ赤にしていたというのに。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #6

大満足の夕食を終え、現在は雪ノ下によるおつまみ作りをソファで待機している。無論、覗き見をするのは辞めていない。

まだ食えるのか、という疑問はあるかもしれないが、まだ全然食欲は残っている。二人分よりも多めに作ってくれた彼女の手料理は余さず平らげてしまったというのに。まるで育ちざかりである。

酒の肴とは言え、彼女のことだから美味しい物を作ってくれるに違いないと期待感が高まる。

しばしの時間、大人しく覗き見しながら待っていると、彼女がワイングラスと白ワインのボトルを持ってこちらにやって来る。

「悪いのだけれど、先にこのワインを開けたいもらえるかしら」

彼女はワインオープナーを俺に手渡し、キッチンの方へ戻って行く。なるほど、コルク開けを頼まれたのか。

このワインのコルクを開けるのは少し苦手である。理由は単純に経験値不足からだろうか。そもそもワインを飲む機会はあまり多くない。

居酒屋やサイゼリヤでデカンタで頼むことは少なからずあることだが、ボトルを開けるのは何時振りだろうか。恐らく、一昨年のクリスマスにシャンパンを開けた時が最初で最後であろう。

あの時はコルクを飛ばすわ、中身を溢すわで散々であった。直後、普通に雪ノ下さんに怒られました。苦手な理由はこれでは……？

実はその失敗の後に、厳しくも優しい彼女に開け方を教えて頂いていた。今日はそれを実践しろってことですかね。頑張るぞい。

まずはボトルの頂部のフィルムを剥がし、コルクとご対面する。対戦よろしくお願いします。

ワインオープナーのスクリューをコルクの中心に垂直になるように突き刺す。後は丁寧につくりと時計回りでスクリューでコルクを掘り進めていく。

オープナーのフック部がボトル口に引っ掛けられるようになったら、回すのを止める。そしてフックをボトル口に引っ掛ける。

最後に少しずつコルクを引き抜いていく。一気に抜く必要はないので落ち着いて行こうのだ。

キュポンと景気良い音が室内に響き渡る。コルクは飛んでおらず、溢してもいない。俺はやったぞ。

「ちゃんと教えた通りに出来てるじゃない、今日はお説教する必要はないわね」  
「ふつ、俺が二度も同じミスをするわけないだろ」

ドヤ顔で彼女にサムズアップをする。

「そうよね、そんな完璧なお兄さんだったら小町さんも鼻が高かったでしょうね。何度も同じことを注意する必要もなかったでしょうね。小町さんが可哀想だわ」

「やめてくれ、小町の気持ちを代弁するように俺を責めないでくれ」

久しぶりに見る頭痛いポーズである。相変わらず様になっている。頭を抑えていない手は四角い白い皿を持っている。その皿が目の前のテーブルに置かれる。

皿上には一口サイズにカットされたモッツアレラチーズを生ハムで巻き、粗挽き黒胡椒とオリーブオイルが散らされている一品が綺麗に載せられている。

これ絶対旨いだらうと眺めていると、もう一品が運ばれてくる。

「おお、アヒージョか。これ好きなんだよなあ」

熱々のアヒージョがスキレットに入っているようだ。食材にはベーコン、じゃが芋、ブロッコリーなどが使われている。更に追加でバゲットまで登場する。完璧じゃないか。

「その白ワインに合うと思うわ。熱いから火傷しないように気を付けてね」

「あいよ、じゃあグラスに注ぐわ」

まずは雪ノ下のグラスに、そして次に自分のグラスに注いでいく。彼女はどちらに注ぐ時もグラスを持って少し傾けてくれた。

視線を合わせ、グラスを少しだけ合わせて乾杯をする。本来はグラスの接触は好くないが、今回は彼女の方から合わせに来てくれたので構わないだろう。

乾杯したグラスをそのまま口に付けてゆっくりと傾ける。良くは分からないが葡萄だけでなく柑橘系や洋ナシの香りが混じっているように感じられた。味はすつきりしつつも果実の酸味と苦みが良い感じに混じり合っている。今まで飲んだ白ワインの中では一番美味しく感じた。

「正直あんまりワインの味の差とかは分からないんだが、これは美味しいな」

「そうね、私もあまり飲んだことがないから同じ感想だわ。誠に遺憾ね」

語尾のように辛辣な言葉が連なっているが、表情はにこやかである。はい可愛い。

続いて、アヒージョのじゃが芋を箸で一摘みし、少し冷ましてから口に含む。おお、少し濃いめの塩気とニンニクの風味が溶け出しているオリーブオイルの風味が堪らない。これはお酒が進みそうだ。

口の中を白ワインで一度リセットする。口内に残るアヒージョの余韻と交じり合う白ワインの風味が心地よく感じた。これが合うってことなんだろうな、と一人で納得する。



次に生ハムチーズを頂くことにする。これは食べる前から美味しいと分かっていたが、口に含むと想像よりも濃厚なチーズが生ハムの塩気に優しく包まれているのを感じる。更に黒胡椒が効いてくることにより諄<sup>とん</sup>さが無くなっている。最高だ。

一人で脳内で優勝していると、雪ノ下が感想を求めて話しかけてくる。

「おつまみはどうかしら？美味しくてきているとは思うのだけれど……」

「おう、マジで旨い。店出した方が良いレベルの出来だぞ」

それは褒めすぎだと謙遜するが、表情や語気に嬉しさが滲み出ている。きつと色んな拘りを持って作ってくれたのであろう。褒めるついでに色々聞いてみたくなった。

「肉じゃがも凄い美味しかったんだが、何かコツとかあるのか？そんなに時間かかってないのに味もしっかり付いてたから驚いたわ」

「それはどうもありがとう。……そうね、強いて言うのであれば水を使わないことかしらね。焦げやすくなってしまうから火加減とかは少し難しくはなってしまうのだけれど、具材を煮る際には調味料だけを加えていたわ。あと……」

想像していた以上に彼女は手間をかけて料理をしてくれていたらしい。途中からレベルが高すぎて良く分からなくなったが、あの美味しさにはたくさんの彼女の料理への愛情が詰まっていたのであろう。

その後は二人で色んな話をした。基本的には今日の出来事に対する感想だったが、彼

女の受け取り方と自分の受け取り方の違いを楽しんでいた。ちなみに映画の感想については俺がほとんど見ていなかったため、雪ノ下さんに叱られました。

暫くすると、お酒が進んだからだろうか、少し身体が熱くなっているし、頭はふらつくし、それと謎の高揚感が押し寄せて来ている。高揚感はアルコールのせいではなく、状況によるものかもしれない。

雪ノ下も同程度の量を飲んでいるので、顔や首や手などが多少だが赤くなっている。いつもは白くて綺麗な肌が火照っているのを見ると否が応にもドキドキしてしまう。彼女のその綺麗な首筋は髪を片側に結っているために、こちらからは鮮明に見える。

……その首筋に触れてみたいと思ってしまった。

やがて俺の手が彼女に触れまいとして動きだそうとしたその瞬間だった。

その手は彼女自身の手によって封じられてしまう。

「何やら妖しい目線を感じたから、この手は拘束させて貰うわ」

俺の手の上には彼女の手が重ねられていた。

今日何度も触れたこの手すら彼女の身体なのだと強く意識してしまっている。明らかに理性が失われつつあるようだ。

「悪いけど、暫くはこのまま捕まえといてくれ」

正直、彼女を傷つけるようなことをするつもりは一切ないが、俺の醜い欲望は彼女に触れたがっていた。だからこの状況は彼女を害さずに触れられる最善の状況であろう。そんな俺の男心を分かっているとは思えないが、彼女は優しく微笑んで頷いてくれるのだった。

気が付けば、もう終電を意識するような時間になっていた。まじかよ。

「そろそろ帰るわ、色々とありがとな。飯も本当に旨かったわ」

「そんなに何度もお礼を言わなくて結構よ、でもどういたしまして。あと……」

お礼をお礼で返してくれる雪ノ下さん。ただその言葉には続きがあるようだ。なんだろう。

「その、良ければ泊まっていてもいいのだけれど……」

上目遣いで凄いい提案をしてくれる。この雪ノ下さんの爆弾発言により、俺の思考は数秒は停止した。

いやいや、流石に泊まるのはアレでは？まだ早いと言いますか、時期尚早と言いますか、早計ですよね？

「……そういうのはまだ早いだろ」

「そう、じゃあ時期が来たら教えてね、比企谷君？」

彼女の表情には随分と余裕がある。きっと俺がへたれると予想していたのだろう。悔しい。

仕返しは思い付かないので、取り敢えず恩返しだけ済ませようと思つて彼女に提案する。

「料理とか全部作つて貰つたし、片付けくらいはするぞ。台所借りてもいいか?」

少し驚いた顔をされる。俺が働こうとするのはまだ意外なイメージなんですかね。早くニートになりたい。

「私の方でやるから大丈夫よ。お皿もあなたが綺麗に食べてくれたお蔭ですぐ洗えるのだし」

「そうか…改めて本当にありがとな」

今日は何から何まで雪ノ下に感謝だ。いくら言葉を重ねても感謝し足りない。

最後に雪ノ下が玄関でお見送りをしてくれる。実は駅まで送ってくれるとか言い出したのだが、それだと駅で別れた後に一人で歩かせることになるので、丁重にお断りさせて頂いた。

「じゃあまたな、雪ノ下」

「……ええ、また、ね」

別れの挨拶も済ませたので、ドアノブに手をかけようとしたりしたその時。

「比企谷君！」

彼女にしては珍しい大声で呼び止められる。思わず焦って後ろを振り返る。声を発した彼女自身も少し驚いているように見えるのは気のせいじゃないだろう。

「……その、次は何時会えるのかしら」

彼女の言葉と態度には不安が滲み出ていた。段々と彼女は顔を俯かせてしまう。

昨夜に出会う前には約1年もの隙間が空いていたのだ。だからこそ彼女は「また」という言葉に不安を感じたのだろう。

最後の最後にこんな不安そうな顔をさせてしまったことが俺は何よりも悔しかった。彼女を早く安心させたいという一心で何とか言葉を紡ぐ。

「近いうちに連絡する。その、ちゃんと誘う。だから少しだけ待ってくれ」

彼女はちゃんと安心してくれただろうか。その表情は彼女が俯いてしまっているのまだ分からない。もしかして言葉足らずだった？心配になり、彼女の方へ近づいたタイミングでその顔が上げられる。

「あまり日は空けないでね。その、寂しいから……」

あまりにも可愛いので抱きしめそうになる、が何とかギリギリで耐える。おいおい、俺じゃなかったら危なかったぞ。あと早めに連絡できるよう頑張りますね。そう決意

して彼女に頷いた。

彼女の家からの帰り道、俺は今日一日の出来事を反芻しようとして、昼間に出会ったところから思い出し始める。この反芻する行為は彼女に出会ってから始めたことである。

最初の方は正直、彼女からの酷い罵詈雑言による憎しみを忘れないために思い出していただけだった。それが何時からか彼女との思い出を大切にしたいという気持ちへと変わっていったのだ。

多分その切り替わりが彼女への想いが芽生えたきつかけだったのだろう。

次に会えるのは何時になるだろう。きっとそれは俺次第なのだ。気持ち的には今すぐにも会いたいのだが、そんなことはまだ言えそうにもない。

だから俺は必至で探さなくちゃいけないのだろう。

そう言えるような未来を。

# やはり俺の社会人生活は間違っている #7

気が付けば月曜日の朝である。これは社会人あるあるだと思われるが、日曜日の朝から就寝時間までの体感時間は秒である。

昨日なんて二チアサを見た記憶ぐらいしか主に残ってないんだが…。

終わってしまった休日を恨んでも仕方が無いので、心を無にして出社の準備を行おう。社会人の朝に心なんて必要ないのだ。むしろ出社するのに足を引っ張るだけである。

相も変わらず満員の電車に身体を振じ込み、何とか予定の時刻に乗車する。否が応でも密着するので、他者の体温を感じるのが不快であった。

時刻はお昼時、午後も働いたためにカロリーを摂取する時間だ。俺は朝食を食べようと食堂へ移動する。今日の気分は揚げ物かな、と気分さんの揚げ物率の高さから目を背けつつ、メニュー覧を上から見ていく。

「おいおい比企谷、昼飯奢ってくれる約束忘れたのか？」

突如後ろから声を掛けてくるのは、イケメン同期こと吉田であった。

……ああ、昼飯奢る約束しちやってましたね、完全に忘れてましたわ。ごめんね、て

へ。へろ。

「すまん、完全に忘れてたわ。ってか社食でいいのか？」

「構わないよ。じゃあ生姜焼き定食で頼むよ」

「相も変わらずイケメンである。自分用の唐揚げ定食も合わせて購入し、吉田に券を手渡す。」

「ありがとう、じゃあ向こうで食べようか」

「彼は窓側のテーブル席を指差す。了解の意を伝え、お盆を持って俺の唐揚げを迎えに行った。」

「で、あの後は雪ノ下さんとは上手くいったのか？」

「席に座り、お待ちかねの唐揚げを口に放り込むと同時に前に座るイケメンが口を開く。」

「……まあ、悪くはなかったと思うが」

「なるほどね、じゃあ逆に何か問題でもあったのかい？」

「問題ならあった。それも重大な問題だ。吉田は経験豊富だろうし、ちよつと相談してみようかと考え、質問をすることにした。」

「お前は、誘う口実って何時もどうしてるんだ？」



「口実ね、基本的には相手に合わせているよ。相手の趣味とかが多いかな？」  
当然かのように即答される。やっぱりイケメンは凄いなと改めて感心する。

しかし、雪ノ下の趣味というか、好みを考慮して誘うとしよう。場所は猫カフェかデイスティニーになるだろう。そこまでは何度も考えたが、そこに自然に誘える自信は全くないのだ。

雪ノ下も急に自分の趣味の場所に行こうと誘われたら疑問を持つのではないだろうか。ゾンビ同伴だとお店に迷惑がかかるから嫌なのだけど、とか言われてしまいそうだし。

「自然に誘える自信が無いんだよ、俺には……」

「……自然に誘いたいのかい？」

何を当たり前のことを聞いてくるんだ。不自然よりは自然の方が良いに決まってる。それが大事な相手なら尚更だろう。

「別に不自然でも良いんじゃないか？」

「はっ。」

吉田は俺に諭すようにゆっくりと語りかける。

「逆の立場になって考えてみればいいんだよ。君は雪ノ下さんが誘って来たらどうするんだい？」

「いや、それは絶対行くけど…」

さも当然のように俺は答える。それが可笑しいのか吉田は少し吹き出しながらも言葉が続ける。

「じゃあ、雪ノ下さんがちよつと張り切つて、遠出になるけどUSJに行こうと提案して来たらどう思う?」

「そりや嬉しいし、行くに決まってる」

雪ノ下が張り切つて計画してくれて、誘つてくれたら小躍りしちゃうかもしれん。想像だけで身悶えしそうになるレベル。

「だろう? 君がそう思えるのなら、雪ノ下さんだつて似たように思つてくれるよ」

「そうか?」

「そうだよ」

目の前のイケメンは即答すると、合掌してから食事を始めてしまった。アドバイスはこれで終わりらしい。まじかよ。

雪ノ下がどう思うか……か、それは正直分からないというのが本音だ。けれど、もう一度ちゃんと考えてみようと思つた。

俺の誘い方というプライドの為にではなく、彼女に喜んで貰えるように。

「サンキューな」

感謝の意として唐揚げを一つ進呈する。少しぶつきら棒な札になってしまったが、吉田は満足そうに唐揚げを食べていた。

「そう言えば金曜日はあの後上手くいったの？」

「それ私も結構気になってた」

「……急に何かしら」

「とぼけないでよ、折角セツティングしたんだから教えてくれてもいいんじゃない？」

目の前で問い詰めてくる二人組は私の同期の加藤さんと橋本さんである。彼女達はあの金曜日の夜に協力してくれた恩人だ。まあ、セツティングしてくれた加藤さんは兎も角、橋本さんは普通に合コンに参加してくれたただけなのだけれど。

「まあ、そこそこ上手くいったのかしらね。翌日の土曜日も遊びに行けたのだし」  
「おおー！！」

二人はニヤニヤしながら私を揶揄ってくる。少し鬱陶しいけれど、この二人のお陰で私はこの会社でも上手くやれていると思う。

茶髪を肩まで伸ばしている加藤さんはコミュニケーション能力が高く、社内のどの部署にも知り合いが居るとのこと、他部署との仕事も円滑に行えることが多い。

こっちのショートヘアの黒髪の橋本さんは純真無垢に見えるけれど、ずる賢いタイプだ。私がいまい付かない抜け道を彼女は見付けてくれる。

どちらも私には無い能力で、チームで仕事をする際には彼女達にサポートをして貰っている。

お昼も基本は三人で食べるため、今日はこうして尋問されてしまっている。

「ねえねえ、土曜日はどこに行ったの?」

加藤さんが目を輝かせながら尋ねてくる。とても楽しそうなのよね…。

「土曜日は映画に行ったのよ、映画の前にはランチも食べたけれど」

「デートとしては良い感じじゃない? ちょっとと大人し過ぎる気もするけど」

橋本さんが目を細めながら静かにそう返してくる。隠れ肉食系の彼女からしたら不満があるのだろうか。

「じゃあ次はいつなの? どこ行く予定なの?!」

「それは……」

加藤さんにそれを聞かれ、私は答えることが出来なかった。

昨日もずっと比企谷君からのお誘いの連絡を待っていたけれど、結局は来なかったのだ。彼がそんなに直ぐに誘えるとは思ってはいないけれど、僅かな期待が私を苦しめている。

「まだ決まってるないんでしょ、彼は奥手みたいだったしね…」  
「……そうなのよね」

彼に積極性が無いことは初見の彼女達にも見抜かれていたようだ。流石比企谷君ねと、ある種の感心をしていると橋本さんが口を開く。

「まあ、そんな奥手の彼がお誘いしてくれたら嬉しき倍増なんだろうね」

「ね、頑張ってくれてる感があると胸きゅんだよね!!」

私もそれには同意だった。だからこそ、土曜日に彼から夕食に誘ってくれたことが本当に嬉しくて、気持ち盛り上がってしまった。

その結果、彼を自宅に誘って手料理を披露するなんて大胆な提案をしてしまったのだけれども。

比企谷君のことだから、誘うための口実を小難しく考えてしまっているのだろう。けれど、私は彼からのお誘いならどんな内容でも喜んで了承してしまうだろう。

彼が私を思っただけで考えてくれた内容なのだから。

「二人はあの後はどうだったのかしら?」

「そうそう、聞いてよ雪ノ下さん!あのね……」

「え、そんな面白いことあったっけ……?」

今はただ、この二人の話しを聞いてみよう。今もきつと私のことで悩んでくれている

比企谷君のことを信じて。

午後の仕事なんてそっちのけで、雪ノ下と行く場所について考えていたが、定時になっても考えは全然纏まっていなかった。

もういつその事、雪ノ下本人に相談するというのも考えたのだが、自分から誘うと豪語した手前、それは憚られた。

雪ノ下は何処なら喜んでくれるのだろうか。選択肢が多くなるとどうしても絞込むのに時間が掛かってしまう。

土曜日の別れ際の彼女を思い出すと、今日のうちに連絡をしておきたい気持ちが強くなる。え、どうしよう……。

もう直ぐ自宅近くのスーパーに到着するので、一旦お誘いの件は置いておいて今夜のご飯を考えることにする。やはり肉、肉が食いたい。最近は焼肉とか行っていないので焼肉欲が強くなってきているのを感じる。久しぶりに金曜日にも焼肉行こうかな？とぼんやりと考えていたところで閃く。

——雪ノ下と焼肉行きたくね？と。

俺が肉を焼き、雪ノ下に焼くのが下手だと蔑まれるのも良いし、彼女に焼いてもらった肉を食べるのも最高だろう。

週末の休みに出掛けることについてはもう少し時間を貰うとして、華の金曜日に食事に誘うことは悪いことじゃないだろう。

というか、俺は一日でも早く彼女に、雪ノ下に会いたいのだ。先週も同じようなスケジュールだったのだ、ダメってこともあるまい。

そう考え、急いでLINEを立ち上げてメッセージを送る。

18:35『金曜日は空いてるか?』

18:35『出来たら焼肉を食べに行きたいんだが、一緒にどうだ?』

18:36『土日どちらか誘おうとは思ってるんだが、まだ決めてないから少し待つて欲しい』

あの日の誘う約束を焼肉だと思われると困るので、土日についても付け加えた。あれ、別に困りはしないのでは?とも思ったが、本当のことを伝えておきたかったのでこれで良い。

連絡はしたので、とりあえずは晩御飯の調達に戻ろう。彼女からの返答を見るまではドギマギだが、こんな浮ついた気分も悪くは無い。

しかし、数分後には雪ノ下からのメッセージが届いていたのだが、それに気付いたのは家に着いてからだった。

『空いているから行くわ』 18 : 38

『お店は任せていいのかしら?』 18 : 38

『待たせてもらうわね、ありがとう比企谷君』 18 : 40



# やはり俺の社会人生活は間違っている #8

金曜日、それは社会人の希望だ。今日さえ乗り切れば安息の休日が入るのである。

終わることを恐れてしまう休日よりもある意味では優しいのではないであろうか。まあこれは完全週休二日制の会社で働いていないと同意は貰えないだろう。

そう、本日は金曜日、華金なのである。雪ノ下を焼肉に誘い、無事に了承を得られたその当日なのだ。

土日の誘いはどうしたのかつて？取り敢えずは土曜日のスケジュールを抑えて貰ったので、実質既に誘ったと言っても過言ではない。

内容はまだ決められていない。雪ノ下さんからは今日までに決めてくれれば問題ないと言われているので、ギリギリセーフではある。

ところがどっこい、もう定時なのである。つまりもう休みだぞ、やったね！

明日の予定は店までの移動時間を使って捻り出すしかない、と決意を胸に退社を決め

込もうとしていた俺を引き止める声がある。

「比企谷、もう帰るのか？」

「……吉田か、用事があるからもう帰るわ。無くても帰るけど」

同期でイケメンの吉田だった。というか気軽に声を掛けてくるのは吉田ぐらいである。戸部みたいな同期と話すのは稀だ。

「はは、相変わらずだな。来週には新人が配属になるんだから手本になるような先輩になれよ？」

その役目はお前だけで充分じゃないですかね？俺は寧ろ反面教師的立ち位置で良いんだが……。

「それはお前に任せるわ、んじゃ」

「……お疲れ様、楽しんで来いよ」

別れの挨拶を交わし、会社を出る。労働からの解放感を噛み締めつつ、足早に店に向かう。

俺は雪ノ下を待たせたくはないのだから。

店の前に約束の15分前に到着する。流石にまだ彼女は来ていないようだった。来ていたら周囲の騒めきで分かるからね。ちなみに店は駅の改札から見える位置にある

ので、迷わないように配慮してあります。

そして当たり前のように、この場所に来るまでには捻り出せなかったもので、この待ち時間に何とか決めてしまいたい。やはり猫カフェが「比企谷君」無難だろうか「ねえ、比企谷君？」…はい？

「何をぬぼーつとしているのよ、比企谷君」

「……その表現も懐かしいな。つてか早いな雪ノ下」

気が付けば目の前に雪ノ下が立っていた。相も変わらず凜とした出で立ちで、スーツ姿も随分と様になっている。

「先に来ている貴方には言われたくないわね……」

彼女は呆れ顔で微笑んだ。一週間振りに見たその微笑に思わず嬉しくなってしまう。

そして俺は気付くのだった、結局決められなかったことに。

席は個室を予約しておいたので、店奥の個室に案内された。

「雰囲気の良いお店ね、個室なのも嬉しいわ」

「何となく個室にしたんだが、それなら良かったわ」

偉いぞ過去の俺、八幡的にポイント高いぞ。お店は内装がお洒落で食べログで評価の高いお店をチョイスしました。

雪ノ下の反応が悪くなさそうで安心したからか、空腹感がひよっこり顔を覗かせる。さて、注文しますかね。

「注文はどうする、最初は俺が適当に頼んでいいか?」

「そうね、サラダは欲しいけれど、後は任せようかしら」

サラダは大根サラダにするとして、肉は取り敢えず上葱タン塩とカルビ、ロース、それとハラミを塩でいいかな。あとはご飯と飲み物ですかね。

「ご飯は俺が中サイズで雪ノ下が小サイズ、飲み物は二人ともレモンサワーに決まった。」

注文した商品が届いたので、まずは乾杯でもしようかとグラスを右手に持つ。雪ノ下を見ると既に両手を使い上品にグラスを胸の高さまで持ち上げていた。

「……じゃあ、今週もお疲れ様ってことで」

「ええ、比企谷君もお疲れ様」

乾杯も済ませ、お待ちかねの焼肉タイムだ。俺がトングを持つと、雪ノ下は少しだけ驚きの表情になる。こいつ実は俺が働いていることを信じていないのでは?

まあそれは置いて、俺の焼肉スキルを魅せつけてやろう。

焼く順番だが、タン塩から焼いていくのは常識だろう。ここで八幡流テクニクだ

が、タンを焼く前にレモンを使い、汁を網の表面にサツと塗っていく。これにより、タンが網に引つ付かないようになるのだ。

準備も終わったので、タンを網の中央に乗せていく。最初は雪ノ下の方に一枚、次にこちら側に一枚。このタンは葱乗せの薄めカットなので片面をじっくり焼きだ。ひっくり返せないのです、ここぞというタイミングを見計らって引き上げる必要がある。五感を研ぎ澄ませ、その機を伺うのだ。

俺の考えるベストなタイミングで雪ノ下の肉から引き上げ、彼女の取り皿にサーブした。そして次に自分の皿に取り上げる。

まずは雪ノ下に食べて頂きたい。その意を察して頂けたようで、彼女は頂きますのその後、小さな口を開けてその肉を味わい始めた。……お、悪くない反応に見えるぞ。

「……美味しいわ、貴方もお肉なら上手に焼けるのね。世話や土下座はあまりだけれど」  
「偶に来るからな、それなりに極めたつもりだぞ。あと世話はともかく、焼き土下座は勘弁してくれ」

俺のその言葉を聞くと、彼女はいつもの挑戦的な表情を見せる。

「そう、それなら後でどちらが美味しく焼けるか勝負しましょう。……あと、焼肉にはこの前の会社の知り合いと来るのかしら？」

「すぐ勝ちにくるのやめろ、今回は負けるつもりはないが。あと焼肉は無論一人で行つ

てる」

最近は一入用焼肉店なども出店しているので、お一人様焼肉もアウエー感が弱くて助かる。雪ノ下はあまり焼肉の経験も無さそうだし、今回は勝てるだろう。大学の頃も行つた記憶ないしね。

雪ノ下は俺の返事を聞くと、何故か安堵の表情を浮かべていた。それよりも肉が冷める前に俺も食べてしまおう。いや、マジで旨い。最初の肉の有難味は計り知れん。

次も二枚ずつ焼いていく、別に急いではいないからだ。ゆっくりと肉も、彼女との時間も味わっていたい。

「では、次のカルビで勝負しましょうか」

タン塩を全て平らげた瞬間に雪ノ下から宣戦布告をされる。彼女にしては珍しく、少しテンションが高いように見えた。まあ焼肉だもんね、テンション上がるよね。つていうか、雪ノ下が肉の部位を声に出すの何か良くないか？イチボとか声に出して欲しい。頼もうかしら……。

「じゃあお互いに二枚ずつ焼いて、お互いの肉を食べて審査するってことでもいいのか？」  
「それで問題ないわ。ふふ、比企谷君に美味しいカルビと敗北を味あわせてあげるわ」

テンション高いのんが見られただけで既に勝利している俺に敗北はあり得ない。焼

肉勝負にも負ける気はしないがな。勝利を前にワクワクで胸が踊り始める。

勝負が始まり、まずはお互いに肉二枚を網の自陣側にセツトした。しかし残念ながら、もう既に勝負は決まっている。何故なら俺の自陣側の方が火力が高いのだ。

カルビの焼き方は強火でサツと片面ずつ焼き目を付けるのがベストな筈。つまり、火力を制する者がカルビを制するのだ。勝ったなガハハとほくそ笑む。

さて、雪ノ下の焼き方も一応見ておこうと彼女のトングの動きを観察する。なんと、何度が裏返ししながら焼いているみたいだった。おいおい、肉はあまり返さない方が肉汁を無駄にしない分美味しいという初歩すら知らないのだろうか。これは万に一つも負けはなさそうだ。

お互いに焼き上がり、それぞれの取り皿に肉を取り分けた。では判定しますかね、と箸を持つとする俺を雪ノ下が声で制止する。

「より味わうために、目を閉じて貰えるかしら。そう、その腐った目よ」  
「いや、腐った目でも閉じると肉掴むの難しいんだが……」

まあ肉掴んでから目を閉じればいいかと考えていると、雪ノ下が焼いたカルビを近づけてくる。ああ、そういうことか。

恥ずかしいが、目を閉じる分まだ耐えられる。ばつち来い、と口を開けてそれを迎い入れ「あーん」る。

ん、これは俺の焼いたカルビだな。カリツとした食感の後、適度な香ばしさと肉汁、そして脂が口に広がる。やはり旨いな。至高である。

「今のは俺の肉だよな、普通に旨いわ」

「そうね、じゃあ次は私の焼いたカルビね……あーん」

無抵抗に口を開けて、それを迎え入れる。食感は柔らかめみたいだ。……んんん?! 香ばしさは俺の方が勿論強い、だが肉汁の溢れ方が圧倒的に雪ノ下の方が多い。しかも後味も比較的さっぱりしていて幾らでも食べられそう。ゆっくりと味わい、飲み込んだ後に目を開く。

「え、めちやくちや旨いんだけど」

「ふふふ、そうでしょう? 表情の変化が面白かったわよ」

そんななにじっくり見られていたのかと恥ずかしくなるが、その前に何故あんなに美味だったのかの説明を求めてしまう。

「カルビは脂が多い部位だから、何度か返すことで無駄な脂を落とせるのよ。それと最初に軽く両面を焼くことで、肉汁を内部に留めることもできるわね」

「それと私の焼いたお肉は少し休ませていたのよ。だから食感が柔らかめだったでしょう?」

なるほど、食べる順番すら計算の内だったわけだ。これは俺の負けだと納得してし



まった。

「……勝手に勝負を終わらせようとしてるみたいだけれど、まだ私が食べていないわよ」  
敗北感で項垂れていたのだが、雪ノ下さんはまだ勝利したつもりではないらしい。  
え、どうして？

顔を上げると、雪ノ下は目を閉じてその薄くて血色の良い唇を少し開けて待っていた。その唇は普段よりも脂で艶めいている。ちよつと、雪ノ下さん無防備だし煽情的じゃないですかね…。

勝負云々のせいではない胸の高鳴りに支配されつつも、ゆつくりと雪ノ下を汚さないように彼女の焼いたカルビを箸でその口へと運んだ。

彼女は目を閉じたままゆつくりと咀嚼している。ずっと見てみると少し変な気分になつてくる。

「……ん、美味しいわね。じゃあ次は比企谷君のを頂戴」

そう口にする、また彼女はその口を小さく開ける。俺は気付かれないように小さく深呼吸をして、変なことを一切考えないように肉を丁寧彼女の口へと運んだ。

先ほどよりも楽しそうに噛みしめているように見える彼女は、やがてその口を開いた。

「正直、好みの範疇ね。私は比企谷君の方が好きだわ」

「引き分けじゃねーか」

引き分けな筈がない。こんな気持ちにさせられた時点で俺の完敗に決まっている。彼女の言葉と、そして彼女の笑顔で俺の鼓動はこんなにも速くなっているのだから。

「ところで、明日は何をするのか決まっているのかしら」

あの勝負の後は普通に焼肉を楽しみ、デザートでも頼もうかというタイミングで彼女はそう問いかける。

あ、タイムリミットでしたね……。これはもう土下座を焼いて披露するしかないのだろうか。

「すまん、結局決められなかったわ」

頭を下げて謝罪する。彼女はきつと悲しい顔になっているだろう。もしかしたら怒らせたかもしれない。どんな言葉を投げられるかが少し怖くなる。

だが、彼女からの返答はあっさりしたものだった。

「それなら好都合ね。実は明日は買い物に行きたいと思っていたのよ。えっと、付き合ってくれるわよね？」

「……元々俺が誘ってたんだ、行くに決まってるだろ」

気を使って案を出してくれたのかもしれないが、願っても無い話だった。

俺は安心して顔を上げて彼女を見て少し驚く。何故なら、彼女が想像とはかけ離れた表情をしていたのだから。

とても優しい笑みをしていた。

「……そうね、誘ってくれてとても嬉しかったわよ、比企谷君」

もしかしたら、土曜日に遊びに行こうと誘った時点で彼女には充分だったのだろうか。俺に求めるハードルが低すぎると悲しんでも良いのかもしれないが、結果オーライだろう。

次こそは内容も考えたいと思う所存ではあるのだが、無理して誘えなくなるよりは、内容未定でも誘える方がずっと良いのかもしれない。

少し自分に甘い気もするが、彼女がこの笑顔を見せてくれるならそれで良いのだろう。

「また内容は決められないかもしれないが、その、次も誘ってもいいか？」

「そうね、比企谷君が決められないなら私が考えるからいいわよ」

「……また今日みたいに食事でもしながら一緒に決めましょうね？」

その言葉で漸く俺は理解したのだった。今日の雪ノ下のテンションが高かった理由を。

「食事もまた誘うわ、んじゃそろそろ会計するか？」

「折角だし、デザートも頼みましょ。私はこのジェラートにしようかしら……」  
最後まで楽しそうな彼女と一緒にデザートを選ぶ。別に帰りが遅くなっても問題ないだろう。

この後は彼女を家まで送るに決まっているし、明日も俺が予約させて貰っているんだ。

誰にも邪魔はされない、俺と彼女だけの大切な時間なのだから。

# やはり俺の社会人生活は間違っている #9

翌朝、目が覚めると同時に口内に少し違和感があることに気付く。寝る前にちゃんと歯を磨いたつもりだったのだが、にんにくスメルを完全に取り除くことは出来なかったようだ。焼肉をした次の日には稀によくあることである。

仕方がないので、取り敢えず歯を磨くことから今日を始めようと意を決し、ベッドから立ち上がった。

閑散としている我が洗面台には歯ブラシと歯磨き粉とハンドソープぐらいしか物が置かれていない。お洒落だった雪ノ下の家と比較するとそれはもう雲泥の差である。

歯ブラシも毛先が開き始めているので、そろそろ交換の時期だろうなと考えながら歯を磨き始める。瞬く間に俺の口内はシトラスミントの香りに支配された。

遅めの朝ごはんを取り、出掛ける準備を始める。朝食が遅くなったのは昨夜に食べ過ぎたせいである。だって途中から雪ノ下さんが焼き専になつて、俺が食べ専になつたのだもの…。嬉しそうに焼いて食べさせてくれる彼女の肉を残す訳がない。

服装は先週とあまり変わっていない、だって他に良さそうなあまり無いしね。安定の黒パンにカーキ色のシャツである。

こういうの雪ノ下さんは気にするのだろうか、気になるのであれば服を選んでくれるかもしれない。比企谷君に似合う服ね、取り敢えずこのアイマスクを着けてもらえるかしら？とか言われてしまうのだろうか。雪ノ下の表情が見られなくなるのは辛いな。

待ち合わせの駅に到着する。待ち合わせの時間は12時なのだが、何故か早く来る彼女を待たせないように40分前行動である。あまり早く来てはいけないというルールを作らないと、段々と待ち合わせ時間が機能しなくなってしまう恐れがある。一層の事、家に迎えに行く方が良いのではないだろうか。

因みに目的地はららぽーとだ。千葉にあるのだがTOKYOの名前を有する不調法者である。まあ実際には東京湾のことなので、全く問題はない。

5分もしない内に雪ノ下が改札から出てくる姿を発見する。今日は濃いめのブルーのシャツに薄水色のロングスカートのようだ。彼女の清楚な佇まいと合わせり、大変良く似合っている。

彼女はキョロキョロと周りを見渡すと、俺の姿を発見したようだ。呆れるように少し苦笑し、こちらに向かって真っ直ぐに歩いてくる。

「こんにちは、比企谷君。相も変わらず早いわね、そんなに楽しみだったのかしら」

俺が先に来ていることが気に食わないのか、やや不満気にも見える。だが実際には照れ隠しが配合されているのであろう、愛らしいね。というか、早く来るのは君のせいだからね？

「……おう、楽しみだったことは否定しないが、お前が先に来るとナンパで長蛇の列が出来る上がる可能性があるからな」

あまり冗談ではない。何故なら、大学時代に遅刻した際、似たような景色を見てしまったからである。その時は由比ヶ浜が上手く対処してくれていたらしいのだが、雪ノ下一人となると非常に不安である。

そんな俺の心情を察してくれたのかは分からないが、彼女は照れを隠し切れなくなっている。普通に色々と赤くなってますね。

「相変わらず過保護気味ね、比企谷君は。……悪い気はしないけれど」

「いや、寧ろ足りていないだろ。迎えに行く位が適切なんじゃないかと思うレベルだぞ」  
待ち合わせ時間の問題も解決するし、一石二鳥ではないだろうか。難点を挙げるとすると、雪ノ下の家の周辺に不審者情報が出回る可能性があることだろうか。

俺が不審者に見えない方法を本気で考え始めようかな、というタイミングで目の前から声が発せられる。

「……………そこまで言うのなら、次からは迎えに来ることを許可してあげるわ」

後ろ向きでそう言葉にすると、彼女はそくさと歩いて行ってしまふ。気分を害した訳ではないことは歩き方を見れば分かるのだが、何故先に行ってしまうのだろうか。

……今日はIKEAに行く予定は無かった筈なのに。

ららぽーと方面へと舵を取り直したので、無事に目的地に到着する。お昼にはまだ早いで、買い物からスタートになるであろう。何から見るのかと疑問に思うと、彼女は即座に回答をしてくれた。

「まずは服を見ましようか、比企谷君にも必要でしようしね」

含みのある微笑である。普通に先週と似た格好なのを気付かれているのであろう。

「社会人になってから買ってないからな、選ぶの手伝ってくれると助かる」

大学の時は由比ヶ浜か小町が選んでくれたので困らなかつたのだが、今や大半は草臥れてしまったのでレパートリーは少ない。

「勿論そのつもりよ、では行きましようか」

雪ノ下が先導し始めるが不安は特にない。どの方向へ行っても基本的に服屋はあるのだから。



雪ノ下チヨイスで三点ほどメンズ服を購入する。諭吉さんが旅立ってしまったが悔いはない。だって雪ノ下さんが真面目に選んでくれたからね。

お次は雪ノ下の服を買う予定なのだが、やはり俺も選ぶのを手伝った方が良いのだろうか。センスの無さは自負しているので、寧ろ邪魔になることを危惧してしまう。

「……比企谷君はどれがいいと思うかしら」

マネキンを前に雪ノ下が俺に問い掛ける。遂にこの時が来てしまったようだ。

雪ノ下に似合う服を選べと言われれば至極簡単である。基本的に何でも似合うだろうからだ。

だがしかし、順位付けをしろと言うのであれば急に難易度が上がる。ほぼ満点同士を比較出来る程俺は目が肥えていないのだ。

「正直どれも似合うと思うぞ、いやマジで」

「……ありがとう、でも選んでみてくれないかしら」

雪ノ下はそう言葉にすると下を向いてしまったので、拒否は出来そうにない。

仕方がないのでちゃんと選ぼうと思い、改めてマネキンを含めた店内の服を眺める。

あまり露出が多い服を着せる訳には行かないので、ミニスカや肩出しはやめておこう。無論見たいし、似合うとは思いますが駄目なものは駄目である。

店の奥の方にピンと来た服を見付けたので、雪ノ下を連れて移動する。

「このワンピースが良いと思うんだが…」

上が青色でスカートが白の上品なワンピースなのだが、腰には青色の紐が付いており、リボン状に結ばれていて可愛さも持ち合わせている。袖は七分丈でスカート丈も長いため露出も少ない。

「比企谷君はこういうのが好きなのね……」

お隣の雪ノ下の反応があまり良くない気がする。上から下まで舐めるようにじつくりと見ている。やはりワンピースは男の子が好きなのだだろうか、服も漫画も。

「あまり気に入らなかったか？ だったら別のを」

「いいえ、私もちゃんと気に入ったわ」

雪ノ下は選んだワンピースを手にとるとサイズのチェックを始める。念の為に試着をするらしく更衣室に早足で向かってしまった。

俺はこの時間に一体何をしていればいいのだろうか…。結局、適当に他の服を眺めながら、雪ノ下が着たイメージを想像して過ごすことにした。

やがて、試着室から雪ノ下が戻ってくる。その顔には笑みが浮かんでいた。本当に気に入ってくれたのであろう。

俺は嬉しさのあまり、彼女から服を少しだけ強引に受け取るとそのままレジへ向かった。

きつと次に出掛ける時に見せてくれるだろうから、感謝の前払いだ。

昼食だが、雪ノ下も朝食が遅かったらしいので、休憩がてらに喫茶店で軽食で済ませることにした。二人で喫茶店のサンドイッチの美味しさを噛み締めました。

現在は喫茶店を出て、近くの雑貨屋に入ったところである。

「何か欲しい物があるのか？」

雪ノ下の家を見るからに足りない物はあまり無いと思われる。だから真剣に物色する彼女には少し違和感があったのだ。

「実は男性用の雑貨を探しているのよ、あまり品が無いのは嫌なのよね……」

彼女の言葉を聞き、一瞬思考が停止する。動き出した後も使い物になっておらず、ただ時間だけが過ぎていた。

そんな様子を見ていた雪ノ下が口元を抑えて笑う。久しぶりに爆笑しているんじゃないだろうか。え、笑うところありました？

「女性が一人で暮らしてると思われると危ないのよ。だから少しは部屋に男物のアイテムを置いたりすると良いらしいわ」

私も学生の時はしていかなかったけれどね、と笑い涙を指で拭いながら続けて呟いた。それを聞き、誰かにプレゼントしたりするのでは無いことに安堵する。

「……なるほどな、じゃあ選ぶの手伝うわ」

「ええ、比企谷君の趣味で選んでいいわよ」

雪ノ下はリアリティを重視したいようで、男である俺に選んで欲しいらしい。服を選ぶよりもずっと気が楽なので問題はない。

「マグカップならこれかな、この青いやつ」

俺は陶器のマグカップを指差す。外側が薄めの青色で内側が白い普通のマグカップである。隣には薄桃色のカラバリも置いてある。

「……そう、じゃあこれにするわね」

雪ノ下は特に文句も言わずにマグカップの入った箱を手取る。何故か隣の薄桃のやつも一緒に。

まあ、同居してると思わせるには効果的なのだろう。というか、そんな部屋の中まで見に来れないのですか？まあ業者が立ち入ることもあるか……。

一人で納得していると、俺は我が家の洗面台の虚しさを思い出す。歯ブラシ立て用にも使おうかと思いい立ち、自分用にも購入することにする。べ、別にお揃いにしたくないじゃないんだからね……。

その後すぐに雪ノ下と同じマグカップを買うことがバレてしまい、少し揶揄われた件については置いておこう。

続けてドラッグストアに立ち寄る。ここでは雪ノ下とは別行動をすることにした。

俺が今朝に気付いた歯ブラシを買いたかったのもあるのだが、彼女が薬局で何を買うのか見せたくない場合もあるだろうことを配慮した結果である。

かための歯ブラシを購入し、店の入り口で雪ノ下を待つことにした。手には服屋の紙袋が二つと、先程のマグカップが入った袋があるのでスマホも弄りづらい。だが、不思議と悪い気分ではなかった。

粗方の買い物も終わったらしく、雪ノ下はこの後の予定について悩んでいた。荷物も少なくないので、あまり遠くに行くのも億劫だろうし、時間もまだ晩御飯には早いのである。

普通に考えれば帰宅になってしまふのだろう。しかし、それは少し寂しかった。

何かを決めたようで雪ノ下がこちらに向き直り、その口を開く。その眼には強い決意が籠っているように思えた。

「では帰りましょうか」

「……まあ、ここら辺でやることも無さそうだしな」

最近はや遅くまで一緒に居られることが多かったので、早めの解散宣言に悲しくなる。しかし、彼女にも都合があるのであろう。

男が寂しがる姿を見せても格好悪いだけなので、表には出さないように取り繕った。

「ここからなら比企谷君の家の方が近いわよね、今日はそちらに帰りましょうか」

「そうね、お前の家よりは大分近い………は？」

「先週は私の家に来たのだし、別に行つてもいいわよね？それとも家に上げられない理由があるのかしら、比企谷君？」

矢継ぎ早に問い掛けてくる彼女は少し焦っているように見える。いや、焦ってるのはこつちなんですけど？

俺の1Kの部屋なんかには彼女を上げて良いのだろうか。特に隠したい物がある訳ではないのだが、彼女の家とのギャップがどうしても気になつてしまう。

だが、目の前で懸命に俺を説得しようとしている彼女の姿を見ていたら、その抵抗感も薄れていった。

「お前の家みたいになくはないんだが、……それでも良いなら来ていいぞ」

そう答えると焦りの顔から嬉しそうな表情へと見る見るうちに変わった。幼けなさの残るその笑顔にはどのような想いが込められているのだろうか。俺の部屋に来ることには価値なんて無いだろうに。

「ふふ、別に構わないわよ。寧ろ狭い方が良いかもしれないわね」

ご機嫌に歩き始める彼女の背中に付いて行く。狭い方が都合が良いことなんてある

のだろうか。

思い付くのは掃除がし易いのと近くに居られる、後は……探し物が容易とかだろう。今更ながら、本当に部屋に見られては不味い物が無いかどうかを必死で考えてしま

う。  
まあ、気にしないでいいだろう。今はあるかもしれない危険物よりも確実に存在する大切な人を気に掛けるべきだ。

彼女はこのままだと駅方面の出口とは反対側に行ってしまうのだから。

今日は彼女の背を見てばかりだなと苦笑しながら、雪ノ下に追い付けるように駆け足で動き出す。どうせこの後は俺の家に行くのだ、先導してあげた方が良さだろうと荷物を片手で持ち直す。

「そつちは逆だぞ、ほら……」

彼女の横に立ち、もう片方の手を差し出す。本日に買った物よりも色々と重たい存在だけけど、何よりも大切に持って帰ろう。

一週間振りに握ったその手は、一週間前よりもずっと暖かく感じた。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #10

俺の住んでいる部屋は洋室9畳＋キッチン付きの所謂1Kという間取りである。風呂トイレは別なので、一人暮らしにしては悪くない物件だとは思う。家賃は6万円で会社の補助金を考慮すると月5万円となる。

家賃は手取りの三分の一までにすべきという世間様のルールを守った、まさに俺に相応しい住居なのだ。

そんな俺が住むには順当な普通の家に、あの雪ノ下を招いてしまったのである。

遂に彼の家に来てしまった。少しだけ強引だった気がするけれど、それも仕方ないことだった。今日を逃してしまふと来ることはきつと難しくなると思ったから。

次からはきつと、彼が私の家まで迎えに来てくれる。そうなると、迎えに来てもらった上で彼の家に行き、挙げ句に帰りも送ってもらうなんてことは流石に私からは言えうにもないのだから。

彼の部屋は物があまり多くなかった。置いてあるのはセミダブルのベッドに少し大



きめの本棚、それとローテーブルと座布団程度だろうか。座布団が二枚あるのはきつと小町さんを考慮してなのだろう。

書物などで知る男の人の部屋とは趣が異なっているけれど、とても比企谷君らしい部屋だと思う。この部屋の香りと相まって私を落ち着かせてくれる。

けれど、ここまで物が少ないと、この部屋に忘れ物をするのは少し難儀だと思ってしまうった。

雪ノ下はぐるりと俺の部屋を見回すと少し難しい顔をして考え込み始めてしまった。やはり、お気に召さなかったのだろうか。猫グッズもパンさんグッズも置いてないしね。まあ湯呑は大事に使ってるから台所にはあるけれど。

にしても、部屋に招いたのはいいのだが、この後は何をすればいいのでしょうか。我が家にはテレビも置いていないので、映画もゲームも無理である。一人ならスマホで事足りるからね。

こつそりグーグルさんにも聞いてみたのだが、碌な内容ではなかった。雪ノ下にそんなことは出来るわけではない。

先週は雪ノ下の家で何をしたらだろうか。ご飯を食べて、お酒を飲んだ記憶しかない。相当に甘やかされてしまった。今回は俺が甘やかすべきなのだろうか。それはハード

ルが高すぎるであろう。

取り敢えず晩飯について考えるかと方針を変更した瞬間に思い付く。そうだ、あれがしたいと思っていたじゃないか。

「……雪ノ下、今日は一緒に何か作らないか？」

何かに悩んでいそうな彼女だったが、俺の提案を聞くと次第に顔が綻ぶ。

「ふふ、いいけれどメニューは何か希望があるのかしら」

二人で作るのに適したメニューとはなんだろうか。我が家の広くないキッチンで並んで作業するのは正直難しい。だが、この部屋で二人で共同作業できる料理を俺は知っていた。

「餃子ってのはどうだ」

徒歩5分圏内のスーパーで食材を購入する。購入内容はタネとなる豚の挽肉に白菜、玉葱、大根おろし、大葉、それと餃子の皮である。大根おろしを入れるとジューシーで美味しくなるらしい。

「まずはタネを作る準備ね、比企谷君は切った食材を混ぜ合わせてもらえるかしら」

我が家の台所に立ち、包丁とまな板を前にした雪ノ下が指示を出してくれる。自分のキッチンに彼女が居るのを見ると気持ちが舞い上がりそうになるのは仕方がないだろ

う。

「任せろ、混ぜるのは得意だからな。人に混ぜるのは苦手だけど」

「社会人とは思えない台詞ね……」

彼女はトントンと小気味よく野菜をカットしながら苦笑している。それを横目に俺は混ぜるためのボウルを用意する。

俺が豚の挽肉をボウルに入れると、雪ノ下が切った野菜と調味料を追加で投入してくれる。調味料は醤油と料理酒、にんにく、生姜、胡麻油である。最後に大根おろしを加え入れ、混ぜ合わせる。匂いだけで既に美味しそうだ。

「タネはこれで完成ね、では包んでいきましょうか」

「……じゃあ向こうで包むか」

タネが出来たので、二人でローテーブルの方に移動し、餃子の皮で包んでいく工程に移行する。大きめの平皿を用意して、包んだ餃子を置く場所を確保する。後はタネを掬うスプーンと、水を入れたお椀を用意した。

座る位置は道具の置き場の関係上、すぐ隣同士になった。こんな些細なことでも少しこそばゆい気持ちになってしまう。

心を落ち着かせるために餃子包みに集中しよう。最初に皮を左手に取り、タネを気持ち少なめに皮の中央に乗せる。水で右手人差し指を少し湿らせ、皮の縁を円を描くよう

に指先でなぞった。

後は両手を使い、ジグザグの折り目を作りながら皮を折り畳んでいく。初めて作った時は散々な出来だったが、今となっては簡単な作業である。

「意外と包むの上手ね、慣れているのかしら？」

「まあな、餃子の皮とオブラートを包むのには慣れてるぞ」

オブラートの方に關しては彼女よりも上手いんじゃないだろうか。これを言ってしまったら包まれていない言葉が飛んでくるのは必死なので決して口にしないが。

「……失礼ね、私も仕事ではオブラートに包んでいるわよ」

横から睨み付けてくる雪ノ下さんにビビりつつ、次の皮を手取る。おかしい、俺の言葉だけでは失礼な要素は無い筈なのだが。

隣に座る彼女の手際は非常に美しく、包まれた餃子は既製品を疑うレベルの出来である。しかし、偶にタネを入れ過ぎてパツパツになった餃子も作成していた。まあそういう事もあるよね。

「ふふ、これは比企谷君のよ、タネが余りそうだったから仕方なくね」

ワザとであった。具沢山の方が嬉しいまでであるから良いのだが、彼女にしては少しお茶目な気がする。

楽しそうに餃子を包んでいるお隣さんに対しても何か特別な餃子を作ってあげたい

のだが、特にできそうなことも無い。

今はただ、彼女に美味しいと言ってもらえるように丁寧に優しく、彼女のことを想って包むことにしよう。

総数50個もの餃子が出来上がったので、焼きの作業に入っていこう。数が多いので何回かに分けて焼く必要があるだろう。

……というか、これ二人で食べ切れないでしょ。餃子が敷き詰められた二枚の大皿を両手に持ち、その重さに俺は衝撃を受けていた。

皿を運搬している俺がキッチンに入ったタイミングで雪ノ下から声を掛けられる。

「電気ケトルでお湯を沸かしてもらっていいかしら」

「……いいけど、何に使うんだ？」

雪ノ下には悪いのだが、我が家に紅茶のパック類は置いていない。飲み物は箱買いしているミネラルウォーターとマツ缶、あとはアルコール類だけである。電気ケトルは専ら朝食のカップラーメン用に働いてくれているのだ。

「餃子を焼くのに使うのよ、蒸し焼きするのに水ではなくお湯を入れることでカリッと仕上がるわ」

したり顔で解説をしてくれる雪ノ下さんだった。相も変わらず知識量が半端ない。

雪ノ下と餃子って意外な組み合わせだと思っていたけれど、実は餃子好きだったりするのだろうか。

お湯も無事に沸いたので、雪ノ下はフライパンに油を敷いて餃子を並べていく。他の餃子とくつつかないように間隔を空けるのが肝要みたいだ。ある程度フライパンが温まったら、お湯を餃子が少し浸かるくらいまで入れて蓋をした。

「3分ほど蒸し焼きにするから、その間に取り皿を用意してもらえませんかしら」

お安い御用である。二人分の取り皿と箸、グラスとミネラルウォーター、そして調味料の容器をローテーブルに持っていく。調味料は醤油とお酢と辣油である。人によっては胡椒を使うらしいが、今回は必要ないだろう。

数分して、焼き目が綺麗なきつね色に仕上がった餃子が目の前に置かれる。第二陣を焼くのはこれを食べ切ってからにしよう。今は早くこの雪ノ下特製餃子を食べたいのである。

対面に座る彼女と共に合掌し、食前の挨拶をする。餃子を俺のお酢9に醤油1の特製餃子タレに付けてから口に入れる。ザクツとした歯応えの後、中から旨味が流れ込んでくる。しっかりと味が付いているのだが、大葉のお陰でさっぱりとした味わいに纏まっている。めちやくちや美味しい……。

「……相変わらず美味しそうに食べてくれるわね」

雪ノ下にガン見されていたようである。少し恥ずかしさはあるが、この餃子を前にして表情に出さないのは無理であろう。

「雪ノ下のこの餃子が美味しすぎるからな、仕方ない」

「そ、そう言ってもらえると悪い気はしないわね」

悪い気どころか、相当嬉しそうな声色なんだよなあ……。それを誤魔化すように餃子を食べる雪ノ下を見ていると、心が洗われるようだった。

「そう言えば、今日はお酒は飲まないのね」

雪ノ下がその事に急に切り込んできたので、少し心臓が縮み上がった。無論、餃子に対してビールやレモンサワーなどのアルコールを合わせたのは山々なのだが、先週の雪ノ下の家での理性低下がそれを妨げているのである。自分の家であれば尚更に油断してしまいそうなんですよね。

「き、昨日も飲んだしね。……雪ノ下は飲むか？」

「……あなたが飲まないなら私も要らないわ」

酒好きのような扱いをしてしまったからか、雪ノ下の反応が芳しくない。そんな風には思っていないからね、ごめんね？

にしても、雪ノ下も餃子にはビールとか欲しいタイプなのだろうか。多分違う気がする。

「酒なんか無くても最高に美味いぞ。だからその、次を焼いてくれるか？」  
「……あなたが食べてくれるなら焼いてあげるわよ」

何でもね、と呟いて彼女は立ち上がった。機嫌良さげに鼻歌なんて歌っている彼女を見ながら考えてしまう。食べ物じゃなくても良いなら、焼きもちとか焼いて欲しいなと。こんなことを伝えたらきつと馬鹿にされてしまうだろう。

結局餃子は全て食べてしまったので、現在は食休み中である。食べ過ぎで動くのには少し時間が欲しいと雪ノ下に伝えたと、彼女も休みたいと言い、今は俺のベッドで寝ている。そう、寝てしまっている。

安らかな表情で眠る彼女においたをするつもりは無いが、ドギマギくらいはしてしまおう。というか、もう少し危機感を持つて欲しい。これアルコールを摂取したら危なかったかもしれないですよ？

彼女にはちやんとお酒飲んだら理性が弱体化することを伝えるべきなのだろうか。

大体1時間ほど時間が経ったので、そろそろ雪ノ下を起こそうかと思いい、ベッドに近付く。相も変わらず安心して切った顔をしているのが複雑である。軽く声をかけても起きてくれないので、仕方なく頭を撫でに行く。布団の上を叩いてしまうと、変なところを触ってしまう可能性があるからね。



「おい、そろそろ起きろよ」

雪ノ下の髪の手触りの良さに感動しつつ、諦めずに声をかける。少しだけ反応が返ってきたと思ったら、撫でている手に頭を擦り付けてきている。こいつは猫なのだろうか、好きになると似てしまうんですかね。

「……おはよう、比企谷君」

「遅い時間だったの、帰る支度をしてくれ」

そこから数分し、漸く彼女の目が覚めたようだ。最後に彼女の頭を軽く叩いて帰る準備を促す。寝惚けながらも了承してくれた彼女はゆっくりとベッドから立ち上がり荷物を整理し始める。

荷物を纏めて、もう出ようかというタイミングで雪ノ下が申し訳なさそうに口を開く。

「悪いのだけれど、少しお手洗をお借りしてもいいかしら…」

「じゃあ先に外出てるわ、急がなくていいぞ」

別に急いでるわけじゃないので、ゆっくり準備して欲しいと思い、彼女にそう返事をした。雲一つない夜空を眺めながら彼女を待とう。今夜は月が綺麗だ。

10分ほど過ぎた頃、玄関から音がしてきた。その後すぐに扉が開き、雪ノ下が顔を

見せる。

「ごめんなさい、長い時間待たせてしまって」

「……全然待つてないから気にするなよ」

言葉とは裏腹にこの時の彼女の表情は明るかった。少し休んで元気になったのだろう。少しミントの香りがするのはあれだろうか。ブレスケアってやつだろうか。餃子のんにくが女性的には気になったのであろう。いつもながらしっかりとっている。

「居心地悪くなかったか？」

「……悪かったら眠ったりは出来なかったでしょうね」

あの睡眠は居心地良いアピールだったのね。そう思うと悪い気はしない。元からしてはいないが。

扉に施錠を行い、彼女から買い物袋とその手を受け取って歩き出す。我が家に連れて来た時と変わらないはずの両の手に感じる重さが軽くなっていく気がする。お持ち帰りとは比べたら気が楽だからだろうか。

にこやかに笑って歩く彼女の足取りも軽やかに見えた。

雪ノ下の住むマンションの入り口に到着した。両の手の荷物とはここでお別れである。

「今日は楽しかったわ、餃子もありがとな」

「……こちらこそ色々ありがとうね、比企谷君」

「じゃあ ”また” な、雪ノ下……」

「ええ、 ”またね”、比企谷君……」

手を振り、彼女を見送る。彼女が見えなくなる寸前にこちらを振り返ったが、その時に見えた表情はとても明るいものであった。

電車から降り、自宅まで歩きながらに次の機会を思案する。普通に次週も誘って良いのだろうか。独占禁止法に触れてしまうんじゃないかと不安になる。

下らないことを考えてる間に自宅に到着した。解錠し、扉を開けた瞬間に部屋から餃子と雪ノ下の匂いが流れてくる。後でフアブリーズをしないとね、消えて欲しくない匂いもあるけれど。

取り敢えず手を洗うべく洗面所に辿り着くと、そこには今朝には無かったはずの色が置いてある。

「あいつ何馬鹿なことやってんだよ……」

こんな光景を見せられたのだ、独り言も出てしまうであろう。

俺の眼前には薄桃色のマグカップと、そこに立てられたピンク色の歯ブラシがあるの

だから。

どう見ても忘れ物という感じではないので、意図してやったのだろう。自分の安全のために買ったんじゃないかな。次に会った時には問い詰めてやろう。

もう仕方が無いので、自分用のマグカップを取り出してその隣に設置する。こんな狭い部屋で同棲アピールは無理があるし、誰にするのかも分からない。けれど決して嫌な気持ちではない。寧ろ嬉しいのではないだろうか。

鏡面に映る男の表情がそう物語っているのだから。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #11

行かないで欲しいと懇願したのに、目が覚めるとその残り香さえも消え去ってしまった。自然と涙が溢れそうになる。

早い話が月曜日だった。

ルーティンのように朝の準備をする。もう既に心は社畜モードである。俺の仲間は電気ケトルさんぐらいであろう。いつもありがとうね。

朝食のカップラーメンを食べ、歯を磨く。まだ慣れていない光景に少しだけ口角が上がってしまった。

会社のフロアに辿り着くと少し騒がしいことに気が付く。恐らく今日から配属になる新人にちよつかいを出している輩が居るのであろう。

自然と去年のことを思い出す。入社して一週間は他の施設を使つての全職種混合での全体研修が行われていた。そこには女子も存在していたので、浮かれる同期の男が喧しかった。同期の戸部こと佐藤もその枠であったのは覚えている。

吉田と話すようになったのは全体研修の最終日である。同期の女子に言い寄られていたのを眺めていたら、その女子を差し置いて俺の方に向かって話しかけてきたのだ。別に俺は羨ましいと思っていた訳でもないし、何なら働きたくないとしか思っていないかったまでである。

その時は大した話もしていない、挨拶程度だっただろう。しかし、その後から定期的に吉田から話しかけてくるようになったのだ。

朝礼が始まると、俺の所属する部署の新人の配属が発表される。あまり興味がなかったので一瞥もしていなかったのだが、新人の自己紹介が始まった瞬間に驚かされてしまった。

「山田です!!」指導「鞭撻のほどお願いします!!」

めちやくちや声がデカいし、ついでにガタイもデカイ角刈りの男がそこに居たからである。身長は175くらいに見えるのだが、筋肉が凄い。デカすぎて固定資産税かかりそうである。彼のやる気に満ち溢れたその眼が俺には眩しく映った。

どうやら今年の配属は山田だけのようだ。去年は三人だったことを考慮すると相当に少ない。不景気のせいなのだろうか。他の部署も少ないことは想像に難しくない。

そして予想通りではあるのだが、新人の教育係は吉田になった。仕事の割り振りが完璧である。素晴らしい上司を持って俺は嬉しいです。

昼休みになり、大盛況の食堂へ向かう。この時期の食堂が最も混むのである。最初は新人のほぼ全員が社食を食べに来るからだ。暫くするとお弁当を作ったり、社外に食べに行く人で減るため、段々と落ち着いていくのだ。そんな去年を経験している先輩としては早く人が減るのを祈るのみである。

今日の昼食は何にしようか、やはり唐揚げだろうか。週に一回は食べたい。だから月曜日は唐揚げである。ちなみに金曜日はカレーである。

食券を購入し、食堂のおばちゃんに渡しに行こうかというタイミングで一人の男に群がる女性の集団が目に入った。その中心では吉田が困ったように笑っている。周りは新人の女の子なのだろう。イケメンは大変ですね。

不意に吉田と目が合うと苦笑しながらこちらに向かってくる。来られても困るんですけど。

……まさかこいつ俺の目を利用して女避けをしているのでは？

「……良かったら比企谷もお昼一緒にどうだ？」

全然良くないので帰って欲しい。最近は特に世話になっっている気もするが、俺には荷が「先輩……？」重いので……へ？

吉田の真後ろから、亜麻色の髪をした見覚えのある女の子が現れた。

彼女とは高校の卒業式以来の再会だろうか。昔よりも少しだけ伸びたその髪とナチュラルから少しだけ背伸びをしたメイクの影響からか、学生の頃よりも幾分か大人の女性に見える。端的に換言すると綺麗になっていた。

「……久しぶりだな、一色」

「お久しぶりです、先輩」

昔のようにテンション高めな返事を期待していたのだが、彼女の声色は落ち着いたものだった。時の流れを感じさせるには十分な変化であろう。

何故か気を使われてしまい、一色と二人で昼食を取ることになった。一色の狙いは吉田だったのにね、ごめんね。

目の前のヘルシーランチ定食を注文した彼女は、どうしてか目を瞑り、深呼吸を繰り返している。話しかけづらいので先に食事を始める。

半分ほど食べたところで、彼女は閉じていた目を開き、笑顔を作って口を開いた。

「まさか同じ会社だったなんて驚きですよね、先輩は元気になりましたか？」

「まあ悪い会社じゃないしな、ぼちぼち生きてるぞ」

「え、生きてる……？」



「おい」

こうやって一色と会話をするのは6年振りだろうか、高校では話さない日の方が少なかった気がする。何にせよ心地の良い懐かしさを感じさせた。

彼女はサポート関係の部署に配属されたらしい。別階のフロアなので業務中に関わることはなさそうだ。同じ階だったら昔みたいに頼られたのだろうか。

お互いに食べ終わり、トレイを下げようかと考えていると、一色が手を膝に置き、こちらを見つめていることに気付く。先ほどまでには感じられなかった真剣さをその瞳に宿しているようだった。

「……………雪乃先輩とは上手くやれていますか？」

「……………上手くかは分かんが、最近は休みに出掛けたりはしている」

そう返答すると、彼女はホツとしたように息を吐いていた。そこからはケロツとした表情で喋り始める。

「それなら良かったです。二人でどこいうところに行くんですか？温泉とかですか？」

「……………そんな場所に二人で行けるかよ、先週は焼肉とららぽに行っただわ」

「へー、まあ金銭的に厳しいんですかね？」

「金の問題じゃねーっての」

恥ずかしさから頬を指で掻いてしまう。気持ち悪い仕草をしてしまったからか、一色

の表情が厳しい感じになっている。具体的には眉間に皺を寄せている。そこまでの反応をされると辛い。

「……つかぬ事をお聞きしたいんですけど、雪乃先輩とはお付き合いされているんですよね?」

「付き合ってるよ、どこ情報だよそれ」

何故か付き合い合っていると勘違いをされていたらしい。一色は俺の返事を聞くやいなや百面相かというほどの表情変化を見せる。大体の表情は昔に見たことあったので、懐かしさからぼけーつと眺めて過ごす。

「そうだったんですねーじゃあ今週の金曜日は私をご飯に連れてってくださいね?」

忙しなかった表情の変化が笑みで落ち着くと一色がメッシーを所望する。いや、どうしてですかね。金曜日は雪ノ下を誘いたいんですけど?」

「……なんでだよ」

拒否にも近い返事をしてしまったにも関わらず一色の表情は変わらず笑顔であった。少しこめかみが動きましたけどね。

彼女は目を閉じて右手を握って口元に持つていくと、咳払いを行う。そして上目遣いで甘ったるい声で話し始める。

「16日の金曜日は先輩と一緒にいたいんですけど、駄目ですかあ?」

「へっ、懐かしいな、そのあざとさ」

少しだけ照れてしまったかもしれないが、今の俺にはそこまで効かなかった。圧倒的な成長を感じる。

しかし、16日か……確か彼女の誕生日だったであろう。それであればご飯くらい奢ることも吝かではない。会社の後輩にもなったことだしな。

「……じゃあ誕生日プレゼントってことでいいなら奢ってやるよ」

そう口にするると、彼女のただでさえ大きい瞳が更に大きくなる。頬も少し朱色になっている気がする。

「ありがとうございます、先輩！」

喜んでくれたようで嬉しいのだが、俺には幾つか質問があるのでそれを口にする。

「ちなみに、何系がいいとか希望はあるのか？」

「……そこは先輩に考えて欲しかったですけど、じゃあイタリアンでお願いします」

久しぶりに会うのにその期待は厳しくないですかね？まあ教えてくれたので助かった。下手したら焼き鳥屋とかを選んでいたのであろう。

「あと、雪ノ下や由比ヶ浜も呼んでいいか？お前に会えたら喜ぶぞあいつら」

高校時代に一色を可愛がっていたのは俺だけじゃない。奉仕部のあの二人も随分と気にかけて、そして懐かれていただろう。間違いなく一色との再会を喜んでくれるだろ

う。

「あの二人には私からお話するので、今は秘密でお願いします。だから今週は二人きりで食へに行きましようね？」

一色は悩む素振りもなくそう答える。なるほど、サプライズ的なのをやりたいのだから。可愛い後輩の久しぶりの頼みくらいは叶えてやろう。驚いた二人の姿も見たいしね。由比ヶ浜は当たり前だけど、雪ノ下も喜んで飛びつくのではないだろうか。

「了解、じゃあ店とか決めたら連絡するわ」

「はい、アカウントも変えてないので連絡待ってますね」

彼女はそう言うのとトレイを持って立ち上がる。その姿を確認してから俺も立ち上がった。随分と懐かしい気分になったが、この後すぐに元通りの悲しき社会人に戻らないといけないのだった。時の流れは残酷なのよね……。

お店選びもジャンルさえ決まっていればあとは食べログさんと相談するだけで良いので楽勝である。

× × ×

一色と行く店は火曜日には決めたので、既に連絡済みである。そこまでは何の問題もなかったのだが、雪ノ下に土曜の予定を聞いたなら残念ながら埋まってしまうていた。や

はり独占はダメだったみたいである。

金曜日は一色に埋められてしまったので、誘えそうな日は残った日曜日だけだった。日曜日は普段は休むことに決めていたので、家からも出ないのが常であるが、雪ノ下に会えない方があれなので誘ってしまった。ちなみに返事として猫が喜ぶ様子のスタンプが飛んできた。

そのスタンプの後に金曜日 of 予定について雪ノ下に聞かれた時は色々辛かった。本当のことは言えないからね、適当に濁すしかありませんでした。

× × ×

一色の誕生日会の会場として選んだのはチーズに拘っているらしいイタリアンバルである。一色の厳しそうな評価としても合格らしく、喜んでくれていた。ちなみに俺の最寄り駅にあるので評判が良さそうなことは知っていた。

飲み物は赤ワインをボトルで頼み、食べ物にはシーザーサラダを始め、ピザやパスタ、ラクレットチーズを注文して堪能した。

当たり前だが、一色とお酒を飲むのは初めてなので新鮮な気持ちで楽しんでいた。一色もちゃんと楽しんでくれてるように見えた。

アルコールが回ってきたからか、お互いに少しお喋りになる。一色はもう既に会社に

愚痴があるらしく、高圧的な女性社員やしつこく連絡してくる同期の男に対しての文句を話し始める。それが終わると大学時代の苦労なんかを語り始めた。やはりサークルクラッシュも経験済みのようだった。

俺からも彼女が知らないであろう大学時代の話を沢山した。大半は奉仕部の二人と遊んだ話ですけどね。

粗方大学の頃は話は終わってしまったので、最近のことについても話し始める。昨年度は全く会えなかつたこと、今年度からは雪ノ下に毎週会っていること。誘い方の相談でもしようかと考えていると、目の前から軽く息を吐く音が聞こえた。

「……分かつてはいたんですけど、そういうことだったんですね」

「……どういふこと？」

曖昧な表現だったからか、アルコールが回っている影響なのかは分からないが一色が何を言いたいのかを全く理解出来なかつた。

「分かりました、協力してあげますよ」

「いや、だから何を？」

一色は俺の話を聞いていないのだろうか。全く会話が噛み合わない。だが、一色がふざけている様子ではないことだけはハッキリと分かつた。

「折角こうして再会出来たことですし、今度こそ」私も先輩の友人になってあげます

ね」

この時の彼女の笑顔が、高校を卒業したあの日の由比ヶ浜の笑顔と重なって見えた。

「で、先輩の今の悩みってなんですか？」

「……雪ノ下を誘う内容が思い付かなくて困ってる」

一色いろはの相談コーナーが始まったので、お悩みを投稿する。MC役はそれを聞いて腕を組んで適当に頷いている。首の動きが止まったと思ったら急に俺を馬鹿にした表情になる。

「……は？そんなの何でもいいじゃないですか」

「いや、お前も同期に誘われて困ってるって話してだろうが」

盛大に溜息をつかれる。少しだけイラツとするが、取り敢えず話を聞こう。

「それは相手の問題ですよ、お二人の間柄でそんな風に思われる訳ないじゃないですか。むしろ嫌味ですか？あ？」

どうしたらあれが嫌味に聞こえるのだろうか。しかし、目の前の彼女がぷりぷりしてしまったので謝罪はしました。

「取り敢えず、雪乃先輩と行きたい場所を片っ端から挙げて、抽選アプリでも使って決めればいいんじゃないですか？知らんけど」

なんか適当に聞こえるが、割と理に適っている気がするので参考にしますかね。

店を出て、一色と駅まで並んで向かった。道中ではお店の料理の感想なんかを話していた。彼女との物理的な距離が昔よりは少し離れている気もするけれど、落ち着く距離感だと思えた。

駅に着いたので、一色とはここでお別れとなる。一応、家まで送るかを聞いたけれど丁重に断られました。

「ではでは、改めて今日はご馳走様でした。また連れてきてくださいね!」  
「……まあそのうちね、何かあったらね」

彼女は呆れるように笑うと手を振り、改札へと歩き出そうとする。だが、言い忘れたことを思い出したので呼び止める。

「一色、……その、誕生日おめでとさん」  
そう口にする、彼女は振り返り、軽くお辞儀をして走って行ってしまった。ホームで走ると危ないから気を付けてね?

その後、俺は駅からの帰り道に日曜日にごこへ行くかを考えていた。既に雪ノ下が考えてくれている可能性は十二分にあるが、自分でも悩みたかった。



一色のアドバイスを参考に雪ノ下と行きたい場所を考える。うん、何処でも行きたいんだよね。枕詞に ” 雪ノ下と行く ” を付けるとどんな場所でも魅力的になつてしまふ。こうなるからそもそも列挙が出来ないことをちゃんと相談するべきだっただろうか。

そういえば、日曜日だと何時まで一緒に居られるか分からない。次の日に忌まわしき仕事があるからである。そういった事情もあることだし、雪ノ下に相談して決めよう。今回の店選びだつて希望を聞いたりしたしね。

LINEを起動して、雪ノ下にメッセージを送ることにする。内容は直球でいいだろう。彼女の行きたい候補が聞けるといいのだが。

21:16 『雪ノ下は今行きたいところとかあるか?』

21:17 『参考にするから教えて欲しいんだが』

家で不貞寝していると、彼からのメッセージで目が覚める。内容は多分日曜日のことなんだろう。けれど、私のこの質問への回答なんて決まっている。

「……………今すぐあなたのところに行きたいわよ」

## やはり俺の社会人生活は間違っている #12

「お久し振りね、由比ヶ浜さん」

「おひさ、ゆきのん！」

土曜日の夕方、私は三週間振りに由比ヶ浜さんと会う約束をし、都心のカフェに訪れていた。私としては比企谷君も連れてきたかったのだけど、由比ヶ浜さんに断られてしまった。理由は分かるけれども。

「でさ、ヒッキーとは上手くいつてる？会ったとは聞いたけど、詳しく教えてよー」  
「教えるから、わざわざ隣に座って腕を掴まないで頂戴」

二人用ソファ一席なのでスペース的には余裕があるはずなのだが、由比ヶ浜さんの距離が近いせいで端に追いやられる。

彼女は期待の目で私を見つめている。仕方ないので、軽く咳払いをし、綺麗に座り直してから話し始める。

「彼と会えた日にね、翌日の映画に誘ったのよ」

「結局ゆきのんが誘っちゃってるじゃん……」

そこを突かれると弱い。けれど、それ以降は基本彼から誘ってくれているのだから問題はないはずよね。

「……けれど、その日の夕飯は比企谷君から誘ってくれたわよ」

「おおー、ヒツキーもちゃんと成長してるじゃん」

「先週の金曜日も焼肉に誘ってくれたし、土曜日も遊びに誘ってくれたわよ」

「本当にヒツキーか疑いたくなるくらい誘ってる……。ちなみに昨日は？」

「……昨日は何か用事があったみたいよ、相手は教えてくれなかったけれど」

未だに消化出来ていないので不機嫌を隠せずに言葉にしまった。由比ヶ浜さんはそれを聞いて何か考え込んでいるようだ。

「うーん、教えないってことは多分女の子だね。会社の後輩とかかなあ？」

私もその線は考えていたけれど、内緒にする理由が分からなかった。別に話してくれば怒ったりはしない、はず。

「あーもしかして、いろはちゃんじゃない？昨日が誕生日だったし」

スマホを取り出し、LINEのタイムラインを見せてくれる。

確かに一色さんの誕生日と表示されているし、昨日が誕生日だったことは覚えていた。

「けれど、大学生の時に彼女から連絡が来たことなんて無かったですよ」

「社会人になったらヒツキーが恋しくなったんじゃない？高校の時は仕事があるしヒツキーに頼る、みたいな感じだったし」

確かにそう言われたら納得出来そうな気もする。一色さんの彼への執着は傍から見ても異常だったと思う。

「ヒツキーが本当にいろはちゃんと会ったんなら、私たちも早く会いたいね」

「……そうね、一色さんは元気がしらね」

もし、一色さんが比企谷君と同じ会社で働いているのであれば嫉妬してしまうだろう。けれど純粹に可愛い後輩に会いたいという気持ちも大きくなる。

「それは置いといて、私もそろそろヒツキーに会いたいな……」

しみじみと彼女は呟く。

それなら今日も呼べば良かったのに、とは思わなくもないけれど、彼女は私を想ってそうしてくれている。

また直ぐに三人で集まってしまうえば大学時代の雰囲気に戻りしてしまう可能性がある。正直、それも幸せだとは思うけれど、今は彼との仲を進展させたいという想いが何よりも強い。

「ごめんなさいね、私が不甲斐ないせいで……」

本当に申し訳ないので、頭を下げて彼女に謝罪する。

「もー、私が協力するって言ったんだから気にしないで！」

「……本当にありがとう、由比ヶ浜さん」

今も昔も、私は彼女の優しさに甘えっぱなしだ。早く変わらなくちゃいけないとは思  
うけれど、心地が良すぎて直ぐには抜け出せそうにない。

「早く比企谷君に会わせてあげられるように頑張るわ」

「うん、期待してる！……ゴールデンウィークには会えそうかな？」

「えっと、頑張ってはみるわね……」

そこまで早い納期を要求されるとは思わなかった。会社で振られる無茶な納期より  
もずっと無理なその期待には応えられる気がしない。

× × ×

プリキユアで涙を流し、シャワーで汗を流して出掛ける準備をする。

今日の予定は猫カフェに行き、早めに夕食を取って解散らしい。明日の仕事に影響が  
出ないように遅くとも21時までには俺が帰れるように配慮してくれたらしい。天使か  
な？

ちなみに、猫カフェは俺が提案した。食い付きが凄かったので即決定になったのである。

今日の服装は先週に雪ノ下を選んでもらったネイビーカラーのジャケットを羽織っている。他は普段通りである。黒パンと白シャツだ。

予定の5分前に雪ノ下のマンション下に到着する。最初からこうすれば良かったと思えるくらい気が楽である。周囲のご近所さんに怪しまれている様子もないしね。

エントランスのオートロックで呼び出しをすると、直ぐに行くと言われて切られてしまった。久しぶりのゆきのんボイスが一瞬で終了してしまって悲しくなる。

しかし、本当にすぐに彼女はやってきた。呼び出してから1分くらいしか経ってないでしょ、はっやい。

「……お待たせ、比企谷君」

「いや、今来たところだって」

デートの定番みたいなやり取りをしまして少したずかしくなるが、そんなことよりも雪ノ下が可愛すぎる。彼女はあのワンピースを着てくれていた。脳内イメージよりも可愛くなるのは何故なのだろう。写真撮ってもいいだろうか。

「やっぱり似合うわ。写真撮ってもいいか？」

「……ありがとう、でもこんなところで写真はやめて」

マンションの入口での撮影はNGらしい。仕方がないので、後で猫カフェで死ぬほど撮ろうと決意を胸にする。

「んじゃ、早速猫カフェに行こうぜ」

彼女に手を差し出す、と同時にくらいに手を握られる。ドキドキを味わう前に繋がってしまった。

「そうね、早く行きましょう」

今日の雪ノ下さんが素早い理由って猫カフェですね、これは。少しだけ悲しくなるが、相手が悪かった。パンさんと猫には勝てそうにもない。

目的の猫カフェは徒歩20分圏内だったので散歩も兼ねてゆっくりと歩く、つもりだったのだが予定の半分の時間で着いてしまった。雪ノ下さんの体力が少し心配である。

店内に入る、早歩きをして熱くなった身体にはエアコンの効いた空間が嬉しい。

二人での利用を店員に告げると直ぐに席へ案内してくれた。

この猫カフェは半個室がコンセプトになっており、各席の周りには150cm程の敷居が立てられている。何となく雪ノ下の猫可愛がりモードを他人に見せたくなかった

のである。

席自体は柔らかめの大きなソファー席なので、長居するにも良さそうだった。

心配としては猫が来てくれるのかってことなのだが、猫のおやつを買って待ってれば心配ないらしい。一人分500円なのだが、初手で三人分の購入を決めた雪ノ下を責めることはできまい。

「ひ、比企谷君……猫さんが来てくれたわよ」

「落ち着け雪ノ下、抱っこは禁止だから膝に乗ってくれようにおやつを持って」

猫が無事に襲来してくれたので慌てる雪ノ下さん可愛い。ちなみに抱っこが禁止されているので、撫でたりするなら膝に乗せるのがベストだろう。

テンパリすぎて逆に猫を警戒させてしまっている彼女の代わりに見本を見せる。

まずは猫のおやつを手で振って猫に気づいてもらう。そして、その餌を膝上に置いて様子を見る。そしたらすぐに飛び乗ってきてくれた。

「よしよし、可愛いやつちゃん」

「……比企谷君、私も撫でていいかしら」

俺の膝に乗っている猫を撫でたいらしい。猫を前にすると少し臆病になるのが可愛い。

「当たり前だろ、遠慮せず可愛がってやってくれ」



「ええ、頑張るわね……」

彼女は慎重に手を猫の頭に乗せて撫で始める。猫も気持ち良さそうに目を細めている。何ならゴロゴロと喉を鳴らして甘えているようだ。それを聞いた彼女は頬がゆるんでいる。ゆるゆるである。

別の猫もその音に釣られたのか分らないが、もう一匹の猫がいらつしやつた。先ほどの猫はマーブルカラーのアメシヨちゃんだったが、今回の猫さんは白毛のラグドールだった。

「ま、また来たわよ比企谷君……」

「おう、今度は自分の膝に乗ってってくれるように頑張ってみ」

先ほどの俺の動きと同じように誘導をする。少しぎこちないのが可愛らしいけれど、ラグドールはちゃんと雪ノ下の膝に座ってくれた。

「おやつ食べるかにゃー?」

猫などで声で猫におやつをあげる猫ノ下さんが可愛すぎてやばい。これを撮影しないのは流石に無礼であろう。お店としては写真は禁止されていないので、念の為フラッシュ機能を切った上で撮影に臨む。

……取り敢えずバレルるまでは動画で撮影しよつと。

撮影時間が5分を過ぎたあたりでバレてしまったけど、その間の光景が尊かったので

大収穫である。家宝にしようかしら。

「あなたの写真も撮っていいわよね？」

「別に構いやしないが、猫を撮った方が有意義じゃね」

猫ちゃんとの触れ合いにも慣れたのか、先ほどの撮影に対して思うところがあるのか分からぬが、雪ノ下さんも写真が撮りたいらしい。

「一緒に撮るに決まっていますよ、ほらアメシヨの猫さんにピントを合わせると比企谷君の顔がボヤけていい感じよ」

「それ俺の写真じゃなくて猫の写真だよね？」

冗談なのか本気なのか分からないラインのボケである。え、ボケだよね？

その後は2時間ほど代わる代わる来てくれる猫との触れ合いを楽しんだ。スマホの写真フォルダには200枚強の猫ノ下さん画像が収められたのだった。

今は少し早いけれど夕食を食べるためにハンバーグ屋に来ている。ちなみにこの店も雪ノ下のマンションから徒歩圏内である。

「……比企谷君とご飯を食べるのも久しぶりね」

先ほどまでは間違いなく和やかな雰囲気だったのに、急に彼女の機嫌が悪くなっている気がする。

表面上は笑顔なのだが、目が全く笑っていない。え、その笑顔怖いからやめて?というか、金曜日のことまだ気にしてるの?

「い、一週間振りだな」

「そうね、本当なら二日前にも一緒に食べられたのにね」

はい、間違いなく気にしてますね。一色が秘密にしたいとか言い出さなければ正直に言えたのだが……。約束を反故にすることも出来ないのです、上手く誤魔化すしかない。「悪かったって、野暮用というかあれがあれでね……」

言い訳が適当過ぎて、目が笑っていないどころか睨まれてしまう。早く白状して楽になりたい。あとマジで怖い。

「はあ……。その、一色さんでしょ?」

「なんだよ、もう連絡来てたの?なんで教えてくれないんだよ一色のやつ……」

全く酷い話である。さつさと教えてくれていれば変な言い訳をせずに済んだというのに。

「あら、本当に一色さんだったのね。鎌をかけてみるものね」

「へ、聞いてたんじゃないの?」

恐らく今の俺は驚愕で間抜け面になっているであろう。対面の彼女は呆れるように苦笑していた。

「金曜日は一色さんの誕生日だったから有り得るかもと考えていただけよ。あなたは昔から一色さんには甘いものね」

「すまん一色、バれてしまいました。あと一色に甘いのは君も変わらないからね？ 棚に上げないでね？ しかし、もう隠せそうにないので白状してしまおう。」

「たまたま俺の会社に入社してたらしくてな、月曜日に偶然出会って誘われたんだよ」  
「……そう、やはり彼女は凄いわね」

急に彼女の表情が暗くなる。確かに一色の処世術には見習うべきところもあるだろうが、雪ノ下には雪ノ下の良さがある。何なら良さしかないまである。

「隣の芝生はなんてやらってやつだろ、俺にとつては雪ノ下の方が凄いと思うぞ」

小町ですら若干見放している気がする俺に対してこんな深く接してくれているしね。つてか小町が最近連絡しても返事が来ないのは何ですかね。兄離れですかね、悲しい。

「……何が凄いつて言うのよ」

「励まし方が適当過ぎたからか、彼女はジト目になってこちらを睨んでくる。」

「今もこうして傍に居てくれてるだろ……。そろそろ注文していいか？」

「恥ずかしいことを言葉にする自覚があったため、ぶつきら棒な口の利き方になってしまった。というか、お腹空いてるから不機嫌になるんですよね。人間は肉食えばストレ

スが吹き飛ばらしい。

「ふふ、そうね、腐食耐性には自信があるわね」

相も変わらずゾンビ扱いをしてくれるけれど、彼女の顔には笑みが戻っていた。理由はよく分からないけれど、俺の恥ずかしい言葉にも意味があったのだろう。今はメニューを眺めている彼女のその表情には、最近よく見せてくれる優しい笑みが浮かんでいた。

「そういうえば、今日撮ったあなたの写真を待ち受けにしてもいいかしら？」

「それ俺の写真じゃなくて、猫の写真ですよ？別にいいけど」

夕食を食べた帰り道、隣で手を引かれてにこやかに笑う彼女に声をかけられた。別に待ち受けにしてもいいけれど、きつと俺の顔はトリミングで削除されてしまうだろう。そもそもピンボケしてるらしいしね。

そんな俺の投げやりな返答を聞くと、雪ノ下はお得意の挑戦的な表情になる。何を考えているのやら。

「そう、ならあなたも待ち受けを私の写真にしてもいいわよ。比企谷君にそんな度胸があればの話だけだね」

安い挑発である。そんな挑発に乗るのはあなたくらいですよ、雪ノ下さん？しかし、

この余裕たっぷり彼女の彼女に一泡吹かせたいという気持ちがないわけでもない。

雪ノ下は俺の目をじっと見つめ、繋いだ手をにぎにぎして返答を待っている。仕方ない、ここは買ってあげることにしよう。

「……馬鹿にするなよ、俺には200枚を超える猫ノ下さん写真があるんだよ。その中から一番可愛いやつを選別して待ち受けにしてやんよ」

「そ、そんなに……」

これ撮った写真の枚数まで言う必要はなかったですね。雪ノ下に引かれてしまったかもしれない。

先ほどまで指先に掛かっていた負荷が今となつては弱々しい。最悪削除要請をされてしまうかもしれないのでクラウドに回避させようかなと画策する。

ふと気が付くと、繋いでいた彼女の手の温度が熱くなっていた。振りほどけるのではないかと思うほど弱かった握る力も前よりも強くなっている。どうしたのかと彼女の表情を見やると、挑戦的な表情に戻っていた。ただ、綺麗な白い肌が今は真っ赤になっ  
ているので、頑張つて取り繕っているだけな気もする。

「別に構わないわよ、折角だし勝負をしましょうか。……先に待ち受けを戻した方の負けよ、いっしょ」

「ふ、負けるビジョンが浮かばないな」

そもそも待ち受けを変えようとは普段は全く思わない。しかも待ち受けには雪ノ下が猫と戯れている素晴らしい写真を設定できるのだ。余計に変える必要性が見当たらなくなるだろう。

「ふふ、では罰ゲームは負けた方が勝者の言うことをなんでも一つ叶えるにしましょうか」

「……まあなんでもいいけどね、絶対負けなしいし」

「……約束よ」

俺が勝利宣言をしているのに追撃してこないことが少し不思議だった。そして、何が嬉しいのかも分からないが喜色満面になっていた。そんな俺もきつと似たような表情をしているのだろう。

もうすぐそこには彼女の住むマンションが見える。そろそろお別れの時間だろう。今週こそはまた金曜日に食事へ誘おう。今も横で歩いてくれている彼女とまた早く会いたいのだから。

歩幅が小さくなり、次の足を出すまでの時間も遅くする。行きで急いだ分の帳尻合わせをしよう。きつと体力の無い彼女もそれを望んでいるだろう。

熱くなった彼女の手は冷めやまない、きつと俺も同じだから。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #13

またしても来てしまった月曜日の朝がアラームを鳴らし、俺の耳朶に挨拶をしてくれる。

憂鬱な気分ですマホを触り、アラームを止めるが、不意に待ち受けの画面が目に入るとそんな気分も薄れてしまう。……今日も頑張ろう。

朝食を食べて、歯を磨く。ただそれだけでも心が少し満たされるようになっていた。

お昼休みになったので、唐揚げ定食を食べに食堂へ向かう。

入口が少しつつかえていたのが何事かと思ったが、一色いろはが入口横で立っており、誰かを探すように周りをキョロキョロしていた。まあ、男性社員は一瞬立ち止まっちゃうよね、わかります。

俺を探していない可能性もあるし、横をこっそり抜けようとしたのだが、そんな上なくいく訳もなく、腕を取られてしまった。

「なんで無視しようとするんですかね、せんぱーい……」



「棒だし低いし怖い、俺じゃないかと思ったんだよ」

謎の罰として俺は昼食を奢らされてしまった。これってパワハラになりませんか？  
なりませんか……。

入口からは正反対の窓側の席を取り、二人で対面するように座る。俺の席側だと窓から差し込んでいる陽の光が眩しいので少し辛い。

「これからは探すの面倒なので、基本はこの席辺りで集合してくださいね」

「……え、まあいいけどさ」

大したことではないようにあっけらかんと提案されてしまう。先週は結局、月曜日しか一緒に食べていないのだが、これからは毎日なのだろうか。ってか同期で友達いないの？先週のあの集団は何だったの？

そういえば、俺は一色に秘密をバレてしまった謝罪をしなくてはいけないだろう。鎌をかけられたとはいえ、俺の失態なのだから。

姿勢を直し、両手を膝に置き、彼女の目を見て口を開く。

「すまん一色、実は雪ノ下にお前のことバレちゃったわ……」

「ええ、知ってますよ。雪乃先輩からLINE飛んできましたし」

表情も変えずに箸で鯖味噌を摘まみながら彼女は答えた。しかし、段々と彼女の口角

が上がつていき、やがて微笑にも見える表情へと変化した。

「正直、私の事をちやんと覚えてくれていたってことが嬉しかったです」

一色は結構大人っぽくなったという印象が強かったのだが、彼女の今の表情からは、我々が奉仕部が大切に思っていた頃の可愛い後輩らしさが浮かび上がっていた。

「で、約束を反故にしてくれた先輩にお願いがあるんですけどー」

え、気にしてないんじゃないの？ さっきのは何だったの、と思っていたのだが、それはそれらしい。

昔によく見た仕事を振ってくる時の笑顔がそこにはあった。完全に作られている顔ですね。

「ゴールデンウィークに温泉に行きませんか？」

「は？ なんでそうなるんだよ……」

何で急に温泉に行きたがるんですかね、この後輩は。あと、周りに誤解されるからそういうことは冗談でも言わないでね。

質問に質問で返してしまったからか、彼女は呆れるようにこちらを見つめ、わざとらしく長い溜息をついた。

「先輩が自分で言ってたじゃないですか、二人で温泉に行けるかよって。だから雪乃先

輩と結衣先輩も誘って行きましょうよ。私も2人に会ってゆっくりお話ししたいですし」

なるほどね、確かにあの二人も一色と会いたがるだろうし、俺も久しぶりに由比ヶ浜に会いたい気持ちはある。でも温泉か…、女三人と男一人で温泉旅行は肩身が狭過ぎませんかね？

返答を渋っている俺をじっと見ていた一色はまた呆れるように溜息をついた。だが、今度のは短く、優しさを感じるような音色であった。

「……可愛い後輩の我が儘を叶えたいって体でなら先輩も誘えるんじゃないですか？」  
「……そういうことね」

あの夜に協力してくれるって言うていたのはこういうことだったのだろうか。

昔から一色を助けているようで、実は俺が助けられていたということは少なくなかった。その関係は今も、これからも変わらないのかもしれない。それが嬉しくて笑ってしまった。

「じゃあ、雪乃先輩へのお誘いは先輩からお願いますねー。結衣先輩には雪乃先輩から誘ってもらおうように頼んでもらえますか？」

「あいよ」

「じゃあ善は急げってことで、ほら、早くLINEで送っちゃってくださいよ」

了承した途端にこの後輩は当たり前のように急かしてくる。でもまだ誘い方とか考えてないから待つてもらえませんかね？

「……どうせ週末に会うからその時でいいか？」

「いいですけど、私としてはLINEとか使って文章で送った方が良いと思いますけどねー」

誤解を生まなければいいですけど、と追加で呟く。正直、意味がわからないのでスルーしよう。

ゴールデンウィークは再来週の土曜日からなので、遅くとも今週の土曜日までには誘って欲しいとのこと、日程の調整や宿の予約については一色の方で受け持ってくれるという旨を聞き、本日のお昼は解散となった。

× × ×

「……そういえば雪ノ下さんは知ってる？」

漸く今週も最後の出勤となり、そして彼と会える日である金曜日、そのお昼時に同期の橋本さんから神妙な面持ちで話しかけられる。私は首を傾げ、彼女に続きを話してもらうように促す。

「あの比企谷君がね、なんか社内では後輩の女の子といちゃついてるらしいよ」

「えっ、嘘でしょ?！」

私よりも先にオーバリアクションで加藤さんが反応する。あなたがそこまで驚くようなことかしらね。まあ比企谷君のキャラクターをあまり知らない彼女からしたら、想像もできない出来事なのかもしれない。

落ち着いて話すために少し息を吐く。思うところが無いわけではないので、表に出さないように努めなければならぬ。

「……知っているわよ。その後輩の女の子は私の後輩でもあるのよ、高校の時のね」

へえー、と彼女たちは反応している。けれどその顔を見る限り、納得はしていなさそうだった。

「高校時代の後輩だとしても、仲良すぎるんじゃない?なんか毎日一緒にお昼食べてるらしいよ」

「……そもそも何処情報なのかしら?」

一色さんに対して嫉妬してしまいそう……いや、してしまったことを隠すように別の話題に切り替える。それにしても、加藤さんは一体誰からそんな話を聞いているのだろうか。

「比企谷君の同期の佐藤君からだよ。LINE交換したんだけど、結構頻繁に連絡が来るんだよねー」

「へー、仲良くなったんだ？」

「……仲良くって訳じゃないけど、まあ積極的にアピールしてきてくれてるね」

意外と加藤さんは男性の扱いが巧く、受け身ながらに相手に攻めさせるように誘導している節がある。大人しそうな見た目とは裏腹に、とても強かな女性だと思う。

情報の出処は分かっていたけれど、そんなに目立つように毎日一緒に食べているのね……。そう、一色さんにはどんなお札をしてあげようかしらね。全くもって会う日が楽しみだわ……………。

本日のお店は石窯で焼くピザを大々的に売りに出しているイタリアンバルである。今回は雪ノ下がお店を探して選んでくれたので味には期待できるであろう。二週連続イタリアンでも全く気にならない。

お店に入ると、まず内装のこだわりを感じる事ができた。古材とアンティーク品を積極的に取り入れており、ヨーロッパ感を見た目から楽しむことができる。これには期待度が更に高まってしまう。

メニューを開くと、多種多様なピザが1000円程度の価格から記載されている。小さいサイズを頼み、是非に色んな種類を食べたいところだ。

「比企谷君はどんなピザが食べたいとかあるかしら」

俺のメニューにのめり込むように見ている姿が可笑しかったからか、少し口元を緩ませている彼女に声をかけられる。

「美味しそうなお店だし、とりあえず基本のマルゲリータは押さえておきたいってのはある。あとはカルツォーネは食べてみたいし、サラダっぽいインサラータも食べておきたいところだな……」

「ふふふ、そうね、私もその辺りが食べてみたいかしら。あとはシーフードも食べてみたいわね」

二人でテンション高めに注文する内容を決めていく、仕事終わりの充足感とこのお店への期待感、そして目の前の彼女が居るからであろう。この俺の高揚感は。

注文から20分程度で一枚目のピザのマルゲリータが到着する。店内に充満する香りによって、既にこちらは腹ペコ状態であった。

ピザに合わせて注文したお酒は、チーズに合うとお店が推している白ワインである。空きつ腹に入れて悪酔いしてもいけないので、まだ乾杯後に一口だけ舐めるように飲んだ程度にしてある。

ピザは4等分されており、スモールサイズで頼んだために1ピース当たりの大きさは丁度いい感じである。

待ちきれないと言わんばかりに、お互いに1ピースずつ手に取り、目を合わせ、タイミングを合わせて食前の挨拶をする。そして、手に持ったピザに口を付けた。

窯焼きにより、こんがりサクサクな表面だけど中はもっちりとした薄めのピザ生地の上には、熱々なモッツアレラチーズと上品な酸味とトマトの香りが引き立つソースが乗っている。こんなの旨いに決まっている。夢中で喰らいついていたため、気が付けば手に持っていた1ピースが綺麗さっぱり無くなっていた。

「ピザってここまで美味しかったんだな……」

「窯焼きじゃないとここまでのは味は出せないでしょうね、見事だわ」

雪ノ下も一口は小さいけれど、パクパクと速いペースでピザを食べ進んでいる。時折、チーズが伸びてしまい、焦っている姿が微笑ましかった。それを恥ずかしがるように赤面してしまった時には、軽く意識が飛ぶかと思いました。

「ピザは先週も食べたんだが、圧倒的に今日のお店の方が美味しかったわ……」

「ふふ、それなら今日、ここを選んだ甲斐もあったわね」

頼んだピザは全て食べ終わってしまい、今は残ったワインを飲みながら食休みをしている。

本日の感想を告げると、お店を選んでくれた彼女は嬉しそうに微笑んでくれた。のだ



が、その微笑には普段とは少し異なるニュアンスを感じた。強いて言うなら、彼女の機嫌が悪いときに似ている気がする。え、なんで？

こういう時は話題ずらしに限る。ゴールデンウィークの温泉についても話さないといけないし、今この場で尋ねてしまおうと決心をする。

ただ、二人で行くではないにしろ、温泉に誘うことには変わりないので、照れから若干どもってしまう。

「……雪ノ下、その、ゴールデンウィークって予定は空いてたりするか？」

「え、ええ、空いているけれど……。な、なにかしら？」

何故か雪ノ下がテンパっているけれど、俺の内では温泉に誘わなければという意識でいっぱいだった。深呼吸をして、彼女の目を見つめて口を開く。

「……その、温泉と一緒に行かないか？」

断られたらどうしようかという恐怖心から、一瞬目を閉じてしまう。怯えるように徐々に目を開いていくと、そこには顔が朱を通り越して真っ赤になり、目をパチクリさせ、あたふたしている雪ノ下さんがいた。

静寂が10秒、20秒、30秒と過ぎる頃には冷静さを取り戻しかけたのか、改めて姿勢を直し、返答するための状態に移行し始めていた。そして、遂には口を開き始める。

「……………ええ、喜んで」

その時の彼女は涙でも流してしまおうのではないかというほど、感情的で幸せそうな表情になっていた。そこまで喜んでくれるなんて一色も嬉しいだろうに。

「二色の発案でな、由比ヶ浜も誘って四人で行きたいんだとよ」

「……はい？」

先ほどまでの笑顔は崩れていないのだが、眉だけがピクピクと動いている。この動きはどこかで見たことがある気がする。あー、あれだ、平塚先生だわ。この表情を見た後は意識が飛んだりするから記憶には曖昧に残っていたんだな、納得だ。……え？

「……そう、一色さんがね」

明らかに雪ノ下は怒っている。俺はシエルブリッドを覚悟し、体を強張らせて目を閉じる。

「……由比ヶ浜さんも入れて四人でね」

「……………そう、それは楽しみね」

平塚先生であればとつくに來ているであろう衝撃が來ないことに疑問を持ち、再びゆっくりと目を開くと腕を組んで呆れ顔で苦笑している彼女の姿が見えた。

「由比ヶ浜さんには私から誘えばいいのかしら？」

「お、おう、それで頼むわ……」

普段通りの微笑になっている雪ノ下に安堵し、息を吐く。

雪ノ下は口に手を当てて、んんつと喉を鳴らして改めてこちらを見つめてくる。座高の關係上、少しだけ上目遣いにも見えるそれにより、落ちつけたはずの動悸が少しだけ早くなった。

「他の人も一緒になら最初に言ってもらえるかしら？」

「お、おお、すまん」

雪ノ下を温泉に誘うことに精一杯で、誘い方が良くなかったようである。正直、何て言つて誘つたかもあまり覚えていない。

「まあでも、一色さんにはお礼をしないといけないわね。皆で温泉だなんて……」

「お前らとゆっくり話がしたいって言つてたし、その時に、昔みたいに会話出来ればあいつも満足してくれるんじゃないか？」

協力してくれるという話ではあったが、一色が彼女たちに会いたいという言葉に偽りはなかったであろう。そもそも、一色が自分に得がないことで動いてくれるイメージがまるで無い。

「けれど、久しぶりに可愛い後輩に会うのだから、何かプレゼントとかしてあげたいわね。この前も誕生日だったのだし……」

顎に手を置いて考え始める雪ノ下。やはり彼女も一色には優しいし甘い。数年の隔たりがあつたとしても、きつと何も変わらずに接してしまうのだろう。

そういう空間で俺たちはあの日々を過ごしてきたのだから。

帰りの電車の中で、隣に座る雪ノ下は由比ヶ浜に連絡を取っている。きつと、由比ヶ浜も尻尾を振るように喜んでくれるであろう。ゴールデンウィークは5日もあるのだ、日程を合わせることも可能だろう。

早速返事が来たらしく、雪ノ下は小さく「やった」と明るい声で呟く。それを伝えるためにか、少しだけこちらに体重を預けてくる。彼女の体温は勿論のこと、サボンの香りがより強く鼻腔をくすぐり、少し弱くなっている理性を刺激してくる。

「由比ヶ浜さんも行けるって返事が来たわよ」

「……それはよかった」

本当によかったと心の底から思える。久しぶりに由比ヶ浜に会える。そして、また四人で集まることができるのである。

少しだけ目頭が熱くなり、うっすらと一滴だけ涙が零れる。目を瞑り、俺の肩に頭を預けてくれている彼女には気付かれていない。

「……私、今幸せよ」

「……俺もだわ」

俺も本当に幸せだ。

「きつと明日も幸せね」

「……そうだな」

明日も幸せに決まっている。

明日も彼女と一緒に居られるのだから。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #14

濃密であった4月が過ぎ去り、そして待ちに待った5月がやって来た。目にも鮮やかな新緑が顔を覗かせ、気温は夏日にも到達しそうな程である。

今年の俺のゴールデンウィークは1日から5日までのカレンダー通りの休暇となっている。社会人になってからの5連休は非常に有難い存在である。これだけ長い間休めるのは、お盆と年末年始とこのゴールデンウィークぐらいでなのだ。大学生の頃は60日近くも夏休みがあったりしたのにね、悲しいね。

そして今日が5連休の初日であり、一色が提案をしてくれた温泉旅行の出発日となっている。1泊2日の箱根旅行らしいのだが、詳しい内容は聞いてはいない。今回は一色 たつての希望により、彼女に任せ切りにしている。

「比企谷君は目玉焼きは半熟で良いかしら？」

「あ、うん……それでよろしく」

フライ返しを握り、エプロン姿で俺に微笑みかけるは雪ノ下である。俺は今、彼女の家で朝食を作ってもらっている。

「……では、頂きましようか」

「悪いな、わざわざ俺の分まで作らせちゃって」

食卓にはトーストと目玉焼き、生野菜のサラダ、コンソメスープが並んでいる。普段はカツプラーメンで済ませているため、こんなに色鮮やかな朝食は久しく見てすらいない。ご機嫌な朝飯だ。

二人で手を合わせて、いただきますと口にする。取り敢えずトーストにバターを塗ろうかと思い、バターナイフを取ろうとしたのだが、雪ノ下が先にそのナイフを手を取ってしまう。

「謝罪をするのであれば、昨晚の謝罪をするべきではないかしら。ね、比企谷君？」

ナイフを片手に謝罪を求めてくる、字面だけを見ると恐ろしいものだ。だが、実際に目を見ると、目が一切笑っていないのに口角だけは完璧な笑みになっているため、マジで怖い。字面だけの方が幾分かマシである。

ちなみに、昨晚においたをしてしまったとか、そういうことは一切ありません。

「昨日は急にキャンセルして悪かったよ。……俺だつて行きたかつたわ」

「……それなら行つてくれれば良かったじゃない」

彼女はナイフを置き、拗ねるように横を向いてしまう。彼女が機嫌を直してくれるか

は分からないが、ちゃんと理由を話そう。

「二色がな、今日はお発が早いから前日の予定はキャンセルしろってうるさくてな……」  
一色は大学時代に寝坊したメンバーが居た所為で、旅行の計画が滅茶苦茶になってしまった過去を引きずっているらしい。

彼女に計画等を全て任せている以上、キャンセルの件についてはあまり強くは言えなかったのである。

「二色さんのお願いなら、何でも聞いちゃうのね」

「いや、雪ノ下ならまだしも一色の頼みなんて基本は聞かないぞ」

昨日が特別だっただけである。まあ、最近はその特別つてのが多い気もしなくはない。

言い訳を聞いて納得してくれたのか、雪ノ下は相槌をしてパンに齧り付き始めた。頬を少し赤く染め、小さな口で食べ進める姿はとても愛らしく見える。

それにしても、雪ノ下さんは結局パンに何も塗らずに食べるんですね。

「昨日は悪かったけど、今日こうして雪ノ下の作った朝飯を食べさせてもらえて嬉しいわ」

「……私から誘ったのだし、それにこんなに朝早くから迎えに来てくれるのだから当然の権利よ」



そう、今朝の朝食は雪ノ下からの折衷案だった。晩御飯がダメなら朝御飯を食べに来  
てね？という彼女の返信を見て断れる男なんて居ないだろう。

今日は朝9時に新宿駅西口に集合の予定なのだが、現在の時刻は7時を少し過ぎたところである。ちなみに俺は5時起きです。

「こんな権利が手に入るなら早起きなんて苦にならん」

そう言っつてスープに口を付ける。ベーコンに玉葱にキャベツと具沢山のコンソメ  
スープは具材の味が溶け出しており、その温度も相まって非常に美味であった。

「……早起きなんてしなくても、食べさせてあげることもできるわよ？」

いつもの揶揄いの眼差しが向けられる。最近はこの手の揶揄いが増えてきている気が  
する。冗談でも軽い返事なんて出来ないの、黙ることしか出来ていない。

俺にとつては軽い気持ちではないし、冗談では済ませたくはないから。

今はただ、上気してしまったこの頬を、熱いスープのせいにするこぐらいしか俺に  
は出来そうにもない。

俺と雪ノ下は約束の15分前に西口に到着し、現在は由比ヶ浜と一色を待っている。

ゴールデンウィーク初日の新宿駅は大盛況であった。俺たちと同じく、どこかに出掛  
けに行くのか、キャリーバッグを片手に持っている人々が多く見られる。

「ゆきのーん！ヒッキーー！」

薄桃色のニットに黒のスカートを合わせたお団子へアアの元気っ娘、由比ヶ浜がぴよんぴよん跳ねながらこちらへ向かって来ている。相も変わらずの元気に嬉しくなつてしまふ。自然と吸い寄せられるその笑顔と胸部には安心感すら覚える。

「先週ぶりね、由比ヶ浜さん」

「……1年ぶりだな、由比ヶ浜」

「……うん、ヒッキーはホントに久しぶりだね！」

由比ヶ浜に会うのは大学の卒業以来である。社会人になつても変わらずのお団子へアアなのだが、この髪型で入社しているんだろうか。まあ似合っているからいいのだろう。

「おい、由比ヶ浜」

「……ん、どうしたのヒッキー？」

俺は由比ヶ浜からどうしても聞きたいことがあった。別に今じゃなくてもいいのだが、折角だからこのタイミングで聞かせて欲しかった。

「おはよう、由比ヶ浜……」

きつと彼女ならば気付いてくれるだろう。いや、気付かなくても彼女なら聞かせてくれるかもしれない。

由比ヶ浜は頭に疑問符を浮かべつつも、自然と笑顔でこう返してくれる。  
「やつはろー!」

そこから5分が経過した頃、上は白いシャツ、下にはエメラルドグリーンのスカートを履いている一色がこちらに向かつて来る姿を確認できた。雪ノ下と由比ヶ浜はお喋りに夢中になっていよう気付いていない。二人に声を掛けようと思ったのだが、一色が人差し指を口に立てるポーズをしているので黙っていることにした。

一色はバレないように二人の背後に回り込み、そして二人に腕を組んでご挨拶をする。

「お久しぶりですね、結衣先輩!雪乃先輩!」

まず最初に反応したのは由比ヶ浜だった。腕を組んだまま、くるつと反転をして一色に勢いよく抱き着く。

「いろはちゃん、会いたかったよ……」

「……ゆ、結衣先輩、く、苦しいです」

感動の再会シーンの筈なのだが、一色が普通に苦しそうなのが笑える。抵抗しようにも両腕を使ってしまったので、されるがままである。助ける気はない。それだけ会いたがってくれていたのだから。

由比ヶ浜が抱き着くのに満足して離れると、次に雪ノ下が一色をゆつくりと抱き締める。その目尻には薄らと涙が溜まっていた。

「……また会えて嬉しいわ」

「……………雪乃、せ、せんばい」

雪ノ下の涙につられ、一色までもが涙目になってしまっている。それを優しく見守る由比ヶ浜も同じみたいだ。ここに居る全員が静かに涙を流していた。

由比ヶ浜は鞆から何かを取り出すと、抱き合っている一色の後ろに立ち、丁寧に彼女の首にそれを掛ける。

「こ、これって、ネックレス……?」

「そうだよ、もう逃げちゃ嫌だからね、いろはちゃん……」

シルバーで形成されているハートの中には、猫とピンクカラーのトパーズが彩られている。4月の誕生石であるダイヤモンドも用いられており、そのネックレスは正にこの三人のイメージにピッタリに思えた。

「私たちからの再会を祝したプレゼントよ」

「ちゃんと大事にしてね!」

二人の優しい笑顔に挟まれた愛すべき後輩は、嬉しそうに涙を拭いながらゆつくりと頷いていた。

「では早速ですが、箱根に向かいましょう」

「行くよー!」

何事も無かったかのように振る舞う後輩に対して、ノリ良く反応する由比ヶ浜。雪ノ下も口元に笑みを浮かべてそれを眺めている。しみつたれた雰囲気は終わりにして、旅行を楽しみますかね。

箱根までの移動手段は小田急ロマンスカーのスーパーはこね号を使用するらしい。使ったことがないので知らなかったのだが、四人席用の個室があるらしく、今回はそれを予約してくれているらしい。

予約までの時間もさして無かったため、俺たちは急いで乗り場へと急いだ。

サルーン席と呼ばれる四人席は、ブラウンのツィシートが車窓を挟んで向かい合わせで設置されている。席の間には少し細いがテーブルもあるため、1時間ちよつとの旅路ぐらいでは不便はしなさそうだ。

まず由比ヶ浜が窓側の席に座ったので、雪ノ下がその隣に座るのだと思っていたのだが、意外にも一色がその隣に座った。由比ヶ浜は一色の肩に手を置き、楽しそうにはしゃいでいる。その後、雪ノ下が窓側の由比ヶ浜の対面に座り、俺はその隣に腰掛けた。

「わたし、ロマンスカーのこのシートで箱根に行くの憧れてたんですよ〜」

「なんか女子旅って感じで凄くいいね!」

「ふふ、今回は女子旅を楽しみましようね」

テーブルには由比ヶ浜の手作りのクッキーが置かれ、女子たちはワイワイと楽しんでいる様子である。自然と俺という男の存在が無視されている気もするが、楽しそうであるによりだ。

この席のシート間には肘掛けが無いので、電車の揺れなどにより、時たま雪ノ下の腕と接触してしまうが、彼女は気にした様子はない。だから俺も顔に出さないように、彼女たちの会話を邪魔しないようにしよう。今はただ、この姦しい言葉のやり取りに耳を傾けていたい気分なのだ。

「そう言えば、雪乃先輩のそのワンピースすごく似合ってますね、上品な清楚って感じで」

「ねー、私もずっと思ってた! ヒッキーもこういうゆきのん好きでしょ?」

「……どう、比企谷君?」

聞き専に徹していたかったのだが、急に話し掛けられる。そもそも、そのワンピースは俺の趣味で選んだので好みに決まっている。どうして雪ノ下もまた感想を求めてくるんですかね?」

2人の前だと正直に言うのは恥ずかしいので適当にお茶濁しをして逃げよう。俺は腕を組み、目を閉じて発言する。

「……まあ、控えめに言っても世界一可愛いよな」

小町なら、うわあー適当だなーとか、気持ち悪いなーで終わる発言をしてターンを終了する。

なかなか突っ込みが来ないので、目を開くと、由比ヶ浜が口を開けて驚愕の表情を浮かべていた。え、真に受けられてません？

一色も同様に口を開けているが、そこにあるのは驚愕ではなく、うわあーというドン引きの表情であった。いや、口に出してね？突っ込んでくれないとボケにならないじゃん。

助けを求めるために左に座る雪ノ下の方を向くと、彼女もまた真に受けてしまっているようだった。

窓側に顔を背けてしまっているのだが、残念なことに、その窓に反射する顔までは隠せていなかった。

「あの一、そういうのは二人きりの時にしてくれませんか？」

求める突っ込みではなかったが、一色の発言によって気まずい雰囲気は少しずつ消えていった。

その後、無事に電車は箱根湯本駅に到着した。そして、旅館のある小涌谷駅に向かうために箱根登山線に乗り換えをする。

都会でストレス社会と戦っている俺たちには、自然に囲まれた道中は最高の癒しであった。

旅館のチェックインまでには時間があったので、ロープウェイに乗って大涌谷観光なんかも楽しんだ。名物の黒たまごは絶品であった。

んで、旅館に着いたのでチェックインをする。代表者の一色が受付に行って手続きを行ってくれる。成長したその背中には安心感すら覚える。今回の旅行については一色に感謝しかないね。

手続きが終わったのであろう、一色がこちらへと戻ってくる。気まずそうな顔を引っ提げているのは何故なのだろうか。

「……えーっと、部屋割りってどうします?」

「は?一人部屋と三人部屋じゃねーの?」

「いやー、こっつて三人部屋がないので、ツインを二部屋取っちゃって…女子旅気分です計画していたので……」

申し訳なさそうにしている彼女に文句を言うのも気が引けるので、黙ってどうするか



を考える。ここら辺にカプセルホテルや満喫はなさそうなので、別の部屋を取るのが無難だろうか。少し値が張るだろうが、致し方ないだろう。

「ここって大人気の旅館なので、他の部屋は空いてないですよね……」

「マジかよ……」

既に受付には確認済みだったらしく、一色は項垂れてしまった。そんな彼女をフォローするかのようによ比ヶ浜が明るく提案をしてくれる。

「私は別にヒツキーと一緒にいいよー。いろはちゃんはゆきのんと一緒に寝てね!」

「は?」

「はい?」

大したことないかのように凄い提案をしてくる由比ヶ浜に、俺と雪ノ下が驚愕する。

一色は由比ヶ浜の発言を聞き、嬉しそうによ比ヶ浜に抱き着いて喜びを表現している。

「結衣先輩、気持ち嬉しんですけど、私が先輩と一緒に部屋でいいですよ。元はと言えば私の責任ですし……」

「いろはちゃん、いいの?」

「はい!」

なんか二人で百合百合し始めているのは大変によろしいのだが、それ以外は大問題なんだよなあ。ねえ、雪ノ下さん?

隣の雪ノ下を見ると、顔を赤くしているので、怒っているようだった。当たり前ですね。

「わ、わ、私がひ、比企谷君と同じ部屋になってもいいわよ……」

「いや、そうじゃないだろ……」

ゆきのん、そういう問題じゃないでしょ？旅行気分ですぐ雪ノ下までアホになっちゃったのだろうか。っていうか本当にどうしようね。

「じゃあ雪乃先輩よろしくお願いしますねー」

「ゆきのん頑張ってるねー」

「はい？」

じゃあこれ鍵なので、と鍵を渡して仲良く腕を組んだまま二人は去ってしまった。いや、ダチョウ倶楽部のノリかよ。急に梯子を外すのやめてあげて。ってか一色、ここまですべて全部計算通りだったりするの？

「では比企谷君、私たちも行きましょうか」

「いやいや、お前はいいのかよ……」

「ふふ、比企谷君なら構わないに決まってるじゃない」

そう言って笑って腕を組んでくる。俺は諦め半分、嬉しさ半分で笑ってしまう。いや、真面目な話をすれば嬉しさ9割はあるのだろうか。

初めての彼女との腕組みの感触を味わいつつ、取り敢えず部屋に向かおう。荷物を置いたら早く温泉に入ってしまいたい。汗で汚れてしまった身体と汚れた煩惱を温泉で綺麗にしないといけないのだ。

今夜は俺にとってはきつと長い夜になるのだろう。隣で咲いている無防備な稚い笑顔がそんな未来を予見させる。

まあ、これからは慣れていく必要があるだろう。何時までも逃げるわけにはいかないし、現状逃げられなくなってきたているしね。

彼女との関係がまた少しずつ変わり始めたのはこの日からだった。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #15

和洋折衷、畳には卓袱台と座椅子が設置され、フローリングにはベッドが並んで置かれている。パツと見15畳程あるこの部屋は二人用にしては少し広いのではないだろうか。

雪ノ下は興味津々とばかりに部屋を見て回っている。目の前に緑が迫るテラスに一緒に出た際には、その瞳に映る景色の優美さに感動の音が自然と同時に漏れてしまっていた。一色が張り切って選んだだけあって、温泉宿の部屋としては非の打ち所がなかった。

「あら、部屋風呂も露天になっているのね」

テラスの端の方にはそれほど大きくはないが檜風呂が設けられており、目の前の木々や流れる水の音を静謐に楽しむことが可能だろう。温泉旅行初心者としては、この部屋は敷居が高いのではないだろうか。しかし、誰にも邪魔されずにゆっくりと檜風呂を味わうのも乙なものであろう。元ぼつちとしてはポイントが高い。

「ほう、入るのが楽しみだな……」

「そ、そうね……、えっと、タオルは巻いて入ってもいいかしら」

タオルを湯につけるのはマナー違反だと耳にするが、部屋風呂なら問題はないだろう。誰に迷惑をかけるわけでもないのだから。

いつもであれば、ここで軽く「良いんじゃないかね？」と返答するところなのだが、高まっている警戒心が俺を再度思考の海へと誘った。

今日の、いや今さつきからの雪ノ下さんは攻め攻めなのである。その攻ノ下が何やら恥ずかしがりながら発言をしているのだ。つまり、これは攻めのん状態の彼女でもかなり恥ずかしいことを言っていると推察ができる。……まさかとは思うのだが、先ほどの俺の発言と一緒に入る提案だと思われるのだろうか。

「さ、流石に二人で入るには狭いんじゃないかね、はは……」

さも広ければ入る、みたいな言い方になってしまった気もするが、勘違いであるならギリギリ気持ち悪いボケで済むだろう。久しぶりに罵倒を聞きたいまでである。

「別に問題はないと思うけれど、確かに少し狭い気もするわね……」

その綺麗な頬に手を当て、浴槽を見ながら思案する彼女は知的な淑女にしか見えない。しかしその実、今の彼女は温泉旅行にはしゃいでいる可愛らしい女の子なのだろう。俺としてはもう少し危機感を持って欲しいと思ってしまうのだが、楽しそうにしている彼女を見ていると何も言えなくなる。

仕方がないので、今はただ穏やかに、由比ヶ浜たちの温泉への出立の連絡を二人で待つことにした。

サウナこそなかったものの、小涌谷温泉と宮ノ下温泉の両方を楽しむことができる旅館の温泉はとても良いものであった。やはり露天風呂はいいね、男一人で1時間も入浴してしまった。

風呂上がりには備え付けの浴衣に着替え、コーヒー牛乳を購入する。この湯上がり直後のコーヒー牛乳の美味しさは異常である。フルーツ牛乳やいちごミルク派もいるらしいが、俺は断然コーヒー牛乳派である。

この後は夕食になるらしいのだが、雪ノ下たちはまだ時間が掛かりそうなので、俺は先に部屋に戻ってゆっくりしている。外泊特有の固さが絶妙な枕とふかふかのベッドがとても気持ち良い。

テラス側から聞こえてくる風の音、水の音を聞いていると、やがて俺の意識は深いところへと落ちていった。

……コンコンとドアがノックされる音で目が覚める。雪ノ下が戻ってきたのであろうか。彼女を待たせてはいけないという想いから、急いでロックを解除してドアを

手前側に開く。

「あら、寝ていたのかしら」

「少しだけ、な……」

雪ノ下の湿った髪、瑞々しい肌、そして浴衣姿に俺は言葉を失う。浴衣美人という枠組みなどでは到底収まらないその容貌に、俺はただ見つめることしかできなかつた。彼女もそんな俺を見つめていてくれる。

「ほらほら、晩御飯食べに行くよー」

「はあ……」

由比ヶ浜の言葉でビックリと我に返る。もし、由比ヶ浜が居なかつたらこのまま雪ノ下を見つめて余生を過ごしていたかもしれない。あと、一色はそのクソデカため息をやめなさい。

ふと、由比ヶ浜と一色を一瞥すると、少しだけ幼い印象を受ける。浴衣姿がとても似合っているの、大人の女性としての佇まいはあるのだが、顔が若く見える。それこそ、高校生の頃のような。これが湯上りマジックかな？と温泉の力を過信していると、一色が本当の理由の片鱗を教えてくれる。

「未だにノーメイクでそれとか頭おかしいんですよ、雪乃先輩は……」

「……頭は関係ないんじゃないかしら」

さも不服と言いたげな雪ノ下だったが、優しい気な声音からして一色の真意は分かっているのだろう。由比ヶ浜はそんな雪ノ下の頬を指で撫でるように触って感触を楽しんでいる。なにそれ俺もしたい。

戯れは終いにして、夕食の会場に移動し始める。伝えるタイミングは逃してしまったのだが、このまま言わないでおくのはバツが悪い気がする。

勇気をだして、前を歩いている二人には聞こえないように雪ノ下に静かに耳打ちする。

「その、浴衣似合ってたんな……」

「ふふ、とても嬉しいわ。……それと、比企谷君も似合っているわよ」

耳朶を打つのは甘い声、目に映るは屈託のない笑顔。湯上がりの香りも相まって、彼女に惹き込まれそうになるのは不可抗力であった。

夕食の会場は旅館内に専用スペースが用意されており、全席掘り炬燵形式でゆったりと食事が楽しめるそうだった。当たり前のように雪ノ下の隣に座ると、旅館のスタツフが飲み物のオーダーを取りに来てくれる。

「お飲み物は如何いたしましょうか？」

「とりあえず人数分の生でお願います！」



流れるように生ビールを注文する一色。湯上りに生ビールを飲みたい気持ちは分かるけれど、女子力はどこへ行ったんだよ。雪ノ下も由比ヶ浜も特に気にした様子はないので、きつと三人の間では既定路線だったのだろう。俺の要望としても、雪ノ下が代弁してくれたことは想像に難くない。

「ちなみに今日のメニニューって何なんだ？」

「メインはお鍋で、後は海鮮のお造りとかですかね。ちなみにお鍋は豆乳鍋ですよ」

「豆乳はお肌に良いから、温泉旅行にはぴったりだねー！」

そうね、イソフラボンがね、すごい効果だよね。俺は対角線上で揺れる景色を見てその効き目を再確認する。正面からは蔑みの目が、隣からは冷気が向けられ、居た堪れなくなる頃には救いの生ビールが到着してくれた。

全員がグラスを手に取り、今回の企画者である一色が乾杯の音頭を取り始める。

「ではでは、改めてになります、私たちの再会を祝してー」

「「乾杯」」

鯛をはじめとした刺身の数々、黒豚を使用した豆乳しゃぶしゃぶ鍋は非常に美味だった。特に鍋は豆乳自体にしつかりと味付けがされており、コンソメやバター、塩胡椒が効いた汁でのしゃぶしゃぶは男の俺でも満足感が大きかった。

食べ物美味しければ、お酒も進むのは必然である。このメンバーでは初のお酒を飲む機会という喜びと、帰る必要が無いという安心感から、由比ヶ浜や一色が勧めてくるままに飲酒をする。

最近はやセーブして飲んでいたので、久しぶりにかなり酔った状態になってしまった。「ではでは、そろそろ部屋に戻って寝ましようか」

「だね、明日の朝御飯は8時から予定だから、ゆつくり眠れそう……」  
飲み放題の時間も終わったので、本日は解散になるようだ。由比ヶ浜も随分と眠そうに見える。俺は先ほど少し眠ったので、まだ眠気は来っていないが、アルコールを摂取して満腹になれば眠くなるのは当たり前だろう。

部屋に戻る際、前方で歩いている由比ヶ浜が雪ノ下に何か耳打ちをすると、雪ノ下の肩が僅かに震えていた。気になるのでポーツと様子を見ていたのだが、後ろからの一色の声に遮られてしまう。

「雪乃先輩も酔ってるみたいなので、転ばないようにベッドまでは支えてあげてくださいね」

「おー、善処するわ」

素直ですね、と笑って由比ヶ浜の方にそくさと歩いていってしまう。よく分からなけれど、彼女なりに心配してくれているのだろう。優しい後輩を持って嬉しいものだ

ある。

先に由比ヶ浜たちの部屋に到着したので、そこでおやすみの挨拶をして二人とは別れた。

こちらの部屋に到着したので、鍵を開けて扉を開く。雪ノ下が入りやすいように、扉を手で押さえて入室を促した。擦れ違う際に彼女の頬や耳が赤くなっていることに気付く。やはり結構酔っているのだろうか。

「雪ノ下、結構赤くなってるけど大丈夫か？…寝る前に水とか飲んだ方がいいんじゃないね」  
「……席を立つ前に飲んだから平気よ。その、気遣ってくれてありがとう」

彼女の表情には確かにまだ余裕がありそうだった。それならもう寝るだけだろうと思ひ、雪ノ下に近づく。少しアルコールの匂いはするけれど、清涼感のあるサボンや独特な甘い香りの方が強く、鼓動が早くなる。

「……もう寝るだろ、ベッドまで連れてくわ」  
「えっ?!」

彼女の肩を抱き、転ばないようにゆっくりと歩き出す。手に伝わる温度がいつもより高いのはアルコールのせいなのだろう。歩き方がぎこちなくなっているところを見るに、転ぶ危険性は確かにありそうだ。一色のアドバイスには感謝しないといけないな。

ベッドは入口から近い方を選び、そこに雪ノ下を丁寧に座らせる。肩から離れた手が

まだ熱いのは俺のせいであろう。今の状態でベッドに座る彼女を見てしまうと、俺の残されている理性が崩れる可能性があるので、振り返らずに自分のベッドへと向かった。後ろからか細い声が聞こえてくるが、今だけは気付かない振りをさせて欲しかった。

「それじゃあ、おやすみ」

「……ええ、比企谷君もおやすみなさい」

部屋に設置されているリモコンを使用して明かりを落とし、おやすみの挨拶をする。当初は雪ノ下と二人きりの部屋で眠れるとは思っていなかったが、アルコールの力で案外眠れるかもしれない。……そう思っていたのも始めの数分程度であった。

僅か1mちよつとの距離から聞こえる衣擦れの音、彼女の呼吸音、これを聞いては正気を保つのが精々であり、眠れるような精神状態には到底なれなかった。横を向けば彼女が寝ている、触れようと思えば触れることができる。お酒を飲んだのは間違いだっただろうことに、この時になって俺は漸く気付くことが出来た。

どうせ眠れないのだ、せめて彼女の綺麗な横顔でも覗き見くらいはさせて頂こう。そう考えて彼女の方を向く。そこで見たものは期待していた横顔、ではなく、彼女のこちらを見つめて微笑む表情であった。

「ふふふ、やっとこつちを見てくれたわね……」

「……お前はいつからこつちを見てたんだよ」

最初からよ、と悪戯が成功した少女のような笑みを浮かべる。理性を言い訳にして、彼女を蔑ろにして見ないようにしていた自分が恥ずかしくなる。彼女はずっと俺のことを気にしてくれていたというのに。

「……正直、眠れる気がしない」

「それはあなたが夕食前に寝ていたからでしょ……、私もまだ眠くはないけれどね」

彼女の声音とその表情は、さも眠れないことを喜ぶようであった。彼女は布団から右手だけを出し、口元を隠すように笑っている。そんな幼さを残した彼女の様子を見ても、俺の中にある欲望は燻り続けてしまっている。

今が丁度いい距離感なのだと思う。俺が限界まで手を伸ばしたとしても、彼女には触れることができない。けれど、彼女も手を伸ばしてくれたなら、その手を掴むことができる。自分だけではなく、彼女にも同じ気持ちがあるのなら。

「まだ寝ないのなら、一緒にテラスに出ない？少し夜風に当たりたいのだけど……」

「……眠れそうにないし、俺は構わないぞ」

この火照ってしまったっている身体を冷ませるには良い機会だろうと思ひ、彼女に同意した。

テラスに出ると、少し肌寒さを感じる。5月とはいえ、こんな山奥の夜では16℃を下回っていきそうだった。隣に立つ彼女も同じなのだろうけれど、触れようすることが少

しだけ怖かった。

何も話さずにただ月を見ていた。風が吹き、木々の葉が揺れ、彼女の目が細められる。月明りに照らされる雪ノ下の繊麗な横顔には儚さすら感じさせる。彼女は今、何を考えているのだろうか。

その口が開かれるまで、俺はずっとその横顔を見ていた。

「……今日はここに來れてよかった。由比ヶ浜さんや一色さんと一緒に温泉にも入ることが出來た。そして何よりも、あなたとこうして過ごせるのだから」

俺の目を見ながら幸せそうに話すその言葉をゆつくりと咀嚼する。正しく、間違わないように、その意味を飲み込んでいく。自身のこととはまだ信じられないけれど、彼女は、彼女だけは信じることができる。

時間はかかったけれど、彼女の与えてくれた言葉に俺の想いを返そう。

「……俺もここに來れてよかった。雪ノ下とここに來れて、こんな風に過ごせて本当に」  
「またこんな風に何処かへ連れてきてくれる?」

「……雪ノ下が望んでくれるなら」

彼女が望んでくれるのなら、喜んで何処にでも連れ出そう。俺が動くための必要十分条件はそれだけなのだから。

「ふふ、では次はここよりも大きなお風呂付の部屋にしましょうね」

「ここよりも豪華な部屋つてなると、探すのが大変そうだな」  
「別に大変でもいいじゃない、……二人で一緒に探していければ」

その時の彼女からは儚さではなく、ただただ温かさを感じるだけだった。

思えば、雪ノ下は常に二人で過ごすことを意識してくれていた気がする。逃げ出さず、投げ出さず、誠実に。そんな彼女の想いが俺の情けない心に火を入れてくれる。身体を温めてくれる。

きちんと返していこう。言葉も想いも、この温度も。

心なしか眠たげになった彼女の肩を抱き、テラスを後にする。少しだけ冷えてしまった身体を温められるように、先ほどよりもずっと近くに抱いて。

きつと今ならば眠ることができるだろう。

同じ部屋で、同じ想いで。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #16

あの温泉旅行から時は流れ、今は雪ノ下のマンションに來ている。いや、大した時間は経っていないです。旅行帰りの日から寝て起きて寝て起きただけである。

ゴールデンウィークも残り2日となり、もう後はいつもの週末と一緒にゃんという気分さえなってしまう。休みが終わるのが怖い。いや、会社に行かなくちゃいけないのが怖いのだ。

まあ、そんな労働への恐怖感置いておくとして、本日は雪ノ下を迎えに來た訳ではない。単純に今日も明日も暇だろうし、家で一緒に過ごさないかと彼女からのお誘いがあつたのである。时期的にどこも混雑しているだろうから、家で過ごすというのは悪くない。無論、緊張はするのだが。

エレベーターで6階まで登り、雪ノ下の家のインターホンを鳴らす。大した間もなく、パパパタとスリッパを鳴らす音が微かに聞こえてきた。

「……………どなたかしら？」



ドアを開けたかと思つたら、顔を半分だけひよつこりと覗かせて、微笑しながら問い掛けてくる。このノリも懐かしい。

「おい、御自慢の記憶力はどうした。比企谷だよ、比企谷八幡」

「あら、比企谷君だったのね。比企谷君には鍵は空けとくから勝手に入つてと言つたのに……」

少しだけ拗ねるような声になる。確かにエントランスを開けてもらう際に彼女からそう伝えられたが、人の家の扉を勝手に開けるのは気が引けてしまったのだ。

「いや、流石に人の家に勝手に入れねーよ。見た目も相まつて不法侵入で捕まるぞ」  
「……許可しているのだから通報はしないであげるわよ」

そう口にして、覗かせていた顔を引つ込めて扉を閉めてしまった。よく分からないけれど、俺に開けさせたいのだろうか。

恐る恐るドアノブに手をかけ、小声でお邪魔しますと呟きながら扉を開いた。

「いらつしやい、比企谷君」

「おう、お邪魔し……」

腕組みをして頬に手を添えながらご挨拶をしてくれる雪ノ下さん。この時点で結構な可愛らしさなのだが、今日は格好がヤバイ。部屋着なんだろうが、緩めの紺色Tシャツに同色のショートパンツである。脚が長い、細い、白いで魅力的過ぎる。これは外か

から見られないように扉を開けなかったのは英断であろう。

魅力的な御御足を黙って凝視していると、彼女は隠すように手を太腿に置き、文句を口にする。

「……その、そこまで見られると恥ずかしいのだけれど」

「……す、すまん」

言い訳のしようがないので素直に謝罪する。雪ノ下は怒ったわけではないようで、取り敢えず靴を脱いで入るように指示される。

靴を脱いでいると、青いスリッパが用意されていることに気付いた。雪ノ下は薄ピンクのスリッパを履いているので、これは客用なのだろうか。

「それは比企谷君用だから、好きに履いて使っていいわよ」

まさかの俺専用だった。これも女性の一人暮らし防犯対策の一環なんですかね。

質問をしていないのに回答が来ることにはもう完全に慣れきってしまった。

「そーいや、今日は何すんの？」

「……そーうね、特にこれといつてやりたいことは無いわね」

テレビ前のソファアーに並んで座り、本日の予定を確認するが特に無いらしい。まあ確かに、一緒に過ごそーうって言われただけだしね。

「……それなら何か観るか、折角デカイテレビもあるしな」

「良いわね、比企谷君のお勧めを一緒に観ましょうか」

そう言つて彼女はリモコンを操作し、アマプラビデオを表示させる。履歴に猫関係が多いのだろうことは視聴履歴に基づくおすすめに表示されているタイトルから予想出来る。

それにしても、雪ノ下も楽しめそうな俺の好きな作品つて何だろうか。アイカツだろうか、アイカツを楽しめない人は恐らく居ないだろう。女の子向けであるのに、おじさんまで楽しんでるのだ。老若男女誰でも楽しめるのは自明の理であろう。

しかし、アイカツは長過ぎるのが欠点だ。ここまでは見て欲しいという場面まで約40話もあるのだ。そこまで見せるとなると、泊まり込みのオールになつてしまう。仕方がないので、別作品にしよう。

無難かどうかは分からないが、氷菓をチョイスした。推理要素もあるし、えるたそは可愛いし、何よりも京アニクオリティのアニメーションは素晴らしいからね。ちなみに氷菓はアマプラにはなく、dアニメチャンネルが必要だったので俺のアカウントに変更しました。

雪ノ下の反応も上々といったところだろうか。何度か体勢を変えながらも真剣に見てくれている気がする。

「ふふ、何だかんだ言っても手伝ってくれるところは比企谷君に似ているわね」

「…………いや、基本的に俺には拒否権がなかったからね？」

俺の耳元近くで囁くように声が発せられる。彼女の髪からはサボンの甘い香りが発せられ、密着している右半身には彼女の体温を否が応でも感じてしまう。そう、雪ノ下は今、俺の右肩に頭を乗せ、右腕を抱くように密着しているのである。

最初は普通に座っていたのだが、途中で体育座りになったり、女の子座りに変えたり、急に手を重ねたりしている内に段々と密着度が上がっていました。俺は彼女が体育座りになった時点で、その白い綺麗な太腿が近くにあることにドキドキしていた。今はその滑らかで触り心地の良い脚が右手の甲に触れているので気が気じゃない。わたし、気になります。

「…………その、ショートパンツなんて珍しいな」

天上にも昇るような気分ではあるのだが、無断で触れてしまっているのは間違いないので、遠回しに意識させるために服装の指摘をする。

雪ノ下は一旦、自分の脚を見てからこちらを見上げるように顔を上げる。その角度あざとくない？大丈夫？僕は大丈夫じゃないです。

「…………えっと、似合っていないかしら？」

何を言うのかと思ったら、不安そうな表情で問い掛けてくる。え、この娘は鏡とか見

ないタイプなのだろうか。普通に世界一似合っているまであるのだが？

「……は？滅茶苦茶似合ってるに決まってるだろうが」

「ふふふ、それなら良かった……」

安堵したのか、朗らかな笑顔を浮かべている。ついでに俺の腕を抱く力が強くなっており、密着度が上がってしまった。二の腕辺りに色々柔らかい感触があるのだが、全力で気にしない方向でいこう。

「……でもあれだな、外だと日焼けとかするからやめた方がいいかもな」

他の男に見られたくないという独占欲でしかないのだが、俺の立場ではこんな言い方しかできない。

「……………ええ、ありがとう、比企谷君」

あんな言葉でもきつと真意は伝わっているのだろう。

こんな距離感ではお互いの鼓動の音さえも隠せないのだから。

「そろそろ晩御飯の準備をするわね」

11話というキリが良いところまで見終わったタイミングで、彼女はホールドしていた俺の腕をすると解いてソファアールから立ち上がる。先ほどまでの雪ノ下の温度が消えてしまい侘しさを感じる。

「……何か手伝えることはあるか？」

俺もずつと座りっぱなしだったので、身体を伸ばすついでに立ち上がって彼女の方へと近付く。雪ノ下はどうやらオーブンを弄っているようで、後ろを向いてしまっている。うむ、太腿裏がとても綺麗ですね。

「料理は基本温めるだけだから、特に手伝って欲しいことは無いわね」

事前に準備をしてくれていたらしい。それは嬉しいのだが、何もしないのは少し申し訳がない。ぐるりと周りを見渡したが、綺麗な部屋なので掃除する箇所も無さそうだった。

「……ふふ、何かしたいのなら、お風呂掃除を頼めるかしら」

俺の様子を見て察してくれたらしく、微笑みながら仕事を斡旋してくれる。合点承知の助の意を伝え、風呂場へと向かった。

風呂場に入り最初に目に付いたのは我が家の倍近い長さの浴槽だった。これならば余裕で足を伸ばして入ることが出来るだろう。普通に羨ましくなってしまう。

鏡の前には石鹸をはじめ、シャンプーなどのボトルが何種類も設置されている。ここでも何時も雪ノ下が身体を洗っているんだなと思ってしまうそうになったが、その近くにあった掃除用であろうスポンジを手に取って風呂場と煩惱の掃除を始めた。

煩惱はともかく、風呂場は最初から綺麗だったので、あまり変化はなかった。一通り

スポンジで擦り、シャワーで流して掃除を終了にする。

風呂場から出ると、とても美味しそうな匂いが鼻腔をくすぐった。手を洗い、リビングの方へ戻るとテーブルには見た目が色鮮やかなシーザーサラダが置かれていた。

「お風呂掃除ありがとう。オーブンの方もすぐに出来上がるから座って待っていてもらえるかしら」

「あいよ、凄く良い匂いだから楽しみだわ」

言われた通りに席に座る。雪ノ下の料理の前ではひねくれ者も素直になってしまったのだ。あれ、完全に胃袋掴まれてませんか？

「お、おお……！」

「ふふ、器が熱いから気を付けてね」

目の前に置かれた料理はドリアだった。というか見た目は完全にミラノ風ドリアだった。最近サイゼリヤには行けていなかったもので、正直めちやくちや食べたかったのである。

2人で頂きますをして、早速ドリアに手を付ける。スプーンで掬うと、ミートソースの赤とホワイトソースの白とターメリックライスの黄色が折り重なっていて非常に美しい。火傷しないように十分に冷ましてから口に含むと、濃厚な肉の旨味が詰まったミートソースが他と混ざり合っていく。おいおい、これマジで美味しいぞ。

「おい、本家を軽く超えてんぞ……マジで美味いわ」

「それなら良かったわ、ハードルが高いから張り切った甲斐があったわね」

雪ノ下はサイズをライバルと認めて頑張ってくれたらしく、勝利を確認して安堵していた。雪ノ下を本気にさせるとは、やはりサイズは素晴らしいかと再認識せざるを得ないだろう。しかし、ドリアについてはもう、この彼女お手製を食べないと満足できない気がしていた。

二人で皿洗いを終わらせて、再びテレビ前のソファに並んで座る。終電までは3時間ほどあるので、あと8話くらいは見れるだろうか。

視聴を再開させると、雪ノ下の体勢もまた再開になる。彼女の匂い、体温、感触を再び感じる。最初はガチガチに緊張してしまっていたのだが、先ほどは2時間ほどこの状態だったので、ある程度は耐性が付いていた。感触以外は落ち着くまでである。ただし、感触には慣れていないので、鼓動が落ち着くまでは時間がかかる。

幸せそうな雪ノ下のその表情が、落ち着くまでの時間を更に伸ばしてくれるのであった。

19話まで見終わり、そろそろお暇しようかなと思っていると、雪ノ下は立ち上がっ



て洗面所の方へ向かってしまった。彼女が戻ってきたら帰る旨と今日のお礼を伝えよう。色々と幸せな一日だったと思う。

微かに水の流れる音が聞こえてくる。きつとお風呂の湯張りを行っているのであろう。俺にくっ付いていたから早く身体を洗いたいのかな？なにそれ泣ける。

涙が流れないように上を向いていると、パタパタとスリッパを鳴らす音が聞こえてきた。

「比企谷君、お風呂は私から入ってもいいかしら？」

「……は？いや、俺もう帰るけど」

至極当たり前のことを言っただつてもりなのだが、彼女は可愛らしく首を傾げている。

「えっと、明日も予定は無いと聞いていたから泊まってくれるのかと……」

「いや、服も無いから泊まるのはちよつとな……」

服とかそういう問題ではないのだが、断る口実としては真つ当であろう。明日も一緒に過ごしてくれるなら、また明日来ればいいしね。

雪ノ下は納得してくれただろうか。傾げた首を戻して頷いているので、大丈夫そうに見える。

「比企谷君用の服ならちゃんと用意してあるから大丈夫よ」

「……………はい？」

「ちゃんと下着も用意しているし、今着ている服は洗濯して乾かすわよ。……他には何かあるかしら？」

「……あー、えっと、男女が一つ屋根の下で眠」

「旅館で一緒に寝たばかりじゃない」

したり顔でこちらを見つめる雪ノ下さん。確かにそれを言われると言い返せなくなってしまう。つていうか、雪ノ下さん準備万端過ぎませんか？

「……分かったから、先入ってきていいぞ」

俺の言葉を聞いて、彼女は満足そうに微笑んで風呂場へと歩いていった。スリッパがパタパタと鳴る音が楽しそうに聞こえるのは気の所為じゃないだろう。

俺は風呂から上がった。雪ノ下が入った後の風呂から上がった。特に何もせず、変な妄想もしていない自分のことを褒めてあげたい。これが理性の化け物の実力なのだ。

目の前の雪ノ下が用意してくれたパジャマは、黒色の綿素材の上下セットのパジャマのようだ。いや、これ雪ノ下がさつき着てたやつの色違いじゃん。雪ノ下のパジャマ姿に当たり前のように見惚れてしまったので、脳裏にはそのパジャマがしっかりと焼き付いていた。

少し気恥ずかしいが、他に選択肢がある訳ではないためパパつと着てしまうことにす

る。その後、髪をドライヤーで乾かして風呂場を後にした。

「もう遅いし、続きは明日にして寝ましうか」

白いパジャマを着て微笑む彼女に連れられ、彼女の寝室へと向かう。今日は精神的な疲労が大きかったので、正直早く眠れるのは有難かった。

寝室にはアンティーク調の本棚と大きめのベッドが置いてあり、壁には収納スペースが取り付けられている。恐らくクローゼットなのだろう。パンさんグッズが見当たらないところを見ると、そのクローゼットに隠している気がしますね。

「俺はどこで寝ればいいんだ？」

俺の寝床用の布団が見当たらないのである。まさかあれか、床で寝ろってことですかね。これが飴と鞭の使い分けなのだろう。最近の雪ノ下は優し過ぎると思っていたのだが、ここで主従関係を再確認させる魂胆か。俺は絶対に屈しないぞ。

「……普通にベッドを使っていよいよ」

意外にも主様は固いフローリングではなく、柔らかそうなベッドの使用を許可して下さった。わーい。

正常な判断能力が俺に残っていれば、気付けていただろう。しかし、眠気が割と限界だった俺はその甘美な言葉に踊らされてしまい、とても良い香りのするベッドへと倒れ込んだ。

ゆっくりと息を吐く音の後、部屋の明かりが落とされる。寝るには煩わしい光が消え、落ち着く匂いに満たされた俺は意識を手放す直前であった。その意識が切れる前に肩を揺すられ、優しい声音が耳朶を打つ。

「その、もう少し奥の方に行ってもらえるかしら」

「……………ん」

言葉にもならない返事をして、声とは反対の方向に寝返りを打った。その後少し揺れる感覚があった気もするが、俺の意識と記憶はここで途切れてしまった。

× × ×

カーテンの隙間から差し込む太陽の光が俺の瞼を開かせようと熱を与えてくる。体内時計的にはいつもの起床時間よりも少しだけ早いだろうか。太陽さんの努力を恨めしく思いながら、ゆっくりと視界を取り戻していった。

「……………え？」

眼前、僅か拳二つ分の距離に雪ノ下の綺麗な寝顔が転がっていた。いや、寝転がっていた。綺麗に伸びている長い睫毛を有する瞼は固く閉ざされており、ただ静かに規則的に呼吸をしていた。

なんて安らかな寝顔であろうか。俺なんて衝撃のあまり大声を出しそうにもなったし、今も高鳴り続けている心臓の音だけで起こす自信すらあるというのに。

けれど、彼女が俺の傍で安心してくれているという事実が嬉しく思える。彼女の、雪ノ下の傍に居ても良いんだと思わせてくれるからだろうか。いや、きっとそんなに小難しい理由じゃないだろう。

俺はただ、俺の隣で幸せそうに眠る彼女の顔を、その目が開かれるまでずっと見つめていた。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #17

ゴールデンウィークが終わった。この言葉だけで某福本漫画並みにぐにやりそうになってしまふのだが、終わってしまった休みよりも目先の休みにとらわれることで精神を安定させる。

本日は木曜日のため、二日働けば二日の休暇となるのだ。等価交換最高じゃんと思っ  
てしまふのだが、よくよく考えたら、これが本来あるべきレートなのではないだろうか。  
日本は早く週休三日制を導入して欲しい。一日くらいは大目に見てあげるから。

今朝は寝転がっていない彼女の顔が見たくなってしまう、待ち受けをふと眺める。明日には会う約束をしているのに、その時が待ち遠しくなる。ただ休日を待っていた去年よりも、今のこの想いの方がずっと強い気がする。

「で、で、ゴールデンウィークに彼とは進展あった？あったんでしょ!」

「温泉旅行、若い男女が二人で夜に身を寄せ合う……何も起きない筈はなく……」

私は久しぶりに会社の同期の友人たちに詰め寄られていた。そもそも、私は彼女たち

に四人で旅行へ行くと伝えていたのに、どうしてそんな期待をしているのだろうか。

進展……はなかったとは言わない。けれど、期待よりは些か小さかっただろうか。由比ヶ浜さんと一色さんに唆されて、期待値を上げ過ぎていた私が悪いのかもしれないけれど。

「……………まあ、同衾まではいったわね」

こんなことを殊更言う必要はないけれど、彼女たちの期待に負けたくはなかった。今現在、私が出せる最高値を提示する。

「おー、雪ノ下さんおめでとー!!」

「本当にやることやってたんだ……………おめでとー」

手の先での軽い拍手を交えながら祝福される。加藤さんは笑顔で、橋本さんは驚愕の表情だった。恥ずかしいので、お礼を言って二人を制止する。

一応、彼女たちは私のことを心配してくれていたようで、これならもう大丈夫そうだと安心してくれていた。……………えっと、本当に大丈夫なのかしら。

確かに、比企谷君には大切にされている自負があるし、異性として意識してくれているとは思う。それに、基本的に近付いたら近付いた分だけ距離を取る彼に対して、あそこまでの接近をしても逃げられないのだから、大丈夫かもしれない。そうね、きっと大丈夫。

「雪ノ下さん嬉しそうだね。それじゃあ今後の目標とか、未来予想図というか……そういうのあったりする？」

「うーん、次つてなると同棲とか？どうなりたいかとか聞きたい」

そう彼女たちに質問されて、私は思案してしまう。私は比企谷君とどうなりたいのかを。

漠然としたイメージの中から、これが良いと思える青写真を拾い上げる。叶ったとしても、きつと遠い未来なのだろう。けれど、決して無理だなんて思わない、思いたくなかった。

「……私は、彼と温かい家庭を築いていきたい」

私の言葉を聞いて、前のめりになっていた加藤さんがゆっくりと席に座り直し、長めに息を吐いた。橋本さんは……形容しがたい難しい表情になっている。何やら前世でどれだけ徳を積んだんだ、などと呟いている。

「雪ノ下さんなら絶対大丈夫、彼だつてきつと同じことを思っているよ」

「……ありがとう、本当にそうだったら嬉しいのだけれど」

彼の、比企谷君の願いを、想いを聞きたくなる。けれど、それこそ何年もかけないと難しいのではないだろうか。そんな私の弱音が口をついて出てしまった。

「罰ゲームか何かでお願いを叶えるって体にすれば少しは聞けるんじゃない？」



「……罰ゲーム」

「なるほど、試合に負けて勝負に勝つて感じだねー」

大局的に見れば私の勝ち、……それならば試してみてもいいかもしれない。

彼が私に何を願っているのか、今の私はそれが最も気になっているのだから。

「で、先輩は次にどうしたいとかあるんですか？」

時刻は昼、会社の食堂で俺は一色いろはに今後の展望を聞かれていた。彼女には雪ノ下と同じベッドで寝たという情報は伏せて、一昨日の出来事について軽く話をしていた。その反応がこれである。

「……次って一体何の話だよ」

「次の段階ですよ、ちゃんとステップアップしていく努力をしないとダメなんですからね」

溜息も吐かずに、優しく諭すような口調でその言葉が渡される。え、今日のいろはは優しくくない？ 適当に煙に巻かずに対応しよ。

にしても、次の段階か……。正直、昨日の添い寝イベントがまだ消化し切れていないから現状すらくよく分らないんですけどね。

「雪ノ下先輩が許してくれるならしたいこと、ないんですか？」

彼女に許されるならしたいこと…、意外にもそれはすんなりと頭に浮かび上がってきた。しかし、これを後輩女子に伝えるのは恥ずかしい。だが、今日の一色には誠実に対応したいという気持ちが俺の口を割ってしまった。

「許されるなら……その、ハグが、したい」

俺の気持ち悪い言葉を聞いた一色は、笑うでもなく、馬鹿にするでもなく、ただこちらをぼんやりと見ていた。少し間を置いて、彼女は口を開いた。

「良いんじゃないですか、先輩はそれで」

「え、全然分らないんだけど……」

「先輩は先輩のペースでステップアップしていけばいいんですよ。…そのうち雪ノ下先輩と同じになれますよ、きつと」

彼女の言葉はどこか抽象的で、結局は具体的な意味は教えてくれなかったけれど、不思議と不安は残らなかった。

× × ×

本日のお店はなんと回転寿司である。雪ノ下さんは行ったことがないらしく、知的好奇心で所望してきたのであった。

回転寿司なら何処へ連れて行くべきだろうかと少し悩んだが、安定のスシローを選択することにした。回転寿司でもそこそこの値段のする美味しい店もあるが、初めて行く

のであれば100円寿司の方が面白いと思つたからである。半分ファミレスみたいな感じだしね。

無人の客席案内を経て、テーブル席に辿り着く。まずは雪ノ下に回転寿司のルールを簡単に説明することにした。回っている寿司を取っても良いし、タブレット端末を使用して注文をしても良い。会計は寿司が乗っている皿で計上するからレーンに皿を戻してはいけない等の基本的なことである。

「本当にお寿司が回っているのね……」

雪ノ下はレーンの上で回っている寿司を見て感嘆の声を上げている。雪ノ下家で寿司を食べに行つたとしても回転寿司なんて行かないだろうし、本当に珍しいのかもしれない。庶民派としては寧ろ回転寿司にしか行かないまであるのだが。

「回っている寿司を取る前に乾いていないかチェックした方がいいぞ。お店側は基本的には何周かしたら回収するらしいけど、念の為な」

「……なるほど、目利きが必要になるわけね」

そう言うと、彼女は少し目を細めてレーン上の寿司を見る目を鋭くする。通過する寿司皿に合わせて顔の向きを追従させる彼女の姿が微笑ましい。

「……………そういえば、勝負をしましょう、比企谷君」

「え、急にどうした」

過ぎ去っていくオニオンサーモンを眺めていたと思つたら、俺の方を向いた途端に勝負を吹っ掛けてきた。

「勝負の内容はあなたが決めていいわ。ただし負けた方は勝者の言うことを一つ叶えること。それでいいかしら？」

雪ノ下にしては色々とおかしい気がする。幾らなんでも突発的だし、何よりも勝負内容が俺に有利過ぎるだろう。それにいつもの負かしてあげると言わんばかりの挑戦的な表情ではなかった。もしかして体調でも悪いのだろうか。

「……その、何か調子悪かったりしないか？俺にできることなら何でも言ってくれ」  
「……だ、大丈夫だから、気にしないで勝負内容を決めてもらえないかしら」

何か訳ありなのだろうか、彼女は顔を隠すように横を向いてしまい、その本心を探ることはできそうにない。それならば勝利報酬として聞かせてもらおうことにしよう。

「……じゃあ食べた枚数で勝負つてことで、ちなみに無理は厳禁だからな。美味しく食べられる分だけで何枚食べられるかを競うぞ」

内容は場所を考えたらこれが無難だろう。このルールであればまず負けることはないし、俺はゆつくり普通に回転寿司を楽しむこととしよう。

「枚数……ということとは、一貫のお皿でも良いのよね？」

「ふつ、サラダでもデザートでも何でも良いぞ」

何だかんだやる気に満ち溢れ始める雪ノ下さん。楽しそうに横に貼られているメニューを見つめる横顔は、いつもの負けず嫌いな愛らしい彼女にしか見えなかった。

現在、雪ノ下は一皿一貫のメニューのみを頼んでおり、七皿を完食した状態だった。一方俺は一皿二貫以上のメニューのみで十二皿食べている。雪ノ下は少しだけ勘違いをしていたのだ。一貫メニューはネタが大きいので、二貫メニューの半分の量になるわけではない。だから十五皿は食べられる俺に勝てるはずもないのである。

敗北を悟って少し悔しそうにしている彼女に声を掛ける。

「俺が勝てる内容の勝負なんだから仕方ないだろ。ここはデザートがそこそこ美味しいから何か頼もうぜ」

「……………じゃあアイスブリュレ」

雪ノ下の言葉を聞き、タブレット端末でさきつと注文をする。店員を呼ばずに注文できるのがとても気軽で助かる。にしても、思っていた以上に敗北した雪ノ下さんのテンションが低い。悪いことをした気分にならなくなる。

2分ほどで注文したアイスブリュレが専用レーンにて到着する。未だに立ち直っていない彼女を見て、俺は自分の前にアイスブリュレを置くことにした。そしてスプーンで掬い、彼女の口の前に差し出す。

「……ほら、いい加減機嫌直せって」

彼女は一瞬呆けたように見えたが、すぐさまその小さな口を開いてスプーンを咥える。冷たく濃厚なバニラと卵の甘味をゆつくりと味わっているのだろう。心なしか機嫌も元に戻っているような気がした。

「結構美味しいわね、……けれどまだ足りないわ」

雪ノ下はそう口にして、また機嫌が悪いように装い始める。口をムツとはさせているけれど、目は笑っていた。そんな彼女にもう一度スプーンで一口分を掬い、口元へと運んでいく。彼女はふふと笑って美味しそうに咀嚼するのだが、またすぐに不機嫌そうに口元を歪ませる。

そんなやり取りがアイスブリュレが無くなるまで続いていた。

雪ノ下のマンションまでの帰り道、すっかり機嫌が良くなってきている彼女に気になっていたことを問い掛けてみた。

「んで、今日の勝負は何が目的だったんだ？」

彼女の動揺が彼女の手を經由して俺の身体へと伝わる。やはり何か事情があったのだろうか。

雪ノ下は少し下を向いて何かを考えていたようだったが、その口からはそれらしい理

由を聞くことは出来なかつた。

言いたくないことを無理に聞く必要もないし、勝利報酬を使って聞くのも野暮だろう。それに、雪ノ下が悪意や変な下心を俺に向けることは無い筈だ。きつと何か可愛らしい理由でもあつたのだろう。それくらいは彼女を理解しているつもりだ。

「……まあ、それよりも勝者の願いを聞いてくれるんだっけ？」

「……ええ、比企谷君のしたいことやお願いがあれば叶えてあげるつもりよ」

至つて真面目そうに、真剣に俺の目を見てそう話す雪ノ下。お願い……したいこと……昨日の一色との会話を思い出してしまふ。こういつた弱みに付け込んで彼女に触れてしまふのは不誠実じゃないだろうか。しかし、許されるならしたいという気持ちが消えてはくれない。

「……その、何をしても許してくれるか？」

意を決し、雪ノ下の手を離して彼女の前に立つ。彼女はそんな俺を見て、深く息を吐いて返す言葉を準備している。やがて余裕のある挑戦的な表情になつて、こちらの目をしっかりと見つめ返してくる。

「……………構わないわよ」

その言葉を聞き、彼女の前に一步近づく。雪ノ下は先ほどまでの余裕さを何処かへ飛ばし、顔を真っ赤にしてその目を閉じてしまった。悪いとは思ふけれど、もう自分を止

めることは出来なかった。

彼女の背中に左手を回し、右手は背中側から彼女の後頭部へと移動させる。少しだけ力を入れて彼女を抱き寄せた。彼女の髪や首筋から香る甘いサボンの匂い、胸には彼女の熱を持った吐息を感じる。華奢だけど、確かな女性らしさを感じる感触に頭が痺れそうになる。

どれだけの時間をそうしていたかは分からないが、腕に込めていた力を抜いて彼女を開放する。

「……これがあなたのしたかったこと？」

「……そうだよ、文句は聞かないからな」

先ほどよりも赤くなっている彼女にそう返答して、俺は背を向けた。一呼吸を置いて、雪ノ下は俺の手を握り直してくれる。これでさつきと元通りだろうか。いや、元には戻れない。

「ふふ、文句はないけれど、思っていたよりは大したことなかったわね」

これ以上ないほど真っ赤になっていたのに何を言っているのだろうか。彼女にそれを指摘してもブーメランになってしまうので言い返すことは出来ないのだが。

「……ちなみに、お前が勝ってたら何にするつもりだったんだ？」

「そうね、……比企谷君の残りの人生を貰おうと思っていたわね」



そんなことを口にしながら楽しそうに俺の手を握って笑っている。大変可愛らしいのだが、その発言にビビってしまう。あんな突発的な勝負に俺の人生がベットされていたのか…。

まあ、彼女のハグと比べたら悪くないレートだったかもしれない。俺の人生にそれほど価値はないだろうしね。

考えてみれば、先ほどの勝敗に関わらず、俺は今後の人生を結果的には彼女に捧げてしまうのではないだろうか。そういう意味では俺は負けていたのだろう。多分ずっと前から。

夜風に吹かれながら、彼女のマンションまでの道を二人でゆっくりと歩く。この次、この先には何が待っているのだろうか。少しずつでも前に進んで行きたい。

これからの未来に、彼女の隣に居られるように。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #18

次の週の天気予報が全て雨時々曇りと表示され、雨が降らなければ嬉しくなってしまうし、降れば予報通りだと納得せざるを得ない……そんな季節が今年もやって来ようとしている。

温泉旅行に始まり、添い寝、ハグ、ラッキースケベとイベントに富んだ5月も終わりの色の少なかった道端に紫陽花が鮮やかな彩りを添えてくれる6月に入った。

雪ノ下との関係はハグをしてしまったあの日から無事に、そう無事に特に変わってはいない。毎週のように晩飯を食べに行き、休みには何処かへ出掛けたり、彼女の家で過ごしたりしている。幸せと言っていていいだろう。

そもそも、あんな勝負で勝ち取った権利で一度ハグが出来たとしても、次に繋がる筈も無かった。

本日は土曜日なので、当たり前のように雪ノ下のマンションに来ている。慣れ過ぎて無意識に来れるレベル。もし記憶を失っても帰巢本能だけで辿り着けるかもしれない。

雪ノ下さん特製のデミグラスオムライスを完食し、幸福指数が著しく高まったタイミングで、彼女から本日の行動指針を提案をされる。

「……その、今日は比企谷君の家を掃除しに行きたいのだけど」

「いや、それは流石に悪いからいいわ」

雪ノ下の家で美味しいお昼をご馳走してもらった挙句に、自分の家を掃除させるのは申し訳が無さ過ぎる。どんな立場の人間ならそれが許されるのだろうか。俺なら絶対に許さない。

俺がお断りしたことが意外だったのか、雪ノ下は顎に人差し指を立てて下を向き、何かを考え始めた。いや、本当に申し訳なさで断ってるだけだからね？言葉足らずだったのだろうか。

「毎週のように美味しいご飯をご馳走になってるし、家の掃除までやつてもらったら何を返せばいいか分からなくなるんだよ……」

少しは俺の気持ち伝わったのだろうか、彼女は少し明るい表情になってこちらを見つめてくれる。

「私は美味しそうに食べてくれるのが嬉しくて作ってるだけだから、貸し借りは無しで良いわよ。それにあなただって、お皿洗いかお風呂掃除とかお風呂掃除とかしてくるじゃない」

明らかに俺の方が受け取り過ぎているのだが、雪ノ下の好意を無下にするのは気が引

けてしまった。何か別のことできつちりと恩返しをすることにして、今回は掃除を手伝ってもらっても良いのではないだろうか。

「……じゃあ悪いんだが、手伝いを頼めるか？」

「ええ、構わないわ」

俺の申し出に対して、雪ノ下は了承の言葉と共に小さく拳を握っている。ガッツポーズにも見えるが、恐らくやる気を出しているだけだろう。この部屋を見る限り、部屋の掃除は間違いなく得意そうだしね。

そんなこんなで、雪ノ下の家から俺の家へと向かうことになったのだが、雪ノ下が持つていくために用意していた靴がそこそこに大きい。彼女曰く、掃除道具とかが入っているらしいのだが、旅行にでも行くのかというサイズである。彼女クラスの掃除スキルを持つっていると、場所によって洗剤とかも変えたりするのだろうか。

それにしても、事前に掃除道具の用意までしてくれている彼女には感謝しかなかった。その大きな靴を持つことへの憂いは一切なかった。

雪ノ下が我が家の敷居を跨ぐのは、およそ2ヶ月振りであろう。あの頃から部屋の内観や備品は特に変わってはいないのだが、彼女が俺用のスリッパを用意してくれていたことを考えると、俺も何か用意した方が良かったのだろうか。

そんな少しの申し訳なさを玄関に入って感じている間に、雪ノ下はそそくさと洗面所へと向かってしまった。

我が家の洗面所は普通に狭い。同時に二人入ると手狭になってしまうので、廊下の少し手前で待機をする。水の流れる音が止まり、少ししてから雪ノ下が廊下へと戻ってくる。その頬が少し赤くなっているのは何故なのだろうか。洗面所に入り、自分の手を洗いながら考えたのだが、その理由についてはちつとも浮かばなかった。

「……結構埃が溜まっているわね」

専門家が俺の部屋に入っただけに問題点を挙げてくれる。確かに、壁際や窓ガラス、ベッドの下等は普段掃除をしていないので溜まっているかもしれない。

昨年度であれば、暇を持て余していたので定期的に掃除をしていたのだが、今年度に入ってから、まあ、その、結構充実していたので疎かになってしまったのだ。逆に雪ノ下はいつ掃除をしているのだろうか、俺の部屋よりもずっと広い彼女の部屋を掃除するのは時間が掛かっているだろうに。

「あー……、すまん。雪ノ下が来てくれるんだったらちゃんと掃除しとけば良かったわ」「それだと、今日私が掃除しに来た意味がないじゃない。……もし、これからちゃんと掃除するのであれば、次に私が掃除をしに来るのはあなたがこの部屋を出る時かしらね」

「俺がこの部屋を追い出される前提で話するのはやめろ、俺はこう見えて近隣には迷惑を掛けないように気を付けているんだぞ」

あら、ゾンビが住んでいるだけで迷惑をかけているじゃない、でも思っているのだろうか。しかし、近隣の方にはそんな風には思われていない筈だ。だってほとんど顔を合わせたことないしね。理由が悲しい。

「家具も多くはないし、これならすぐに引越し出来そうね……」

雪ノ下さんは俺の言葉を無視して引越しを想定しているようだった。え、本当に俺はこの部屋を追い出されてしまうのではないだろうか。急に不安になってきたんだが。

用意していた鞆から掃除道具である洗剤スプレーと何枚かの厚めの布、そしてゴム手袋等を取り出して掃除の用意をしてくれる。ゴム手袋は青とピンクの2セット用意してくれており、彼女の気遣いに嬉しくなる。

また、汚れてもいいようにだろうか、オーバーサイズの青色のTシャツを上重ね着している。少し違うが、彼シャツみたいな感じでとても可愛らしく見える。思わず見惚れてしまったのも仕方ないだろう。

雪ノ下の指示で床を拭き、壁を拭き、窓ガラスを拭いていく。拭き掃除をする箇所によつて、手法を変えながら綺麗に磨かれていき、2時間が経過する頃には一通り綺麗に

なつたように見られた。

「水回りの掃除は後でやるとして、……その、一つ勝負をしましょうか」

休憩がてら、俺のベッドに並んで座っていたところ、雪ノ下が俺の顔を覗き込むようにして挑戦的なその表情を見せてくれた。

勝負と聞き、前回のハグを思い出してしまい少し赤面してしまっている気がする。それに気付いたのであろう、雪ノ下のその可愛らしい表情に揶揄いのアクセントが追加される。

「……別に構わないが、その、あんま重い内容はダメだからな。その、人生とか」

今回の雪ノ下さんは間違いなく勝ちに来ているだろう。その表情を見れば火を見るよりも明らかである。別にあげたくない訳ではないのだが、勝負とかではない形にしたとは思っている。

「ふふ、重くないし、片腕……いえ、片手間で出来ることぐらいなら構わないかしら？」  
「まあ、それくらいなら全然構わんぞ。……勝負内容はどうするんだ」

彼女は楽しそうに条件を話しているのだが、逆に片手間で可能なお願いごとって何かあるだろうか。俺が勝つ可能性もあるので、一応考えておいた方が良さだろうか。いや、皮算用になりそうなので、勝つてから考えることにしよう。まずは勝負内容を気にするべきだろう。

「私はこれからスーパーに買い物に行くわ。比企谷君は今晚の料理のジャンルを予想して、当てることが出来たらあなたの勝ち、外れたら私の勝ちにしましょう」

なるほど、中華とかイタリアン等を予想すればいいのか。メニューを当てろだったら難しいけれど、ジャンルだけならそこまで不利じゃない気がする。我が家にある調理器具では作れる料理の幅も広くないだろう。

「趣旨は分かっただが、俺はその予想を何時言えればいいんだ？ 買い物後だったら食材で予想出来るだろうし」

「……そうね、私が買い物に行っている間に部屋で考えてもらって、私が戻ってきたタイミングで発表にしましょうか」

その料理を作るのだと分かる食材を買ってくるから、と話してくれる雪ノ下。彼女の話を聞いていると、一人で買い物に行くつもりなのだろうか。

「おい、もうすぐ暗くなる時間だし、一人で行かせねーよ。今から適当に紙に書くからちよつと待つててくれ」

ベッドから立ち上がり、仕事用の鞆から紙とボールペンを取り出す。その紙に“中華”と書き、折りたたんでからパンツのポケットへと仕舞った。

準備が出来たので、雪ノ下の方へと身体を戻すと、口をもごもごさせて頬を少しだけ赤くしている姿が目に入った。そんな彼女と目が合うと、もごつかせていたその口を開



き始める。

「……その、ちゃんと予想しないで勝てると思ってるのかしら？」

「お前を一人で行かせて危険に晒すくらいなら俺の負けでいいわ」

この辺りの治安は決して悪くはないのだが、雪ノ下を一人で歩かせるのは躊躇してしまふ。そもそも、彼女なら普通に迷子になる可能性もあるんですね。危険が危ないのである。

そんな守るべき彼女はやる気満々なようで、急ぎベッドから立ち上がり、洗面所の方へと歩いて行ってしまった。その大きいTシャツとか脱がないといけないもんね。可愛いからまだ見ていたかったので少し残念な気持ちになる。

買い物物を済ませて、雪ノ下が調理を開始してから数十分が経過した。俺の部屋にはとても美味しそうなカレーの匂いが充満している。そう、買い物時点で分かつてはいたのだが、今夜のメニューはカレーらしい。普通に中華からは遠いメニューだったので当たり前のように敗北してしまった。

大盛りの炊き立てご飯の横には美味しそうなポークカレーが添えられており、色の対比が食欲を推進させる。実は昨日のお昼にも会社の食堂でカレーを食べたのだが、それよりも圧倒的に美味しそうなので不満は全くない。何なら涎が出そうまである。

頂きますをして、ご飯とカレーを掬い上げて口へと運ぶ。溶け出した野菜の旨味と豚肉の脂がカレーのスパイスと合わさって堪らない味になっている。美味すぎて大盛りしてくれたのにお代わりしちゃうかもしれない。

忙しくなくスプーンと口を動かす俺を見て、微笑む雪ノ下。俺がお代わりをするまで、俺たちの間に会話は特にはなかった。

「それで、比企谷君の予想は当たっていたのかしら？」

「……いや、中華って書いたから外れだな。正解はインドなの？和食なの？」

カレーと言えばインド料理なのだが、日本のカレーは本場とは異なる進化をしているので、実質和食とも言われている。そのため、どちらが正解なのかは少し気になるころだった。

「ふふ、外れているのであればどちらでも構わないわよ」

雪ノ下は何やら意味深に微笑んでいる。もしかしたら、前回負けたのが悔しくて、絶対に勝てる勝負を吹っかけてきたのだろうか。狡い気もするが、大食い勝負を吹っかけた俺が非難できる筈もない。それに、負けて落ち込む彼女を見るよりも、勝って笑っている彼女を見ている方が俺としても嬉しかった。

綺麗に完食をした皿を洗う勢いで、シンク周りの掃除を行う。雪ノ下は風呂場の方を

やってくれるらしく、大きい鞆を持って風呂場へと向かってくれている。

シンク周りが終わったので、手伝いに行きたいのは山々なのだが、少し前に起こしてしまった事件があるので風呂場へ行くのは憚られてしまった。

半刻ほどの時間が経ち、途中から聞こえてきていた水の流れる音が止まり、風呂場の扉が開かれる音がした。随分と丁寧に洗ってくれていたのだろう。俺は劳いの気持ちでグラスに水を注ぎ、彼女に渡す準備をしていた。しかし、雪ノ下は一向に現れず、気が付けばドライヤーの音が聞こえてくる。

……まさか湯浴みをしていたのだろうか。いや、普通に考えて掃除途中に濡れてしまった髪か衣服を乾かしているのだろう。そんな俺の予想はいとも簡単に崩れ去った。

「悪いとは思ったけれど、先にお風呂に入らせてもらったわよ」

この前見た白色のパジャマとは違い、ボタンの付いたシャツタイプの水色のパジャマを着て彼女は洗面所から出てきた。何で風呂入つてると突っ込みたい気持ちはあるのだが、視覚的情報に俺の思考が阻害されてしまって言葉が出てこない。

言語中枢が回復する頃には、雪ノ下に洗面所へと押し込まれていた。

自分の家の浴室に嗅ぎなれない匂いが充満している。雪ノ下の家では非現実感で思考をぶっ飛ばして何とか平静を保っていたのだが、自分の家となるとその手法も使えな

いだろう。

髪を洗おうとシャンプー置き場を見やると、見慣れない小さなボトルが幾つか並んでいる。同棲したらこんな感じなのだろうか……………。

何とか風呂場から出ると、洗面台には着替えが用意されていた。見覚えのない紺色のそれは、きつと彼女の着ていたパジャマの色違いなのだろう。嬉しくない訳がなかった。

パジャマに着替え、髪を乾かしてから雪ノ下の元へと戻った。色々と言いたいことはあるのだが、まずは感謝の言葉だろう。

「…………着替え用意してくれてたんだな、その、助かったわ」

「ふふ、とても良く似合っているわよ」

彼女が嬉しそうに笑う姿を見てしまったら、先程まで言いたかった言葉が出てくることはもうない。今日は負けっぱなしである。

「今日はもう寝ましようか。比企谷君が奥側に行ってもらえるかしら」

寝るにはまだ少し早い時間なのだが、雪ノ下さんはもう眠りたいようである。小さなポーチを持って洗面所から帰ってきた直後に睡眠を所望してきたのだ。きつと掃除で疲れたのだろう、体力の無い彼女に無理をさせてしまったのかもしれない。

と言うか、雪ノ下さんは至って真面目そうに話しているのだが、こんなセミダブルのベッドで並んで寝る気なのだろうか。広かった雪ノ下の家のベッドならまだしも、これは流石に無理でしょ。

「いや、あんまベッド広くないし、俺は床で寝るから……」

この家の主は俺なのだが、奴隷根性が身に付いているので固い床を選択する。座布団を敷けば何とか眠ることは出来るだろう。

「……そう、なら私も床で寝るわ」

いや、身体痛めちゃうからベッドで寝た方がいいですよ、と説得を試みたのだが、彼女の了承はなかなか得られない。次第に俯いてしまい、拗ねるような声音で小さく呟く。

「隣で寝ないと今日のお願いができないのよ……」

そんな可愛い声で言われてもどうしようもない。ないのだが、横になって悶える必要があるのでベッドに横になりますね。はい、ギリギリまで詰めました。

微かに笑う声が聞こえ、部屋の電気が落とされる。背後から甘い香りとベッドが軋む振動が伝搬され、俺の身体がそれを受信する。視覚的情報が無い分、より他の感覚が鋭敏になり、普段以上に彼女の存在を感じ取ってしまった。彼女の呼吸音さえも今は鮮明に聞こえてしまう。だから、彼女が何かを口にしようとする前触れすらも分かって

しまうのだった。

「……とりあえず、仰向けになってもらえる?」

言われるがままに身体を倒して、天井を見上げる。なるべく腕を縮こませて彼女に触れないように努力をしたのだが、それでも当たってしまった、彼女の熱を感じてしまう。

「…えっと、次は腕を真っ直ぐ伸ばしてもらえるかしら」

やはり腕が身体に当たってしまったってしまっているのが不快なのだろうか。俺は彼女に当たらないように左腕を天井へと真っ直ぐ突き上げる。しかし、苦笑する音が聞こえ、彼女にその腕を掴まれてしまった。

「違うわよ、横に真っ直ぐに伸ばしなさい」

言われるが儘に左腕を横へとゆっくりと倒していく。間違っても雪ノ下の顔にぶつけてしまわないようにゆっくりと。

無事に下まで倒したその腕に、温かな重みが加わった。

俺の左腕には彼女の柔らかな笑みが乗せられ、こちらを見つめていた。

「これが今日の勝ったお願いよ。……その、重くはないでしょう?」

「………重いです。」

その行動が重いし、俺には荷が重いし、責任も重い。軽いのは物理的な重さぐらいである。確かに片手間なのかもしれないが、これはレギュレーション違反ではないだろう

か。

しかし、彼女から伝わってくる温度が、想いが嬉しくて、そんな悪言は口から出てこない。それに片腕が動かせない方が俺にとっては都合が良いだろう。両腕が自由だったら何をしてしまうかは分からないのだから。

「……………文句はないから早く寝てくれ」

「ふふ、いつもありがとう、比企谷君…………」

雪ノ下はそう言葉にして、その熱を持った瞳を綺麗に閉じていった。

本当に疲れていたのだろうか、あまり時間も経たずに規則的に胸が小さく上下し始める。

彼女の感謝の言葉にはどういった意味が籠められていたのだろうか。家の掃除までしてもらったのだから、俺の方がずっと感謝をしないとイケない筈だろうに。

そんな感謝の気持ちで寝ている彼女にも伝わるように優しく頭を撫でていく。他の気持ちも全部を籠めて、ゆっくりと丁寧な。言葉ではまだ伝えられそうにはないから。

眠りに落ちる前に見た彼女のその表情は、優しく笑っているようだった。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #19

贈り物、それは社会を生きていく上で度々必要になるアイテムである。内容よりも、贈るという行為が重要であり、送る側と送られる側の立場をより明確にする意味合いがあつたりする。

しかし、対等の間柄では中身を重視するのが普通であろう。相手の欲する物を贈ること、そして何よりも喜ばせたいという気持ちが大切なのだと思う。

だから、俺は、彼女に喜んでもらえる物を選びたい。

「ダマスカス鋼、……耐久性に優れているこれにしましょうか」

「いや、流石に中華包丁を贈るのはやめたれ……」

本日は来週の金曜日に誕生日を迎える由比ヶ浜の誕生日を買いにららぽーとへと赴いている。一色も誘ったのだが、彼女は誕生日会の当日にプレゼントとしてケーキを自作してくれるらしいので、本日の買い物には来ていない。

お菓子作りは得意と言えるレベルの腕前になっている由比ヶ浜に調理器具を贈るの



は悪いことではない。しかし、限度があるだろう。包装紙を開いたら中華包丁が入っていたなんて絵面は流石の由比ヶ浜でも苦笑いしか出来ないだろう。

大学の時には俺監修の下ではあるが、割と良さげな品を選んでいた筈なのだが、1年のブランクで元に戻ってしまったのだろうか。

隣で中華包丁のメリットを凜とした表情で延々と説明してくれる雪ノ下は今日も愛らしい。

「確かに、由比ヶ浜さんが欲しい物では無いことは分かったけれど、それなら何が欲しいと思うのかしら」

数分に及ぶ中華包丁のプレゼンテーションが終わり、そのカウンターとして送られる側を仮定した忌憚のない意見を進言すると、意外にもすんなりと納得をしてくれた。

学生時代であれば、由比ヶ浜とはそこその頻度で会っていたので探りを入れることが出来ていたのだが、社会人になってからは欲しい物を聞いていない。つまりはアイデアは無い。強いて言うのであれば、昔から変わらずに好きなのは犬と雪ノ下ですかね。

「間違いなく喜ぶプレゼントは雪ノ下だろうな……」

由比ヶ浜が満面の笑みで雪ノ下を抱き締め、雪ノ下もまた満更ではない表情で百合百合し始めるだろう。そんな二人を見て俺も百合活が捗ってしまう。これがベストアン

サーでは……。

「……………由比ヶ浜さんに譲ってしまってもいいの?」

雪ノ下は腕を掴む力を少し強め、流し目でこちらを伺っている。その可愛さに動揺している俺でさえ彼女の言いたいことは理解出来る。出来るからこそ返答に困ってしまった。俺はまだ、ここで強く言えるような立場ではないのだから。

「ほら、真面目に由比ヶ浜にあげてもいいプレゼント選ぶぞ。……あ、アクセサリーとか良いんじゃない」

目の前にあつたアクセサリーショップを指差す。そして、掴んでくれている腕に力を入れて彼女を少しでも引き寄せる。今の俺に出来るのはこれが限界だろう。

「もう……………ばか」

そんな罵倒とも取れる言葉とは裏腹に、正面から向けられるその表情には満ち足りたような笑みが浮かんでいた。

そのままアクセサリーショップ、というよりはジュエリーショップに入店する。入店するや否や、若めの女性店員が急ぎ足でこちらへと向かってくる。接客員は苦手なので少し後退りしそうになるが、密着している雪ノ下さんがそれをさせてはくれない。

「いらつしやいませ、何かお探でしょうか? あつ、もしかして指輪でしょうか。それ

でしたら、こちらに今年の新作が入荷しておりますので是非ともご覧下さい！」

笑顔で接客してくれている店員の推しが強く、有無を言わずに指輪コーナーまで案内されてしまう。意外にも雪ノ下が興味有り気に相槌をしていたからなんだろうが。

友人の誕生日に指輪を贈るのは同性ならアリなんですかね？ 由比ヶ浜なら喜んで付けてくれそうな気もするけれど。

指輪の入ったショーケース前に立ち、中身をざっと見ていく。由比ヶ浜に似合いそうな指輪……指輪で似合うって難しいな。肌色と指の形とかで決めるのだろうか。

「本日はペアリングを御希望でしょうか、それともプレゼント用でしょうか？」  
「まあ、どちらかと言えばプレゼント用ですかね……」

そもそも指輪を買いに来た訳ではないのだが、雪ノ下が真剣に吟味しているので否定はせずに答える。ペアリング購入からの百合ルートも見たかったのは内緒だ。

「なるほど、彼女さんの指輪のサイズはおいくつでしょうか？」  
「……確か、6号だったかと思えます」

店員からの質問に雪ノ下は自分の左手薬指を見ながら答える。由比ヶ浜の指のサイズ把握してるなんて流石ですね、捗ります。少し頬が紅くなってるのがホントに尊い。  
「ただ、今日は友人へのプレゼントを選びに来たので、イヤリングとか見せてもらえますか？」

「あら、そうだったんですね。てつきり彼氏さんが指輪をプレゼントしてあげるのかと思っていました」

「……えっと、その、今日は違うわよね？」

店員に向けていた顔をゆつくりと俺の方に向け、上目遣いでその是非を聞いてくる。その頬は先ほどの紅よりも更に濃くなっている。

今日”は”ってどういう意味ですかね、もしかして欲しいんですか？まだ給料3ヶ月分の貯金が出来てないので夏のボーナスまでは待つてもらえませんかごめんなさい。

脳内でしつかりとお断り台詞を決めたところで、現実にも目を向ける。その現実では、長い睫毛を広げた綺麗な瞳が細められてこちらを見つめていた。現実でも返答しないといけないようだ。

「………今日は違うだろ、今日は」

今日じゃない日が来るのは何時になるだろうか。この先離れるつもりなんて毛頭ないのだから、きつとそれほど遠くは無いと思いたい。

雪ノ下にもその想いの一端が届いたのだろう、細められていた目、今はその影も形もない程に大きく開かれているのだから。

その後は接客をしてくれた店員に生暖かい目で見られながら、由比ヶ浜に似合いそうなホワイトゴールドのイヤリングを無事に購入しました。

雪ノ下からのプレゼントは購入したのだが、俺からのプレゼントを買うのにはかなりの苦勞をした。さっきの店で俺も何か買おうと思ったのだが、雪ノ下にアクセサリーはダメだと止められてしまったからである。似たようなプレゼントを贈るのはマナー違反なのだろう。

その後何店か回ってみたのだが、隣の彼女にダメ出しをされるのでなかなか決められない。服も靴もNGらしい、最近のマナー講師は厳し過ぎる。

結局、お洒落なデザインのLEDランタンを購入することにした。適当な物を贈りたくはないので、選ぶのにはそれ相応の時間が掛かってしまった。

無事にプレゼント購入を果たしたので、休憩がてらにソファアで並んで座る。ここまで苦勞した買い物なんて、高二の頃に初めて由比ヶ浜の誕生日プレゼントを買いに来た時以来だろう。

あの日はプレゼント選びのいろはを知らない雪ノ下さんが耐久性で物を選んでいったつけ……あれ、さつきも聞いた気がしますね。

それよりもあれだよ、ツインテールですよ。あれ可愛かったからまた見てみたいんだけど、頼んだらやってくれませんかね。

「なあ、前にしてた」

「あれー？ 雪乃ちゃんとは比企谷君？」

少しだけ雪ノ下に似たその声に遮られる。その声の持ち主は肩につかない程度で綺麗に整えられた艶やかな黒髪の類稀なる美人、雪ノ下雪乃の姉である雪ノ下陽乃であった。

俺の目が陽乃さんを姿を認識すると、危機管理フォームがオートで発動する。雪ノ下との距離を拳一つ分という充分な距離を開けて、背筋を伸ばして瞳を濁らせる。

当の陽乃さんは素敵な笑顔を引つ提げて、急ぎ足でこちらへと向かつており、雪ノ下の隣へと着弾する。爆発が起きるのではないかと気が気でない。

「今度こそデートでしょーこのこのっ！」

「……姉さん、公共の場ではやめて」

それは昔に見たような光景で、陽乃さんは雪ノ下に肘をつついて揶揄うようにスキップを取っている。前と違う点としては雪ノ下が冷めていないように見えるところだろうか。

陽乃さんは妹との触れ合いを楽しむと、次は俺を標的にするつもりなようで、一度席を立てて俺の隣へと座ってくる。

「比企谷君も久しぶり〜、元気にしてた？」

「……お、お久しぶりです。まあ、ぼちぼちですかね」

未だに陽乃さんと話すとなると緊張してしまう。当たり前障りのない発言をして様子を見ることにしたのだが、陽乃さんはニヤリと笑って口を開く。

「へー、じゃあ元気にしてあげようかな」

ニヤつきながらそう口にする、陽乃さんは俺に抱き着こうとしているのか、少しオーバーに腕を広げてその身を接近させてくる。

しかし、その腕が俺の身体に触れることはなかった。

「触らないで」

陽乃さんが俺に触れるよりも前に、身体ごと雪ノ下の方へと抱き寄せられたからである。

俺の顔は雪ノ下の胸元に押さえ付けられ、いつもよりも強く彼女の香りを感じる。そして、その柔らかさと温もりからは離れようにも離れることはできない。精神的な理由ではなく、普通に結構な力で押さえ付けられているから。

「……その、姉さんは触っては駄目よ」

決して強い声色ではない。ただ自分の考えをはっきりと伝えているだけで、その言い方は上の者に対する願いのように聞こえた。ただ、妹が姉に対して何かをお願いするかのように。

隣に座っていた陽乃さんが席を立つ音が聞こえる。その足音は俺の前を通り、雪ノ下

の奥まで進んだ所で止まった。

「雪乃ちゃんほんとに可愛いく、お持ち帰りしていい?」

「もう、公共の場ではやめてって言うてるでしょ。それに、姉さんは駄目よ」

陽乃さんが雪ノ下を抱き締めると同時に俺の拘束が解除される。開放された視界には、美人姉妹が仲良く引つ付いている姿が映し出されていた。

昔は雪ノ下が嫌そうにしていた印象が強かったけれど、今はそんな様子は一切見られない。二人とも自然に笑顔を浮かべている気がする。

それにしても、妹している雪ノ下さんも本当に可愛らしい。陽乃さんがシスコンになってしまうのも仕方がないだろう。千葉生まれだしね。

「ねえ、挨拶は何時するの?」

「……そのうちするわよ」

「ふーん、まあ決まったら教えてね。協力してあげるから!」

挨拶か……今の定期的に考えると、お盆休みの挨拶回りの日程を聞いているのだろうか。お盆休みは確か5日程あるので、俺も実家に帰った方が良いのだろうか。久しぶりに小町にも会いたいしね。具体的な日取りは雪ノ下と相談してから決めることにしよう、うん。

「……じゃあ比企谷君、私の可愛い妹をよろしくね」



最後に意味深な笑みを向けられてしまったが、適当に相槌をして、去っていく陽乃さんを見送る。相変わらず完璧という言葉が似合い過ぎる人だ。優れた強化外骨格も可愛い妹の前では外してしまうのだから、ギャップ萌も狙っているのだろうか。

そんな完璧な姉が去り、隣で息を吐いて安心している雪ノ下に声を掛ける。

「相変わらずお前の姉ちゃんはずげえな……」

「……そうね、私の自慢の姉だもの」

姉とは違う長い黒髪を軽く手で翻しながら彼女は静かに微笑んでいた。俺の知らぬ間に陽乃さんとの蟠りは消えたのだろうか。彼女は去っていく背中が見えなくなるまで、その目を逸らしたりはしなかった。

「そう言えば、さっきの挨拶って何時するんだ？」

夏の予定は出来るだけ合わせたかったので、彼女が実家に帰る日は知っておきたい。以前であれば、臆して訊けずにいただろうことを考えると成長しか感じない。

「ま、まだ考えてないわよ……。姉さんの言うことは本気にしないでもいいわ」

日程については2か月も先なので納得できるのだが、何故か動揺しているの彼女の発言には引つ掛かりを覚えてしまう。恥ずかしいことだとは分かっているけれど、確認せずにはいられなかった。

「……俺は、その、デートだと思っていたんだが」

「……ふふ、それは否定してないわよ」

呆れるように苦笑し、俺の肩に身体を預けてくる。彼女の言葉と温もりに安心しながらも、脳裏には少しだけ疑問が残っていた。

それを言うなら、挨拶とやらも否定してないじゃん、と。

帰り際にゲームセンターを無意識に覗いてしまった。これはきつと、あの日のことを思い出してしまったからだろう。

UFOキャッチャーのシヨーケースにはパンさんのぬいぐるみは置いてはいない。今であれば他力本願ではなく、自分の力だけで彼女にプレゼントをしたいと思えたのに。

あの頃は効率を重視して、手段は問わなかった。その考え方が悪いとは今でも思っていない。今はただ、彼女に対して見栄を張りたいと思うようになっただけだ。

あの頃と同じ組み合わせなのに、何もかもが違ってきている。今が良くて、昔が悪いと思っている訳ではない。終わり良ければ全てよし理論で考えれば、今が良ければ昔も必然的に良かったと言える筈であろう。

今が良いと思える根拠なんて、すぐ隣にいるのだから。

「今日も楽しかったわよ、比企谷君」

隣の彼女が笑って声を掛けてくれる。昔なら耳を疑うような言葉だったけれど、今では疑いようもなかった。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #20

梅雨明けが宣言された7月の中旬、季節はすっかり夏一色である。

夏と言えば、で浮かぶイメーヅは基本的には眩しく明るい青春の1ページの物が多いのではないだろうか。プールや海で水着姿で涼しく遊ぶ、浴衣で夏祭りや花火大会、俺も昔はそうだったかもしれない。だが、今となっては汗だくのリーマンと押し競饅頭を強いられる大変に厳しい季節だという認識が強い。これに関しては汗っかきが悪いのではない、暑過ぎる日本の夏と乗車率が高過ぎる東西線が悪いのだ。

しかし、今年はそんな醜悪なイメーヅを払拭するような色濃い夏を味わうことになるだろう。今回はその1ページ目だ。

日中は30℃を優に超える真夏日である土曜、涼みに来たのは猫カフェである。雪ノ下のマンションから徒歩圏内ということもあり、月に一度は訪れている。手慣れた様子で猫を膝に乗せて笑っている彼女を見ることのできる素晴らしい場所なので文句は一切ない。ただ、新しく撮った写真を待ち受けにしたい欲とは戦わなくてはいけなくなっ

たりする。あの日の待ち受け変更禁止勝負が実は曲者だった。

猫カフェに来ることに文句はないのだが、彼女は自分の家で猫を飼おうとは思わないのだろうか。俺の住んでいる部屋はペット禁止なので飼うことはできないのだが、彼女のマンションでは禁止されていないだろう。たまに犬を連れてくる住民と擦れ違し。

膝に乗っていた猫が寝始めたタイミングで彼女に声を掛け、そのことについて質問をした。

寝ている猫の頭を撫でているため、こちらには視線を向けてはくれない。だが、その幸福感を隠さずに優しい声音で返してくれる。

「そうね、考えていないこともないのだけれど、多頭飼いは相性とかも考えなくてはいけないから……」

「ほう、飼うなら複数飼いたいってことか。猫同士でじゃれ付いている様子とか見たいしな、気持ちは分かるぞ」

やはり猫大好きフリスキーなだけはある。複数飼うことで一匹当たりにも構う時間が減ることも猫にとっては良いことかもしれない。構われ過ぎるとストレス溜まったりするらしいしね。

「あら、今はあなたを飼い慣らしているところだからって意味だったのだけど」

雪ノ下さんは小馬鹿にしたような可愛らしい笑みを浮かべてそれを口にした。可愛  
いから許してしまいそうになるけれど、ペット扱いは酷いだろう。

「ペット扱いは失礼だからやめろ。俺はこの暑い中で働きに出ている哀れな存在なんだ  
からな」

「ペットに失礼って意味だったのね……。けれど、ちゃんと面倒見てあげてるじゃない」  
面倒見てもらっているって言っても、家でご飯作ってもらったり、衣服用意しても  
らったり、ちよつとばかりの愛情をもらったりしているだけだろ。……あれ、これって  
普通にペットがしてもらうことでは？

自分の立ち位置に疑問を持ち始めた俺を見て彼女は可笑しそうにくすくすと笑う。  
その音が振動でかは分からないけれど、膝で寝ていた猫が大きな欠伸をして彼女の膝か  
ら飛び降りた。雪ノ下は少し残念そうな表情を一瞬浮かべたが、すぐにこちらを見つめ  
て笑った。

「そろそろペットのご飯の材料を買いに行きましようか」

きつと彼女に飼ってもらえる猫は幸せになるのだろうか。この笑顔を向けてもらえ  
るのだから。

暑い日差しの下、手を繋いで歩いている。アスファルトで舗装されている地面からの

放射熱も合わせると相当な熱量である。少し遠くでは雲が固まっているので、もう少し経てばこの暑さから解放されるかもしれない。今は雪ノ下の手が少しひんやりしている気がするのだけが救いだらう。

最近の夏は長いので、少なくとも9月まではこの酷暑が続くのだろう。彼女といえるのにしんどい顔をするのも悪いので、何か楽しめることを考えたい。そんな考えが隣の彼女にもあつたのだろうか、明るい声色で話し掛けてくれる。

「もうすっかり夏ね、そろそろ水着を買わないといけないかしら」

水着か……何だかんだ大学の時にも見せてもらっていないので、俺の記憶では高校2年の千葉村の水着姿しか出てこない。あの水着は似合っていたと思うのだが、もう着ないのだろうか。いや、実はもう入らないのかもしれない。見た目的にも、腕に当たる感触的にも成長を感じるのだから。

そうなると、おニユーの水着を見られるのだろうか。欲を言えばビキニタイプが見てみたいのだが、周りで見られることを考えると露出は控えめにしたい。やはりパラオだろうか、うーん。

「ふふ、ちゃんと水着になれる場所に連れていってくれる気はあるのかしら」

「そうね、なるべく人が居ないところを探してみるわ」

人が少ない海水浴場が良いのだろうか、千葉で幾つか人気がありません場所心当た

りはあるのだが、それでもそこそこには人が居るらしい。もつと遠くの場所へ行かないといけないかもしれない。

移動手段も考えないといけないだろうし、天気も気にしないといけない。夏は急に天気が悪くなることもあるし、……おっと。

ポツポツと雨雫が地面を叩く音が聞こえた。空を見上げると、先程見えていた雲が真上まで来ていることに気付く。

これは強くなるかもしれない、そう考えた時には自分のジャケットを脱いで隣の彼女の頭に被せていた。

「ゲリラ豪雨かもしれない、走って帰ろう」

「え、ええ、わかったわ……」

雪ノ下のマンションまでは徒歩5分くらいの距離だろうか。走ればあまり濡れないだろう、そう思って走り出したのだが、到着するよりも空が大泣きし出す方がずっと早かった。

痛いくらいの大きな雨粒が空から隙間無く降り注がれる。残り数メートルの道のりさえも果てしない距離に感じてしまう。隣の雪ノ下は大丈夫だろうか、そう心配しながら残りの数歩を踏み締めた。

「おい、大丈夫か？」



自分の髪から滴る水滴が邪魔で見えづらけれど、雪ノ下の状態を確認する。頭に被せたジャケットを剥がすと、すっかり雨に染まりきっており、結構な重量になっていた。彼女の頭は少し濡れてはいるが、水が滴るほどには雨を被っていないようだ。一応、守ることは出来たのだろうか。

「……あなたは自分の心配をするべきね、水も滴る良い比企谷君になっているわよ」

「男が上がってるなら構わねーよ、さっさと風呂入った方が良いでしょう」

雪ノ下はあまり身体が丈夫ではない、これしきの事でも風邪を引いてしまう可能性は充分にあるだろう。

対する雪ノ下さんはそんな心配に気付いていないようで、心底呆れたような顔で俺を見上げている。

「はあ……すぐに用意するから、あなたから入りなさい」

「取り敢えずタオルで拭いて着替えれば平気だから、雪ノ下から入ってくれ」

エレベーターに乗りながら、そんな押し問答を繰り返す。俺は引く訳にはいかないし、彼女も引いてはくれなかった。

彼女が家の扉を解錠して玄関まで入ると、ここで待つように指示をされる。俺の今の状態だと、廊下を濡らしてしまうからだろう。

直ぐにタオルを手を持って戻ってきてくれる。彼女の肩にも色違いのタオルが掛け

られていた。

「取り敢えず少し拭いてお風呂に入って頂戴、お湯はもう入れ始めているから」

「いや、まずは……おおっ？」

まずは雪ノ下から入って欲しい。そう言葉を繰り返す前に彼女にタオルで髪の毛を荒目に拭かれる。

「……どうしても私からと言うのであれば一緒に入ってもいいわよ」

こちらを試すような表情と言葉に胸が高鳴る。よく見ると微かに服が透けてしまっているため、その扇情的な姿に惑わされそうになる。

「……じゃあ悪いんだが、先に入らせてもらおうわ」

きつと、本当は一緒に入る気なんて無いのだろうが、彼女の優しさに甘えさせてもらおう。この際カラスの行水でいいから、早く済ませるべきだろう。

俺の諦めの言葉を聞いて、彼女は更に荒々しく俺の頭を拭いて笑っていた。

またしても用意されていたパジャマに着替え、雪ノ下が風呂から上がるのを待っていた。このパジャマに袖を通すのは二回目、温泉旅行のすぐ後にこの家に泊まった時以来だった。そもそも彼女の家の風呂に入ったのが二回目だからね。

ドライヤーの音が止まってから数分後、スリッパが床を叩く音が聞こえてくる。外の

雨が非常に喧しいので、微かにしか聞き取れはしない。

すっかり温まり、紅潮している雪ノ下は大きな窓ガラス越しに映る止めどない雨粒を見て、口角を上げて目を丸くしていた。だが、その口を開く前には凜とした表情へと変わる。

「この雨では帰るのは難しいでしょうし、泊まっていけば良いと思うのだけれど……」  
「……んじゃ悪いんだが、泊めてもらってもいいか？」

確かに、この雨の中帰るのはしんどいので泊めてもらおう。ゲリラ豪雨だからそのうち止むかもしれないが、止んだらその時考えればいいだろう。

「う、うん。じゃあ晩御飯の準備するわね……」

そう言って彼女はキッチンへと向かう。色違いのパジャマの上にエプロンを装着して、鼻歌なんて歌いながら機嫌良さそうに調理に取り掛かってくれている。

外からは騒がしい雨の音が流れ込んでくるけれど、俺の耳には彼女の奏でている音の方がずっと鮮明に聞こえていた。

夏の風物詩の一つである夕立、今では改名してゲリラ豪雨と呼ばれるようになった現象のせいで食材の買い出しには行けなかった。そんな状況で何を作るのかと思っていたのだが、目の前には美味しそうなツナの冷製パスタとオニオンスープが並んでいた。

彼女と対面するように座り、食前の挨拶をして料理を頂く。パスタからは美味しそうな出汁とにんにくの香りがしており、スープからは優しい玉葱とコンソメの香りが漂っている。

堪らず、パスタから口に含むと、醤油と鰹節、そしてにんにくとツナが合わさって食欲を加速させられる味になっている、やばい美味しい。次にオニオンスープに口を付けると、温かい野菜の旨味が胃袋と心を落ち着けてくれる。何だかホツとするような味わいだった。

「その、簡単な物でごめんなさい。あまり食材が残っていないくて……」

落ち着いて食事をしてしていると、目の前の雪ノ下が何故か申し訳なさそうな顔をして謝るような言葉を告げてくる。俺は慌てて感謝や感想を言葉にしようと口を開く。

「何を謝ってるのか知らんけど、俺からしたら充分に凝ってると思うし、味もめっちゃ美味い。何なら家庭的な感じで寧ろ嬉しいまである」

こんなに美味しい料理を俺なんかにつけてくれた彼女にそんな暗い顔はして欲しくない。そんな想いから口にした言葉はきつと本心で、彼女にもそれは伝わってくれたのだと思う。見る見るうちに微笑みに変わっていく表情を見せてくれる。けれど、何かに気付いたのか少しだけ照れるように顔を俯かせてしまう。

「……………家庭的、かしら」

雪ノ下に言われて初めて、その言葉に胸を打たれる。もし、彼女も同じ気持ちでいるのであれば、俺は相当攻めた発言をしてしまったのではないだろうか。

またしても訪れる二人の静寂に、ギャにも取れる窓を叩く音だけがこの場を繋いでくれている。

「比企谷君は飼うならどんな猫種がいいかしら？」

「あんま考えたこともなかったけど……」

食事と洗い物を済ませてソファで一休み、その時の話題に選ばれたのは猫の話でした。今日猫カフェで話したことが理由だろう。空で話せるほど猫の種類に詳しくはないので、スマホで検索を試みる。そこに映る猫を見ながら話すことにしよう。

「取り敢えずアメシヨは可愛いよな、マーブル模様が良い」

「アメリカン・ショートヘアね、好奇心があつて明るい性格らしいから遊んでくれそうで良いわよね」

猫種の性格まで把握されているらしい雪ノ下さんがハキハキと説明をしてくれる。何だか楽しくなってきたので、気になった猫を挙げていく。

「サイベリアンはシベリア種の多毛な猫ね、別に比企谷君と同じミアミス好きという訳ではないわよ。それに、大人しくて水を嫌がらないから一緒にお風呂も入ってくれ

らしいわ」

「マンチカンは足が短いのが特徴的な猫よね。それに長毛種でふわふわした撫で心地、そして性格も穏やかだから多頭飼いにも向いているらしいわよ、比企谷君」

「ソマリは人見知りをするらしいけど、甘えん坊らしいわね。寂しがり屋でもあるみたいだから、専業主婦になるなら飼えるのかしらね、比企谷君」

「ラグドールは抱っこが好きらしいわ。大らかな性格で子どもにも怒ったりしないらしいから、情操教育としては悪くないと思うのだけれど……」

一々含みのある説明をしてくれたのは何とかスルー出来たのだが、何時の間にか密着するような距離で上目遣いにそんなことを言われると返さざるを得ない。

「……き、気が早いんじゃないか？」

一瞬、結婚してたっけとか思ってしまったのだが、そんな筈はない。俺がプロポーズをそんな簡単に出来る訳がないのだ。自分が信じる自分を信じよう。

「……えっと、”あなた”は飼う猫はどうしたい？」

「一番可愛がるのは、”おまえ”だろうし、任せるわ」

きつと彼女が選んでくれる猫が一番良いのだろう。彼女が見初めた猫はきつと多大な愛情を受けることが出来るだろうし、そんな愛を貰える猫が幸せにならない訳がないのだから。

雪ノ下もそんな未来を想像しているのだろうか、今はただ幸せそうに顔を綻ばせていた。

今日もやって来てしまった就寝タイム、前回は意識せずに彼女のベッドで寝ていたのだから驚くしかない。今回はすっかり緊張しているので長い夜になることは確定だろう。相も変わらず布団が敷かれる様子もない。

「ふふ、比企谷君は奥の方に入っていてね」

「あ、はい」

ご機嫌な彼女には有無を言わずに服従させる力がある。ソースは俺。

壁に触れるのではないかという程に端に近付いて寝転がる。このダブルベッドを広々と使えば触れ合うことなく二人で寝転ぶことが出来るのだから。

電気が落とされ、隣に彼女がゆつくりと寝転がる。視界の端には彼女の横顔が映っていた。彼女は軽く息を吐くと、こちらに向き直ってその口を開いた。

「……………その、してくれないの?」

俺の耳朶に響いたその言葉は、脳に辿り着くとピンク色に変換される。きつと先ほどの子どもとか、教育云々の話が影響しているのだろう。手を出せと言われていたのだから、違うだろうけどそうとしか取れない、助けて誰か。

「……比企谷君にその気があれば構わないけれど、今のは腕を出してという意味よ」

あたふたしている間に彼女に正解を告げられる。なるほど、危ないところだった。

しかし、腕枕はこの前の勝負での話なので、今回それをする言い訳が思い付かない。

「……それはこの前限定じゃなかったのか？」

「あら、期限や回数は決めていなかったのだから無期限無制限よ」

あつけらかんに彼女はそう口にした。言い訳さえ有るのなら、行動しても良い筈だろう。

今度は最初からゆっくりと横に俺の左腕を伸ばしていく。そして、また温かい笑みが重さを預けてくれる。

「ふふ、比企谷君の方も同じ条件なのだから、何時でもいいわよ」

俺の右腕を取って彼女は笑った。

彼女のその背中にゆっくりと優しく右手を触れさせ、少しだけ力を入れる。彼女の身体を引き寄せるためではなく、ただ抱いているような感覚を味わいたかったから。

手と腕だけを接触させる、それだけの行為で嬉しく感じる、どうしようもなく心が躍ってしまう。

「私、こういうのがしてみたかったのよね」

小さく呟かれた彼女の言葉、彼女もきつと同じ想いを抱いている。



「……やりたいたいことがあつたら言ってくれ」

きつと同じことをしたいと想えるから。

「この夏は色々経験させてね……まずはプールか海かしら？」

「……海なら海月が多くなるお盆前に行かないとな」

「ふふ、楽しみね」

「……そうだな」

「水着も買いに行かないとね」

「そうだな！」

……………。

何時の間にか、雪ノ下は俺の腕の中で眠ってしまった。話し疲れたのだろう、今日はいつもよりも饒舌に言葉を紡いでくれていた。

背中に置いていた手を彼女の頭に移動させて、その綺麗な黒髪を優しく撫でる。彼女の幸せそうに笑った顔が見たいから。

今はもう、彼女の小さな呼吸音以外は何も聞こえない。

静寂に満ちたこの部屋には、カーテンの隙間から月明りが綺麗に差し込まれていた。

## やはり俺の社会人生活は間違っている # 2 1

自動車の運転というのは恐ろしい。重量1000kgを軽く超える鉄の塊を制御する必要があり、何よりも危険を察知する能力が求められるからだ。

自動車学校では、常識では在り得ないだろうという危険行為をしてくる輩に気を付けながらの運転をシミュレートさせられたりする。あれで無事故は制限に近い速度を出したら無理だと思います。

速度を出さなきゃいいという意見は至極当然なのだが、速度が低い車というのはそれだけで他の車の迷惑になってしまうのだ。だからこそ周りの速度に合わせるために、危険に対して回避が難しい状況を作らざるを得ないのが日本の道路交通事情なのではないだろうか。いや、違うかもしれないが。

車は運転者とその同乗者の命を運ぶ箱舟であり、同時に他人の人生を奪う凶器にもなり得る。

結局何が言いたいのかというと、気を付けて運転しようねってことである。

夏だ！海だ！水着だ！を味わう前に、まずはその海へと辿り着かないといけない。今  
回選択した海水浴場は南伊豆にある穴場のスポットである。海が綺麗な上に人がほと  
んど居ないらしいのだが、車で片道4時間程度掛かってしまう。そのことを雪ノ下に相  
談すると、彼女は快諾どころか寧ろ嬉しそうだったので即時決定となった。綺麗な海と  
いうのが効いたのだろうか、そんな海と雪ノ下の組み合わせが早く見たいです。

7月も最終日となった土曜日、午前7時に雪ノ下を迎えに行くと同時にお手製の朝食  
をご馳走になる。スケジュール的には温泉旅行の当日を思い出しますね、あの日と違っ  
て昨夜は普通に雪ノ下とご飯食べに行きましたけど。

「わざわざレンタカーを使わなくても、実家から車を借りても良かったのに」

「いや、高級車乗り回すのは怖いってのと、お前の家族に借りを作るのも怖いから……」  
雪ノ下の父親に娘と二人で海に行くなんて知られたら、望み通り海……というか東京  
湾に連れて行かれるかもしれない。会ったことないから人柄とか知らないけど、俺が雪  
ノ下の父親なら絶対に許さないのだから。

俺がレンタルしたのはマツダの五人乗りの車である。人数的には軽自動車でも充分  
なのだが、長時間のドライブなので足回りを重視してみた。それに、もしもの場合には  
車の剛体性が必要だろうからね。まあ、車にはあまり詳しくないので、ネットの情報で  
選んだだけなのだ。

用意したアイスボックスに雪ノ下が作ってくれたお弁当を収納する。中身は着いてからのお楽しみらしい。他にも飲み物を何本か入れてある。

運転席に乗り込み、改めてバックミラーや席位置の調整を行う。雪ノ下のマンションに来るまでももやったのだが、念の為に恥づかしさを誤魔化す為に再度行ってしまう。

その恥づかしさの原因が助手席へと乗り込んでくる。白いワンピースなんて着ちゃってるのだから、運転中に目を奪われないように更に緊張感が増加する。勘弁して欲しいものである。

事故の要素は事前に減らしておきたい、その一心で俺は口を開いた。

「運転途中に見惚れると危ないから、慣れるまで見てもいいか？」

僅か10分で見切りをつけ、目的地へと出発する準備を再開する。少し暑くなった車を冷やすために冷房を強め、カーナビを起動して目的地を入力する。

「んじや出発するぞー」

「ええ、道案内は任せなさい」

テンション高めな雪ノ下さんにほっこりする。俺は頼れるパートナーに改めて挨拶をした。

「……ああ、道案内宜しくな」

「ちよつと、カーナビの画面じゃなくて私を見なさい」

便利になったものだ、もし助手席の彼女の案内で運転することになったら間違いなく辿り着けなかっただろう。

お隣さんから苦情紛いのお小言が来ているので、軽くいなしておこうと口を開く。

「お前のことはさつき散々見てただろうが……」

「……………」

そこで照れるなら見ろとか言わないで欲しいんですけど？

固まってしまった空気を動かすようにシフトレバーをDに入れて、ゆっくりとアクセルを踏み込む。加速度をあまり感じないように気を付けながら。

「道中長いから、適当に音楽とか流してていいぞ」

「そうね、退屈に感じたら流そうかしらね」

4時間もトークで場を繋ぐ自信など無かったのだが、赤信号で止まる度に周りに見える景色の話を、運転中は楽しそうに鼻歌なんかを聴かせてくれる彼女のお陰で、退屈なくせずに目的地へと近付いていく。

一度、高速道路のサービスエリアで休憩を挟み、軽食を取って水分補給を行った。綺麗に広がる青空による影響なのか海が近付いていることへの高揚感では分からない

けれど、雪ノ下はずっとニコニコしてくれている。

「あなた運転上手いのね、ちよつと意外だったわ」

「……自覚はないんだが、確かに乗せた人には褒めてもらえるんだよな」

大学時代に免許を取ってから実家で運転したり、会社でも先輩社員の外部移動の送迎なども偶にだがやっていたりする。特別なことはやっているつもりは無いのだが、大概は褒めてくれるのだ。何なら教習所ですら教官に褒めてもらったまである。頭文字Dを読み込んでいるのが効いているのだろうか。

「それなら将来は私の送迎をしてみらうのもありかもしれないわね」

「いや、今も結構送り迎えしてるでしょ……」

雪ノ下は一体何を言っているのだろうか。まさか、今後は車での送迎をしろつてことですか？車さえ有れば別に構わないというか、安全面と体力面を考えたら普通に良い案まである。ローンを検討するべきだろうか……。

「ふふ、休日じゃなくて会社の送り迎えの話よ」

え、平日は業務時間被ってるから流石に厳しいんですけど…。

頭上にハテナマークを浮かべて悩む俺を見て、彼女は相も変わらず笑顔を浮かべていた。

苦節、いや安穩の時間を経て漸く目的の海岸へと到着した。手前のトンネルを通り抜けた時に見えたマリンブルーの綺麗な海模様が今や目の前にある。

波が打ち寄せる音がとても心地良く、透明度の高い水は海底までしっかりとその容貌を露わにしてくれている。

テトラポッドに囲まれたその海辺の近くに持つてきたパラソルと椅子を並べていく。ここは砂浜はなく、下がコンクリートなので安定性は問題ないだろう。穴場と言うだけあり、他の人は俺たちを除くと男女のカップルが4人居るだけだった。

人が見ていない間にタオルを使って水着に着替える。面白味もない膝丈に合わせた青のサーフパンツを履いて白のラッシュユガードを羽織る。

雪ノ下は車で着替えてもらっている。穴場たる所以だろう、ここには更衣室などを用意されていないのだ。周りに居る女性などどうでもいい、俺は雪ノ下の水着だけが見たいのだ。そんな想いを抱きながら波で揺れ動く水面を眺めて彼女の到着を待っていた。「待たせてしまったかしら……」

後ろから控えめに声を掛けられる。振り向けば雪ノ下の水着姿が見ることが出来る、まさに緊張の瞬間であった。

今日の雪ノ下の水着を俺は把握していない。先週に一緒に買いに行つて水着の種類ごとに一着ずつ選びはしたものの、試着した姿も見せてもらえず、買った水着も教えて

もらっていない。だからこそ一週間もの間、悶々と過ごさざるを得なかったのである。

その鬱憤を晴らすかのように俺は笑顔で後ろを振り返った。

「……………何……………だと……………」

後ろを振り返ると、膝上まである白いパーカーを着た雪ノ下がそこに立っていた。

サンダルを履いた細くて白い綺麗な素足を見せてくれているのは嬉しいのだが、パーカーのファスナーが鎖骨付近まで閉められているので水着を見ることが出来ない。

「比企谷君に最初に見て欲しかったから」

雪ノ下は照れるようにこちらを見つめ、ゆっくりとファスナーを下ろし始める。彼女の言葉の意味を噛み砕く暇もなく、その光景に目を奪われる。心臓は痛いほどに鼓動し、彼女の一挙手一投足に心も奪われていく。

やがてファスナーがその使命を果たすと、全てが露わになった。

「……………綺麗だ」

言葉を失いそうになるほど、彼女の水着姿は魅力的であった。

白い素肌の対になるかのような黒いビキニが彼女を包み、彼女の美貌をこれでもかという程に引き立てている。

知っていた筈の細くて長い脚はその全貌が見えることでより一層の魅力が溢れているし、控えめだと思っていた胸元にも健康的な膨らみが確認できる。無駄な脂肪が一切



付いていない身体だからか、大きくはなくても充分なメリハリを感じる。そして、細いながらも女性特有の美しい曲線が腰回りに描かれており、その中心には縦に伸びる綺麗なお臍が鎮座していた。

じつと見過ぎたせいか、雪ノ下の肌が少しずつ赤くなっていく。全身見えることで、赤くなっていないところとの対比が綺麗で余計に気になってしまう。うーん、可愛い。

「……見てくれるのは嬉しいけれど、隅々まで見るのはやめて」

そう言葉にすると、上目でこちらを細目で見つめ、腕を交差して胸元を隠してしまう。いやー可愛い、一生護りたい。

世界一綺麗で可愛い雪ノ下の水着姿が周りの男共にジロジロ見られていないかを確認する。どうやら、わざわざこんな秘境まで来るような男は自分の彼女にしか興味が無いらしく、二組ともきやつきやうふふしている。この海に雪ノ下が来ているというのに、全く馬鹿な野郎達である。

「それにしても、まさかビキニを着てくれるとは思ってなかったわ」

「あなたが人が居ない所を探すって言っていたから……」

良かった……穴場を探して本当に良かった……。

空を見上げて、過去の自分を誇らしく思う。今日の空は快晴、文句なしの海日和だ。

海での楽しみ方を俺は分かっていない。既に充分以上に楽しんだとも思うのだが、海自体を楽しんだ訳ではない。取り敢えず膝ぐらいまで浸かる程度の浅瀬まで移動した。

周りのカップル達を観察しても、水を掛け合ってるだけに見える。あれが楽しいのだろうか、物は試しと手のひらの先で水を掬って雪ノ下の綺麗なお臍を狙って水飛沫を放つ。

「きゃっ……」

急に掛けたからか、可愛いお臍にヒットしたからかは分からないが、彼女が可愛らしく声を上げて身体を縮こませる。

……なるほど、これは楽しい。完全に調子に乗った俺は次はその白くて細い肩を目掛けて躊躇することなく水を掛けていく。嬌声にも似た可愛らしい声と水に濡れる彼女の身体を見て興奮しない男は居ない。

「……いい加減にしなさい！」

受け身であった彼女の目には闘志の炎が宿り、片手を鞭のように使って海面を切り俺の顔面に目掛けて水を放った。

「うおっ……ぐおおおおお」

「ふふ、これで少しは滑りが取れたんじゃないかしら」

海水が目クリーンヒットし、涙が出るほど目に染みる。痛い、痛いけど何故か悪い

気はしない。

目覚めたのではない、きつと夏の海という状況に浮かれて馬鹿になっただけなのだろう。仕返しに俺も目一杯の水を彼女の身体に目掛けて放ち返す。水飛沫には太陽の光が反射して、きらきらと眩しい程に輝いていた。

暫く水を掛け合つた俺たちは、一度陸へと戻つて昼食を取ることにした。

アイスボックスから取り出された四角く包装された風呂敷を解くと、二段重ねの重箱が姿を見せる。その一段目には色取り取りのサンドイッチが詰められており、もう一段には唐揚げを始めとした美味しそうなおかず達が顔を覗かせる。

パーカーを羽織つた彼女にどうぞと勧められ、頂きますをしてサンドイッチを手に取つた。種類豊富な中から先ず口にしたのは卵サンドである。マヨネーズと合わさつてしっとりとした卵が程よい塩気と酸味を効かせており、汗をかいた身体には堪らなく美味しく感じる。

「……………」これもどうぞで」

俺がサンドイッチさんに感動していると、横から彼女に唐揚げを箸で差し出される。水を掛け合つていた時よりもずっと近いその距離に気が付いた。潮の香りに混ざつても弱まることのない彼女の匂いに久しぶりに動揺し、急激に鼓動が早まっていくのを感じ

じる。ただの ” あーん ” に何を今更戸惑っているんだ。

彼女の箸から俺の口へと渡された唐揚げを噛み締める。揚げてから時間は経っているのにそのサクサク感には健在であり、塩とニンニクで味付けされたもも肉は柔らかくて大変に美味である。

「ふふふ、お弁当もちゃんとお口に合ったかしら」

「……当たり前だろ、雪ノ下が作ってくれた弁当なんだから」

自分が作った訳でもないのに、少し誇らしげになってしまったのは何故だろうか。理由はきつと浮かれていたからなのだろう。海は川の水と違って身体が浮くのだから妥当な理由である。

俺たちは自然が奏でる波風の音を聞きながら、ゆっくりと初めての雪ノ下の弁当を堪能した。

昼食後はもう少し深い場所へと移動して軽く泳いでみたり、テトラポッドの近くにいた小魚たちを眺めたり写真を撮ったりして過ごしていた。激レアである雪ノ下の水着写真もツーショットが条件だったけれど、しっかりと入手することが出来た。密着するその際には腰まで海に浸かることで事無きを得ました。

日が落ちるにはまだ早い時間だけれど、帰路に掛かる時間を考えて5時頃には帰る準備

備をし始める。此処には簡易シャワーすら無いので、持ってきた水を使って軽く海の塩を洗い流す。残りは近くの伊豆温泉でしっかりと落とす予定だ。

「ねえ、来年も海に連れてきてくれる……？」

しっかりとファスナーを胸の上まで閉め切っている雪ノ下にそう言葉を投げられる。

「当たり前だろ」

そのファスナーを下すことが出来るのだから、俺は何度だって海に足を運ぼう。

そんな下心は半分冗談として、こんな遠くまで足を運んだ海はその甲斐以上の成果があったと思う。そもそも道中が全く苦じやなかったというのもあるが、太陽の下で水着で笑う彼女が見られたことが何よりも大きかった。

今度来るときはシュノーケルなんかも楽しんでみよう。ボートも良いかもしれない。彼女としたいことが増えていく。それを叶えることが出来ると思っているからか、未来を想うだけで口角が自然と上がるのを感じる。

「……来年も、その先も、また来ような」

「……ええ、もちろん」

お互い自然に手を出して指を重ねる。

一つの貝殻のように閉じられた手は暫く離れることなく海辺に佇んでいた。

温泉に入つて疲れを癒し、新鮮な海鮮に舌鼓を打った俺たちは帰路を辿っていた。

湯上りの雪ノ下に改めて悩殺されたのは言うまでもないのだが、『泊まりに行く約束、今日でもいいのだけれど』と上目で誘われたのにしつかりと車を走らせている俺は強い。いや寧ろ、よわよわのヘタレなのだろう。脳内でメスガキver.の小町に罵倒されてしまいそうになる。

そんな雪ノ下の誘惑のせいで、時折目に入るホテルの看板を見ては動揺しそうになる。唯一の救いは助手席からはうつすらと心地よい寝息が聞こえることだろう。安らかに眠つてくれていることに、穏やかな気持ちが強くなつて俺を支配してくれる。

あんなに手の込んだお弁当を作つてくれていたのだ、きっと夜が明ける前から起きて準備をしてくれていたのだろう。彼女が目覚めたら改めて感謝の言葉を言おう。美味しかった、ありがとうつて。

彼女の頭を撫でることも、その寝顔を眺めることも出来ない。だからこそ、今はハンドルと足のペダルに集中して気を付けて運転するべきだろう。彼女にはこのまま眠っていて欲しいから。

アクセルペダルをゆつくりと踏んでいく、身体が加速度を感じないように。

他の誰かと比較する必要なんてない、俺と彼女の加速度で進んで行きたいから。

サイドミラーを確認するついでに目に入った彼女の寝顔もまた、優しい笑みを浮かべていた。

## やはり俺の社会人生活は間違っている # 2 2

8月に入り、暑さが一層厳しい日が続いている。多くの主要都市で猛暑日と定義される35℃を超える日が観測され、前年よりも熱中症の緊急搬送数が著しく増加しているらしい。札幌ですら猛暑日が観測されているのだから驚きである。俺が小さい頃には札幌は夏でも涼しいイメージがあっただが、今では地球温暖化の影響なのか東京や千葉とあまり変わらない。

地球さんの変化が著しい一方で、会社の働き方に変化はほとんど無い。クールビズが登場し、ノーネクタイやノージャケットが登場してからはそこで進化が止まってしまった気がする。後は各々でネッククーラーを使用したりして対策する必要があるのだろう。

文句は程々にして、来週からはお盆休みが始まる。学生時代はお盆と聞くと、夏休み中にある親の実家に帰ったりすることがある期間というイメージだったが、社会人になってからはゴールデンウィーク並みにテンションが上がるようになった。理由は単純明快で社会人の夏休みだからである。基本5連休ではあるが、この暑い中を休めるの



は非常に有難い。

そんな連休の前祝として、本日は夏祭りに行く予定だ。

本日、7日の土曜日の夕方に近くで行われる夏祭りへと行くことになっている。雪ノ下からの提案だったので二つ返事で了承したのだが、追加で浴衣着用を条件付けられてしまった。彼女の浴衣姿が見られるのは嬉しい限りなのだが、自分の浴衣には需要があるのだろうか。浴衣自体は実家に戻れば親父の物を借りることが出来るかもしれないが、色々と面倒なので自分で用意する方法を調べることにした。

方法の一つは浴衣レンタルと呼ばれるサービスを利用することだった。レンタルしたい浴衣をサイト上で選択し、配送してもらう方法だ。値段も五千円程度なのでお財布にも優しい目である。

もう一つは普通に購入することである。安い物を選べば1万円掛からずに帯やらもセットで購入できるので、2回以上着る予定があるなら購入も有りだろう。

俺はあまり迷うこともなく、藍色の生地の浴衣セットを購入することにした。帯は白で信玄袋と呼ばれる小物入れと下駄も付いてきており、準備万端である。

予定の時刻に間に合うようにネットで調べながら着付けを行って家を出た。今日は風があまり吹いていないが、適度な雲と陽が落ち始めているおかげで気温はそこまで高

くない。念のため、ミニサイズのミネラルウォーターを購入して信玄袋の中へと収納した。

雪ノ下のマンション下に到着したので彼女にメッセージを送信し、待っている間に雪ノ下の浴衣姿を想像してみる。自分用の浴衣を調べている時に幾つか女性用の浴衣も見っていたので、雪ノ下に脳内で着せ替えを行うことが可能なのだ。……おいおい、これ写真のモデルを雪ノ下にするだけで売れ行き倍増するだろ。

そんなビジネスチャンスを感じていると、カランコロンと趣のある音が聴こえてくる。実際にはそんな音ではないのだが。

エントランスの扉が開く音がしたので、俺は待つてましたと振り返る。そこには何時もとは違う姿をした天女が居た。

「……浴衣似合っているじゃない」

そう柔和な笑みで語り掛ける彼女の浴衣姿は圧倒的だった。

美しい濃いめの紫色を基調としたその浴衣には白の花模様が散りばめられている。腰には黄色の帯が締められており、その帯にも赤で花の模様が描かれている。夏の夜に咲く花火のようにも見えるその浴衣に合わせるかのように、彼女の美しい黒髪は三つ編みのおさげとして片側に垂らされていた。

「月並みな言葉で悪いんだが、凄く似合っているし、凄く綺麗だぞ……」

こんな言葉しか紡ぐことが出来ない自分が情けなくなる。もっと伝えたい内容がある筈なのに言葉にすることが出来ない。だからせめて、感情だけは数少ない言の葉に乗せようとした。

頬が紅くなつていく彼女の手を取って歩き始める。顔を突き合わせるのが面映ゆいというのもあるが、それ以上に早く彼女に触れたかった。

固く握った手の平から伝わるその温度が、足りていなかった言葉を補ってくれている気がした。

目的の祭り会場までは数駅離れているため電車を使って移動する。休日の夕方ということもあり、駅構内には多くの人で溢れていた。同じ予定の人々も数多く見受けられ、浴衣を着ている女性も少なからず目に入る。しかし、気にはならなかった。

電車が到着し扉が開くも、降りる人は少ないため扉側に立つことを余儀なくされる。電車が発進すると、隣に立つ雪ノ下の身体が慣性の影響で少し傾いた。普段であれば問題ない程度の方だったのだろうが、下駄を履いた状態では少し不安定だったのだろう。咄嗟に彼女の腰を抱いて支える体勢に入った。

「危ないから掴まっとけ」

「え、ええ……そうさせてもらおうわね」

俺の言葉に反応して、彼女はゆっくりと動き始める。

いつだったかのように、指先で俺の袖を摘まむようにして掴まると思っていたのだが、雪ノ下は隣から目の前に移動をすると俺の腰へと手を回した。

彼女が移動する間も、揺れに備えて彼女の腰に手を回したままだったのだから、まるで抱き合っているかのような体勢になってしまっている。

流石に周りの目が気になってしまうので、俯いている彼女に声を掛けようと少し腰を曲げて下を向いて口を開く。

「……おい、雪ノ」

言葉を投げ終える前に雪ノ下がその顔を上げた。

………声が出てこない。

白磁のような肌が朱に染まり、綺麗な瞳が、長い睫毛が鼻先で触れてしまいそうな場所に位置している。

彼女との距離感は以前よりもずっと近くなったつもりでいた。実際に抱き締めたことだつてある。けれど、こんなに彼女と顔の距離が近付いたのは初めてだった。

上目でこちらを見つめている彼女の、強く触れたら壊れてしまいそうな薄い綺麗な唇に普段以上に惹きつけられてしまう。

雪ノ下の瞳が熱く潤んでいる。何かを羨望している。だが、言葉は出せない。出してはくれない。

もし、今この瞬間に電車が強く揺れるようなことがあれば……そんな想いが湧いて出でる。

そんな想いとは裏腹に、電車は揺れることなく目的の駅へと到着する。

立っている側の扉が開いたので、慌てて向き直って降車する。電車を降りた数多くの人々に混ざり合いながら、俺たちは改札口へと足を運んでいた。

浴衣を着ている人たちの背中を追うように歩いていると、活気ある騒々しさが視界に入った。赤、青、黄色と分かりやすい大きな文字が出店の暖簾として存在感をアピールしている。

忘れることなど出来やしないが、この騒ぎに乗じて気持ちを切り替えて彼女に声を掛ける。

「雪ノ下は何か食べたい物とかあるか？」

彼女は軽く息を吐くと、可愛らしく首を傾げて考え始める。

特に思いつかない、と微笑んだ彼女の手を引いてゆつくりとその喧騒の中へと足を運んだ。

夏祭りで食べる物など子どもの頃から変わりはない。たこ焼きに焼きそば、かき氷に串焼きくらいだろう。変わったことは、飲む物がラムネからアルコール入りドリンクになったことぐらいである。

ただ、あまり変わらない夏祭りの内容よりも、隣を歩いてくれている彼女と寄り添いながら楽しめることが何よりも嬉しく感じた。

いつものメニューを食べ終え、出店を一通りは見て回った。見終わってしまった。

「……もう一周ぐらいは見て回るか？」

「いいえ、もう満足したから帰りましょうか」

彼女は確かに満足そうな微笑を浮かべていた。だが、少しだけ疲労の色が見えてくる。

人混みの中を慣れない下駄で歩いて疲れたのだろう。それに、無駄に出店のおっちゃんに声を掛けられるものだから、気疲れもしている筈だ。まあ、そのおっちゃんのサーブスで基本的には半額で済んでしまったのだから悪い気はしない。絶世の美人のみが為せる業なのだろう。

「……じゃあ送っていくわ」

「ええ、よろしくね」

そう言って笑う彼女の手を握り直して駅へとゆつくりと歩き始めた。

「そう言えば、折角の三連休なのだから泊まってくれても良いと思うのだけれど……」

「……まあそうね、そうしたいのは各かではないんだけどね」

可愛らしく言われると思考停止でYESと答えそうになるから困る。

ただ、私浴衣ですからね、明日この格好で帰るの恥ずかしいから嫌なんですよね。

「ちゃんとパジャマとは別に服も用意してあるから」

「あ、はい」

当たり前のように何故か準備されている服があるらしい。俺の部屋に雪ノ下の着替えが置いてあるのは、以前に泊まった時に着ていた服をそのまま置いていったから仕方ないとして、俺はそんな事はしていない。

このままでは衣食住全てを握られてしまうかもしれない。そんな危機感が芽生え始める。

「ふふ、折角だから花火でもしない？ 線香花火だけでいいから……」

祭りで浴衣と来たたら花火を見たくなる気持ちは分かる。折角、彼女が飛び切り綺麗な装いをしてきているのだ、花火と合わせてみたくなるのは自然な気持ちだろう。

了承の意を伝え、もう近くまで来ていた彼女のマンション傍にあるコンビニへと足を運び必要な物を購入した。

そして近くにあった公園まで歩き、手頃な場所に屈んで花火の準備をする。線香花火とチャツカマン、それに買ってあったミネラルウォーターを取り出した。熱中症対策のために買っていた水を花火の処理に使うなんて想像してはいなかったけれど、予定よりも喜ばしい使い方だと思えた。

カチャリと音を立てて、火を点ける。そこに二人で線香花火の先端を加熱していく。先端部はやがて橙の球状へと形を変えていき、無性に懐かしくなる火薬の匂いが鼻腔をくすぐる。

ぱちぱちと音を立てながら火花が散り始め、四方八方へと激しく橙や黄、桃にも似た色の花が咲いていく。

大した光量でもないけれど、その花々に照らされる彼女の微笑には幻想的な美しさが備わっていた。

不意に彼女と目が合ってしまった、動揺から持っていた線香花火の寿命を終わらせてしまおう。

落ちてしまった……いや、疾っくの疾うに落ちていた。

そんな今更なことを改めて自覚し、恥ずかしげに彼女の目を見やるとまたしても視線がぶつかる。

「あっ……」



同じように落としてしまった彼女と顔を合わせ、どちらからともなく笑い始める。暫く笑い合うと、雪ノ下は久しぶりに挑戦的な表情を向けて口を開いた。

「ふふ、次の花火で勝負しましょうか」

「……望むところだよ」

やはり俺たちにはこういった空気が合っている。

「普通に勝負したらあなたに勝ち目はないから、お互いの顔を見ながらってルールにしましょうか」

「それは俺の顔が面白いつて言っているのか？」

「そうは言っていないわ、ただ無性に笑ってしまうだけよ」

「やっぱり可笑しいんじゃないか」

「……おかしいのはきつと私でしょうね」

俺の顔が面白可笑しいと言われてしまったが、久しぶりに何も考えずに会話が出来た気がする。

少し夢げに微笑を浮かべる彼女と目を合わせて、線香花火に同時に火を点け始める。紙の燃える匂いが放ち始め、橙の光が球状に変化する。

そこから彼女の瞳をじつと見つめ始める。

「……何か賭けましょうか？」

無意識に開いたその口を、唇を見つめてしまう。

「……………いや、今回は賭けは無しで」

賭けてしまったら、きつとその唇を奪ってしまうから。

自分の力で奪ってしまいたい、時間が掛かったとしても。

「……………仕方ないわね」

そう言って笑う彼女の瞳を見つめ直す。下で綺麗に輝く光を反射している彼女の瞳をただ見つめていた。彼女も同じように視線を上げて俺の瞳を見つめ始める。

お互いの瞳には火花ではない、確かな熱が宿っていた。

パチパチと鳴っていた音が止まり、指先に線香花火が天寿を全うした感覚が伝わる。

彼女の持つ花火を見ると、その光はもう残ってはいなかった。

彼女の家の扉を潜ると、甘い匂いを感じる。先ほどまで火葉の匂いを嗅いでいたからかもしれないが、雪ノ下の匂いをここまで甘く感じるのは変態性が高い気がする。もはやアルコールの影響だろうか、お酒を飲んだ状態で入室したのは初めてだしね。

そんな自分に恥じていると、風呂に入るために浴衣を脱ごうとする雪ノ下に帯を外したいかを訊かれて辱められる。そんなのしりたいに決まっているだろうに。首を縦には振れませんでした。

雪ノ下が風呂に入っている間に、彼女が点けてくれたテレビを見ながら今日を振り返って一人身悶える。今日の雪ノ下が艶やかで麗しくて綺麗で可愛かったとはいえ、理性を失いかけたのは頂けない。反省しないとイケないだろう。

だが、そんなことよりも重大な事実気付いてしまった。

「……………写真撮んの忘れてた」

本日の彼女の姿を収めた写真があれば敗北覚悟で待ち受けにしただろうに……。びえん。

涙ながらに風呂に入ったからか、部屋に入った時ほどの匂いを感じずに入浴を終えることが出来た。九死に一生を得た感じである。酔いも覚めてきた気がする。

少し着慣れた。パジャマに袖を通して、彼女の待つリビングへと足を運んだ。

髪を乾かし、その艶のある長い黒髪を下している彼女の隣に腰掛ける。二人並んで、視聴途中のアニメを観賞し始める。声も出さずに体重を預けてくれる彼女の体温を感じながら、画面から発する光を眺めていた。

区切りは良くないが、3話ほど見終わったタイミングで掛けられていた重みが離れ、彼女は席を立って寝室へと向かってしまう。もうそろそろ眠るのだろうか、そう考えて俺も席を立とうとしたその時、寝室の扉が音を立てて開き彼女が姿を見せる。

「……誕生日おめでとう。これが二つ目のプレゼントよ」

手の平サイズの立方形の梱包を持って、彼女は優しく笑っていた。

そう言えば、今日が俺の誕生日だったっけ。

「……ありがとよ、その、開けてもいいか？」

ゆっくりと首を縦に振る彼女を見てから、それを受け取って蓋を開け始める。

中にはシルバーの腕時計が入っており、二つの針が12を指し示していた。

「在り来たりかとは思ったけれど、これを贈りたかったから……」

「何言ってるんだよ、凄いい洒落なデザインじゃねーか」

黒の盤面に緑の時計の針、シンプルだからこそ一つ一つのクオリティが際立ってい

る。

仕事に行くときはこの腕時計を身に付けよう。少しはやる気も上がる気がする。

「絶対大事にする、本当にありがとな」

「……ふふ、ケーキも焼いてあるから、起きてから食べましょう」

二つ目のプレゼントはケーキなのだろう。由比ヶ浜の時も一色がプレゼントとして贈っており、由比ヶ浜が跳んで喜びを表していたことを思い出す。

こんなに嬉しい誕生日は初めてかもしれない。彼女には学生の頃にも祝ってもらっていたけれど、昔よりも今の方がずっと俺のこの胸が熱くなっているのだから。

暗くした部屋のベッドに二人並んで横になる。

彼女の言葉を待たずして、俺は腕を伸ばして彼女の温もりを待った。

昨日見たどんな表情よりも稚い笑顔を見せてくれる。温もりを与えてくれる。

そんな彼女を包むように背中中に手を回すと、満足そうにその瞳を閉じてくれた。

暫くすると、規則的な呼吸が聞こえてきたので背中に回した手を彼女の頭に移動させた。

艶のある指通りの良い綺麗な黒髪を撫でながら、想いを言葉にしようと口を開く。

「……………いつもありがとな」

伝えなくちゃいけない言葉はまだ口には出せないけれど、別の言葉にその想いを乗せることなら出来る。触れているこの手にも籠めているつもりだ。

俺もこの先はずっと雪ノ下と同じ時間を共有していきたい、その想いを。

今度は彼女の目を見て伝えてみよう、そう決意をした。

彼女の顔を見ると、少し紅くなっている気がした。もしかしたら、伝わったのかもしれない。

そんな風に思えて小さく笑ってしまった。

彼女の髪から手を離して、少しだけ掛け布団を下げる。お腹は冷やさないうように少し

だけ。

こんなに幸せな気持ちだが、夜が明けたら更に強くなるのだろう。そんな想いを抱いて、俺はゆっくりと意識を手放していく。

………幸せな誕生日をありがとう、雪ノ下。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #23

「……俺はお盆休みに実家に戻ろうかと思ってるんだけど、雪ノ下も来るか？」

私が実家に帰る予定は特にないことを彼に伝えると、自然と彼の口からそんな言葉が紡がれた。

一瞬、婚約でもしていたのかと錯覚を覚えそうになるほどに彼の口振りは自然であった。

その錯覚を差し置いたとしても、私の心は弾むようだった。少なくとも、彼に実家に呼んでも良いと思われているという証拠であり、私にとつても好機であったからだ。

それに、あの誕生日の夜から然程時間が置かれてはいないことも大きな要因だろう。

彼の問いには二つ返事で了承をし、本日に向けて準備を進めてきた。手土産の選択のために、さり気なく彼の実家で出される菓子の種類について聞き取り調査を行ったり、第一印象を良くするための服装を選んだり等だ。ただし、彼の口からは基本小町さんの情報しか引き出せないから、そこからの類推にはなってしまったけれど。

彼が迎えに来るまではもう少しだけ時間がある。もう一度不備がないかを確認しま

しよう。

本日4度目の最終確認が終わる頃、彼からの到着の連絡が届いた。

小町に会いたいという一心で実家へと帰省する。手土産に雪ノ下を連れて行けばポイントカンストして、また気軽に連絡してくれるようになって欲しいというほんの僅かな下心と、雪ノ下が実家に帰らないのであれば、なるべく一緒に居たいという大部分の想いから彼女を誘うことにした。

結果としては無事に来てくれることになったので嬉しい限りである。きつと小町とカマクラを可愛がってくれるのだろう。

炎天下の中、彼女の手荷物と柔らかな手を握って実家へと到着した。インターホンを鳴らすと、握った手の平から震えが伝わってくる。隣に立つ彼女を見やると、目を閉じて深呼吸をし始めていた。別に猫も小町も逃げないぞ。

「お兄ちゃんおかえ………えっ?！」

扉が開き、小町がその可愛らしい姿を見せながらも若干の気怠さを隠し切れずに出迎えを始める。だが、俺の隣に立っている手土産を確認した途端にその態度は一変した。

しゅばばと擬音が聞こえてきそうな軽快な動きで急ぎ玄関から外へと飛び出し、開け



た扉を手で押さえながら頭をペコペコと下げる。

「雪乃さんも来てくれたんですか！ いやー、外は暑いですから中へどうぞどうぞ……」

「ええ、ありがとう小町さん」

実の兄との対応の差が気になるところではあるのだが、雪ノ下のことを恭しく出迎えてくれることには感謝するしかない。雪ノ下は久方振りに会う小町に少し緊張しているようにも見えたけれど、これでもう憂いは無くなったのではないだろうか。今となつては兄妹揃つて彼女の笑顔に見惚れてしまっているのだから。

俺はそんな雪ノ下の後続く形で、久し振りに我が家の敷居を跨いだ。

「……比企谷君、今はその、いらつしやらないのかしら？」

リビングへと足を踏み入れると、雪ノ下は小声で俺に耳打ちをしてくる。懐かしい我が家の匂いとは異なる優しく甘いサボンを香らせている彼女の表情は少し不安げに見えた。ちゃんと居るから安心して欲しい。

「小町、早速で悪いんだけど連れてきてくれ」

了解であります、とポーズを取つて階段を昇っていく。大学生にもなつてその仕草が似合っているのだからやはり小町は小町である。大学生どころか、来年には社会人なんですけどね。

暫くして。パタパタと階段を降りてくる音が聞こえ始めると、雪ノ下は目を閉じてゆっくりと息を吐く。そして臉を上げ、開かれるであろう扉を真剣な眼差しで注視していた。

やがてその扉が開き、小町の笑顔が輝き、腕に抱かれたカマクラが「にゃー」と鳴いた。

「お待たせしました……つてお兄ちゃん、どうして雪乃さんを立たせたままなの？」

「……猫に対する意気込みが凄くてな、ソファアに座れつて言うのも憚られたんだよ」

俺は呆けている雪ノ下の腕を取ってソファアへと誘導し、小町は座った彼女のその膝の上にカマクラをそつと下す。比企谷兄妹のコンビ打ちに、然しもの雪ノ下も目を丸くしてされるが儘である。

雪ノ下の匂いを頻りに嗅いでいたカマクラが彼女のお腹を枕にこてんと寝転がったのを見て、彼女はその口角を上げて笑顔を見せてくれた。

カマクラを撫でる彼女の優しい笑みを中心に、この空間には優しい時間が流れ始めていた。

「両親は今、父方の実家に帰省してるので、かーくと遊んだり、お兄ちゃんて遊んだりしてゆっくり寛いで下さいね！」

カマクラを撫でる彼女の笑みを中心に、この空間の時間が一瞬停止した。

「……………そう、ではお言葉に甘えてあなたのお兄さんで後で遊ばせてもらうわね」  
「どうぞどうぞー」

「えっ、待って？」

小町は雪ノ下の急変に気付いているのか分からないが、兄を生贄に捧げることに躊躇いが一切ない。兄の事など見向きもせず雪ノ下の荷物の整理に取り掛かろうとしている。

「……………あれ、もしかしてこれってお土産ですか？　ありがとうございます、雪乃さん」

小町のその言葉で、雪ノ下の恐ろしい笑みは影を潜め、そわそわと可愛らしい雰囲気へと変貌する。今日の雪ノ下さんはどうしちゃったのだろうか、そして俺は助かったのだろうか。

「……………ええ、小町さんとご両親にと思って」

彼女のその言葉を聞いて小町は少し息を漏らすと、とびっきりの笑顔で口を開いた。

「ありがとうございます、雪乃さん！　それと、両親は雪乃さんのことを充分に知っていますし、間違いなく良く思っているので固くならなくて大丈夫ですよー」

本当かと俺を期待の眼差しで見詰める彼女に首の動きだけで肯定する。

大学生になり、お酒を飲める歳になってからは親父と一緒に晩酌を交わす機会も少なくなかった。その際に俺から話す内容なんて、今も近い距離に居てくれる彼女たちの

話が主に決まっていた。

始めは俺の言葉に猜疑心を持っていた親父だったが、愛する小町の言葉も合わさると信じてくれるようになった。捻くれた息子と仲良くしてくれる女性が二人も居ることに涙された時には少し苛立ちを覚えたけれど、両親は彼女たちのことを女神か何かだと認識するようになっていた。

安心してくれたのか、彼女にしては珍しく背筋を少し丸めて息を吐いていた。比企谷家の末っ子のカマクラは雪ノ下を見上げて優しい声で鳴いている。カマクラだって家族なのだから、きつと同じ認識なのだろう。

再び撫で始めた雪ノ下を横目に見ながら、俺は小町と共に荷物の整理をし始めたのだった。

夕飯の買い出しに向かった小町を見送った俺たちは、雪ノ下の希望で俺の自室へと移動していた。カマクラはリビングで寝ているので、真正正銘二人きりになっている。

ベッドに座って肩を寄せ合い、外から聞こえてくる騒がしい蝉の合唱を背景音にして俺たちは静かに言葉を交わし始める。

「ねえ、（ゴ）両親が不在なら普通は教えてくれると思わない？」

「……言ってませんでしたっけ」

隣から発せられる熱で額から汗が滴り落ちる。

おかしい、この状況で甘酸っぱい雰囲気にならないのは間違っている。

隣の彼女は確かな熱を持ちながらも、冷ややかな視線でこちらを伺いながら言葉を続ける。

「実家の状況について訊いても小町さんの情報しか話してくれなかったじゃない」

「……いや、小町しか居ないから話す必要ないかと思つて」

小町が居る以上の情報が必要なのだろうか、いや要らない。比企谷家男子の共通認識まである。しかし、彼女とは認識が違っていたようで、久々にお怒りモードを相手することになってしまっている。

ここまで怒るつてことは、何か強い思い入れがあつたのかもしれない。手土産に高そうなどら焼きを用意してくれたり、暑いのにジャケットを羽織つていたりしたことは彼女なりに考えがあつたのだろう。

「俺が悪かつた。きつと色んなことを考えたり、準備してくれてたんだよな」

「……嫌われてしまつたら困るもの」

彼女は不機嫌さを残しながらも、気弱そうに呟く。

その心配は確実に不要なので、訂正しておこうと少し強気に言葉を投げる。

「比企谷家で雪ノ下を嫌う人間なんて居る筈ないだろ……カマクラだつて即墮ちしてた

ぞ」

久し振りに帰ってきた俺には見向きもせず、雪ノ下の匂いだけで懐いてたからね。気持ちは大変よく分かるのだが。

何時の間にか尻を下げて、優しい目をした彼女が問い掛けてくる。

「……………」両親にも好かれていと思うていいのかしら？」

「小町も言つてたけど、気に入つてると思うぞ」

「……………」小町さんとカマクラさんにも好かれているのよね？」

「下手をしなくても多分俺よりも好かれているまであるな」

小町には長年付き添った兄の方が慕っていて欲しいとは思うけれど、雪ノ下への態度を見ると怪しいどころか、答えが出てしまっている気もする。カマクラに至っては俺は好かれていない自信があるので明らかだろう。

雪ノ下はそこまで聞くと、頬を赤く染めて俺を上目で見詰め始める。ベッドに置いていた手は重ねられ、太腿にもその柔らかな手が置かれてしまい鼓動の動きが速くなる。

蠱惑的な表情で心の奥まで見透かされそうなほどに深く見入れられ、その薄桃色で柔らかな唇を咲かせ始める。

「もう一人にも好かれていっていいのかしら？」

「……………」嫌いなやつを実家に招待したりはしないだろ」

小町から実家に帰って来るか確認の連絡を受け、最初に思い浮かんだのが雪ノ下の予定だったのだから考えるまでもない。無論、招待することへの抵抗など皆無だった。

高鳴る鼓動を抑えるように口にしたその言葉を、彼女はただ静かに聞いてくれた。

蝉の声よりも煩い鼓動が収まる頃、やがて揶揄うような口振りで彼女は言葉を紡ぎ始める。

「……そう、なら今度は私の実家に来てくれるのであれば今回の事は不問にしてあげてわ」

「それってご両親は居ない時になってことですよね？」

「ふふつ、必要ない情報らしいから言わないでおくわね」

男と女では両親に会う難易度は段違いだと思うのだが、そこら辺の理解はしてくれませんかね。

厳しい和解の条件に焦っている俺を差し置いて、彼女は心底楽しそうに笑っていた。

折角帰ってきたからには小町の料理を食べたい派閥の俺と、雪ノ下の料理を食べたい派閥の小町の熾烈な争いの結果、女性二人の共同作業による晩御飯が完成していた。

「美味しい、美味すぎるぞ小町……」

「それ作ったのほとんど雪乃さんだよ」

「……………」

小町からの視線が痛い、隣からの視線は生暖かくてむず痒い。ただ、この生姜焼きは美味しい。

この雰囲気有耶無耶にすべく、俺は一度箸を置いて小町に気になっていたことを訊いてみることにした。

「にしても、最近連絡しても返事をしてくれないのは何か理由があったのか？」

就職するまでは気軽に連絡してくれていたのに、就職を機に一人暮らしを始めてからは殆ど連絡は来ないし、こちらから送つても既読スルーされてしまっていた。こちらら悲し過ぎて有給を取ったこともあるんだぞ。

小町は隣に座っている雪ノ下に視線を動かして微笑むと、箸をゆつくりと置いて背筋を伸ばして俺の目を見詰める。大人になった彼女の優しい瞳で俺を見てくれていた。

「…………お兄ちゃんの小町への愛情を少しでも他の人に向けて欲しかったからだよ」

「おい、小町への愛を他のやつに向けるわけないだろ。小町の代わりなんて居る筈ない」  
「相も変わらずシスコンだなあ……………ポイント高いけど」

小町は苦笑しながら少し紅潮している頬を指先で搔いている。どうやら小町からの愛の試験に合格したみたいなので、再び仲睦まじい千葉の兄妹に戻ることが出来るのだ



ろう。俺はもう千葉在住じゃないけれど。

こほん、とお隣さんから咳払いが聞こえてくると小町は顔色を戻して話を続けた。

「小町の代わりは居ないかもしれないけど、代わりに使える時間とかお金とか色々あるじゃん？　去年はあんまり成果無かったみたいだけど、今年はバッチリみたいだしねー」

言い終わる前にニヤリとした表情へと変わって、俺と雪ノ下を交互に眺める。

フオローを求めて雪ノ下の方に視線を動かすと、同じようにこちらを見ていた彼女と視線がぶつかった。動揺を誤魔化すようにお腕を持ち上げるタイミングまでもが同時になってしまい、目の前の小町に揶揄いの表情で笑われてしまった。

「これは今夜の雪乃さんのお布団はお兄ちゃん部屋の部屋に用意しても良さそうですねー」  
「あら、別に布団を用意してもらわなくても結構よ。同じベッドで眠るから……ね？」

完全に揶揄している小町に対して、雪ノ下さんが強気に反撃している。完全に巻き込まれて事故つたのだが、最後の確認が可愛すぎて反射的に首を縦に振ってしまった。

「雪乃義姉ちゃんとお呼びしても……？」

反撃を受けた小町は完全に堕ちていた。こんな兄より雪ノ下みたいな姉が欲しかったのだろう。

「……そういうやり方は狡くないかしら、比企谷君」

「ふつ、小町に文句があるなら俺に言っても無駄だぞ」

小町の狡いほどの可愛さは俺には制御不能である。可愛くない部分も合わせて、俺が制御出来た時代は遙か昔だろう。今も昔も変わらない小町然とした彼女に無性に懐かしさを覚えながら、俺は箸を握り直して食事を再開した。

順番に風呂に入つて、就寝のために各々の部屋へと向かい始める。

結局、雪ノ下の布団は小町の部屋に敷かれることになった。これは小町の希望で、色々話したいことがあるからだそうだ。小町に昨夜はお楽しみでしたねと言われてしまふ朝を回避出来ることは素直に喜ばしい。

ソファアで隣に座っていた雪ノ下は小町がうきうきでリビングから出ていくのを確認すると、俺との空いた距離を静かに埋めて耳元で甘い声で囁いてくる。

「……その、寂しくなったら呼んでもいいわよ」

「……………呼ばないから安心しろ」

一瞬で眠気を剥ぎ取られながらも、彼女の口撃をなんとか回避する。

寂しくならないと言えなかつたのは、きつと？をつくことになるからだ。

満足そうに微笑んでリビングを出る彼女の背中を眺めながら、俺は様々な感情を押し出すように溜息を長々と吐いていた。

俺が自室へと向かうことが出来たのは、彼女の足音が聞こえなくなって暫く経つてからになるのだった。

ベッドが軋む音が聞こえ、背中には温かな感触が添えられる。やがて肩に柔らかな手が添えられると、俺の瞼は次第に開かれていった。

目の前には少し驚いたようにその瞳を大きく開けている雪ノ下が存在していた。暗

がりでもその頬が紅く染まっていることを確認することが出来る。めっちゃ可愛い。

「……ん、呼んだつもりはなかったんだが」

「……その、布団をカマクラさんに取られてしまったから」

カマクラはたまに布団の真ん中で丸くなることもあるし、トイレにでも行く際に居場所を取られたのだろう。朝起きたらカマクラにチュールでもあげようかなと考えながら、俺は反射で腕を横に伸ばしていた。

腕に乗せられた体温がいつもよりも熱く感じる。一人で眠ってしまつて俺自身が冷めていたのだろうか。その温もりを求めるように彼女の背中へと手を伸ばすと、同じように彼女の腕が俺の方へと伸びていく。彼女の手は俺の背中ではなく俺の頭へと着地し、好き勝手に動き回される。

「比企谷君だつて私の頭を撫でているのだから、私だつてしてもいい筈よね」

文句はないので黙つて撫で回されることにする。俺も彼女が寝ている間に好き勝手に撫でているのなもの。

「ふふ、少しカマクラさんに似た触り心地かもしれないわね」

「……飼い主に似るつて言うしな」

主かと言われると間違いなくノーなのだが、家族で同性だから似る部分もあるのだろう。

「……それならもう少し私に似た部分があっても良いと思うのだけど」

頭の撫で方が雑になっていく。相変わらず俺のことをペットだと思っ  
ているのだから。うか。

まだ家族でもないし、性別も違うのだから似てないで当然だろうし、何なら似てない方が良いに決まっている。

「……悪い、少し眠るわ」

眠い頭で考え事をするのも限界だったので、一言呟いて瞼を閉じていった。

撫でる動きが静かで丁寧になったことで、意識を保つことが難しくなる。とても心地が良くて幸せな気分になっていく。

一人で寝ていた時には無かった落ち着く香りと自分よりも高い彼女の温もりに包まれながら、少しずつ深いところへと落ちていく。ゆっくり、ゆっくりと。

彼女の甘い優しい声が耳朶に響き渡ると、俺の意識はそこで途切れる。

「……本当に幸せそうな顔で眠るのよね、あなたは」

## やはり俺の社会人生活は間違っている # 2 4

未だに厳しい残暑の残る9月へと突入し、現在はその下旬へと差し掛かり始めている。

台風は夏が終わる前に需要も無いのに駆け込みとして何度も訪日し、都心の交通機関に平気で影響を与えてくれる。早朝から電車が止まってくれたら休めるかもしれないのだが、大体は努力すれば通勤可能に調整されているためにストレスと疲労が溜まった状態で仕事をする羽目になるのだ。これが本当に辛いから勘弁して欲しい。

台風が水不足の解消に役立ったりすることは百も承知しているのだが、そう何回も来る必要はないのではないだろうか。あと、可能でしたら夜中に来ていただけると助かります。

会社までの行程が厳しい季節なのは仕方ないとして、現在弊社では新製品のリリースによる影響で業務が逼迫されてしまっている。普段は定時退社を余裕で決めている俺なのだが、上長命令で残業指示が出ている現在においては一日数時間程度の残業を強いられていた。

残業代が出ないということは一切ないので給料面的には悪くはないのだが、退社する時間が不明瞭なことが唯一で大きな問題となっている。

「……………金曜日に雪乃先輩とご飯食べに行けないだけじゃないですか？」

「ばっかお前、俺が一週間何の為に働いてると思ってるんだよ」

八幡は怒っている。目の前のあざとい後輩ではなく、繁忙期の弊社の業務状況について怒りを感じているのだ。9月頭から所謂繁忙期と呼ばれる時期に突入し、もう2週間も連続で雪ノ下のご飯イベントがキャンセルされてしまっているのである。

1週目は忙しいのであれば仕方ないわね、と流してくれていた彼女だったが、2週連続となると明らかに残念さを醸し出してしまい、挙句の果てには今日で3週連続記録を達成してしまいそうになっている。残業が確定してしまったら連絡してと言われているので、本日も後にキャンセルのメッセージを送信する必要があるのだろう。

「あ、今は食事中なのでその続きは食べ終わってからでお願いしまーす」

俺が怒りを吐き出そうとしていると一色からストップ指示が出る。そうだよ、愚痴聞きながらご飯食べたくないよね、ごめんね。黙って食事を再開した一色を見習って、俺もスプーンを握り直してカレーを食べる態勢に移行する。やはり金曜日にカレーは鉄板だ。

先に完食したので、時間潰しのためにスマホを取り出して画面を表示させる。そこに映っている愛らしい笑顔には常々癒されているのだが、きつと今日も曇らせてしまうことを考えると気が重くなる。どうかかしたいとは思うけれど、現実的な解決策は浮かんでこない。非現実的な案としては、さっさと仕事を辞めることだろうか。

一色は食事を終えて丁寧にごちそうさまと合掌すると、次の瞬間には嫌そうな表情を隠そうともせずにこちらに視線を移して口を開き始める。

「で、雪乃先輩のために働いている先輩は何が言いたいんですか？」

「そんなことは言っていない、俺は一週間の勤務に対する褒美が欲しいだけだ」

健康的に働くためには適度な疲労回復とストレス解消が必要になる。毎週金曜日の食事会もその一環なのだから本当に勘弁して欲しい。それに雪ノ下が送ってくる落ち込んだ猫のスタンプも見たくはないのだ。

「……何が違うのか全く分かりませんが、それなら簡単な解決方法があるじゃないですか」

そこまで口にする、彼女は頬杖をついて勿体振るように一呼吸を置いた。小馬鹿にするような表情で、けれど優しい声音で一色は言葉を繋げてくれる。

「同棲すれば毎日のように雪乃先輩とご飯食べられますよね、せんぱい」



上司から帰宅するように指示が出され、今週のお勤めが終了した達成感よりも疲労感がどつと押し寄せてくる。項垂れた視線で腕時計を見やると、二つの緑の針は定時から3時間が経過していることを物語っていた。

疲れた身体に鞭を打って残りの体力を絞り出し、何とか帰り支度を済ませて退社する。今週も結局、彼女との約束を駄目にしてしまった。

改めて雪ノ下に謝罪文を送るためにスマホを開くと、彼女から数件のメッセージが来ていることが通知されていた。中身はきつと、残念そうなスタンプと仕事が終わった俺を労う優しい言の葉なのだろう。

そう予測して開いた彼女とのトーク画面が目に入った途端、俺の足は気が付けば駅へと全速力で駆け出し始めていた。一秒でも早く彼女の元へと辿り着くために。

『仕事が終わったら、私の家に来てくれないかしら』

『遅くなっても構わないから一緒にご飯を食べましょう』

『来るまで待っているから』

彼女の部屋の前に到着し、まだ落ち着いていない呼吸を整えながらインターホンを押下する。

数秒の後、期待していた彼女の微かな足音を聴き取る前に目の前の扉が開かれた。

「……お帰りなさい、比企谷君」

シャンプーの香りを纏う部屋着の彼女に優しい笑みで出迎えられる。高鳴り続けている心臓が再び加速していくのを感じながら、お詫びと感謝の気持ちを伝えるために口を開いて静かに言葉を紡いでいく。

「遅くなって悪かった。……それとありがとう」

雪ノ下は俺の言葉を聞くと困ったような、呆れるような表情で首をゆつくりと左右に揺らす。

「相変わらずコミュニケーションが下手ね、たった四文字の返事も言えないのかしら？」

「………ただいま、雪ノ下」

「ふふっ、お帰りなさい」

彼女の愛らしい笑みと自分の発言で顔が次第に紅くなっていく。それを誤魔化すように彼女が開いてくれた扉を潜ると、オフィスとは全く異なる甘い空気と食欲を刺激する香りが鼻腔をくすぐった。

ここが俺の帰るべき家ではないけれど、無性に安心出来るのはきつと彼女が居るからなのだろう。そんな彼女は両手をちょこんと差し出して、何かを求めるポーズをしている。

次こそは間違えないようにと、そつと彼女の手に自分の手を重ねていく。空いている

方の手で、彼女の温もりと優しさに触れるために。

「お手ではなくて、その鞆を渡しなさい」

「……………」

死にたくなる気持ちを抑えながら黙って鞆を手渡すと、雪ノ下はその鞆を腕で交差するように抱いて肩を震わせて笑い始める。そこまで笑わなくてもいいじゃん、可愛いから文句は言わないけど。

手を洗って、リビングの方へ向かうとテーブルの上には美味しそうな料理が並べられていた。メインはロールキャベツのようで、一瞥しただけで胃袋が早く食べさせろと文句の音を放つ。

「食事の前にジャケットを脱いでもらえるかしら」

雪ノ下の言葉に反応し、走った影響で少し汗で濡れてしまったジャケットを脱ぐ動作に入る。すると、ぱたぱたと急ぎ足で後ろに回り込んだ彼女が、スーツの襟と片側の袖を掴んで脱衣の補助を行ってくれた。非常にむず痒い気持ちになるといふか、甘やかされていく感覚が強い。

「……………その、ネクタイも外す？」

外さない理由も特にないので、ネクタイを緩めてから一気にするりと抜き取って結び

目を解いていく。綺麗に畳んでから、ぼんやりとしている雪ノ下の差し出している手にネクタイを置いて声を掛ける。

「雪ノ下も疲れているのに色々とありがとうな」

「……………疲れの方は少し休んだから平気よ、席に座って少し待ってもらえるかしら」

またしても、ぱたぱたと音を鳴らして去っていく雪ノ下を見送り、お言葉に甘えて先にテーブルの方に着席する。久しぶりの仕事終わりの彼女との食事に胸を躍らせていたのだが、美味しい料理の前になかなか戻ってこない焦らしを味わうことになるのだ。た。

大満足の夕食を食べ終え、追い炊きされた浴槽に浸かって身体の疲労を回復させていく。風呂は命の洗濯というのは有名な言葉だが、こう汗水流した後に入るとその意味が良く分かるというものだ。涼しいオフィスで働いているのだから、汗水流した大半の理由が仕事ではないことはこの際置いておこう。

風呂から上がり、見慣れたパジャマに身を包んでリビングの方へ戻ると、雪ノ下が楽しそうに電話をしている様子が目に入った。相手が由比ヶ浜なのは話の内容を聞くまでもないだろう。

彼女は俺が戻ってきたことに気付くと、少し名残惜しそうに感謝と別れの言葉を告げ

て電話を切っていた。そして、ソファから腰を上げて俺の方へと微笑みながら近付いてくる。

「お風呂上りにビールでも飲まない？……あなたがお湯でお腹を一杯にしていなければだけれど」

「俺がお前の残り湯を飲んでる前提で話をするのはやめろ、それと折角だから頂くわ」

由比ヶ浜効果で上機嫌な彼女にビールを注いでもらう。グラスを使うだけで見栄えと泡が格段に楽しめるのが嬉しい。

軽くグラスを接触させて乾杯の音を響かせ、喉を潤すためにビールを流し込んでいく。キンキンに冷えている最初の一口の美味しさは別格だ。

隣からも勢いよく液体が喉を流れる音が聞こえてくる。彼女にしては珍しい光景だったので、少し惚けてその綺麗な喉元を眺めてしまった。

「相談というか、お願いがあるのだけれど……」

雪ノ下は口を付けたグラスを静かにテーブルに置き、両の手の指先を合わせながら控えめに言葉を続けようとしている。頬を朱に染め、上目でこちらを見る彼女に抗うことなど出来るのだろうか。

俺は照れを誤魔化すようにグラスを呷り、空になったそれをテーブルへと置いてから彼女の言葉を待った。

「これから金曜日には、なるべく私の家に来てくれないかしら。……その、一緒にご飯を食べられないのが嫌なのよ」

「俺も雪ノ下と一緒に飯を食べたいと思ってる、んだが……」

願ってもない話に飛びつくように乗り掛かろうとしてしまったのだが、雪ノ下の負担を増やしてしまうのではないかという不安が胸の内に現れる。きつと彼女はその負担を苦にならないと言ってくれるだろうし、実際にそう思ってくれるだろう。

けれど、それに甘え切ってしまうのは男として許容出来ないし、したくない。ただでさえ、彼女には返しきれない量の恩や想いがあるのだから、これ以上は甘受する訳にはいかないだろう。

「……最近は何時に仕事が終わるのかも分からない。それに、そこまでしてくれる雪ノ下へのお礼も思い付かないから」

「私に対しての返礼があればいいのよね？」

俺の言葉を遮った彼女へと視線を戻す。そこには頬の色はそのままに、見慣れた挑戦的な微笑が浮かんでいた。

「それなら、比企谷君には私のストレス解消と安眠性の向上に役立ってもらおうかしらね」

「……あまり乱暴にはしないで欲しいんだが」

安眠の方はまあ何となく恥ずかしい内容だと予想が付くのだが、ストレス解消の方は某作品のせいで兎の人形を殴る女性が思い浮かんでしまう。決して雪ノ下さんに殴られたい願望がある訳ではないことだけは信じて欲しい。踏む程度にして欲しいものである。

「ふふ、それは比企谷君次第かしらね」

彼女はそう楽しそうに笑うと、両の腕を俺の方へゆつくりと、そして真っ直ぐに伸ばしてくる。何事かと見守っていると、彼女の腕はそのまま俺の後ろへと回されようとしていた。

……素直に伝えてくれたらとは思うけれど、それはきつとお互い様なのだろう。だから、彼女が俺に触れるよりも先にその身体を抱き寄せた。

「……………もつと強くして」

力を入れて彼女を抱き締める。匂いも体温も溶け合って、混ざり合って、どちらが発している鼓動なのかすら曖昧になっていく。今はつきりと理解できることは、リラックヌ効果があるのは間違いないだろうということだけだ。

彼女が僅かに身を振るだけで、自分の身体とは異なる柔らかな感触が触れている面全てに再送信される。意識しないようにするにも限度があるのだが、彼女はお構いなしに居心地の良い場所を探してその身をずらしていく。

「……何時までこうしていればいいんだ？」

「そうね、落ち着くようになるまでかしら」

「擲揄うような熱い吐息を擁した言葉が耳元に吹き込まれる。一生離せそうにもないなんて、そんな軽い言葉を口にする余裕も俺には残ってはいない。

結局、落ち着くことがないままに彼女の希望で二人の身体は離れていく。少し汗ばんだ彼女の姿はとても煽情的で、彼女を想う気持ちだけが俺の理性を保ってくれていた。

パジャマに着替えた雪ノ下と同じ寢床に並んで寝転がる。この感情には未だに慣れないけれど、片腕を彼女の方へと伸ばす行為には慣れたものである。

普段よりも少し近い位置に咲いている彼女の笑顔に向かって、もう一つのお礼について訊くことにした。

「さっきのはストレス解消として、安眠の方は何をすればいいんだ？」

「……それくらいは比企谷君に考えて欲しいのだけれど」

「高いハードルに苦笑してしまいそうになるが、彼女が落ち着いて眠れるようになる行為など多くは思い付きはしない。取り敢えずは真つ先に浮かんだ頭撫でを実行しようと考えたのだが、雪ノ下の期待するような瞳がこそばゆく感じる。思えば、俺が撫でようとするタイミングは彼女が寝ている時だけだった。



「……少し、目を閉じてくれないか？」

「……………うん」

やけに幼さを感じる返事を聞き届けると、彼女はゆっくりとその瞳を閉じ始める。

俺は彼女が顔を少し上げてくれたお蔭で撫で易くなつた後頭部へと手を動かし、大切な物を愛でるように丁寧に指通りの良い艶髪を梳いていく。

再度その目を開いた彼女は、笑顔で左手を俺の頭へと移動させて撫で返してくる。移動途中で頬が抓られたことを除けばただのお返しなのだろう。

「地味に痛かったんだが、撫でるのはお気に召して頂けませんでしたかね……」

「……………撫でるのは自体は良いのだけれど、私もしてあげたのだから別のことをして」

おまけで抓ってきたのは、やはりストレス解消の一環なんですかね。

僅かに痛みが残っている頬を指で擦りながら、次なる安眠方法を検討する。雪ノ下がわしやわしやと撫で続けてくるせいで全く集中は出来ないのだが、不意にその動きは止められてしまった。

「もつと他にすることあるでしょう……」

消え入りそうな声でそう口にした彼女の、止まってしまったその手を優しく掴んで顔の前へと持っていく。自分の手で、指一つ一つで綺麗な細い指を搦め捕っていく。彼女の求めている行為かは分からないけれど、繋ぎ留めておきたかったから。

雪ノ下は黙って俺の目を真つ直ぐに見詰めてくれている。彼女に伝えたかった言葉は自然と口から零れ落ちるように空気を揺らした。

「これから先もよろしく頼むな、雪ノ下……」

彼女は軽く息を吐いて少し苦笑すると、搦めた指に力を入れて晴れやかな笑顔を見せてくれた。

「あなたがもし離れようとしたって、もう離してあげるつもりはないわよ」

痛い程に握られる感覚に笑いがこぼれる。もう一生離すつもりもない大切な指先にお返しをして、二人で暫く笑いあった。

熱いほどの体温で湿度が上がり始めた手のひらですら、もう離れる理由には及ばない。

固く繋いだ手は移ろい、今は腰の方へと位置している。視界から外れても尚、確かな繋がりを感ずることに安らぎを覚えていた。

小さな呼吸音だけが聞こえる暗闇の中で瞳を閉じる。

俺の網膜には幸せそうに眠る彼女の優しい寝顔が焼き付いて離れないでいた。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #25

心地の良い秋風が金木犀の香りを運んでくれる季節になった。

10月の中旬にもなると、夏の気配は完全に消え去っており、音も匂いも気温も全く異なった色を見せてくれている。春に次いで人気の季節だけあって、非常に過ごし易い時期である。

年がら年中美味しい雪ノ下の料理によつて、馬でなくとも肥えてしまいそうになる。食欲の秋だから一杯食べてねと勧められては断ることも出来ない。旬の食材を使った美味しいおかずが目の前にあるのだから、余裕で毎度白飯をお代わりしてしまつてい

る。業務の方も秋の訪れと共に落ち着きを見せ始め、現在では残業無しで帰ることが出来る日も少なくない。それでも金曜日には彼女の家で食事をご馳走になり、少々の心ばかりのお礼を返している。お礼ですらも俺の方が得をしている状況には些か申し訳ない気持ちがあるのだが、彼女の表情からは不満の色は見えないので深くは気にしないことにしている。

そんな順風満帆な社会人生活を送っていた平日の水曜日のことであった。

ディスプレイと睨めっこしながら、カタカタと音を鳴らしてキーボードを打鍵している。次こそは要修箇所のない完璧な資料を作成するべく、文字抜けや数字の打ち間違いにも注意を払って臨んでいる。

時折振動するスマホを横目に、腕に巻かれた時計で現在時刻を確認する。ディスプレイやスマホにも時間の表示はされるのだが、業務中には基本的に腕時計を眺めるようになっていた。

昼休みまで残り1時間、他に急ぎの仕事でも来なければ定時に帰れそうな状況に安堵していると、癒し機能付きのスマホが珍しく頻繁に振動を繰り返していた。流星に気になるので通知を見ると、雪ノ下からのメッセージが届いているようだった。

『お仕事頑張ってね』

最後に彼女から送信されたメッセージにはそう記されていた。上の履歴を辿ってみると、猫のスタンプを片っ端から貼り付けて送ってきている。暇ノ下さんは何をしていらっしゃるのだろうか。

『今日は会社は休みなのか？』

『ええ、有休を取っているわよ』

即既読、即返信の早業に苦笑してしまう。有休は年間5日の取得が義務付けられているので、俺も年始の連休でも伸ばすのに使おうかなと一応は考えている。

それにしても、彼女がこんな平日の真中を休みにするのは少し意外だった。計画的に取得するにしても、年末年始辺りに利用すると勝手に想像していたからだ。年始には誕生日もあるし、実家の方の行事も何かと忙しいだろうに。

……本日の彼女の奇怪な行動に思い当たる節があつたので、最後にこれだけは訊いておこうとフリック入力を開始する。

『もしかして、体調が悪かったりするの？』

『問題ないわ』

先程とは違い、少し時間が置かれてから返信が表示される。その内容を一瞥して、仕事へと急ぎ戻ることにした。俺には今日中に終わらせなければいけない業務が残っているのだから。

また私の悪癖が出てしまった。

素直に体調を崩していることを伝えたら、彼は来てくれただろうか。

仕事を投げ出してまで来てくれることは期待し過ぎかもしれないけれど、会社帰りにお見舞いに来てくれるくらいには気を使ってくれた筈なのに。

昔と比べたら幾分も想いを口に出ることが出来るようになった。けれど、本当に伝えたいことに關しては素直に言葉を紡ぐことが出来ていない。

この前の彼へのお願いだって、お酒の力を借りなければ、素面ではきつと口には出来なかつたと思う。何時まで経っても彼に対して素直になれない自分が嫌になつてしまふ。

返事の来なくなつてしまつた携帯を握りしめて、私は一人で瞼を閉じる。冷たくなつた布団には彼の残り香すら存在してくれていない。

「比企谷君……………」

せめて夢の中で会えたら、そんな想いから彼の名を呼び掛けてしまふ。

私の独白は誰の耳にも届くことなく、私だけが存在するこの部屋の中で静かに消えていった。

平日の真昼間にお天道様の下に居ることに後ろめたさを感じながら、俺は手に複数のビニール袋を引つ提げて彼女のマンションを訪れていた。

勘違いなら別にそれで構わない、寧ろその方が嬉しいまである。急に暇になつた目の死んだ男が平日の昼間に一人暮らし女性の部屋を訪れているだけの問題で済むからね。うん、通報されても文句は言えそうにありませんね。

エントランスに入って呼び出しを行うと、寝惚けた声が俺の来訪を喜んでくれていた。こういう時に合鍵でもあれば起こさずに済んだのだろうか、そんな大層な空想で胸を躍らせてしまう。

エレベーターで6階まで昇り、彼女の部屋のインターホンを鳴らした。

パタパタとスリッパが床を叩く小気味良い音が聞こえてくると、目の前の扉が一息に開かれる。

扉の先で微笑む雪ノ下は見慣れたパジャマを身に纏い、顔だけでなくデコルテまでも朱で色付いている。普段は白磁のような肌色なので、こういった事態の時には分かり易くて助かる。

「お帰りなさい、比企谷君」

「……ただいま、じゃなくて大丈夫か？」

少しふらついていている雪ノ下に急ぎ近付くと、彼女は倒れるように正面からもたれ掛かってきた。ワイシャツ越しに触れている彼女の体温が普段よりも高く感じる。やはり季節の変わり目に風邪を引いてしまったのだろう。

彼女を支えるために細い肩に手を添える。彼女を真っ直ぐに立たせると、まるで夢から覚めていくように段々と臆気だった瞳が改まり始める。先程までよりも更に紅潮した彼女は慌てて口を開いた。

「……………は、ハロウィンにはまだ少し日があつたと思うのだけれど」

「残念ながらこの目はノーメイクなんだわ」

毎年恒例のハロウィンジョークには一切覇気がない。例年であれば渋谷か池袋に行つた方が良いと勧められ、行きもしないイベントの撮影ルールについて教授してくれるんですけどね。

そんな可愛らしいトリックを後日の楽しみにしつつ、俯いてしまった彼女の様子を見守る。

「……………お仕事はどうしたの？」

消え入りそうな彼女の声が俺の鼓膜を確かに揺らす。体調を崩している彼女に気を使わせるのも忍びないので、なるべく明るい口調で言葉を返していく。

「急に午後は休みになつてな、暇だから雪ノ下に相手してもらおうかと思つて」

賢い彼女を騙せるとは微塵も思っていないが、少しでもその遠慮を振り払いたかつた。

彼女はゆつくりと顔を上げると、いつものような優しい笑みを向けてくれた。

「……………相変わらずね、けれどありがとう」

「感謝は今はいいから、取り敢えずベッドに連れてくぞ」

無抵抗な彼女を支えてベッドへと連れて行き、買ってきた食材を冷蔵庫へと詰めてか



ら彼女の元へと戻る。彼女は俺の顔を見て嬉しそうに微笑んでいるのだが、力ない表情では体調の悪さを隠し切れてはいない。

「起きてから熱は測ったか？」

彼女はゆっくりと首を振って否定する。体温計自体は持っているようだったので、場所を教えてもらい彼女に手渡す。

雪ノ下は俺の視線を気にもせず、無防備にシャツのボタンを一つ外して脇に挟み込んだ。その様子を眺め続けることに疚しい気持ちが芽生えたので、測り終わるまでは視線を外すことにした。

びびびと高めの電子音が鳴り、体温の測定が終わったことを告げられる。

視線を戻して、彼女の脇から取り出された体温計を覗くと37度8分と表示されていた。た。

「微熱だな、風邪引いた時ぐらいは頼ってくれていいんだぞ」

「……………迷惑じゃない？」

彼女の言葉に自然と溜息が零れる。俺がどれだけ彼女や小町達に迷惑を掛けて生きていると思っているんだろうか。俺はもう少し恥じるべきだが、彼女に頼られることを迷惑だと思ふ筈はない。

「体調が悪いのを教えてもらえない方が困る。常日頃から雪ノ下の体調が気掛かりで仕

事も手に付かなくなるわ。……だから、俺の為にちゃんと教えてくれ」

「……………うん、ありがとう」

そんな可愛らしい返事をした彼女の目からは布団で覆い隠されてしまったけれど、今の心情を読み取るにはその目尻だけで充分だった。

「そう言えば、ゼリー買ってきたけど食べるか？」

俺の言葉に反応して、彼女は布団からひよっこりと顔を出すと、控えめに首を縦に振った。そんな稚い動きから目を逸らし、コンビニ袋から買ってきた蜜柑ゼリーを取り出す。

ビニール蓋を剥がし、スプーンも包装から取り出して彼女に手渡そうと近付ける。しかし、不満気な口元を作った彼女は手すらも動かしてはくれず、目線だけで何かを訴えてきた。

仕方がないので、プラスチックのスプーンで一口分だけを掬って彼女の口元へとゆつくりと運ぶ。嬉しそうに頬張る彼女の咀嚼に合わせて、もう一度とその行為を繰り返した。彼女への献身的な行動だと考えれば、気恥ずかしさは鳴りを潜めてくれる。

「こういう時ぐらい素直に甘えてくれてもいいぞ」

「……………素直な方があなたには良いのかしらね」

空になった容器を処理しながら口にした何気ない言葉、それが精神まで弱っている彼

女には響いてしまったらしい。普段ならきつと気にも留めない内容だった筈だが、彼女は俯き気味になって暗い顔をしている。

こんな事を話すのは柄ではないけれど、彼女の不安を取り除くには正直に伝えるしかないのだろう。知らないことはきつと、不安でしかないのだから。

「別にどつちでも構わねーよ。素直に言われても裏があるんじゃないかと疑うし、回りくどい言葉でも本音を読み解こうとするしな」

ただ静かに俺の言葉を聞く彼女の頭に手を伸ばし、優しく撫でながら言葉を続ける。「それに俺はこういう面倒なやり取りが存外に気に入ってるんだよ。無くなったらきつと寂しく感じると思う。でも、弱っている時には優しくしてあげたいからな、希望を言ってくれると助かったりする」

結局、彼女が考えた末での行動をしてくれるならば、どのような対応でも俺は受け入れてしまうだろう。結果ではなく、その過程にこそ意味があると思うから。

俺の拙い言葉を聞いて、彼女はゆっくりと顔を上げる。少し潤んだ瞳がこちらを見詰めていた。真っ直ぐにこちらを見て、真っ直ぐに言葉を伝えてくれる。

「二人で寂しかったから、眠るまで手を握ってもらえるかしら」

「それぐらいは喜んで、ただその前に冷えピタな」

彼女のおでこに冷えピタを貼ろうと、その艶のある黒い前髪を捲り上げる。高めの熱

を保有している肌に触れながら、普段は見れない彼女の一面を覗いていることに心音が変化を見せる。

貼った瞬間には、その冷たさに身を振らせて反応する彼女をくすりと笑ってしまう。文句代わりに放たれた彼女の軽いパンチを受け、大袈裟に後退して二人で笑い合った。改めて彼女の傍へと近付き、その小さく細い指を優しく握る。

彼女もその熱を伝えるかのように、俺の指を強く握ってくれた。

「ふふ、もう夢を見る必要もないわね」

「おう、ぐつすり寝ていいぞ」

夢を見ている間は眠りが浅いと聞いたことがあるので、夢入りせずに彼女には深く眠って疲れを取って欲しいと思うのは間違っていないだろう。

やがて安心して眠りに就いた彼女のその手を、俺は優しく包み込むように握り続けた。

日が落ちてから間もない頃に雪ノ下は目を覚ました。片手で読書が出来る時代だったので、時間を過ごすことには苦勞をしなかつたけれど、座り続けていた為腰が少し痛い。もう片方の手を握り直して嬉しそうに微笑む彼女が見れたので、その痛みも直ぐに吹き飛んでしまつたけれど。

「晩御飯用に鰻鮎の食材を買ってきたから作ってくるな」

「……………ん、ありがとう」

手を離すのは名残惜しいけれど、実は昼も食べていないので胃袋がそろそろ限界である。彼女もお昼はゼリーだけだと思うので、さっさと作ってしまおう。

キッチンを借りて早速料理を始める。料理といっても、お湯を沸かして葱を切つて、調味料と合わせて麺を煮込むだけの簡単な手順である。拘りとしては、彼女が早く治るようにと願いを込めて生姜を擦ったことぐらいだろう。

10分程度で出来上がったので、雪ノ下をリビングへと連れ出して一緒に食べることにした。ベッドで食べるには些か危険な食べ物にしてしまったのは減点対象かもしれない。お粥の方が無難だっただろうか。

「……………美味しい」

れんげを用いて淑やかにうどんを頬張る彼女に続いて、自分も麺を嚙つて口へと放り込む。

……………うーん、美味しくない訳じゃないが、雪ノ下の料理を食べ続けてきた俺からしたら大した味ではない。俺の舌はハイエンドに完全に染まり切っていた。

「本当に美味しいわよ、ありがとう、比企谷君」

「……………どういたしまして」

彼女が美味しそうにしてくれているのが救いである。それにしても、自分が作った物をそんな表情で食べてくれると非常に嬉しい気持ちになる。今度はもつと気合の入れた料理を作ってみようかとすら思ってしまうのだった。

夕食とその片付けが終わり、この後はどうしようかと思案する。朝早く起きて、彼女が治っていれば急いで家に帰って出社準備、治っていなければそのまま看病をする。常識的に考えたらこれが無難だろうか。

風呂の湯張りが完了したので、雪ノ下に着替えを用意してもらい風呂場へと連れて行く。流石に下着まで用意することは出来ないで、彼女に無理をさせてしまったかもしれない。

彼女が浴室に入っている間は、その扉の前で待機をしていた。もし突然倒れた時に対応出来るように、彼女が寂しくならないように。裸体の状態で俺が近くにいたら落ち着かないだろうが、お互い様なので許して欲しい。

聞こえてくる音で中の様子を想像しないようにすると、変な音が聞こえたらすぐさま行動出来るように気を張ることの両立は困難を極めた。

途中からは危機感知を優先し、両立を諦めました。ごめんなさい。

その後は特に問題もなく、いつも通りにパジャマへと着替えて彼女の待つベッドへと向かう。寝る前にもう一度彼女の体温を測ると、37度まで下がっていたことに安堵した。

「このまま休めば明日には治っていると思うぞ」

「……………その」

こちらを見上げ、口を開いた彼女の歯切れが悪い。どんな無茶難題なお願いをされるのかと気が気でなくなる。素直に甘えて良いと発言した手前、断ってしまうことは出来ない。自分の発言には責任を持つべきだろう。

緊張した空気の中、やがて意を決した彼女の口が開かれる。

「移してしまうかもしれないけれど、一緒に寝てもらえないかしら……」

「……………移されると少し困るけど、寝るのは別に構わんぞ」

俺まで風邪を引いてしまうと看病に支障が出るのは困る。移して治るのであれば喜んで引き受けるのだが、医学的根拠は無い筈だ。そんな迷信が出回った理由はきつと、移されるほど熱心に看病してくれた相手が居たというだけなのだろう。

一緒に寝ることに関しては、逆に他の選択肢があったことに少し驚いている。泊まり客用の布団が実は何処かにあつたりするんですかね。今更なので要らないですけど。

嬉しそうに微笑む彼女を横目に、俺は部屋の明かりを消してベッドへと向かうのだっ

た。

彼の優しい匂い、そして温かい腕と布団に包まれている。

枕は少し硬いけれど、寝心地は不思議と悪くはない。私専用の特注品だ。

「…比企谷君」

「……なんだよ」

彼の優しい瞳が私に向けられている。私をちゃんと見ていてくれる。

それが本当に嬉しくて、我慢出来ずに彼の胸に思い切り抱きついてしまった。

抱き枕になっている比企谷君の顔は真っ赤になっている。心臓の音も私と同じか、それ以上に早くなっている。何度も抱き合っている筈なのに慣れない彼を愛おしく感じる。意識してくれていること、大事にしてくれていることが鮮明に理解できるから。

そんな彼から求められることが、私の密やかな目標になっている。

真っ赤になった彼から差し出された手を、指を握っていく。彼の手は私と変わらない程の熱を持っていた。

目を閉じて少し経つと、彼は枕にしている手で私の頭を優しく撫で始めてくれる。私はこの感触をとても好ましく思っている。私が目を開けている時にもして欲しいけれど、これ以上は高望みだろうか。



彼が眠りに就いた後に胸元へとそつと移動する。今日は風邪を移さないように気を付けて。

彼の鼓動を聴きながら眠るのも悪くなさそうだ。これからは時々こちらにお邪魔しようかなと、起こさないように声を抑えて笑ったりしていた。

私は彼の存在で満たされた空間で意識を少しずつ手放していく。

彼の手を握って、夢の中でも会いたいなんて素直な気持ちに身を委ねながら。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #26

彩り鮮やかな紅葉も既に地へと落ち、寒気が流れ込んでくる時期となった。

秋用の外套を羽織るのでは肌寒く感じる日も少なくなはなく、マフラーや手袋を身に着けて出勤する人々も段々と多く目に入るようになってきている。冬はもうすぐそこまで来ているのだろうか。

今年も気が付けば残りひと月と少しになり、そのことが比企谷八幡には大きな悩みの種の一つになっている。

悩みの一つは雪ノ下に何を贈るか、何を贈りたいのかというプレゼント選びである。一つと言っても、選ぶプレゼントは二つある。クリスマスと誕生日、二つの大事なイベントが近付いているのだ。彼女の喜ぶ物を贈りたいとは考えているけれど、彼女との関係性が不明瞭なことが選択肢の幅を狭げてしまっている。

俺には未だに形にし切れていない想いがある。それを伝えるまでは、俺と彼女の関係性のカテゴリーは友人になるのだろうか。そんな風には微塵も思っていないのは、きつと彼女も同じだろう。

彼女と過ごしていく日々の中で、胸の内で育ち続けた想いが確かな形となって表に出てくる日も遠くはない筈だ。

ただ、想いが象られてしまうことも少し怖かった。歪で脆い形にはならないように、間違わないように大切に胸に仕舞っている。

そんな少し先の未来と、本日の晩御飯のメニューが今の大きな悩みになっていた。

今週も最後の出勤日となる金曜日の昼休み、休み前で少し浮かれた社員達の雑談が飛び交う喧噪の中で一色と対面して食事を取っていた。

「一色は今まで貰って嫌だったプレゼントってあるか？」

大学では当たり前のようにモテモテだったらしい彼女に参考までに意見を頂戴する。ここで大事なのは欲しい物を訊かないことだ。一色の欲しいものを参考にするのは雪ノ下に対して真摯に向き合わないことに繋がるだろうし、自分で考えることが肝要だからね。ただ、女性にとつての地雷になりそうな物くらいは把握しておきたい。

「まあ、普通にありますけど」

左上を向いて考え始めた彼女は、今まで幾多もの男を惑わしてきたであろう美少女顔を歪ませ始める。何度か溜息を吐き、俺がその様子をじつと見ていたことに気付いた彼女はささっと笑顔を取り繕って口を開いた。

「そうですね、取り敢えずアクセサリーは最悪です。男って大体はハートモチーフのアクセサリースしやがるんですけど、私は別に好きじゃないっていうか、センス悪い物送られても困りますし、一度くらいは着けないと申し訳ないとか気を遣わされる時点でもう最悪です。まあ、私は何一つ着けませんでしたけど」

……彼女に勇気を出して贈り物をした男に同情を覚えてしまう。いろはす本当に辛辣で酷い。

一色の言葉に傷付き、候補からアクセサリーを外そうか悩み始めていると、彼女の咳払いで意識を持つていかれる。彼女へと視線を戻すと、わざとらしい上目遣いでこちらを見詰めていた。

「……だけど、せんばいから貰える物なら何だつて喜んじやいますよ?」

そんな嬉しい言葉が甘い声で囁かれる。彼女にアクセサリーを贈った男たちはこの言葉に騙されてしまったのだろうか。

「あざとい」

「はあく……私は嘘ですけど、雪乃先輩はそう思ってるんじゃないですかね」

俺が照れなかつたことが不満なのか、一色は分かり易く溜息を吐いて投げやりな態度になる。その態度には慣れているので何も思うことはないのだが、彼女の発言には物申さねばならない。

「おい、何でも良いが一番困るんだぞ。俺はちゃんと雪ノ下が欲しい物を贈りたい」  
俺の誕生日には素敵な腕時計と美味しいケーキをプレゼントしてくれたのだから、彼女にもそれ相応に喜んで貰える物を選びたいと思うのは自然だろう。日頃の感謝だつて積りに積っているのだから。

「……はいはい、記入済みの婚姻届けとかでいいんじゃないですかね」

完全に適当な意見を言い放ち、面倒ごとから追い払うようにしつしつと手を払っている。最初から彼女の欲しい物は自分で考えるつもりだから構わないのだが、そんなに煙たがらないで欲しい。

「もうお腹一杯なのでこの話は終わりで、次は私の愚痴を聞いて下さいってか聞け」  
湯水の如く溢れ出る彼女の愚痴を聞き流しながら、雪ノ下への贈り物で頭を悩ませ続ける。

適当に相槌を打つ際に見えた彼女の胸元には、雪ノ下と由比ヶ浜からの再会を祝したネックレスがしっかりと掛けられていた。

両手にビニール袋を引っ提げてエレベーターに乗り込み、目的の階まで上昇する。歩いて彼女の部屋の前に到着すると、施錠されている扉に鍵を差してゆつくりと回転させた。

ガチャリと音を立て、開錠される振動が指へと伝わる。エントランスでも感じたけれど、本当に開いてしまうことに恐怖すら覚えそうになる。

「…………お、お邪魔します」

恐る恐るその扉を開くと、サボンの微かな香りが鼻腔をくすぐった。目の前には明かりの点いていない暗い廊下が広がっている。その光景は新鮮ではあったが、少し寂寥感を感じてしまった。

部屋の明かりを点け、手洗いうがいを終えてからスマホを取り出す。雪ノ下からはまだ連絡は来ていないので、もう暫く時間が掛かるのだろう。繁忙期だから仕方ないのだろうが、体力が無いのだから無理はしないで欲しいものである。

『なるべく早く帰るわね』

最後に送られてきた彼女からのメッセージを眺めると自然と口角が上がってしまった。こんな目の腐った男に合鍵を預けてまで、一緒に食事を取りたいと願ってくれる彼女のために出来る限りの努力はしよう。

あの風邪の日以降、雪ノ下は比較的素直に気持ちを伝えてくれるようになっていた。俺は相も変わらず捻くれていたのだが、彼女の想いにはなるべく応えてあげたいと思っ  
ている。

その第一歩として気合を入れてキッチンへと足を運ぶ。俺の手には食材の入ったビ

ニール袋と、調理手順が事細かに表示されているスマホが握られていた。

サラダ用に盛り付けを行ったカルパッチョは既にラップを掛けて冷蔵庫へと仕舞っている。今は一口大にカットした食材を柔らかくなるまで煮込み、味付けに手作りホワイトソースを投入して軽くひと煮立ちさせたところだ。鍋からはコンソメとバターの豊かな香りが漂っており、否が応でも俺の空腹を刺激してくる。

空腹を誤魔化すためではなく、味見のために一口分をスプーンで掬い、充分に冷ましてから口を付けた。クリーミーな味わいは概ね想像通りになっているのだが、以前に雪ノ下が作ってくれたシチューと比べると味が薄い気がする。しかし、雪ノ下はどちらかと言うと薄味の方が好みだから好都合かもしれない。

味見に集中していた俺の背後から急に腰へと手が回される。その手はひんやりとしているが、同時に温かい柔らかな感触が背中へと押し付けられた。

「……………おかえり」

「あら、もう家主にでもなったつもりかしら、それとも宿り木かしらね？」

この状況を宿り木扱いするのは失礼だろう。今日は料理を作って待っていたけれど、普段は食っちゃ寝しているだけだからね。宿り木さんは半分は寄生ではなく自身の力で生きているんだぞ。

「どつちでもねーよ、家主が帰ってきたから挨拶しただけだろうが」

「なら、ただいま……………それで、どう？」

揶揄するような明るい声音が耳元で囁かれる。不意にスーツ姿の雪ノ下に抱き着かれている状況には未だに頭が追い付かないのだが、何とか平常心を装って返事を取り繕った。

「……………味は悪くないぞ、煮込み加減も頃合いだと思う」

「そつちも気になるけれど、こういうのはどう思うかしら？」

先ほどまでよりも密着度を上げて、声色も心なしが高くなつて再度問い掛けられる。彼女の熱い吐息が首元に当たつて非常にこそばゆい。

相も変わらずリラックスとは程遠い行為により、上擦ってしまった声で感想を告げる。

「……………悪くない、です」

「ふふつ、なら料理も文句なしってことかしらね、楽しみだわ」

心底楽しそうに自室へと向かうお茶目な彼女の背中を呆然と見送る。彼女のせいで泡を吹いてしまった鍋を鎮めるべく火を弱め、自身の平静さを取り戻すために再びスプーンを握り直して味見に戻る。

冷ますことすら失念していたせいで舌は少し火傷してしまつたけれど、多少煮詰まっ



たお陰で俺好みの味へと近付いていたことは悪くない……いや、非常に喜ばしく思えていた。

食卓にはホワイトシチューと少し不格好なカルパッチョ、それにバゲットを置いている。上着を脱いだ彼女と向かい合わせで座り、味の感想が告げられるのをただじっと待っていた。

何やら言いたげな雪ノ下だったが、諦めて一口分を掬って口へと啜えた。思うところがあつたのか、一瞬だけこちらを丸い目で見てきたのだが、直ぐにもう一口、もう一口と続けて味わっている。俺の視線を思い出したのか半分程を平らげると、頬を赤らめ軽く咳払いをして体裁を整え始める。

「食材を細かく切り過ぎて煮崩れしてしまっているわね。それにホワイトソースを作る時だと思うけれど、僅かにダメが出来てしまっているのが気になるかしらね」

一応小さめに切つたのは、疲れているだろう彼女が食べやすいように配慮したつもりだったのだが、崩れてしまつては文字通り形無しである。ダメに関しては弁明のしようもない。

やはり素人料理ではプロ並みの技術を持つ彼女を満足させることは出来なかつたのだろう。少し落胆しそうになる俺の視界に、口元を緩めて微笑む彼女の優しい表情が映

り込んだ。

「……………けれど、とても美味しいわ、ありがとう比企谷君」

「……………まあ雪ノ下の料理と比べたら見た目も味も劣るけどな」

照れ隠しに捻くれた言葉で誤魔化してしまつたけれど、彼女のその一言で心底救われた気がした。俺の気持ちを揺さぶつた最初の辛口コメントも、雪ノ下流の捻くれだと解釈すれば可愛らしいとしか思えなくなる。

そんな彼女と食べる夕食はやはり嬉しいもので、自分の作つた料理でも味気ある食事になっている。見栄えなんて、目の前で笑う彼女だけで充分なのだから。

「今日はどうしてシチューを作ってくれたの？」

珍しくお代わりまでしている彼女からそんな問いが投げ掛けられる。悩みに悩んだ癖に大した理由でないのが恥ずかしいけれど、正直に伝えることにする。

「もう冷え込みも強くなつてきてるし、温かくて栄養のある好みの料理が良いかなと」

また体調を崩されたら心配だからね、雪ノ下にはちゃんと栄養を取つて欲しいものがある。

他にも候補は幾つかあつたけれど、以前に食べさせてもらったシチューが印象に残つており、彼女自身もシチューが好きだと語っていたのが決め手になった。

「……………好きよ」

「……………知ってる」

優しい笑みで告げられた言葉、その対象が自分でなくても動揺するのは仕方がないだろう。彼女の手元にある皿の中身を見詰めてしまったのは嫉妬からかもしれない。

その皿から立ち昇る白い蒸気の行方を目で追うと、白磁のような頬を少し赤らめた彼女の瞳と視線がぶつかる。その瞳には様々な想いが込められていそうで、今の彼女の心を解き明かすことは容易ではなかった。

ただ、その瞳に映っていたのは紛れもなく俺自身だった。

「……………もつと好きになってしまったわね、誰のせいかしら」

きつと、今の俺は酷い顔をしている。

顔色は間違いなく真っ赤になっているだろうし、口も開いたまま閉じることが出来ない。

目の前の彼女はそんな醜態を笑顔で見詰めてくれている。

返事をせずに黙っている俺を、ただ優しく見守ってくれている。

「……………ありがとな」

漸く出てきた何に対する感謝かも曖昧なその言葉で、彼女は満足そうに頷いてくれた。  
いた。

「……折角あなたが作ってくれたご馳走が冷めちゃうわね」

雪ノ下はそう口にして食事を再開させる。本当に美味しそうに、幸せそうに食べてくれている。

そんな彼女を見て湧き出た言葉は、先ほど聞いたばかりの二文字の言葉だった。しかし、この面倒な感情をその言葉だけで表現することは到底不可能で、俺はまた言葉を飲み込んで自分の胸へと仕舞い直した。

だが、この胸に宿る熱は冷める気配を一向に見せない。同じ言葉を飲み込む度に、温度は際限なく上がり続けているのだから。

「ねえ、比企谷君は花言葉には詳しいかしら？」

「有名なものは知っている程度だな、薔薇は色や本数で意味合いが変わるんだっけ」

当たり前のように俺の腕を枕にしている彼女がそんな問い掛けをしてくる。その声音は楽しげで、今までよりも鮮明なままに俺の耳へと到達する。先週までよりも更に近くなった距離も影響しているのだろう。その距離に比例して彼女の匂いと吐息の熱をより強く感じるのだから、俺の心身は穏やかではない。

「そうね、あなたなら私に何本の薔薇を贈ってくれる？」

「八本かな、八幡だけに」

渾身の持ちネタが不服だったのか、雪ノ下はその細い指で頬を抓ってきた。そして馬鹿、ボケナスと続けて小さく呟く罵倒さえしてくる。

「もう少しだけ頑張れないのかしらね、この八幡は……」

「……………そこら辺の意味合いとか知らないんだが、じゃあおまけでもう一本」

罵倒の三段活用で下の名前を呼ばれる。正解に辿り着くまで罵倒され続けたら、体温が上がり過ぎて死ぬかもしれない。そんなドキドキを味わうために一本ずつ上げていこう。百本が愛の告白なのは知っているのです、そこまでは終わって欲しいとは思っていません。

しかし、僅か一手で彼女は満足されてしまったらしく、抓られていた頬が解放されていく。そして、代わりにその柔らかな頬を俺の胸に押し当てて嬉しそうに笑い始めたのだった。

きつと彼女の今日の言葉に浮かれていたのだろう。普段であれば決して行動には移さなかったのだが、先程までの仕返しとして、その瑞々しい頬に軽く唇を触れさせてしまった。

「……………別に、ここにしてくれても構わないわよ」

回り諄さの欠片もない愛情表現をしてしまったことに気付き、気付かれ、お互いに顔を真っ赤にしているのだが、それでも彼女の方に余裕が見られる。彼女の指差している場所と触れ合うためには、それこそ薔薇の花束を贈るような行動が必要になるのだろう。

体勢的に仕方ないとは言え、上目遣いであからさまな催促をしてくれる彼女に改めて目を合わせる。早くなった鼓動が事を急かしてくるけれど、俺の残念な理性と心の蕾はまだ時間を要していた。

「……それはもう少し待って欲しい」

「……いつまで？」

苦悩すべき重大な期日は自分でも驚くほど簡単に思い浮かぶ。今も思い悩み続けている、本来はもつと早くに確認すべきその日を。

「その、来月のクリスマスって予定あるか？」

「………ええ、イヴは金曜日だから比企谷君と過ごす予定だけれど」

聖夜も当然の如く一緒に過ごしてくれる気で居たことに思わず笑ってしまう。きつと次の日も一緒に過ごしてくれるのだろう。そんな彼女にだから、俺は怯えずに誘うことが出来るようになった。今この瞬間も、その先のずっと先の未来まで。

「……だから、その日まで待って欲しい」

「……………楽しみをしているわね」

俺の決意表明を聞くと、彼女は優しく微笑んで頭を浮かし、先週までと同じ場所まで戻って行く。近過ぎると思っていた距離が今では少し遠く感じてしまう。

俺の胸に置かれている手を取り、ゆっくりと指を絡めると、やがて彼女は瞳を閉じて眠りへと入って行く。その柔らかな寝顔を眺めながら、彼女の艶のある黒髪を優しく撫でるだけでは満たされなくなっていた。

撫でる手を止めて、彼女の幸せそうな寝顔を静かに抱き寄せる。彼女を求めてしまっていることはもう否定する余地もない。そして、この距離を当たり前のように享受するためには、今一度深く考えて選択せねばならないのだろう。

雪ノ下に贈る想いを込めたプレゼントを。

そして、誰よりも大切な彼女へと贈る告白の言葉を。

## やはり俺の社会人生活は間違っている #27

今年の最後を締め括る十二月、その下旬ともなると街中は完全に冬景色となっていた。等間隔に整理された木々にはもう葉は付いておらず、落ちた先の地面にもその余韻は一切残っていない。

千葉に近いこの場所では、雪は滅多に降ることもないので銀色の世界は広がらず、代わりに厚めのコートを羽織った人々が駅のホームで白い息を次々と連ねていく。その光景こそが都心の冬景色と言っても過言ではないのかもしれない。

しかし、そんな寂しい季節にも関わらず、擦れ違う人達は皆明るい顔をしている。それは正月休みが近いからだろうか。それとも、至る所で派手にライトアップされているイルミネーションによるせいだろうか。

会社では正月休みを気兼ねなく過ごすために必死で仕事を片付ける、正に師走に相応しい日々を過ごしていた。だが、今日だけは何かあっても残業する訳にはいかなかった。事前に上司に相談してまで定時に退社し、目的地へと向かっている。忙しく吐き出される白い息の行方に目もくれず、小気味良く地面を蹴って前へと進んでいく。



そんな俺は一丁前に緊張をしながらも、きつと周りの人々と同じように明るい顔をしているのだろう。鞆には丁寧に包装された小さな四角い箱を隠し入れ、胸には想いを込めた不格好な言葉が今にも飛び出そうと鼓動を速めていた。まるで、一秒でも早く彼女に会わせると急かすかのように。

「……悪い、待たせちまったみたいだな」

漸く辿り着いた待ち合わせの場所、そこには白いコートにチェックのマフラーを身に着けた雪ノ下が佇んでいた。白魚のように細い指を擦り合わせていた彼女がこちらを向いて微笑む。

「……そうね、随分待たされた気がするわ」

軽口を叩くように文句を紡いだ彼女の瞳は眩しいほどに輝いていて、その期待の眼差しに少しでも沿えるように俺は言葉を返す前に彼女の手を取って歩き始めた。

予約をしている店まで並んでゆつくりと歩いて向かう。予定の時刻までは随分と時間があったから時間を掛けて。彼女の冷たくなっている手を温めるのには調度良い時間かもしれない。未だにこの繋ぎ方で高鳴る鼓動が煩いけれど、今日の街は騒がしいから気にはならなかった。

「雪ノ下は今日は会社休みだったのか？」

仕事上がりであるの時間に到着するのは困難だろうし、何よりも今日の彼女は随分と煌びやかな恰好をしている。スーツ姿でも十二分に綺麗なのだが、まるでドレスのような青いワンピースに身を包んでいる彼女には普段以上に魅了されてしまいそうになる。コートを羽織っている状態でこれなのだから困りものだろう。

雪ノ下は俺の言葉を聞くと、その艶めいた黒髪をためかかせて俺の顔を覗き込む。嬉しそうに、楽しそうに口を開いて言葉を返してくれる。

「色々と準備をしたかったもの……それに、どうせ今日は仕事なんて手に付かないのだから行っても仕方ないじゃない？」

「……………まあそうだな」

今日どころか、今週に入ってからはずっと意識してしまっていた。彼女から貰った腕時計が目に入らなければ、きっと仕事にもならなかっただろう。

雪ノ下は俺の実感のこもった相槌を聞いて、くすくすと笑って言葉を続ける。

「なんて、今日もちゃんと出勤していた働き谷君に失礼かしらね」

「失礼なのは呼び方だけだからね。そっちの準備の方が大変だったまであるだろうし……………その服も似合ってるしな」

本当は出会って直ぐに褒められたら良かったのだろうが、俺はこういうやり取りの合間に差し込むことでしか自然に言葉にすることが出来ない。こんな調子で告白など出

来るのかと心配になるけれど、入念にシミュレーションしてきた通りに事を進めれば何とかなる筈である。

「…………ふふつ、比企谷君もスーツ姿がとても素敵よ」

一瞬、驚きで目を丸くした彼女が朗らかな笑顔を向けてくれる。想定よりも早まってしまいそうになる言葉を飲み込んで、顔も身体も熱を帯びていく。

まだ店までは距離があるけれど、彼女の手も俺の手も既に温まり切っていて、もう寒さなど微塵も感じなくなっていた。

「それにしても、フレンチなんて全く似合わないわね」

店内に入り、コートを脱いでその魅力的な全貌を見せつけながら雪ノ下は口を開いた。キラリと光るイヤリングも相まって、まるで冬の星空を身に纏っているかのように思える。そんな見目麗しい彼女に当たり前のように見惚れながら、しどろもどろに言葉を返していく。

「悪かったな、まあなんつーか雰囲気というか……」

照れ臭さから、無意識に後頭部を搔いてしまう。勿論、俺にフレンチなんてお洒落な食べ物も場所も似合わないことなんて百も承知である。それでも、今日という日のデイ

ナーには他の選択肢など考えもしなかった。

「そうよね、雰囲気は大事よね……」

俺の恥じらいが伝搬してしまったのか、彼女は人差し指の先端を合わせて少し頬を赤らめている。だが、とても嬉しそうに微笑んでいた。彼女に喜んでもらえるように、今日は好物が取り入れられているコースを選んだことが良かったのだろう。

先ずはウェイターが食前酒としてスパークリングワインをグラスへと注いでくれた。軽く会釈でお礼を済ませ、改めて彼女と向き合ってグラスを持ち上げる。グラスの高さを合わせ、彼女の目を見て、ほんの少しだけグラスを近付けるように腕を動かして言葉を交わす。

「メリークリスマス、雪ノ下」

「メリークリスマス、比企谷君」

注がれた金色の液体、そこから弾ける細やかな泡の音色がこの大切な聖夜を静かに盛り上げててくれている。そのまま目で合図をして、お互いにグラスに口を付けてゆつくりと傾けていった。

口に広がる爽やかな果実の味わいを堪能していたのも束の間で、気が付けば彼女のワイングラスに残る綺麗な唇の跡ばかりを目で追ってしまっていた。

結構なお値段するだけあって、コース料理は非常に豪勢で美味であった。鴨を使用したテリーヌの前菜から始まり、帆立の海鮮スープ、メインには牛フィレ肉の岩塩包み焼きと彼女の好物である伊勢海老のソテーが登場した。その際の雪ノ下さんの反応が大変に可愛らしく、自分の分まで彼女に振る舞おうとしたのは致し方ない。

そんなこんなで、最後の一品であるラズベリーのパルフェを口に行っている彼女は上機嫌だった。俺の顔を見ては微笑んでいるのは決して面白い造形をしているからではなく、単純に機嫌が良いからなのだろう。

「……………ねえ、比企谷君は記念日を分けて考えてくれるタイプかしら？」

微笑んで話し掛けてくる彼女に、念の為に真面目な表情を作って応対する。変わらず微笑んでいるのを確認してから、彼女の言葉の意味を考えて返事を口にした。

「あれだろ、クリスマスと誕生日が近いとプレゼントを一緒にされたりするらしいな。俺はちゃんと別々に用意するつもりだぞ？」

「……………それは嬉しいのだけれど、急に不安になってきたわ」

見慣れた頭痛いのポーズをしている彼女のために水を追加オーダーしつつ、残ったデザートをスプーンで掬って口へと放り込んだ。甘酸っぱいラズベリーの風味が口一杯に広がるのを感じながら、俺はこの後の予定について今一度確認を始める。

彼女が不安に思っているであろうプレゼントを渡すタイミングと、俺の想いを伝える

場所はもう決めているのだから。

店を後にして外へと出ると、暖められていない冬の空気が肌に纏わり付いてくる。店内との寒暖差が気になるけれど、アルコールや諸々の雰囲気ですぐに身体には都合が良かった。

俺は隣で白い息を吐いている彼女に声を掛ける。上擦らないように気を付けて、可能な限り自然に聞こえるように。

「…………折角だし、イルミネーションを見に行ってもいいか？」

駅前には無料ではあるのだが、なかなか評判の良いライトアップが展示されており、幻想的な光のアートを求めて毎年多くの男女が観に来ていているらしい。

俺の提案を首肯で快諾してくれた雪ノ下の手を取って歩き出す。今の関係に相応しい、指を絡めない自然な方法で。

イルミネーションの光が近付く程に鼓動が早くなっていく。手を繋ぐ彼女にも伝わってしまったていないか、気付かれないか心配になる。だが、確認する余裕など俺には残ってはいない。

次に口を開く時にはきつと……………。

一直線に並んだブルーの光を放つ木々、それが一番奥が確認できない程に何処までも続いているように見えた。その通りには何十組ものカップルが集っており、百人百様にその美しい光の芸術を楽しんでいる。

俺と彼女もその暖かな光の中に足を踏み入れる。周りに紛れて、光に紛れて歩を進めていった。眩しい輝きに包まれたその場所では自分の影さえも付いては来れやしない。

「……………とても綺麗ね、比企谷君」

彼女のその言葉を皮切りに、思わず握っている手の力が強まってしまふ。何事かと立ち止まり、疑問符を浮かべながら俺の顔を覗き込んできた彼女から目を背けずに向き合った。

「……………雪ノ下」

青い光に照らされた彼女の表情が変わっていく。訝しげから驚きへと変わり、戸惑いから焦りへと移っていく。恐らく俺の今からすることを理解してしまったのだろう。

俺は周囲の騒めきに掻き消されてしまわぬように息を吸い、冷たい空気を胸に取り込んでから口を再度開いていく。

そして、用意していた言葉を紡ごうとした——その瞬間に雪ノ下に強い力で腕を掴まれる。

狼狽える俺を牽引するように先導する彼女の足先は入口方面へと向けられた。綺麗

な明かりから遠ざかるように足早に歩いていく。失われていく機会に呆然としながらも、彼女の荒くなった息遣いと地面を叩く靴の音に耳を寄せては落ち着きを取り戻し始めていた。

何処まで歩くのだろう、そう思っていると彼女は四車線を跨ぐ歩道橋へと足を掛けて登り始める。階段の先には人の影はなく、信号の赤い光が照らす寂しい空間が広がっていた。そんな場所で漸く腕を解放した彼女はくると振り返る。

「……私、こう見えてお人好しじゃないから、他の人に聞かせてあげるつもりはないの」  
「……………」

見た目通りだなんて軽口を返せない程に惹き込まれてしまったのは、彼女の赤々とした揶揄うような笑顔が眩しかったから。イルミネーションの下でなくても変わりはない。その美しさも、その傲慢で魅力的な表情も……そして俺のこの気持ちも。

一歩だけ距離を縮めようと彼女へと近付いた。決して自動車の走行音で掻き消されてしまわないように。間違っても他の人には届かないように。

「……正直、お前の居ない人生とかもう考えられないというか」

雪ノ下雪乃と関わり始めて、俺の心に彼女が居座るようになってから七年の月日が経過している。印象だとか認識なんて日毎に変化してきた。良くなるだけだった訳でも



なく、衝突だつてしてきたし、相容れないことも多々あった。

「俺は……………」

それでも関わってくれて、関わり続けたくて此処まで辿り着いた。勘違いだなんて考える余地も無い程に思い知らされてしまったんだ。

彼女を照らしていた光が青へと変わる。ただ、俺の瞳に映る彼女の顔色はイルミネーションの下で見たものとは異なっていた。

「お前を、雪ノ下雪乃を愛しています。だから、お前を愛する権利を俺にくれ……………」

冷たい空気を揺らして伝えた言葉、それが彼女の耳に届いたことは間違いないだろう。彼女自身の赤色が青い光の中でさえも綺麗に映し出されていた。

雪ノ下の言葉を待っていた時間は長くはなかった。開かれる筈の薄い唇が胸に飛び込んで来ては、俺の身体すらを揺らして伝えてくれる。

「……………あげるわよ、だから」

その後に繋がる言葉は聞こえてはこない。代わりに彼女は顔をゆつくりと上げて瞳を閉じて静止した。貰えた権利を行使するために、彼女の細い肩に震える掌を静かに置いて、額よりも更に下へと顔を近づけていく。痛いほどに高鳴っている鼓動も、震える身体も自分だけではなかった。

軽く触れ合うだけの短い接吻をした。感触は柔らかかった気がするけれど、味は分か

らない。それが俺の初めての感想だった。

車が一台、二台と過ぎ去っていく。二人の間には言葉はなく、ただ余韻に浸れるだけの時間が流れていった。雪ノ下はやがて触れた場所を中指でなぞると、鞆から折り畳まれた紺色のマフラーを両の手で広げて俺に向き直った。

「巻いてあげるから少しだけ屈んでもらえるかしら」

思考も覚束ない俺は言われた通りに前屈みになると、温かな毛糸の感触が首の後ろへと回され、彼女の甘いサポンの香りに包まれていく。もし手編みだったりしたら、一生大事にすべき贈り物だろう。そんなことを漠然と考えていると、不意に彼女の唇が花開いて甘い言の葉が囁かれる。

「あなたが好きよ」

その甘美な衝撃にではなく、マフラーを引っ張る力によって顔が下へと引き下げられた。

下がった先には、先程触れたばかりの柔らかな感触が待っていた。色々と言いたいことはあるけれど、先ずは大切なマフラーが伸びてしまわぬように彼女の後頭部と背中に手を当てて引き寄せる。すると、次第に首元に掛けられていた力は抜け落ちていった。

息継ぎで彼女の熱い吐息が肌に触れる。少しだけアルコールの混じった甘い匂いに酔わされて、どちらからともなく離れた唇をもう一度求めては近付いて閉じていく。言

葉だけでは伝え切れなかった想いを確かな熱で伝え、伝えられる。その行為は彼女の顔の色が何度も移り変わるまで繰り返されていた。

酔いが冷め、漸く二人の間に距離が作られる。その僅かな距離を使つて、雪ノ下はマフラ―を正しく結び直して柔らかく微笑んでいた。

お返しに鞆から包装された箱を取り出そうとした手は彼女に捕まえられ、そのまま強く握られていく。元々の想定とは大きく異なつてしまつてゐるし、此処で渡す必要も無いだらう。如何あつても、この後もずっと一緒に居るのだから。

そのまま並んで歩き始め、二人を繋ぎ合わせてくれた橋を静かに降りていく。

この瞬間も二人を繋げてくれる指は、然も自然に絡み合つていた。

彼女のマンションまでの道、今夜は街灯だけでなく、所々にクリスマス仕様の明かりが照らしてくれていた。そんな記念すべき日に大きな一歩を踏み出した俺たちはこれからどうなつていくのだろうか。先週までと変わらない想いと、大きくなつてしまつた想いが重なり合つてしまつてゐる。

隣を歩く彼女はそんな男心なんて露知らず、楽しげな鼻歌交じりの横顔を見せてくれ

ている。俺の恨みがましい視線に気が付いてか、こちらを見上げて不思議そうに首を傾げた。だが、そんな表情も一瞬のことで、直ぐに挑戦的な笑顔を作つて口を開き、揶揄い混じりに言葉を紡ぐ。

「愛し合う二人は、こんな夜にはやはり愛し合うのかしらね？」

「……………お、お前は好きって言つてただろうが」

見事に悩みの真ん中を射抜かれてしまい、彼女の挑発的な台詞を受け流すことに失敗する。好きとか愛なんて言葉を安易に使いたくはないのだが、矜持を保つ様な余裕を持つことは出来なかつた。そんな俺が可笑しいのか、可愛らしい小さな笑い声を擁したままに再度口が開かれる。

「ふふつ、なら私のことを好きにしていいわよ」

冗談にも聞こえるその言葉で必死に繋ぎ止めていた理性が崩れ落ちていく。身体は酷く強張つてしまい、繋いだ手にも力が入ることで、彼女へと緊張が伝わるのに時間は掛かりはしなかつた。

はにかむような照れ笑いが神妙な面持ちへと変わっていく。沈黙さえにも耐えきれなくなつた彼女はぼそりと言葉を零した。

「……………その、優しくしてもらえると」

「……………善処する」

繋げた指を脱力しようと努力はするのだが、目の前に近付いてきた通い慣れた光景が視界に入ると、余計に身体が固まっていく。隣の彼女も声を漏らして歩幅が極端に狭くなっていた。

冬空の下、並んで静かに白い息を上げる。ぎこちない歩みのせいで、部屋に辿り着くまでにはまだ幾分か時間が必要になるのだが、二人の間に会話は消失する。

冷めているでもなく、望んでいない筈もない。ただ、心の準備をする淡い時間を要しているだけ。互いを求めることを知った今だからこそ、この後の未来がふいにならないことを確信してしまっているのだから。

そんな二人で過ごす初めての聖夜は例年よりも一層遅くまで続くことになるのだった。

## やはり俺の社会人生活は間違っている # 2 8

冬の朝、冷え切った気温が大気中の水蒸気を霜として降ろし、乾いた空気を緩やかな風で運んでいく。そうした控えめな自然からの挨拶が部屋の窓を小さく叩いていた。

視界を閉じたままに息を吸うと、ツンとするような冷たい空気に混じって冬の匂いが鼻腔に辿り着く。それに加え、痺れて感覚が薄くなっている二の腕からでも確かに伝わる、愛おしい体温が俺の臉をゆっくりと開かせていった。

「……ん。おはよう、雪——雪ノ下」

朦朧としていた意識が段々と覚醒してくると、少し乱れたと表現出来る程度に整え直されている寝間着、歳を重ねる毎に美麗さを増す相貌が視界に映し出される。

終わりと始まりを告げる鐘の音が新しい年を連れて来てから早二日、今日も贅沢極まり雪乃の柔らかな笑みから一日が始まろうとしていた。

昨年末に仕事納めをしてからは、彼女の家に泊まり込みで生活させてもらい、おはようからおやすみまですっかり雪乃三昧。連休明けに社会復帰が可能なのか、これが俺の中で著しく大きな問題になりかけている。

ここで用いた彼女は三人称の意味だけではない。嬉し恥ずかしガールフレンド。いや、雪乃に恥ずかしい所など存在していない。恥ずかしいのは俺の存在と思考回路であろう。なんかもう舞い上がり過ぎて色々とおかしなことをしている自覚しかない。

その異常的な行動のツケを払うべく、今日こそはと気合いを入れるスイツチを模索する。何せ初詣にも行かずに大晦日からずっと引き籠っているのだ。外に出ずともお腹が空けば雪乃謹製のお節に舌鼓を打ち、食欲を満たせば愛しの彼女と三大欲求の残りを制覇。もう本当にダメかもわからんね。

だがしかし、今日は是が非でもこの幸せスパイラルから抜け出す必要がある。何と言つても本日は雪乃の生まれてきてくれた大切な日なのだから。眼前で転がっている祝うべき対象は、昨日までと変わらず稚さを感じさせる微笑でこちらを見つめていた。

暖房の加熱に負けずと張り切る冬の朝、その冷気を言い訳に彼女を抱き寄せる。小さな笑い声が耳朶を打つ頃には、彼女の温もりが俺の身体を包んでくれていた。

「もう、こんな調子じゃ今日も外に出れなくなっちゃうじゃない……」

私は彼、比企谷君を少し強引にベッドから連れ出すと、お気に入りのエプロンを身に付けて静かに微笑む。年の瀬からのここ数日は本当に幸せな日々だった。そうした日々を反芻しながらも私は朝食の準備を進めていく。彼が好きだと言ってくれた、この

雑煮も今回分で無くなってしまいそうだ。

加熱始めの鍋に二人分の角餅を入れ、ふと後ろを振り返ると通知を知らせる明滅が目に入る。ひんやりとした画面を表示させると、私の誕生日を祝う多くのメッセージが届いていた。一番初めに送られたであろう親友のストレートな文字列が私の心をじんわりと温めてくれる。

私が”おめでどう”という言葉を受けないように受けたのは間違いない。彼女のお陰。ただの年始めにある行事だと感じていたけれど、形式的でも裏があるでもない由比ヶ浜さんの振る舞いが私を変えてくれた。そんな彼女に返す言葉はたったの五文字、それだけできつと分かってくれるだろう。また一つ歳を重ねても、依然と彼女に甘えてしまう私は変わってはくれない。

十分に煮えた雑煮を器に装い、そろそろ寝巻から着替えて身嗜みも直したであろう、愛する彼を迎えに洗面台へと向かう。ぱたぱたと鳴らすスリッパの足音が私の今の気持ち、幸せを奏でているようで心地が良かった。

洗面台へと近付くと、私の奏でる足音に彼の柔らかな声が混じる。最近はただでさえ上がり気味な口角がまた一段と上向きになり、温まり切った心が彼の下へと急かしていた。



もしかしたら私の名前を呼ぶ練習なんてしているのかもしれない。行為中は呼んでくれることもあるけれど、それ以外では恥ずかしかがってか全く呼んでくれないから。私も人のことは言えないのだけれど。もし本当にそうだったなら、彼の背中に思いつきり抱き着いて耳元で名前を囁こう。普段はここまで幸せな頭にはならないのだが、初めて過ぐす彼との二人きりの誕生日なのだからと期待は留まるところを知らない。

幸せの絶頂を噛みしめるように辿り着いた先には、これまた都合良く彼の背中が向けられていた。けれども、彼の口からは期待した名前が紡がれることはなかった。

「……………まあ、その時は宜しくお願いしますね、陽乃さん」

どうして、ねえどうして？ 何故私じゃなくて姉さんの名前を呼んでいるの？ 変じゃない、可笑しいじゃない……………だって今日は私の誕生日なのに……………。

「馬鹿、ぼけなす、八幡」

昔に小町さんに習った彼に対する最大級の罵倒。三段活用で段々と酷い言葉になっていく最終段に彼の名前を置く手法、習った当初に呟いた際には堪え切れずに笑ってしまったが、今は微塵も笑える気持ちではない。

不機嫌全開の私が入ると、比企谷君は怪訝そうな表情で一瞬固まった。しかし、直ぐに私の頭へと手を差し伸ばすと、髪を撫でながら優しい口調で言葉を放つ。

「陽乃さんが雪ノ下に代わってくれてさ、相変わらず見てるのかと思えて普通に怖い

わ」

「又もや姉の名前を平気で呼ぶことに少し苛立ちを覚えたが、彼の撫でてくれる感覚が私を平常へと立ち直らせてくれようとしていた。

「……それで何かしら、姉さん」

「幸せに満ち足りていたはずの朝、時間的にはお昼を邪魔され、私は無意識に低めに声を発していた。そんな私を見兼ねてか比企谷君が再度私の頭に手を置くと、耳まで優しく愛撫するよう丁寧指先を擦ってくる。

「少し声が出そうになるのを我慢していると、彼の顔が眼前へと近付いており、私はゆっくりと瞼を閉じて唇を迎え入れた。今日だけでも何回目になるのか分からない接吻、それが去年の彼に贈った二つ目のプレゼントに対するお返し。伝えていない、内緒でしてしまっていた分の返済も程無くして終わってしまったし、まいそな勢いだ。

「そうした幸せな時間は私たちにとっては一瞬の出来事だったけれど。

「——あのー、そろそろ私の話聞いてくれるかな？」

「………そ、それで何かしら、姉さん」

「先程と同じ台詞を少し上擦った声で繰り返す。

「あはは、先ずはおめでどうね、雪乃ちゃん」

「………毎年になるけれど、ありがとう」

姉からの祝いの言葉に対して私は素直に感謝を伝えた。陽気さを感じる朗らかな声色が先程の失態を引き摺らせないように導いてくれる。私の返事を聞いた姉は笑いを含んだままに言葉を続けた。

「ふふつ、折角だし、ちゃんと会ってお祝いしたいからこの後に外出られない？ とびつきのプレゼントをあげられると思うから」

「そうね、無理ではないけれど……」

姉の勿体を付けた物言いが気にはなるけれど、今日は比企谷君と一緒に過ごすことしか考えていなかったので返答に困ってしまう。そういった私の考えを見抜いているのだろう、彼女はカラカラと笑いながらこんな提案をしてきた。

「あ、もちろん比企谷君と一緒に来ていいよ、つてか連れて来て。あんまり長くならないと思うから、終わったら序でに初詣にでも行ってくればいいんじゃない？ どうせ外にも出ずにイチヤコラしてたんでしょ」

「……………んんつ、それなら行くのかしらね」

否定できないから否定はしない。どうせ嘯うそぶいても看破されるのは目に見えている。

時間と場所は後でメッセージで送ると伝えられた後に通話は切れ、ツーツと規則的に鳴る音が聞こえると、肩に入っていた力は途端に抜けていった。祝ってくれる気持ちは嬉しいのだけれど、相も変わらず台風のような存在。

「幾つになっても妹が可愛くて仕方ないんだらうな」

シスコン代表みたいな男が苦笑交じりにそつと呟く。妹側には決して分からない感覚を、二人は生まれながらに共有しているのかもしれない。私はそんなむず痒い気持ちを、静かな問い掛けで誤魔化した。

「……ところで、どうして私に直接ではなく、比企谷君に掛かってきたのかしらね。何か思い当たる節はある？」

「さつきからちよくちよく目からハイライト消すそれやめて」

指定された千葉の店先に定刻数分前に到着する。その場所は格式のある料亭であった為に、格好にはある程度の気を使った。ストールを羽織り、コートの内側には爽やかな緑色のプリーツドレス。そしてデコルテには、彼からのクリスマスプレゼントとしてもらったネックレスが煌々と鎮座していた。

由比ヶ浜さんと一色さんに事の顛末と共に自慢気に話したら、独占欲丸出しだねと揶揄うように笑って祝福してくれた。その大切なネックレスを身に纏い、私が首ったけなスーツ姿の彼を隣に連れて門戸を開く。受付に名前を告げると、物腰柔らかな仲居の方に二階の角部屋へと案内して頂いた。

三つ指ついて失礼しますと襖が開かれた先には、お猪口片手に酒盛りしている姉の

姿。ライトベージュのタートルネックニットに黒のロングスカートとカジユアル寄りの恰好ではあるのだが、どこか気品のある雰囲気を感じている。

私と比企谷君は羽織っていた外套を預かってもらい、部屋の入口側の席の方へと並び歩いた。

「久しぶりだね。改めておめでとう雪乃ちゃん……、それに比企谷君も」

「ああ、明けましておめでとうございませす」

特に何てことない社交辞令的な挨拶、しかし目の前の酔っ払いは簡単には終わらせはくれなかった。私たち二人を上目で眺めてニヤリと意地の悪そうな笑顔を見せると、姉の視線は隣の彼一人に向けられる。

「そっちじゃないって。あれれ、君はもしかして私の雪乃ちゃんをゲットしておいて、めでたくないって言うのかなあ?」

「……………大変至極光栄でございませす」

「あははは、苦しゅうない。おっと、ほらほら二人とも立ってないで座りなよー」

頬を掻いて恥ずかしがる彼を見て、姉妹共々満足そうに笑みを浮かべる。照れ隠しに比企谷君の服を軽く摘まんで姿勢を戻し、姉の言葉のままに対面へと並んで座していった。

「それで、プレゼントにご馳走してくれてくれるってことでもいいのかしら」

着座して尚も変わらずにやけている姉に肅々と用件を切り出すと、私の言葉を皮切りに姉の表情は豹変する。

久しぶりに見た、本気で揶揄いをする際に見せる嗜虐的な口元に、私の身体は否応なしに身震いが起こる。隣からはゆるゆると温かいお茶を啜る音が聞こえてきたので、彼は異変に気付いてはいないようだ。

「あれ、私言わなかったっけ……、とびっきりのプレゼントだって」

直後、廊下からは聴き馴染みのある二つ並んだ足音が聞こえ始める。姉の言葉に疑問符を浮かべる彼を横目に、私は奥で閉ざされている襖を唯じつと見つめていた。

起こりうる事態に対して、何の準備もしていないことを悔やみながら。

こんにちは、比企谷八幡です。隣に座っている見目麗しい可憐な女性は雪ノ下雪乃さん。木机を挟んだ向こう側に座っている御三方は雪ノ下御一行様のようなです。対面にはオールバックの渋めの男性、俺が最も恐れるべき存在である恋人の父が神妙な面持ちで鎮座している。

そのお隣、雪乃の対面には美しい瑠璃色の着物に身を包んだ彼女の母親が微笑を浮かべ、更にその隣には陽乃さんがお腹を抱えていた。度々、隣に座る母親に注意されるも、

周囲を見渡すとまた同じように笑い始める。混沌とした状況に出口へと逃げ出したい気持ち湧き出でてくるのが止められない。

新年早々に雪ノ下家総出のお誕生日会はなかなか……、いや俺の人生史上最重量イベントではないだろうか。正直に言つて、陽乃さんだけで緊張感マックスだったのに、母マシ父マシトツピングは胃袋に収まり切りそうもない。胃に穴が空きそう。

そういつた重々しい場を繋いでくれたのは、運ばれてくる色華やかな蟹料理たち。しかし、並べられた数々の御立派な身剥きの蟹を見ても一向に食欲は湧いては来なかった。丁寧な料理の説明の言葉も左から右へとただ流れていく。

気が付けば、自身の近くに藍染水滴の徳利が置かれていた。俺は大慌てで対面の相手、彼女の父親へとお酒を注ぎ始める。

「……………ありがとう」

感謝の言葉と共に雪ノ下父は口元を少し綻ばせると、すぐさまにお猪口を傾けては息で飲み干してしまう。そしてまた、俺は自然な流れで小さな器に液体を流し込んで一杯にしていく。

その様なやり取りを三回ほど繰り返しただろうか。満ちたお猪口を口へと運ばず、ゆつくりと細めていた目を開いては娘である雪乃を見やった。

「……………誕生日おめでとう、雪乃」

「え、ええ。ありがとう……、父さん」

何だか少し気恥しい家族のやり取りだ。県議員と会社の経営を両立している堅物の印象から程遠い、そういうった言葉の柔らかさに重圧が軽くなつていくのを感じる。卓上では大きなズワイな蟹も、ブイサインで場を温めてくれているじゃないか。

「それに明けておめでとう、……比企谷君だよね」

「……え、あつはい。明けておめでとうございます」

そうした心の余裕も視線がこちらへと向けられると一瞬で失せてしまった。気まずさから隣の雪ノ下母に目を逸らすと、畳んだ扇子を口元に当てながら、にっこりとした笑顔で首を小さく傾げる。……なるほど、雪乃の母親だけあつて現役で可愛い。軽く見惚れていたことを誤魔化すように、俺は首肯で新年の挨拶を彼女の母親にも伝えた。

「あなた、今日は大切な日なんですから、お酒の量は考えてくださいね」

「ああ、……うん、分かつてはいるよ」

そんな綺麗なお母さまは優しい口調で夫を心配し始めていた。二十代中頃の娘が居るとは思えない美貌に、雪ノ下父も秒でたじたじになっている。朱色が差していた顔色も何故かすっかり元通り。これが長年の夫婦の愛の力なのだろうか。お猪口にお酒を注ぎ直しながら何度も目配せをしているのも、きつと健康や体調を気遣つてに違いな



い。

雪ノ下父は注がれた日本酒を一気に呷ると、意を決したように向き直つて口を開いた。

「君のことは二人から随分と聞いていたけれど、実際に会えて良かったよ」

「……………」

話し始めたと同時に、お猪口の中身を補充しにいくお母さまの動きに目を奪われそうになるが、理性でそれを封殺する。

それほど遠くない未来を考えると、目の前の父親に気に入られなくとも嫌われないことは肝要だ。ただ真つ直ぐに彼の瞳を見据えて言葉に耳を傾ける。

「娘には高校の時から良くしてもらつていたのだろうか？ 雪乃が私たち家族としつかり向き合つてくれるようになったのも、きっと君の影響が大きいんだろかね」

そこまで言い終えると、雪ノ下父はお酒を口にしようとして一旦顔を伏せた。その僅かな時を使つて俺は返答する内容、話す言葉を纏める。決して難しくはない、ただ当たり前前思つたことを素直に話せば良い。

「いえ、それ程のことはないと思います。私なんかよりも他の友人たちの方が」

「———そつ、そうだよね、……………いやごめんなさい」

お母さまがいつの間にか開いていた扇子を閉じた音が室内に響くと、何故か一瞬破顔

しかけた雪ノ下父の表情は元に戻る。

またしても空っぽになった器を静かに卓に置くと、長めに息を吐いた後に言葉が発せられた。その表情は何かを観念したかのような、そういった男の様相に見えて仕方なかった。

「友人の影響も勿論あるだろうね。でもそれよりも……………」

「……………雪乃とは、付き合っているんだろう?」

何よりも大事な自分の娘との関係、父親の立ち向かうべき責務に彼は向き合っていたんだ。そうした男の決意に対し、隣の雪乃にアイコンタクトで了承を得ると、俺は目を閉じ背筋を正し直した。

「……………はい、娘さんとお付き合いをさせて頂いております」

「……………だろうね。雪乃から好きな人が居ると聞かされた時は、初めは戸惑ったというか、頭が真っ白になったというか、怒りが沸いて出てきたものだけけど、まさかその相手が交通事故で迷惑を掛けた男の子だっというから本当に驚いた記憶があるよ」

途中から語気が強くなったり、握りこぶしが作られたりしていたけれど気にはしない。あれ、もしかして怒ってるのかな、とか思ったけれど気にはいけない。

「今更だけれど、事故に遭わせてしまって本当に申し訳なかった……………」

「……………いえ、私が飛び出したのが悪いですし、気にしていません。昔のことですしね」

あの車を運転していたドライバーからしたら、避けられない完全に不幸な事故であろう。由比ヶ浜の飼い犬を助けるためとはいえ、当たり屋もびつくりな飛び出しに遭遇してしまっただから。それに、あの事故のお陰で奉仕部に出会えたことを考えれば、俺にとつては良い思い出でしかない。

「そう言ってもらえると助かるよ。けれど、私が本当に感謝したいのは、その様な出会い方をした君が雪乃をずっと大切にしてくれたことだ」

「（こちらこそ、雪乃さんには本当に良くして頂いています）」

出会った当初こそあれだが、お互いの存在を許容してからは悪くない関係を築けていただろう。今では本当に夢心地な扱いになっていくことは口が裂けても言えない。未だに固く握られている拳が顔面に飛んでくることが想像に難くないから。

「……………これからも雪乃を支えてあげてくれるかい？」

「はい、こんな私で良ければ、これからも雪乃さんの傍で支え……、いえ、これまで以上に寄り添い合っていきたいと思います」

俺は言い終えると同時に必死になって頭を下げていた。ただ、許しを請うように。雪乃とのお付き合いを許してもらえるように。東京湾に捨てられてしまわぬように。

そして再び顔を上げ、目の前の力強い双眸に改めて向き合った。

「……………本当に、ありがとう。これからも雪乃をよろしく頼む」

今にも感涙してしまいそんな面持ちでそんな言葉を口にしてくれた。父親の解かれた手の平が許してくれたことを物語っている。まさか付き合つて十日やそこらで、別れを強制される事態にならずに心底安堵していた。諦念している父の背中にそつと手をまわす雪ノ下母、この落ち着いた夫婦の情景が今回の幕切れであろう。

乾いた喉を潤すように、温かさの欠片も残っていないお茶を口へと流し込んだ。勝利の美茶なのに、妙に苦味と渋味が後を引いている。やはり彼のように美酒を飲むべきなんだろうな、そう考えて人数分用意されているお猪口の一つを手にとると、既に注ぐ姿勢に入っている彼女の母親が目映った。

感謝を告げると、香りの良い透明な液体が並々に注がれていく。表面張力がしつかり仕事をしているが、俄然身動きの取りづらい状況となり、緊張感のない自らの笑みが水面に浮かんで揺れ始めている——その直後だった。

「それで、二人の式はいつ頃に行いましょうか」

耳を疑うような発言に身体も口も反応することは出来ない、溢さぬように慎重に口元へと運ぶまでは。だが、そんな事情とは関係なしに話は進んでいく。

「今年の六月に間に合わせるのは少し大変だと思っけれど、お父さんも協力してくれるし、その辺りにしましょうか。あなたもこの時期なら予定を空けられますよね」

視線を向けられた男は溜息と共に項垂れてしまう。しかし、俯きながらもお猪口に手

を伸ばして飲み干すと、威厳のあるオールバックの強面を上げて渋々と口を開いた。

「その、場所とか希望はあるかい？　そもそも式は教会式と神前式……」

これは何だ、何が起こっているんだ……。未だ頭の整理が追い付いていかない状況に、隣の雪乃に助けを求めようと首を回していく。行き着く先には、夢を語る幼い少女のような表情で両親と向き合う彼女の姿があつた。

「……私はやっぱりウエディングドレスを着たいわね」

あーうん、僕も見たいよ。純白のドレスを着た雪乃を両親にも見せてあげたいよね、うん。

この再び這い寄った混沌を打破すべく、最後の神頼みとして、不自然な程に黙つていた陽乃さんにアイコンタクトを試みる。瞬時に目線がぶつかると、彼女は小さく頷いた。そして、口角を上げ、ちらりと舌を出してウィンク。

「八幡はもしかして、雪乃ちゃんのウエディングドレス姿見たくないの？」

「……………あー、めっちゃ見たいです、はい」

漸く到達した器を一息で飲み干して、自棄気味に希望を吐露した。その直後、向かい側に座る女性二人は徳利を笑顔で近付けてくる。先程までに何度も見ていた、空いた傍から注ぎ直される光景が何故かフラッシュバックした。

「んんっ、は、八幡は六月で大丈夫……？」

もう何が大丈夫なのか一切分からないけれど、照れている雪乃が可愛いことだけは分かる。

耳まで赤くして問い掛けてくる彼女への返答を考えている合間に、視界の端には優しい気な表情をした姉が小さく口を開いていた。

「……………誕生日おめでとう、雪乃ちゃん」

家族とも別れ、料亭の近くに境内を構える神社にお参りをした駅への帰り道。三箇日の落ち着いた交通量のお陰で静寂にも近い、清閑とした並木道が続いていた。

ふと空を見上げると真暗な夜空から、はらはらと雪の結晶が舞い落ち始める。瞳に映る初雪とは真反対に、依然として昂っている身体には寒さなど気にもならなかった。

姉の計略により、一番の障害だと考えていた両親への挨拶があつさり終わりを迎えた。姉の誕生日には何をお返ししたら良いのだろう、何なら喜んでくれるのだろうか。こう頭を悩まされている時点で、姉の術中に嵌っている気がしないでもない。いや、近

うちに彼の両親にも挨拶に伺う必要があるのだし、姉へのお返しはまた今度考えよう。

同じ歩幅で同じように空を見上げ、白い息をのぼらす比企谷君。その袖を軽く引つ張り注意を引くと、疲れを感じさせる濁った優しい瞳が私に向けられた。そんな彼に遠くはない未来の軽い相談を持ちかける。

「ねえ、役所にはいつ提出する?」

「……………その、ちよつと待つてもらっていいですかね」

私の言葉を聞き、段々と苦い顔になった彼は答えを保留したいと口にした。流石にそうは思っていないけれど、少し大袈裟に拗ねるような口調で不平を漏らす。今日は甘えでも許される筈だから。

「……………なによ、もしかして私とは結婚したくないって言いだすのかしら」

「ちげーよ、こういうのって順序とか色々あるだろうが」

順序、その言葉で浮かんだのは、お世話になった数多くの方々への報告だった。決して私たち二人だけの問題ではないことは分かっている。考えたくはないけれど、比企谷君の家族に反対される可能性もあるだろう。

横断歩道の信号待ちに、足元のレンガ調の舗装路をぼんやりと見ていた。やつと目標の地に届いた雪が積ることなく消えていく。そんな事象に私の心を重ね合わせようか、

何て馬鹿げた考えが浮かびそうになってしまふ。

——嫌に長く感じていた沈黙を、不意に乾いた音が切り裂いた。

私は小さく肩を跳ねさせ、恐る恐る音の発生源に顔を向けていく。そこには、コートから手を出している比企谷君の姿。

「……………」の後、一回俺の家に戻っていいか」

何故かと問いかけると、僅かに頬を腫らした彼は気まずそうに口籠る。慎重に言葉を選んでいるようにも見えるけれど、私には己が羞恥心と向き合っているだけだと分かっていた。

「……………」実はあるんだよ、プレゼント」

「そうだったのなら、言ってくれたらいいのに……………」

誕生日プレゼントは、年越し前から離れず私と居たので買っておらず、正月休み中でも私の気に入る物を一緒に選びに行こうと話をしていた。私としては、本当に欲しかったプレゼントは既に沢山受け取っているから不満は無かったのだけれど。

「……………」色々、早まり過ぎたかなって思ったから置いてきた」

「何かしら、この流れなら指輪でも貰わないと私は満足しないわよ？」

本日に限っては、勿体を付けた贈り物に対して期待が高まり過ぎていけるせいで、つい冗談めいた言葉を振り翳<sup>かざ</sup>してしまう。本当は彼からの贈り物なら何だって嬉しい。け



れど、彼が恥ずかしがっているプレゼントを恥ずかしい儘ままに渡して欲しいから。

自分でも分かる意地悪な笑みを比企谷君へと向けた。彼の後方では、疾うに青へと変わっていた信号の光が点滅を始める。聖夜に見た光景と重なる彼の震える唇に、私は今日も変わらず心を奪われていた。

「まあ、その……、期待には沿えると思う」

紺色のマフラーに顔を埋め、そつぽを向いた彼の背中に私は堪らず抱き着いた。そして、光と同じ色に染まる彼の耳元へと顔を近付けて名前をそつと囁く。

私が持てる最大級の愛をこめて。

「——ぼか、大好き、八幡」

二人で手を繋いで駅に、彼の家へと向かう。彼の左腕に両の手と頭、心までもを纏めて預けて。

あの日と同じように私たちの間に言葉はないけれど、今は五月蠅い心臓の音を聴いていたいから丁度良かった。それに未来の私に愛を伝えようと必死に考えを巡らせている、彼の横顔を唯じつと眺めていたかったから。

ゆつくり歩いても、駅まではもう少しだろう。

いつの間に彼の頭に残った白い結晶が、街灯に照らされて綺麗に反射している。届いて、留まりたかった場所に想いは積もってくれていた。それが嬉しくって。

どうせ時が来れば、私自らの手で払ってしまうけれど、今はその光輝く華を名残惜しんでいたい。だって、大切にしていた私の一部なのだから。

一歩を、一日を噛みしめるように。

もう残りも短くなった、雪の下で。